

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	菱山 湧人
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 320 号
学位授与の日付	2021 年 12 月 1 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	タタール語における人称標識の出現傾向について –コーパスに基づいた研究–

Name	Yuto, Hishiyama
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 320
Date	December 1, 2021
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	On the Tendency of Occurrence of the Tatar Person Markers: A Corpus-based Study

タタール語における人称標識の出現傾向について
—コーパスに基づいた研究—

菱山湧人

目次

目次.....	i
表の目録.....	v
図の目録.....	ix
略号一覧.....	x
序論.....	1
0. はじめに.....	1
0.1. 本稿の目的と結論.....	1
0.2. 本稿の構成.....	3
1. タタール語概説.....	5
1.1. 基本情報.....	5
1.1.1. 系統.....	5
1.1.2. 主な特徴.....	6
1.1.3. 地理的分布と方言.....	7
1.1.4. 使用状況.....	9
1.2. 音韻論.....	9
1.2.1. 母音.....	10
1.2.2. 子音.....	11
1.3. 文字と表記法.....	12
1.3.1. キリル文字正書法.....	12
1.3.2. ラテン文字正書法.....	14
1.3.3. 本稿で用いる文字と表記法.....	15
1.4. 形態論.....	17
1.4.1. 名詞類.....	17
1.4.2. 動詞.....	21
1.4.3. その他.....	26
1.5. 統語論.....	27

1.5.1. 句	27
1.5.2. 節	28
1.5.3. 文	30
2. 人称に関する通言語学的研究	32
2.1. Cysouw (2003).....	32
2.2. Siewierska (2004).....	34
本論.....	38
第一部 タタール語における人称標識の出現傾向.....	38
3. タタール語の人称標識に関する先行研究.....	38
3.1. ソ連・ロシアの先行研究.....	39
3.1.1. 所有接辞に関する記述.....	39
3.1.2. 述語人称標識に関する記述.....	46
3.2. その他の先行研究.....	52
3.2.1. 所有接辞に関する記述.....	52
3.2.2. 述語人称標識に関する記述.....	55
3.3. 問題提起.....	60
3.3.1. 所有接辞について.....	60
3.3.2. 述語人称標識について.....	65
4. タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法.....	68
4.1. 調査対象.....	68
4.1.1. 人称標識.....	68
4.1.2. 人称標識が現れうる領域.....	73
4.1.3. 人称標示構造.....	75
4.2. 調査方法.....	77
4.2.1. コーパス調査.....	77
4.2.2. インフォーマント調査.....	79
5. タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察.....	80

5.1. 所有人称接辞の出現傾向	80
5.2. 述語人称標識の出現傾向	110
第二部 チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ	129
6. チュルク諸語の人称標識に関する先行研究	130
6.1. チュルク諸語全般に関する先行研究	130
6.1.1. 所有接辞に関する記述	131
6.1.2. 述語人称標識に関する記述	135
6.2. 個別言語に関する先行研究	137
6.2.1. 所有接辞に関する記述	137
6.2.2. 述語人称標識に関する記述	153
6.3. 問題提起	160
7. チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法	163
7.1. 調査対象	163
7.2. 調査方法	164
7.2.1. コーパス調査	165
7.2.2. インフォーマント調査	170
8. チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察	171
8.1. 所有人称接辞の出現傾向	171
8.2. 述語人称標識の出現傾向	190
結論	198
9. 言語接触の影響の可能性	198
10. 本稿のまとめと今後の課題	201
10.1. 本稿のまとめ	201
10.2. 今後の課題	204
初出一覧	208
参考文献	209
調査資料	214

謝辭.....	215
---------	-----

表の目録

表 1：人称を標示する要素（タタール語）	1
表 2：人称標識の出現傾向とそれに影響している主な要因	3
表 3：チュルク諸語の分類 (Johanson 1998b).....	5
表 4：トルコ語とタタール語の母音の対応	7
表 5：母音音素.....	10
表 6：前舌対後舌の調和	11
表 7：子音音素.....	11
表 8：キリル文字と音素の対応	13
表 9：ラテン文字と音素表記の対応	15
表 10：本稿で使用するラテン文字と音素表記の対応	16
表 11：名詞形態法.....	17
表 12：所有人称接辞	18
表 13：格接辞.....	19
表 14：人称代名詞（主格形）	20
表 15：指示代名詞の格変化形	21
表 16：単数人称代名詞の格変化形	21
表 17：動詞形態法.....	22
表 18：動詞語幹に付加する派生接辞	22
表 19：定形動詞形成接辞	23
表 20：述語人称標識	24
表 21：願望・命令形	24
表 22：非定形動詞形成接辞	25
表 23：単数ホモフォニーのありうるタイプ	32
表 24：人称標示のパラダイムの構造のアウトライン	32
表 25：ラテン語型パラダイム（直説法現在）	33
表 26：シンハラ語型パラダイム（代名詞）	33
表 27：所有接辞 (Zäkiev et al. 2016).....	39
表 28：述語性接辞 (Xisamova 2006; Zäkiev et al. 2016).....	47
表 29：人称接辞 I (Xisamova 2006).....	49
表 30：人称接辞 II (Xisamova 2006).....	49
表 31：人称接辞 III (Xisamova 2006)	50
表 32：人称接辞 (Zäkiev et al. 2016).....	50
表 33：人称標識 (Berta 1998).....	56
表 34：述語人称語尾（名詞・形容詞）(服部 1941).....	57
表 35：述語人称語尾（動詞）(服部 1941).....	57

表 36 : 述語人称語尾 (過去形) (服部 1941)	58
表 37 : 人称語尾 (林 1989a).....	58
表 38 : 接尾人称代名詞 (Ersen-Rasch 2009)	59
表 39 : 所有型人称接辞 (Ersen-Rasch 2009)	59
表 40 : 先行研究による述語人称標識の分類.....	65
表 41 : 所有人称接辞が現れうる領域	73
表 42 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (全体)	82
表 43 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (従属部と主要部が隣接している場合)	83
表 44 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (従属部と主要部の間に形容詞が一語介在する場合)	83
表 45 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (yan「横」が主要部の場合)	85
表 46 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (art「後ろ」が主要部の場合)	85
表 47 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (主要部 fayda に与格が付加し後置詞的に機能する場合)	86
表 48 : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (主要部 xaq に与格が付加し後置詞的に機能する場合)	87
表 49 : 人称代名詞を持つ後置詞句における所有人称接辞の出現頻度 (xaqta「～について」が主要部の場合)	88
表 50 : 人称代名詞を持つ後置詞句における所有人称接辞の出現頻度 (turida「～について」が主要部の場合)	88
表 51 : 人称代名詞を持つ関係節名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞過去 -GAn が述部の場合)	92
表 52 : 人称代名詞を持つ関係節名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞未来 I~III が述部の場合)	92
表 53 : 人称代名詞を持つ名詞化関係節における所有人称接辞の出現頻度 (名詞化した形動詞過去 -GAn が主要部の場合)	93
表 54 : 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (動名詞が主要部の場合)	97
表 55 : 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞過去 -GAn が主要部の場合)	97
表 56 : 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞未来 II -(y)AčAK が主要部の場合)	97
表 57 : 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞未来 III -{A/y}sE	

が主要部の場合)	98
表 58 : 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (非定形コピーラ ikänlek が主要部の場合)	98
表 59 : 人称代名詞を持つ名詞節 (動名詞が主要部) における所有人称接辞の出現頻度 (従 属部と主要部が隣接している場合)	99
表 60 : 人称代名詞を持つ名詞述語文 (主節) における述語人称標識の出現頻度	111
表 61 : 人称代名詞を持つ形容詞述語文 (主節) における述語人称標識の出現頻度	112
表 62 : 人称代名詞を持つ動詞述語文 (主節) における述語人称標識の出現頻度	112
表 63 : 調査対象の述語	113
表 64 : 非動詞述語における述語人称標識の出現数	114
表 65 : 非動詞述語における述語人称標識の出現数 (=mE 疑問文)	115
表 66 : 人称代名詞を持つ非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (形容詞述語 šat 「嬉しい」が述語である主節の場合)	116
表 67 : 人称代名詞を持つ非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (形容詞述語 tiyeš 「必要だ」が述語である主節の場合)	116
表 68 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (完了形が述語であ る主節の場合)	119
表 69 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (意図形が述語であ る主節の場合)	119
表 70 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (未来 II 形が述語で ある主節の場合)	119
表 71 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (現在形が述語であ る主節の場合)	120
表 72 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (過去形が述語であ る主節の場合)	120
表 73 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (künek-kän 「慣れて いる」が述語である主節の場合)	121
表 74 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (oxša-yan 「似ている」 が述語である主節の場合)	121
表 75 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (öylän-gän 「結婚し ている」が述語である主節の場合)	121
表 76 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (完了形が述語であ る引用節の場合)	122
表 77 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (現在形が述語であ る引用節の場合)	123
表 78 : 人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (過去形が述語であ	

る引用節の場合)	123
表 79 : トルコ語の所有接辞 (Göksel and Kerslake 2005)	137
表 80 : ウズベク語の所有接辞 (Kononov 1960)	142
表 81 : カザフ語の所有接尾辞 (中嶋 2013)	145
表 82 : サハ語の所有接辞 (江畑 2020)	147
表 83 : チュヴァシ語の所有接辞 (Clark 1998)	149
表 84 : サラール語の所有接辞 (Tenišev 1976a)	151
表 85 : サリグ・ヨグル語の所有接辞 (Tenišev 1976b)	152
表 86 : サラール語の所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度	152
表 87 : トルコ語の人称標識 (Göksel and Kerslake 2005)	153
表 88 : ウズベク語の人称接辞 (Boeschoten 1998)	154
表 89 : カザフ語の一致標識 (Muhamedowa 2016)	156
表 90 : サハ語の主語の人称・数を標示する接尾辞 (江畑 2020)	157
表 91 : チュヴァシ語の人称接辞 (Pavlov 2014)	158
表 92 : 現代ウイグル語の人称接辞 (新田 2015)	159
表 93 : 分析型の所有名詞句に関する先行研究の記述	161
表 94 : 述語人稱標識の出現傾向に関する先行研究の記述	162
表 95 : 人稱を標示する要素 (トルコ語)	163
表 96 : 人稱を標示する要素 (ウズベク語)	163
表 97 : 人稱を標示する要素 (カザフ語)	164
表 98 : 人稱を標示する要素 (チュヴァシ語)	164
表 99 : 使用したコーパス	165
表 100 : インフォーマント情報	170
表 101 : 人稱代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (トルコ語) ...	172
表 102 : 人稱代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (ウズベク語)	173
表 103 : 人稱代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (カザフ語) ...	173
表 104 : 人稱代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (チュヴァシ語)	173
表 105 : 人稱代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (牧地マリ語)	189
表 106 : 人稱代名詞を持つ名詞述語文・形容詞述語文における述語人稱標識の出現頻度 (トルコ語)	191
表 107 : 人稱代名詞を持つ名詞述語文・形容詞述語文における述語人稱標識の出現頻度 (カザフ語)	191
表 108 : タタール語とその周辺言語およびトルコ語における人稱標識の分布	199

図の目録

図 1 : チュルク諸語の地理的分布 (Johanson and Csató 1998: xvi-xvii)	6
図 2 : ロシア連邦におけるタタールスタン共和国の位置.....	8
図 3 : ロシア連邦におけるタタール人の分布 (2010 年国勢調査)	8
図 4 : ウラル・ヴォルガ地域における諸民族の分布 (2010 年国勢調査)	9
図 5 : 述語階層 (Siewierska 2004: 127).....	34
図 6 : 意味論的述語階層 (Siewierska 2004: 132).....	35
図 7 : 被所有名詞階層 (Siewierska 2004: 138).....	35
図 8 : 譲渡不可能性階層 (Siewierska 2004: 143).....	35
図 9 : 人称階層 (Siewierska 2004: 149).....	36
図 10 : CWT の検索画面.....	78
図 11 : TSC の検索画面①.....	166
図 12 : TSC の検索画面②.....	166
図 13 : OTTK の検索画面.....	167
図 14 : NCKL の検索画面.....	168
図 15 : CCIS の検索画面.....	169

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	LOC	locative	位格
ABE	abessive	欠如	MOD	modality	モダリティ
ABL	ablative	奪格	NEG	negative	否定
ACC	accusative	対格	NFIN	non-finite	非定形
ADVLZ	adverbializer	副詞化	NMLZ	nominalizer	名詞化
AUX	auxiliary verb	補助動詞	OPT	optative	願望
COMP	comparative	比較	PL	plural	複数
COND	conditional	条件	PN	person name	人名
COP	copula	コピュラ	POSS	possessive	所有
CVB	converb	副動詞	PRF	perfect	完了
DAT	dative	与格	PRS	present	現在
EMPH	emphasis	強調	PST	past	過去
FAM	familiar	親称	PTCP	participle	形動詞
FOR	formal	敬称	Q	question	疑問
FUT	future	未来	SG	singular	単数
GEN	genitive	属格	VN	verbal noun	動名詞
IMP	imperative	命令	VOL	volitional	意図
IND	indirect	間接	-		接辞境界
INE	inessive	入格	=		接語境界
INF	infinitive	不定形	+		複合語境界

序論

「序論」は、第0章「はじめに」、第1章「タタール語概説」、第2章「人称に関する通言語学的研究」からなる。第0章「はじめに」では、本稿の概要について述べる。第1章「タタール語概説」では、本稿の問題を理解するために必要な背景知識として、タタール語の概説を行う。第2章「人称に関する通言語学的研究」では、タタール語における人称標示が通言語的にどのようなタイプに該当するかを示すために、人称に関する通言語学的研究の記述をまとめる。

0. はじめに

本章では、導入として本稿の概要を述べる。以下、0.1節で本稿の目的と結論、0.2節で本稿の構成について述べる。

0.1. 本稿の目的と結論

本稿の目的は、タタール語（チュルク諸語北西語群）¹および他の主な（それぞれの語群の話者数が多い）チュルク諸語を対象に、コーパスを用いた定量的調査を主とした調査を行い、1）タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにすること、2）タタール語における人称標識の出現傾向を他の主なチュルク諸語と比較し、タタール語のチュルク諸語における位置づけを行うこと、を目的とする。

タタール語で人称・数を標示する要素は、人称代名詞のほかにも所有人称接辞と述語人称標識がある。第3章で後述するように、先行研究によって諸説あるが、本稿では表1²に示す所有人称接辞と述語人称標識をまとめて「人称標識」と呼ぶ。

表1：人称を標示する要素（タタール語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	min	-(E)m	-m(En)	-m
1PL	bez	-(E)bEz	-bEz	-K
2SG	sin	-(E)ŋ	-sEŋ	-ŋ
2PL	sez	-(E)GEz	-sEz	-GEz

¹ チュルク諸語の分類については1.1.1節の表3を参照。

² タタール語の文法形態素は、1.2節で述べる母音調和や子音交替に従って、一部の音が交替する。本稿では、本文中や表、注において、各形態素を、交替する部分を大文字で表した代表形を用いて表記することがある。本稿では、多くの先行研究で三人称の標識とされるものを人称標識に含まない立場をとる（4.1.1節を参照）。二人称複数の人称代名詞および人称標識は、二人称単数（敬称）も表しうる。

所有人称接辞は、名詞句の主要部（被所有名詞や、関係節に修飾される名詞）に付加し、主に所有者や関係節の主語の人称・数を標示するほか、名詞節の主要部（非定形動詞など）に付加し、名詞節の主語の人称・数を標示する。述語人称標識（代名詞型と所有型の2種類がある。名称に関して、詳しくは4.1.1節を参照）は、定形節の主要部（述語）に付加し、定形節の主語の人称・数を標示する。本稿では、人称標識の現れうる主要部を含む統語的まとまり（句や節など）を「領域」と呼ぶ（詳しくは2.2節および4.1.2節で後述）。

人称標識は、領域内に人称代名詞が出現している場合、現れない場合もある(0-1~0-5)。この点でタタール語は、多くの場合人称標識が義務的であるトルコ語（チュルク諸語南西語群）など他の一部のチュルク諸語とは異なる。

所有人称接辞

(0-1) **bez-neŋ awıl(-ibüz)**

1PL-GEN 村(-1PL.POSS)

「私たちの村」(名詞句)

(0-2) [**sez-neŋ yaz-yan** xat(-iyüz)]

2PL-GEN 書く-PTCP.PST 手紙(-2PL.POSS)

「あなた(たち)の書いた手紙」(名詞句)

(0-3) [**bez-neŋ qayan kil-gän(-ebez)]-ne**

1PL-GEN どこから 来る-PTCP.PST(-1PL.POSS)-ACC

「私たちがどこから来たかを」(名詞節)

述語人称標識

(0-4) **Min tatar(-mın).**

1SG タタール人(-1SG)

「私はタタール人だ。」(定形節)

(0-5) **Min bar-maqçı(-mın).**

1SG 行く-VOL(-1SG)

「私は行くつもりだ。」(定形節)

本稿では、人称標識の出現傾向にどのような要因が影響しているかを解明する。この問題は、先行研究では十分に記述されてこなかった。

調査結果（第5章および第8章で後述）に基づき本稿では、1）タタール語における人称標識の出現傾向が複数の要因によって異なっていること（表2）、2）タタール語における

人称標識の出現頻度が他の主なチュルク諸語に比べて低く、これが言語接触の影響によるものである可能性があること、を示す。

表 2：人称標識の出現傾向とそれに影響している主な要因

人称標識	主な要因	出現傾向
所有人称接辞	人称・数	2SG 標識 > 1PL 標識
	主要部要素の種類	述語 > 被所有名詞 > 後置詞的名詞
	従属部と主要部の距離	非隣接 > 隣接
述語人称標識	標識の種類	所有型 > 代名詞型
	主要部要素の種類	動詞 > 形容詞 > 名詞
	節の種類	非動詞述語文：その他 > =mE 疑問文 動詞述語文：主節 > 引用節

なお、特にことわりのない限り、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写（1.2 節で後述）、例文番号、グロス、文字飾り³、図表、図表番号は筆者による。本稿の例文のうち出典を明記していないものは、特にことわりのない限り、4.2 節または 7.2 節で挙げるコーパスから得られたものである。

0.2. 本稿の構成

本稿は大きく「序論」、「本論」、「結論」に分けられる。

「序論」では、本章で本稿の概要について述べた後、第 1 章「タタール語概説」で、本稿の問題を理解するために必要な背景知識として、タタール語の概説を行う。第 1 章では併せて、本稿の調査対象である人称標識およびそれが現れうる領域の文法全体における位置づけと、本稿で用いる枠組みや用語の一部とその定義を示す。次に、第 2 章「人称に関する通言語学的研究」で、まずタタール語における人称標示が通言語的にどのようなタイプに該当するかを示したうえで、後に考察（主に第 5 章）でタタール語における人称標識の出現傾向を通言語的に位置づける際の参考にするために、人称に関する通言語学的研究の記述をまとめる。

「本論」は、第一部「タタール語における人称標識の出現傾向」と第二部「チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ」からなる。

第一部「タタール語における人称標識の出現傾向」は、第 3 章「タタール語の人称標識に関する先行研究」、第 4 章「タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法」、第 5 章「タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察」から

³ 例文中の名詞句は下線で示し、関係節、名詞節は [] で囲む。ただし、本文中でかっこ内に例を示す場合は、関係節、名詞節も下線で示す。人称標示要素（人称代名詞および人称標識）またはそれ以外で特に問題となっている部分は太字で示す。

なる。第3章では、タタール語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述が不十分であることから、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があることについて述べる。第4章では、調査対象とした標識や領域を示し、調査方法としてコーパス調査とインフォーマント調査を行ったことについて述べる。第5章では、調査結果を示し、タタール語の人称標識の出現傾向とそれに影響している要因を挙げ、考察を行う。

第二部「チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ」は、第6章「チュルク諸語の人称標識に関する先行研究」、第7章「チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法」、第8章「チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察」からなる。第6章では、主なチュルク諸語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述も不十分であることから、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があることについて述べる。第7章では、第4章と同様に、調査対象とした標識や領域を示し、調査方法としてコーパス調査とインフォーマント調査を行ったことについて述べる。第8章では、調査結果を示し、人称標識の出現傾向に関して、タタール語のチュルク諸語における位置づけを検討し、考察を行う。

「結論」は、第9章「言語接触の影響の可能性」と第10章「本稿のまとめと今後の課題」からなる。第9章では、タタール語における人称標識の出現頻度に言語接触の影響がある可能性について議論する。第10章では、本稿の議論をまとめ、今後の研究課題を示す。

1. タタール語概説

本章では、本稿の問題を理解するために必要な背景知識として、タタール語の概説を行う。併せて、本稿の調査対象である人称標識およびそれが現れうる領域の文法全体における位置づけと、本稿で用いる枠組みや用語の一部とその定義を示す。本論で特に重要となるものについては、太字で示す。

以下、1.1 節で基本情報、1.2 節で音韻論、1.3 節で文字と表記法、1.4 節で形態論、1.5 節で統語論について述べる。

1.1. 基本情報

本節では基本情報として、1.1.1 節で系統、1.1.2 節で主な特徴、1.1.3 節で地理的分布と方言、1.1.4 節で使用状況について述べる。

1.1.1. 系統

タタール語(カザン・タタール語ともいう)はチュルク諸語の1つであり、Johanson (1998b: 82) による地理的分布と系統的・類型論的特徴に基づいた分類では、北西(キプチャク)語群に分類される。Johanson (1998b: 82) によるチュルク諸語の分類を以下の表3に示す(タタール語を太字で示す)。

表3：チュルク諸語の分類 (Johanson 1998b)

分類		現代語 ⁴	
Common Turkic	南西(オグズ)語群	西	トルコ語 ガガウズ語 アゼルバイジャン語
		東	トルクメン語
	北西(キプチャク)語群	西	クムク語 カラチャイ語 バルカル語 クリミアタタール語 カラライム語
		北	タタール語 バシキール語
		南	カザフ語 カラカルパク語 ノガイ語 キルギス語
	南東(ウイグル)語群	西	ウズベク語
		東	現代ウイグル語(サラール語)(サリグ・ヨグル語)
	北東(シベリア)語群	北	サハ語
		南	トゥヴァ語 トファ語 ハカス語 ショル語 アルタイ語
	アルグ語群		(ハラジ語)
オグル語群		チュヴァシ語	

⁴ Johanson (1998b: 87) が文章語を持つ現代語として挙げている言語に加え、アルグ語群に属する唯一の現代語であるハラジ語と、本稿における議論で重要なサラール語およびサリグ・ヨグル語を挙げた(文章語を持っていない言語はかっこ内に示した)。Johanson (1998b: 83) によると、おそらくサラール語は歴史的には南西語群から、サリグ・ヨグル語は北東語群から発展した。

(Johanson 1998b: 82, 87 をもとに筆者作成)

併せて、Johanson and Csató (1998: xvi-xvii) によるチュルク諸語の地理的分布を以下の図 1⁵ に示す。



図 1：チュルク諸語の地理的分布 (Johanson and Csató 1998: xvi-xvii)

1.1.2. 主な特徴

タタール語は他のチュルク諸語や日本語と同様に、類型論的には膠着語に分類され、基本語順は SOV である。Nichols (1986) の分類に従えば、他の多くのチュルク諸語と同様に二重標示型 (Double-marking) の言語に分類される (ただし、常に二重標示されるわけではなく、従属部もしくは主要部にのみ標示される場合もある)。

母音調和を持つこと、アラビア語 (アフロ・アジア語族セム語派) やペルシャ語 (インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派) からの借用語を多く持つことは、他の多くのチュルク諸語と共通の特徴である。タタール語 (およびバシキール語) の際立った特徴としては、体系的な母音推移 (Johanson 1998b: 92) の結果、表 4 に示すように、他のチュルク諸語の e, i に i, e が、他のチュルク諸語の o, ö, u, ü に u, ü, o, ö がそれぞれ対応することが挙げられる (タタール語の母音について詳しくは 1.2.1 節を参照)。

⁵ 筆者により一部改変。タタール語を赤い丸で囲んだ。

表 4：トルコ語とタタール語の母音の対応⁶

	トルコ語	タタール語
「肉」	et	it
「犬」	it	et
「手、腕」	kol	qul
「奴隷」	kul	qol
「湖」	göl	kül
「笑う」	gül-	köl-

(林 1989a: 622 をもとに筆者作成)

タタール語とバシキール語は、ヴォルガ・ウラル地域に分布する他の周辺諸言語（同じくチュルク諸語に分類されるチュヴァシ語、ウラル語族フィン・ウゴル語派に分類されるマリ語やウドムルト語など）とともにヴォルガ・カマ言語連合 (Helimski 2003: 159-160) に属し、様々な共通の地域特徴を示す（タタール人と周辺諸民族の分布は図 4 を参照）。主な地域特徴としては、弱化母音を持つこと、類似の語彙を持つこと、ロシア語（インド・ヨーロッパ語族スラブ語派）から強く影響を受けている（ロシア語からの借用語やロシア語直訳的表現が多くみられる）ことなどが挙げられる。

1.1.3. 地理的分布と方言

タタール語話者の分布域は、タタール移民がロシア国外（中央アジア、中国の新疆ウイグル自治区、フィンランド、北米など）に存在するため広大であるが、主にヴォルガ川とカマ川の合流域（タタールスタン共和国）からウラル山脈南部の西側斜面（バシコルトスタン共和国）に住む (Johanson 2008: 509)。

主な方言としては、ロシア共和国に含まれるタタール自治共和国（現在のロシア連邦タタールスタン共和国）の首都カザンを中心に話されるカザン方言（中部方言）と、その西および南で話されるミシャル方言（西部方言）がある (林 1989a: 620)（ロシア連邦におけるタタールスタン共和国の位置は図 2 を参照）。Poppe (1963) は他に西シベリアで話される諸方言を挙げているが、林 (1989a: 620) は、バシキール語を別個の言語とする以上、そのすべてがタタール語の方言と考えられるかは疑わしいと述べている。タタールスタン共和国の国家語である現代標準タタール語はカザン方言に基づいており、本稿で研究対象とするタタール語は、現代標準タタール語を指す。

ロシア連邦におけるタタールスタン共和国の位置を以下の図 2 に、ロシア連邦における

⁶ トルコ語とタタール語の母音の対応について林 (1989a: 622) は、「ここで注意すべきは、同じ記号で表されているものの、実際は、トルコ語の e, o, ö とタタール語の e, o, ö とが相異なる母音である点である。すでに述べたように、タタール語の e, o, ö, さらに ə は、相当弱化した母音である。」と述べている。なお、林 (1989a) は、本稿で i を用いて表記する音素を ə を用いて表記している。

タタール人の分布を以下の図3に、ウラル・ヴォルガ地域における諸民族の分布を以下の図4に示す。



図2：ロシア連邦におけるタタールスタン共和国の位置

(<https://ru.wikipedia.org/wiki/Татарстан>)



図3：ロシア連邦におけるタタール人の分布（2010年国勢調査）

(https://ru.wikipedia.org/wiki/Расселение_татар_в_России)

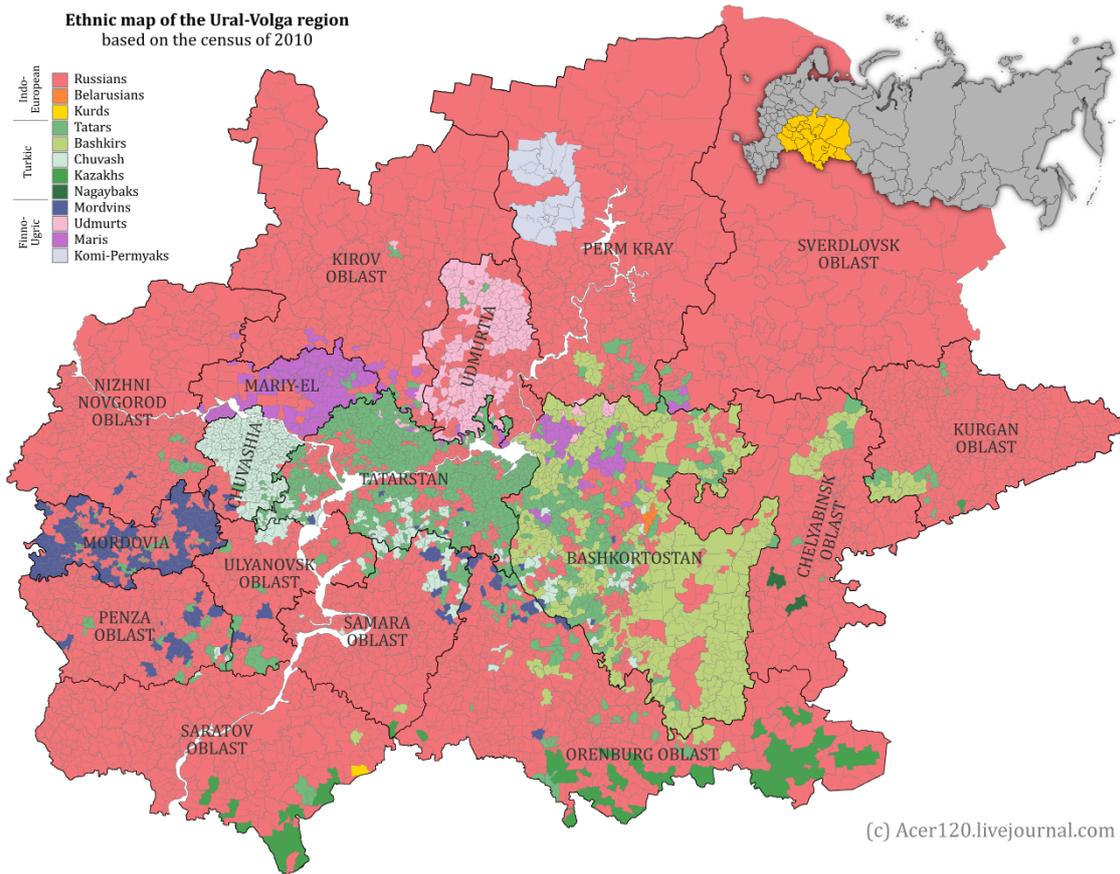


図 4：ウラル・ヴォルガ地域における諸民族の分布（2010 年国勢調査）
(<https://acer120.livejournal.com/>)

1.1.4. 使用状況

ロシア連邦を構成する共和国の 1 つであるタタールスタン共和国では、カザン方言に基づいた現代標準タタール語がロシア語と並んで国家語と定められている。

2010 年の全ロシア国勢調査によると、ロシア国内の話者数は 428 万人である (https://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm)。同調査では、ロシア連邦内に居住するタタール人（約 531 万人）のうち 97.8%が「ロシア語を話す」と回答した一方で、「タタール語を話す」と回答した割合は 69%にとどまる (https://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm)。筆者の知る限り、ロシア国内の話者の多くはロシア語とのバイリンガルであり、都市部の若年層を中心に、ロシア語を第一言語とし、タタール語が話せないタタール人も珍しくない。

1.2. 音韻論

本節では以下、1.2.1 節で母音、1.2.2 節で子音について述べる。

1.2.1. 母音

本節では 1.2.1.1 節で母音音素、1.2.1.2 節で母音調和について述べる。

1.2.1.1. 母音音素

Poppe (1963: 9), 林 (1989a: 621), Berta (1998: 283) によると、母音音素は、以下の表 5 の通り 9 個である（ロシア語からの借用語にのみ現れる音素は含めていない）⁷。

表 5：母音音素

	後舌		前舌	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭		/u/	/i/	/ü/
中	/i/	/o/	/e/	/ö/
広	/a/		/ä/	

(Poppe 1963: 9; 林 1989a: 621; Berta 1998: 283 をもとに筆者作成)

/a/ は第一音節やそれに続く音節でやや円唇化する（例：bala [bälä] 「子供」）(Berta 1998: 283)。円唇は第一音節から遠ざかるほど緩んでいく (Baitchura 1993: 29)。中母音 /i/[ĩ], /e/[ě], /o/[õ], /ö/[ö] は弱化母音であり、アクセントがない場合は口語でゼロと交替することがある（例：keše~kše 「人」）(Berta 1998: 283)。ただし、これは正書法に反映されず、本稿で用いる表記法も正書法に従う（正書法および本稿で用いる表記法については 1.3 節で後述）。/o/, /ö/ は語幹の /o/, /ö/ の後にのみ現れ、それ以外の非第一音節には表れない (Berta 1998: 284)。円唇性は第一音節から遠ざかるほど緩んでいく (Baitchura 1993: 30)。正書法で、非第一音節の円唇弱化母音 /o/, /ö/ は、非円唇の文字で書かれる（例：озын /ozon/ 「長い」）(Berta 1998: 285)。本稿で用いる表記法も正書法に従う。

1.2.1.2. 母音調和

タタール語は他の多くのチュルク諸語と同様に母音調和を持つ (林 1989a: 622)。語幹と接辞の間に、前舌母音には前舌母音、後舌母音には後舌母音が続くという共起制約が働く (林 1989a: 622)。固有語では、語幹内部の母音の分布に関しても同様の規則が見いだされる (林 1989a: 622)。前舌対後舌の調和は以下の表 6 に示す通りである (Berta (1998: 284) によると、円唇対非円唇の調和はあまり発達していない)。接辞の母音は A, B の 2 種類があり、どちらの母音が現れるかは接辞によって決まっている (林 1989a: 622)。

⁷ Poppe (1963), 林 (1989a), Berta (1998) は、一部異なる文字を用いている。本稿におけるタタール語の表記は、特にことわりのない限り、1.3.3 節で後述する文字と表記法に従っている。

表 6：前舌対後舌の調和

語幹の最終母音					接辞の母音	
					A	B
/i/	/e/	/ä/	/ü/	/ö/	/ä/	/e/
(前舌母音)						(/ö/)
	/i/	/a/	/u/	/o/	/a/	/i/
(後舌母音)						(/o/)

(Poppe 1963: 15; 林 1989a: 622 をもとに筆者作成)

1.2.2. 子音

本節では、1.2.2.1 節で子音音素、1.2.2.2 節で子音交替について述べる。

1.2.2.1. 子音音素

林 (1989a: 622) によると、子音音素は以下の表 7 の通り 22 個である (ロシア語からの借用語にのみ現れる音素は含めていない)。

表 7：子音音素

	両唇	唇歯	歯茎	後部歯茎	歯茎 硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
破裂音	/p/, /b/		/t/, /d/			/k/, /g/			
摩擦音		/f/	/s/, /z/	/š/, /ž/	/č/, /j/		/x/	/h/	
破擦音									
接近音	/w/		/l/			/y/			
鼻音	/m/		/n/				/ŋ/		
ふるえ音			/r/						

(Poppe 1963: 10-13; 林 1989a: 622; Berta 1998: 283 をもとに筆者作成)

表 7 に挙げた音素に加え、Poppe (1963: 8) はアラビア語からの借用語に現れる声門破裂音を音素に含めているが、林 (1989a: 622) と Berta (1998: 283) は含めていない。本稿は、林 (1989a: 622) と Berta (1998: 283) に従い、声門破裂音を音素に含めない立場を取る。

/k/, /g/ は、前後の母音により、硬口蓋から口蓋垂にいたる異音を持つ (/g/ は母音間で摩擦音化する) (林 1989a: 622)⁸。/č/, /j/ は、破擦音から摩擦音にいたる異音を持つ (Berta 1998:

⁸ Berta (1998: 283) は /k/, /g/ について、前舌母音を持つ音節では軟口蓋音 [k], [g]、後舌母音を持つ音節では後部軟口蓋音 [q], [y~ǰ] として実現するとしている。ただし、借用語ではその限りではなく、完全に相補分布しているわけではない。Berta (1998) は各形態素の代表形を表記する際、大文字 K, G を用いて表記し

284)。

1.2.2.2. 子音交替

語幹末の /p/, /k/ は、母音で始まる接辞が付加すると弱化してそれぞれ /b/, /g/ となる (例: tap- 「見つける」 > tab-il- 「見つかる」、ayaq 「足」 > ayay-i 「その足」) (Berta 1998: 284)。⁹ 接辞頭子音の性質は、語幹末子音によって決まる (Berta 1998: 284)。タタール語の多くの接辞頭子音は、有声か無声の2つのバリエーションを持つ (Berta 1998: 284)。語幹末が母音または有声子音の場合は有声子音が、語幹末がその他の音の場合は無声子音が現れる (例: taw-da [山-LOC] 「山で」、ayaq-ta [足-LOC] 「足で」) (Berta 1998: 284)。複数接辞と奪格接辞 (いずれも 1.4.1 節で後述) は鼻音同化を起こし、語幹末子音が鼻音の場合、接辞頭子音が n となる (例: uram-nar [通り-PL] 「通り (複数)」、uram-nan [通り-ABL] 「通りから」) (Berta 1998: 284-285)。以上の子音交替はいずれも正書法に反映され、本稿で用いる表記法も正書法に従う (正書法および本稿で用いる表記法については 1.3 節で後述)。

1.3. 文字と表記法

タタールスタン共和国の国家語である現代標準タタール語では 2021 年現在、キリル文字に基づいた正書法が公式に用いられている。ソ連崩壊後はラテン文字への移行が目指されたが、ロシア政府が認めず、実現しなかった。以下、1.3.1 節でキリル文字正書法について、1.3.2 節で、かつて移行が目指されたラテン文字正書法について、1.3.3 節で、本稿で用いる文字と表記法について述べる。

1.3.1. キリル文字正書法

本節では、1939 年に制定され、タタールスタン共和国の国家語である現代標準タタール語で 2021 年現在公式に用いられているキリル文字正書法について述べる。

タタール語のキリル文字は、ロシア語のキリル文字 33 字に ә, ж, н, ө, ү, һ の 6 字を加えた 39 字からなる。表 8 に、キリル文字と音素の対応を示す (音素については 1.2 節を参照)。

なお、比較的新しいロシア語からの借用語はロシア語の音韻体系に従って発音される。従って、同じキリル文字が異なる音素を表す場合がある。例えば в は /w/ を表すが、ロシア語の音韻体系に従って発音される借用語では /v/ を表す。ë, ц, ш の 3 字はロシア語からの借用語でのみ用いられるため、それらの文字が表す音素はカッコ内に表記した。本稿では、ロシア語の音韻体系は示さない。

ている。本稿でも、完全に相補分布しているわけではないこと、音声的な差異が大きいことを考慮し、Berta (1998) にならって大文字 K, G を用いて表記する。

⁹ 子音 r で始まる接辞 -rAK (1.4.1.2 節で後述) が付加する場合も同様に有声化する (例: küp 「多い」 > küb-räk 「より多い」)。

表 8 : キリル文字と音素の対応

キリル文字	音素
А а	/a/
Ә ә	/ä/
Б б	/b/
В в	/w/
Г г	/g/
Д д	/d/
Е е	/e, ye, yī/
Ё ё	(/yo/)
Ж ж	/ž/
Ж ж	/j/
З з	/z/
И и	/i, ey/
Й й	/y/
К к	/k/
Л л	/l/
М м	/m/
Н н	/n/
Њ њ	/ɲ/
О о	/o/
Ө ө	/ö/

キリル文字	音素
П п	/p/
Р р	/r/
С с	/s/
Т т	/t/
У у	/u, iw/
Ү ү	/ü, ew/
Ф ф	/f/
Х х	/x/
Һ һ	/h/
Ц ц	(/c/)
Ч ч	/č/
Ш ш	/ʃ/
Щ щ	(/šč/)
Ъ	
Ы, ы	/i/
Ь	
Ю, ю	/yu, yiw, yü, yew/
Я, я	/ya, yä/
Э э	/e/

(Poppe 1963: 19-24 をもとに筆者作成)

主に語末の и, у, ү の文字が表す音に関しては、先行研究によって記述が異なっている。Poppe (1963: 19-24) は、и, у, ү の文字は第一音節以外の音節や語末でそれぞれ /ey/ [i], /iw/ [ü/uw], /ew/ [ü] を表すとしている (例: әти /ätey/ [ät'i] 「父」、уку /ukiw/ [uk'ü / uk'uw] 「読むこと」、бирү /birew/ [birü] 「与えること」)。林 (1989a: 621) は、「у, ү の文字は音節末で w の音を表すが、先行する母音が i の場合は、iw ([ü] と発音される) 全体を у で、先行母音が e の場合は、ew ([ü] と発音される) 全体を ү で表す。この他に、文字 и も、i を表す場合と ey ([i] と発音される) を表す場合がある」としている。Berta (1998: 285) は、「音節末で и, у, ү の文字はそれぞれ i, ü /uw, ü /üw の音を表す」としている (本稿での立場については、1.3.3 節で後述する)。

硬音記号 ь と軟音記号 ь は、いくつかの機能を持つ (ロシア語からの借用語におけるこれらの記号の機能については説明しない)。主に、分離記号として用いられる (例: кулъязма

/kulyazma/「手記」、көнъяк /könyak/「南」) ほか、アラビア語・ペルシャ語からの借用語において、к, г の文字が硬口蓋音～軟口蓋音または口蓋垂音のどちらを表わすかを示す機能(例: тәкъдим [täqdim]「提案」、пакъ [pak]「清い」)、直前の母音字が対応する前舌母音を表わすことを示すための機能(軟音記号のみ、例: яшь /yäš/「若い、歳」、мәкаль [mäqäl]「諺」)を持つ。

1.3.2. ラテン文字正書法

本節では、1999年の「ラテン文字に基づくタタール語アルファベットの復活に関する法」(タタール語: Татар алфавитын латин графикасы нигезендә торгызу турында канун)により導入が目指されたラテン文字正書法(以下、1999年版)と、2012年の「タタールスタンにおけるタタール語の国家語としての使用に関する法」(タタール語: Татарстанда татар телен дәүләт теле буларак куллану турында канун)に添付の文字対応表で示されたラテン文字(以下、2012年版)について述べる。

ラテン文字正書法は、主にネット上の一部のサイト(タタール語版ウィキペディアや、トルコ国営放送タタール語版サイトなど)で用いられている(ただし、文字は2012年版のものが使用され、表記法は必ずしも正書法通りではない)。2012年の「タタールスタンにおけるタタール語の国家語としての使用に関する法」により、タタールスタンの国家・地方機関とのやり取りでは、キリル文字に加えてラテン文字(およびアラビア文字)を使用することが可能である(<https://www.azatliq.org/a/24807561.html>)。

ラテン文字は、1999年版と2012年版のいずれも34字(標準ラテン文字26字+特殊文字8字)からなるが、一部の特殊文字が異なる。以下の表9に、ラテン文字(1999年版、2012年版)と音素の対応を示す(1999年版と2012年版で異なる文字は太字で示す)。

なお、比較的新しいロシア語からの借用語はロシア語の音韻体系に従って発音される。したがって、同一のラテン文字が異なる音素を表す場合がある。v の文字はロシア語からの借用語でのみ用いられるため、v の文字が表す音素はカッコ内に表記した。

表9：ラテン文字と音素表記の対応

1999 年版	2012 年版	音素	1999 年版	2012 年版	音素
A a	A a	/a/	M m	M m	/m/
Ә, ә	Ä ä	/ä/	N n	N n	/n/
B b	B b	/b/	Ŋ, ŋ	Ñ ñ	/ŋ/
C c	C c	/j/	O o	O o	/o/
Ç ç	Ç ç	/č/	Ө ө	Ö ö	/ö/
D d	D d	/d/	P p	P p	/p/
E e	E e	/e/	R r	R r	/r/
F f	F f	/f/	S s	S s	/s/
G g	G g	/g/ [g]	Ş ş	Ş ş	/ʃ/
Ğ ğ	Ğ ğ	/g/ [ɟ]	T t	T t	/t/
H h	H h	/h/	U u	U u	/u, iw/
I ı	I ı	/i/	Ü ü	Ü ü	/ü, ew/
İ i	İ i	/i, ey/	V v	V v	(/v/)
J j	J j	/ž/	W w	W w	/w/
K k	K k	/k/ [k]	X x	X x	/x/
Q q	Q q	/k/ [q]	Y y	Y y	/y/
L l	L l	/l/	Z z	Z z	/z/

(Poppe 1963: 19-24; Tatarstan Respublikası Fännär akademiäse 2000: 8-9;
<https://www.azatliq.org/a/24807561.html> をもとに筆者作成)

タタールスタン共和国学術アカデミーによる正書法概説である Tatarstan Respublikası Fännär akademiäse (2000: 13, 18) は、主に語末の i, u, ü の文字が表す音について、「語末の i の音が純粋な母音ではなく、y の音を伴う二重母音のように発音されることは文字には反映されない」、「語末の u と ü の音が純粋な母音ではなく、w を伴う二重母音のように発音されることは文字には反映されない」としている（本稿での立場については、1.3.3 節で後述する）。

1.3.3. 本稿で用いる文字と表記法

本節では、本稿でタタール語を表記する際に用いる文字と表記法について述べる。

上述のキリル文字正書法およびラテン文字正書法は、一部の正書法上の規則のために形態素分析に適さない。例えば、キリル文字正書法では、子音と母音の組み合わせを表わす文字 (е, ю, я) が形態素境界をまたいで表記されうるという問題がある（例：соя (сой-ә [愛する-PRS]) 「愛している」）。さらに、いずれの正書法も、ロシア語の音韻体系に従って発音されるロシア語からの借用語を別の文字セットを使うなどして書き分けることをしないため、

2つの異なる音韻体系が1つの文字セットを用いて表記されるという問題を持つ。これらの問題を解決するため、本稿では、特にことわりのない限り、タタール語の音韻体系に従って発音される部分を、以下の表10に示すラテン文字を用いて表記し、ロシア語の音韻体系に従って発音されるロシア語からの借用語¹⁰を、Timberlake (2004: 25)にある linguistic 方式を用いて表記する（異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す）。ただし、タタール語で書かれた参考文献の書誌情報（著者名を含む）は、1.3.2節でみたラテン文字正書法（文字は2012年版）に従って表記する。

表10：本稿で使用するラテン文字と音素表記の対応

ラテン文字	音素	ラテン文字	音素
A a	/a/	N n	/n/
Ä ä	/ä/	ŋ	/ŋ/
B b	/b/	O o	/o/
Č č	/č/	Ö ö	/ö/
D d	/d/	P p	/p/
E	/e/	R r	/r/
F f	/f/	S s	/s/
G g	/g/ [g]	Š š	/š/
Ƴ Ƴ	/g/ [g]	T t	/t/
H h	/h/	U u	/u/
İ i	/i/	Ü ü	/ü/
I i	/i/	W w	/w/
Ĵ ĵ	/j/	X x	/x/
K k	/k/ [k]	Y y	/y/
Q q	/k/ [q]	Z z	/z/
L l	/l/	Ž ž	/ž/
M m	/m/		

正書法で、主に語末において и, y, Ƴ または i, u, ü の文字で表される部分（音韻的にはそれぞれ /ey/, /iw/, /ew/, 音声的にはそれぞれ [i ~ iy], [ü ~ uw], [ü ~ üw]）を、本稿では当該部分の音声的実現およびこれに続く接辞の形態音韻論的交替を踏まえ、それぞれ iy, uw, üw と表記することとする¹¹。

¹⁰ ある借用語がロシア語の音韻体系に従って発音されるかどうかは、世代差や個人差があるため、判断が難しい。本稿では原則として、キリル文字正書法においてロシア語と同様の綴りを持つものを斜字体で示すこととする。

¹¹ ey, iw, ew は、実際の音声と乖離しているため用いない。i, ü, ü は、後続する接辞が子音終わりの語に付

1.4. 形態論

Johanson (1998a: 38) は、チュルク諸語の主要な品詞は名詞類 (Nominals) と動詞 (Verbals) (それ以外は不変化詞) であり、名詞類は名詞、形容詞、代名詞、数詞からなると述べている (1.4.1.2 節で後述するように、名詞と形容詞、形容詞と副詞は明確に区別できない場合が多い)。本稿は Johanson (1998a: 38) に従い、タタール語の品詞を大きく名詞類、動詞、その他¹²に分ける。以下、1.4.1 節で名詞類、1.4.2 節で動詞、1.4.3 節でその他について述べる。

1.4.1. 名詞類

本節では、名詞類およびその形態法について述べる。以下、1.4.1.1 節で名詞形態法、1.4.1.2 節で名詞類の下位分類について述べる。

1.4.1.1. 名詞形態法

名詞類には名詞形態法を施しうる。以下の表 11 に、タタール語の名詞形態法を示す。

表 11 : 名詞形態法

名詞語幹	屈折接辞		
名詞語根	複数	所有	格
語根+名詞派生			

以下、派生接辞と屈折接辞について述べる。

まず、派生接辞について述べる。ここでは、本論に特に関わるものとして、名詞派生接辞 -IEK と副詞派生接辞 -čA について述べる。いずれも屈折接辞を内包した派生が可能であり、統語的性格を持った「統語的派生接辞」(江畑 2018, 2020) であると考えられる。

名詞派生接辞 -IEK は、名詞から名詞を派生する機能 (例: küz-lek [目-NMLZ] 「眼鏡」 tiš-liq [外-NMLZ] 「カバー」)、形容詞から名詞を派生する機能 (例: matur-liq [美しい-NMLZ] 「美しさ」) に加え、節を名詞化する機能も持っている (例: öy-dä sin bar-liq-ni [家-LOC2SG いる -NMLZ-ACC] 「家に君がいることを」)。節を名詞化する -IEK については、1.5.2 節でも取り上げる。本論では、主に 5.1 節で扱う。

副詞派生接辞 -čA は、名詞から副詞を派生する機能 (例: dus-lar-ča [友人-PL-ADV LZ] 「友人のように」)、代名詞から副詞を派生する機能 (例: minem-čä [1SG.GEN-ADV LZ] 「私からすれば」)、形容詞・副詞から副詞を派生する機能 (例: yaŋa-ča [新しい-ADV LZ] 「新しく」) 非定形動詞から副詞を派生する機能 (例: bel-üw-ebez-čä [知る-VN-1PL.POSS-ADV LZ] 「私たちが知るところによると」) を持つ (Xisamova 2006: 285)。この接辞について、本論では主に 5.1

加する異形態となって現れることから用いない。

¹² 名詞類と動詞以外のものの中には接辞が付加しうるものがあるため、「不変化詞」とはせず、「その他」とした。

節で取り上げる。

次に、屈折接辞について述べる。表 11 に示したように、名詞語幹には、複数接辞、所有接辞、格接辞がこの順番で付加しうる。以下、複数接辞、所有接辞、格接辞についてそれぞれ述べる。

A. 複数接辞

複数接辞は -LAr である (Berta 1998: 287)。2 以上を表わす数詞や、数量を表わす語の後の名詞は通常、複数接辞で標示されない (例 : biš tölke [五 狐]「五頭の狐」、küp kön(-när) [多い 日(-PL)]「多くの日」) (Berta 1998: 287)。

B. 所有接辞

所有接辞 -(s)E¹³ は、主に属格もしくは主格の名詞句に限定された名詞句に付加し、所有関係を中心とする幅広い関係を標示しうる (例 : anıñ дәftär-e [それ.GEN ノート-POSS]「その人のノート」、Kem bala-si? [誰 子供-POSS]「誰の子どもだ?」)。

すでに表 1 で挙げた**所有人称接辞**も所有接辞に含まれるが、これは上述の -(s)E とは異なり、主に属格人称代名詞に限定された名詞句に付加し、所有などの関係と人称・数を同時に標示する。以下の表 12 に、改めて所有人称接辞の形式を示し、さらに子音終わりの名詞 дәftär 「ノート」と母音終わりの名詞 bala 「子供」に付加した形を示す。所有人称接辞が現れうる領域である所有名詞句については 1.5.1 節で、関係節と名詞節については 1.5.2 節で後述する。

表 12 : 所有人称接辞

	形式	däftär 「ノート」	bala 「子供」
1SG	-(E)m	däftär-em	bala-m
1PL	-(E)bEz	däftär-ebez	bala-biz
2SG	-(E)ŋ	däftär-eŋ	bala-ŋ
2PL	-(E)GEz	däftär-egez	bala-yiz

(Berta 1998: 287; 林 1989a: 623; Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

C. 格

タタール語は 6 つの格 (主格、属格、対格、与格、位格、奪格) を持つ (Berta 1998: 287)。主格は接辞を持たない (Berta 1998: 287)。対格は主に特定の直接目的語を標示し、不特定の目的語はほとんどの場合対格を欠く (Berta 1998: 287)(詳しい条件はここでは問題にしない)。

¹³ 多くの先行研究は -(s)E を三人称の所有接辞であるとしている (第 3 章を参照)。本稿では、この接辞は三人称という人称は標示せず、所有などの関係のみを標示する接辞であるとみなす (-(s)E についての本稿の立場について、詳しくは 4.1.1 節で後述する)。

以下の表 13 に、それぞれの格接辞の形式と、名詞に付加した形を示す。

表 13：格接辞

	形式	käjä 「ヤギ」	uram 「通り」	at 「馬」
主格		käjä	uram	at
属格	-nEŋ	käjä-neŋ	uram-niŋ	at-niŋ
対格	-nE	käjä-ne	uram-ni	at-ni
与格	-GA	käjä-gä	uram-ya	at-qa
位格	-DA	käjä-dä	uram-da	at-ta
奪格	-DAn	käjä-dän	uram-nan	at-tan

(Berta 1998: 287; 林 1989a: 623 をもとに筆者作成)

なお、与格は一部の所有接辞に後続する場合、-A となる（例：at-**im-a** [馬-1SG.POSS-DAT] 「私の馬に」）。所有接辞 -(s)E に後続する対格は -n となる（例：at-**i-n** [馬-POSS-ACC] 「その馬を」）。所有接辞 -(s)E に与格、位格、奪格が後続する場合、所有接辞と格接辞の間に n（いわゆる pronominal n）が現れる（例：at-**i-n-da** [馬-POSS-n-LOC] 「その馬で」）。

1.4.1.2. 下位分類

名詞類の下位分類として、本稿では名詞、形容詞、代名詞、数詞を認める。名詞と形容詞、形容詞と副詞は明確に区別できない場合が多い。以下、それぞれについて述べる。

A. 名詞

名詞は主に具体的な対象を指示し、文中では主に項として機能するほか、単独で述語にもなりうる（例：Min tatar. [1SG タタール] 「私はタタール人だ」）。複合名詞（1.5.1 節で後述）の前部要素として、他の名詞を修飾することもある（例：tatar tel-e [タタール 言語-POSS] 「タタール語」）。yan 「横」、al(d) 「前」、ös(t) 「上」、ara 「間」などの相対的な位置関係を表わす補助名詞 (auxiliary nouns)¹⁴ は、所有と格の接辞をとって後置詞的に機能する（例：yan-**i-n-da** [横-POSS-n-LOC] 「(～の) 横に」）。本論で、補助名詞は主に 5.1 節で取り上げる。

B. 形容詞

形容詞は主に状態や様子を表わし、文中では主に修飾語（修飾用法）または述語（叙述用法）として機能する（例：matur čáčäk [美しい 花] 「美しい花」、Čáčäk matur. [花 美しい] 「花は美しい」）。叙述用法のみを持つ形容詞もある（例：存在述語 bar / yuq 「ある／ない」、モ

¹⁴ Berta (1998: 296) が用いている用語。Berta (1998: 296) は補助名詞を後置詞として扱っているが、本稿では名詞として扱う。al(d) 「前」、ös(t) 「上」のかっこ内に示した子音は、所有接辞が後続する場合にのみ現れる（例：öy ald-**i-n-da** [家 前-POSS-n-LOC] 「家の前で」）。

一ダル述語 *kiräk, tiyeš* 「必要だ」)。多くの形容詞は、名詞的にも副詞的にも用いられうる (例: *matur-ïm* [美しい-1SG.POSS] 「私の美しい人よ」、*matur söylä-* [美しい 話す-] 「美しく話す」)。副詞的に用いられる形容詞には、しばしば接語 =GEnA (1.4.3 節で後述) が付加する (例: *matur=yïna söylä-* [美しい=だけ 話す-] 「美しく話す」)。

形容詞の比較級は *-rAK* により形成される (例: *ozin-raq* [長い-COMP] 「より長い」) (Berta 1998: 286)。ただし、*-rAK* は形容詞と類似の統語機能を持つ他の要素 (位格名詞、副詞、形動詞、副動詞) にも付加しうる (例: *monda-raq* [これ.LOC-COMP] 「もっとこっちに」)。比較表現で *-rAK* は義務的ではない (例: *yulbaris-tan köçle* [トラ-ABL 強い] 「トラより強い」) (Berta 1998: 286)。最上級は小辞 *ij* を前置することで形成される (例: *ij matur* 「最も美しい」) (Berta 1998: 286)。

C. 代名詞

代名詞には人称代名詞、指示代名詞、再帰代名詞、疑問代名詞、不定代名詞がある (Berta 1998: 289)。

すでに表 1 で挙げた**人称代名詞** (主格形) を、改めて以下の表 14 に示す。

表 14 : 人称代名詞 (主格形)

	SG	PL
1	<i>min</i>	<i>bez</i>
2	<i>sin</i>	<i>sez</i>

(Berta 1998: 289; 林 1989a: 623 をもとに筆者作成)

sin は二人称単数 (親称) 「君」を、*sez* は二人称複数 「君たち」または二人称単数 (敬称) 「あなた」を表わす (林 1989a: 623)。三人称を指す場合には指示代名詞が用いられる (*ul* 「あれ、その人、彼/彼女」、*alar* 「あれら、その人ら、彼ら/彼女ら」) (林 1989a: 623)。

指示代名詞には主に *bu, šušī, šul, tege, ul* の 5 つがある (林 1989a: 623)。*bu, šušī* が近称に、*šul, ul* が遠称に用いられる (林 1989a: 623)。*tege* は、日本語の「アレ、アノ」のように、聞き手が *tege* の指示対象を知っていると話し手が見なしている場合に用いられる (林 1989a: 623)。

再帰代名詞は *üz* であり、所有接辞をとって名詞と同様に屈折しうる (例: *üz-em-neŋ* [自身-1SG.POSS-GEN] 「私自身の」) (Berta 1998: 289)。複数・所有・格をとらずに名詞を修飾する機能も持つ (例: *üz il-em* [自身 国-1SG.POSS] 「私自身の国」)。本論で、再帰代名詞 *üz* は主に 5.1 節で取り上げる。

疑問代名詞には *kem* 「誰」、*närsä, niy* 「何」、*nigä, nik* 「なぜ」、*nindiy* 「どんな」、*ničä* 「いくつ」、*qaysi* 「どれ」などがある (Berta 1998: 290)。

不定代名詞は *ber* 「一」、*hič* 「全く」、*här* 「すべての」、推量の接語 =DEr (1.4.3 節で後述)

などと疑問代名詞の組み合わせからなる（例：berkem, hičkem 「誰も～ない」、kem=der 「誰か」、härkem 「みな」）。

一部の代名詞（指示代名詞および単数人称代名詞）の屈折形は不規則な形となる。例として、以下の表 15, 16 に、指示代名詞および単数人称代名詞の格変化形を示す。不規則な形は太字で示す（格接辞の形式については 1.4.1.1 節の表 13 を参照）。

表 15：指示代名詞の格変化形

主格	bu	šuši	šul	ul	tege
属格	moniŋ	šuši-niŋ	šuniŋ	aniŋ	tege-neŋ
対格	moni	šuši-ni	šuni	ani	tege-ne
与格	moŋa	šušiŋa	šuŋa	aŋa (aŋar, aŋarya)	tegeŋä
位格	monda	šuši-n-da	šunda	anda (aŋarda)	tege-n-dä
奪格	monnan	šuši-n-nan	šunnan	annan (aŋardan)	tege-n-nän

(林 1989a: 624; Xisamova 2006: 147 をもとに筆者作成)

表 16：単数人称代名詞の格変化形

	1SG	2SG
主格	min	sin
属格	minem	sineŋ
対格	mine	sine
与格	miŋa	siŋa
位格	min-dä	sin-dä
奪格	min-nän	sin-nän

(林 1989a: 624; Berta 1998: 289 をもとに筆者作成)

D. 数詞

数詞は基数詞（例：ber 「1」、ike 「2」、öč 「3」、un 「10」など）のほか、序数詞、集合数詞、分割数詞、概数詞がある (Xisamova 2006: 135)。序数詞は基数詞に -(E)nčE（例：ber-enčE 「1 番目の、初めて」）、集合数詞は -Aw（例：ikäw 「2 人で」）、分割数詞は -(š)Ar（例：ike-šär 「2 つずつ」、öč-är 「3 つずつ」）、概数詞は -lAp（例：un-lap 「約十の」）を付加することで形成される (Xisamova 2006: 136-138)。

1.4.2. 動詞

動詞には動詞形態法を施しうる。以下の表 17 に、動詞形態法を示す。

表 17：動詞形態法

動詞語幹			屈折接辞			
動詞語根 語根+動詞派生	派生接辞		定形動詞	述語人称		
	態	相		非定形 動詞	動名詞	
					形動詞	
					副動詞	
					不定形	

動詞語幹には派生接辞と屈折接辞が付加する（派生と屈折の別は Berta (1998) に従う）。以下、派生接辞と屈折接辞について述べる。

A. 派生接辞

動詞語幹に付加し、新たな動詞語幹を派生する接辞には、態、相、極性を表わすものがある。以下の表 18 に、それぞれの接辞形式を示す（異形態の出現条件等はここでは詳しく述べない）。

表 18：動詞語幹に付加する派生接辞

態	受身	-(E)n, -(E)l
	再帰	-(E)n
	使役	-(E)t, -(E)r, -Ar, -DEr, -Ez など
	相互	-(E)š
相	多回	-GAIA, -(E)štEr
極性	否定	-mA

(Berta 1998: 291 をもとに筆者作成)

B. 屈折接辞

屈折接辞には、定形動詞形成接辞と非定形動詞形成接辞がある。本論において、定形動詞は 5.2 節で、非定形動詞は 5.1 節で主に取り上げる。

定形動詞形成接辞は、まずモードにおいて直説法の接辞とその他の接辞に分けられる。直説法の接辞は時制・相を表わす。以下の表 19 に、それぞれの接辞形式を示す。

表 19：定形動詞形成接辞

直説法 (時制・相)	過去	-DE
	完了	-GAn
	現在	-A/y
	未来 I (曖昧未来)	-(V)r (否定 -mAs)
	未来 II (確定未来)	-(y)AčAK
その他	願望・命令	(表 21 を参照)
	条件	-sA
	意図	-mAKčE

(林 1989a: 624; Berta 1998: 292-295 をもとに筆者作成)

林 (1989a: 624) によると、時制・相を表わす接辞のうち、正真正銘の定形動詞と考えられるのは過去 -DE のみであり、現在 -A/y は本来、副動詞 (表 22)、完了と未来 I, II は本来、形動詞 (表 22) である¹⁵。

Xisamova (2006: 183-184) によると、完了 -GAn は主に次の機能を持つ。1) 発話の瞬間までに起こり、完了した動作を表わす。話者は動作を目撃しておらず、動作の結果から推測して述べる (例: qayt-qan [帰る-PRF] 「帰ったようだ」)。一・二人称主語は比較的少なく、一人称主語の場合は話者の意志の外で行われた動作を表わす (例: onit-qan-biz [忘れる-PRF-1PL] 「私たちは忘れたようだ」)。2) 発話の瞬間までに起こり、発話の瞬間においてまだその動作の結果が持続していることを表わす。動作が話者の眼前で起こったかどうかは重要ではない (例: qal-yan [残る-PRF] 「残っている」)。本稿では、前者の機能を「間接経験」、後者の機能を「結果状態」と呼ぶ。現在 -A/y は、子音終わりの動詞語幹に -A が、母音終わりの動詞語幹に -y が付加する。ただし、-y が付いた動詞の語幹末母音は変化し I (i もしくは i) となる (例えば、ešlä- 「働く」の現在形は ešliy [働く.PRS] 「働いている」、qara- 「見る」の現在形は qarïy [見る.PRS] 「見ている」となる)。否定の -mA (表 18) に後続する場合も同様である (例: bar-ma- [行く-NEG-] 「行かない」の現在形は bar-mïy [行く-NEG.PRS] 「行かない」、kil-mä- [来る-NEG-] 「来ない」の現在形は kil-miy [来る-NEG.PRS] 「来ない」となる)。未来 I の -(V)r は、母音終わりの語幹には -r が、子音終わりの動詞語幹には -Ar または -Er が付加する (否定形は -mAs) (例: kil-er [来る-FUTI] 「来るだろう」、kil-mäs [来る-NEG.FUTI] 「来ないだろう」)。意図 -mAKčE は、Berta (1998: 294) によると複合接辞 (complex suffix) である。Zäkiev et al. (2017: 41) によると、この接辞は否定接辞 -mA (表 18) と共起せず、名詞と同様に tügel (1.4.3 節で後述) で否定される (例: bar-maqčï tügel [行く-VOL COP.NEG] 「行くつもりではない」)。

¹⁵ 林 (1989a: 624) のこの記述は、通時的な観点からのものであろう。共時的には、表 19 に挙げた形式は全て定形動詞である。よって、例えば「本来、形動詞である」という部分は、「形動詞に由来する定形動詞である」とするのが適切であろうと筆者は考える。

定形動詞には主語の人称・数に応じて、すでに表 1 に挙げた**述語人称標識**（以下の表 20 に改めて示す）が付加しうる。述語人称標識は 2 種類あり、過去形、条件形には所有型の、それ以外（非動詞述語も含む）には代名詞型の標識が接尾しうる（例：kil-de-k [来る-PST-1PL] 「私たちは来た」、bar-a-biz [行く-PRS-1PL] 「私たちは行く」）¹⁶。二人称単数標識は二人称単数（親称）を、二人称複数標識は二人称複数または二人称単数（敬称）を表わす。二人称単数標識は加えて、一般的な事柄を述べる文の述語にも現れうる（例：Uram-ya=da čiy-a al-miy-sij, muyinnan qar. [通り-DAT=も 出る-CVB 取る:AUX-NEG.PRS-2SG のどまで 雪] 「外にも出られない、深さがのどまでの雪だ」）。三人称は標示されない。三人称複数は複数接辞と同形の -LAr で標示されることがある（例：bar-a(-lar) [行く-PRS(-PL)] 「(その人らは) 行く」）。-LAr は行為者が不特定であることを表わしうる（例：Kanada-da francuzča söylaš-ä-lär. [カナダ-LOC フランス語 話す-PRS-PL] 「カナダではフランス語が話されている」）。

表 20：述語人称標識

	代名詞型	所有型
1SG	-m(En)	-m
1PL	-bEz	-K
2SG	-sEŋ	-ŋ
2PL	-sEz	-GEz

(林 1989a: 625; Berta 1998: 292-295 をもとに筆者作成)

なお、願望・命令形は表 21 に示すようなパラダイムを持っている。

表 21：願望・命令形

	SG	PL
1	-(I)y _m	-(I)y _K
2	-∅	-(E)GEz
3	-sEn	

(Berta 1998: 294; Xisamova 2006: 170 をもとに筆者作成)

-(I)y_m, -(I)y_K は話者の意志、提案、願望を表わす。子音終わりの語には -Iy_m, -Iy_K が、母音終わりの語には -y_m, -y_K が付くが、-y_m, -y_K が付いた動詞の語幹末母音は変化し I (i もしくは i) となる（例：al-iy_m [取る-OPT.1SG] 「私は取ろう」、ešlä- > ešliy_K [働く.OPT.1PL] 「私たちは働こう」）。-∅ は二人称単数（親称）への命令を、-(E)GEz は二人称複数または二人称単数（敬称）への命令を表わす（例：Bar! [行く.IMP.2SG] 「行け！」、Utir-iyiz. [座る-

¹⁶ 代名詞型の標識を接辞とみなすか接語とみなすかは先行研究によって立場が異なる（3.2.2 節を参照）。本稿での立場については、4.1.1 節で後述する。

IMP.2PL]「座ってください」)。-sEn は三人称に対する命令、話者の願望を表わす（三人称複数への命令、話者の願望は -sEn に複数接辞と同形の -LAr が後続した -sEnnAr で標示されることがある）（例：Tämle bul-sïn. [美味しい なる-IMP.3]「美味しくなりますように（召し上がれ）」、kil-sen-när [来る-IMP.3-PL]「(その人らが) 来るように」)。本稿では、願望・命令形の形式は人称標識には含まない（詳しくは 4.1.1 節で後述）。

非定形動詞形成接辞には動名詞接辞、形動詞接辞、副動詞接辞、不定形接辞がある。以下の表 22 に、それぞれの接辞形式を示す。

表 22：非定形動詞形成接辞

動名詞		-(U)w
形動詞	過去	-GAn
	現在 I	-(U)wčE
	現在 II	-{A/y} torȳan
	未来 I (曖昧未来)	-(V)r (否定 -mAs)
	未来 II (確定未来)	-(y)AčAK
	未来 III (義務未来)	-{A/y}sE
副動詞	同時・反復	-A/y (否定 -mly)
	継起 I	-(E)p (否定 -mly(čA))
	継起 II	-GAč
	限界	-GAnčE
不定形		-(V)rGA (否定 -mAsKA)

(Berta 1998: 295 をもとに筆者作成)

これらのうち、動名詞と形動詞には名詞形態論（表 11）を施しうる（所有人称接辞が付加しうる）。よって、本稿では非定形動詞のうち、主に動名詞と形動詞を扱う。

動名詞 -(U)w は最も頻繁に用いられる動名詞接辞であり、動詞の辞書形としても用いられる（例：al-uw [取る-VN]「取ること」）(Berta 1998: 295)。動名詞 -(U)w は、主に名詞節（1.5.2 節で後述）の述語として機能する（例：sineȳ kil-üw-eȳ [2SG.GEN 来る-VN-2SG.POSS]「君が来ること」）。動名詞接辞とみなしうる形式としては、他に -mAK, -(E)š がある（前者は頻度が非常に低く、後者は動作名詞派生が主な機能であることから、本稿ではこれらの接辞を動名詞接辞として扱わない）。

形動詞には 6 つの形式がある (Xisamova 2006: 227)。それらの多くは動作主、対象物、場所・時間などを表わす名詞を修飾するほか、名詞化する場合（例：yaz-ȳan-nar-ïm [書く-PTCP.PST-PL-1SG.POSS]「私が書いたもの」）、動名詞と同様に名詞節（1.5.2 節で後述）の述語として機能する場合（例：kil-gän-em-ne [来る-PTCP.PST-1SG.POSS-ACC]「私が来たことを」）がある。形動詞過去 -GAn は、主動詞よりも前に完了した状態・動作だけでなく、同時に起

こる状態・動作も表す (Xisamova 2006: 233-234) (例: *yäšä-gän yort* [住む-PTCP.PST 家]「住んでいる家/住んだ家」)。形動詞現在 I-(U)wčE は名詞節述語としての用法を持たず、動作主を表わす名詞のみを修飾しうる (例: *al-uwčī (keše)* [取る-PTCP.PRS I (人)]「取る人」)。形動詞現在 II の -{A/y} *toryan* は、副動詞接辞 -A/y と、継続を表わす補助動詞 *tor-* の形動詞過去形 *toryan* からなる分析的な形式であり、道具を表わす名詞も修飾しうる (例: *ipiy kis-ä toryan pičaq* [パン 切る-PTCP.PRS II ナイフ]「パンを切るナイフ」)。形動詞未来 I-(V)r (否定 -mAs) は曖昧未来、形動詞未来 II-(y)AčAK は確定未来、形動詞未来 III -{A/y}sE は義務未来を表わす (例: *kil-er keše* [来る-PTCP.FUTI 人]「来るだろう人」、*uz-ačaq čara* [過ぎる-PTCP.FUT II イベント]「行われる予定のイベント」、*äyt-äse süz* [言う-PTCP.FUT III 言葉]「言うべき言葉」)。

副動詞には、表 22 に挙げたもの以外に、使用頻度の低い同時副動詞 -(E)šIly がある (例: *bar-išIly* [行く-CVB]「行きながら」)。

不定形 -(V)rGA (否定 -mAsKA) は文中で名詞的にも形容詞的にも副詞的にも機能しうる (例: *Aša-rya bet-te.* [食べる-INF 終わる-PST]「食べるものがなくなった」、*yoqla-rya waqit* [寝る-INF 時間]「寝る時間」、*uqi-rya ker-* [学ぶ-INF 入る-]「学びに入る」)。加えて、ロシア語の不定形と同様に、義務や禁止のモダリティを表わす用法も持つ (例: *Söyäl-mäskä!* [寄りかかる-NEG.INF]「寄りかからないこと!」)。

1.4.3. その他

その他の品詞には後置詞、接続詞、感嘆詞、小辞などがある。名詞形態論 (表 11) を施しうるもの、述語の一部として機能する場合に述語人称標識 (表 20) が後続しうるものもある。

後置詞は主格 (一部の代名詞は属格) 支配のもの (例: *belän* 「～と」、*öčen* 「～のために」、*kebek* 「～のような」など)、与格支配のもの (例: *taba* 「～まで」、*qarši* 「～に対し」、*kürä* 「～によれば」など)、奪格支配のもの (例: *bašqa* 「～以外に」、*birle* 「～以来」、*soñ* 「～のあと」など) がある (Berta 1998: 296)。「～のような」を意味する主格/属格支配の後置詞 (*kebek* など) は複数・所有・格をとりうる (例: *kebek-lär-eñ-ne* [のような-PL-2SG.POSS-ACC]「君の～のようなものを」)。述語の一部として機能する場合は、代名詞型の述語人称標識が後続しうる (例: *Čäčäk kebek-señ.* [花 のような-2SG]「君は花のようだ」)。主格/属格支配の後置詞 *xaqta, turida* 「～について」は、属格の代名詞に後続する場合に所有接辞をとりうる (例: *minem turī(-m)-da* [1SG.GEN (語幹) (-1SG.POSS)-LOC]「私について」)。後置詞 *xaqta, turida* 「～について」は、本論の 5.1 節で主に取り上げる。

接続詞には、等位接続詞 *häm* 「～と～」、*yäki* 「～または～」、逆接接続詞 *läkin, ämma* 「しかし」、理由接続詞 *čönki* 「なぜなら」、仮定接続詞 *ägär* 「もし」などがある (Berta 1998: 296)。

小辞には、疑問 =mE、推量 =DEr、累加 =DA 「～も」、限定 =GEnA 「～だけ」、強調 =UK、否定コピュラ *tügel* および古いコピュラ動詞 *i-* の活用形に由来するコピュラ小辞 *ide* (過

去)、isä (主題標示)、ikän (非定形コピュラ／条件／意外性)、imeš (伝聞) などがある (非定形コピュラ ikän については 1.5.2 節および 5.1 節で後述)。=GEnA には所有人称接辞が付加しうるほか、述語の一部として機能する場合に代名詞型の述語人称標識が後続しうる (例: ber=genä-m [一=だけ-1SG.POSS] 「私のたった一人の人」、Yalyüz=yïna-mïn. [一人=だけ-1SG] 「私はたった一人だ」)。tügel, ikän には名詞節 (1.5.2 節で後述) の述語として機能する場合に所有人称接辞が付加しうる (例: yalyüz tügel-em-ne [一人の COP.NEG-1SG.POSS-ACC] 「私が一人ではないことを」、sinen kem ikän-en-ne [2SG.GEN 誰 COP.NFIN-2SG.POSS-ACC] 「君が誰であるかを」) ほか、定形節 (1.5.2 節で後述) の述語として機能する場合に代名詞型の述語人称標識が付加しうる (例: Ač tügel-bez. [空腹な COP.NEG-1PL] 「我々は空腹ではない」、Kečkenä ikän-señ. [小さい COP.MOD-2SG] 「君は小さいんだね」)。ide には所有型の述語人称標識が付加しうる (例: Bez yäs ide-k. [1PL 若い COP.PST-1PL] 「私たちは若かった」)。

1.5. 統語論

本節では以下、1.5.1 節で句、1.5.2 節で節について述べる。

1.5.1. 句

句は、主要部の品詞によって名詞句、形容詞句、副詞句、動詞句、後置詞句などの種類に分けられる (ただし、名詞と形容詞、形容詞と副詞が明確に区別できない場合が多いのと同様に、名詞句と形容詞句、形容詞句と副詞句も明確に区別できない場合が多い)。本節では以下、名詞句について述べる。

名詞を主要部とする名詞句では、形容詞、数詞、代名詞、形動詞などが従属部となり得る (例: matur čäčäk [美しい 花] 「美しい花」、öč at [三 馬] 「三頭の馬」、uqi-yan keše [学ぶ-PTCP.PST 人] 「学んだ人」) (Berta 1998: 296)。固有名詞、職業名を含む名詞も従属部となり得る (例: timerče Yali [鍛冶屋 PN] 「鍛冶屋のガリ」) (Berta 1998: 296-297)。従属部の順序は通常、指示代名詞、数詞、形容詞の順に配列される (例: bu öč qara kitap [これ 三 黒い 本] 「この三冊の黒い本」) (Berta 1998: 297)。

複合名詞 (compound nouns) の主要なタイプは、2 つ目の名詞句に所有接辞が現れるものである (例: ayaq kiyem-e [足 服-POSS] 「靴」、Qazan šähär-e [カザン 街-POSS] 「カザン市」) (Berta 1998: 297)。複合名詞に所有人称接辞 (表 12) が付されると、元あった所有接辞 -(s)E は削除される (例: minem ayaq kiyem-em [1SG.GEN 足 服-1SG.POSS] 「私の靴」)。複合名詞は並置によっても形成される (例: ata+ana [父+母] 「両親」、almayač < alma+ayač [リンゴ+木] 「リンゴの木」) (Berta 1998: 297)。

属格の名詞句 (従属部) と、それに限定される名詞句 (主要部) からなる構造を、本稿では**所有名詞句**と呼ぶ。属格の従属部名詞句は典型的には所有者を、主要部名詞句は典型的には被所有物を表わすが、従属部と主要部の関係は所有関係に限られない (例: minem yan-ïm-da [1SG.GEN 横-1SG.POSS-LOC] 「私の横に」)。主要部名詞句には、所有接辞 (1.4.1.1 節を参照)

が現れうる。Zakiev et al. (1993: 32-33) によると、所有を表わす 3 つの方法（統合法、分析統合法、分析法）がある（3.1.1 節で後述）。本稿では、それぞれの方法による構造を統合型、分析統合型、分析型と呼び、これら 3 つの構造を総称して**所有構造**と呼ぶ（詳しくは 4.1.3 節で後述）。統合型は、従属部名詞句が現れない構造である（例：däftär-em [ノート-1SG.POSS] 「私のノート」）。分析統合型は属格の従属部名詞句と、所有接辞を伴った主要部名詞句からなる構造である（例：minem däftär-em [1SG.GEN ノート-1SG.POSS] 「私のノート」）。分析型は、主要部名詞句に所有人称接辞が現れない構造である（例：minem däftär [1SG.GEN ノート] 「私のノート」）。0.1 節で述べたように、所有名詞句における所有人称接辞の出現傾向は本稿の主な調査対象の 1 つであり、本論では主に 5.1 節で取り上げる。

1.5.2. 節

本稿では、述語とその項からなるまとまりを節とみなすが、項が現れていない場合であっても、項が想定できる場合（例えば、kil-üw-em [来る-VN-1SG.POSS] 「私の来ること」のように、述語に付加した接辞から項が想定できる場合）は節とみなす。本節では以下、Berta (1998: 298-299) にならい、節について定形節と非定形節に分けて述べる。

A. 定形節

定形節は、定形動詞（表 19）または非動詞述語など、文を終始する述語を持つ節である。主に主節を構成するが、等位節や従属節（引用節など）を構成する場合もある（例：Min quštī dip äyt-egez. [1SG 命じる-PST と 言う-IMP.2PL] 「私が命じた、と教えてください」）。定形節の述部には主語の人称・数に応じて述語人称標識（表 20）が付加しうる。述語人称標識は、述語が動詞である場合は現れることが多いが、述語が名詞類である場合は現れないことが多い（例：Min tatar(-mïn). [1SG タタール人(-1SG)] 「私はタタール人だ」）。0.1 節で述べたように、定形節における述語人称標識の出現傾向は本稿の主な調査対象の 1 つであり、本論では主に 5.2 節で取り上げる。

B. 非定形節

非定形節は、非定形動詞（表 22）など、文を終始しない述語を持つ節である。主に従属節を構成するが、従属節が主節化する現象 (insubordination) も見られる（例：Anda nik bar-uw-iyiz? [そこに なぜ 行く-VN-2PL.POSS] 「そこになぜ行くんですか？」）。非定形節は文中での統語的機能から、関係節、名詞節、副詞節に分けられる。ただし、形容詞、名詞、副詞が明確に区別できない場合が多いのと同様に、関係節、名詞節、副詞節も明確に区別できない場合がある（詳しくは 4.1.2 節で後述）。副詞節を除く非定形節は所有構造（1.5.1 節を参照）をとることがあり、主要部には所有接辞が付加しうる。0.1 節で述べたように、名詞句と名詞節における所有人称接辞の出現傾向は本稿の主な調査対象の 1 つであり、本論では主に 5.1 節で取り上げる。以下、関係節、名詞節、副詞節について述べる。

a. 関係節

関係節は、名詞句を修飾する節である（本稿では便宜上、名詞句を修飾する節全般を関係節と呼ぶ）。関係節は、修飾される主要部名詞句とともに名詞句を形成する（例：kil-gän keše [来る-PTCP.PST 人]「来た人」、sin kür-gän keše [2SG 見る-PTCP.PST 人]「君が見た人」）。本稿では、関係節と主要部名詞句からなる構造全体を**関係節名詞句**と呼ぶ（詳しい定義は 4.1.2 節で後述）。いわゆる主要部なし関係節（関係節が名詞的に機能すること、名詞化した形動詞が主要部であることから、本稿では「名詞化関係節」と呼ぶ）も見られる（例：minem kür-gän-när-em [1SG.GEN 見る-PTCP.PST-PL-1SG.POSS]「私が見たもの」）。多くの場合、関係節の述部は形動詞（表 22）であるが、非動詞述語を述部とする関係節もある（例：aqča kiräk keše-lär [お金 必要な 人-PL]「お金が必要な人たち」¹⁷）。関係節は主語、目的語、場所・時間、道具などを表わす名詞を修飾しうる（例：uqi-yan {keše / kitap / mäktäp / yıl-lar} [{読む/学ぶ}-PTCP.PST {人 / 本 / 学校 / 年-PL}]「読んだ人／読んだ本／学んだ学校／学んだ年」）（Xisamova 2006: 228）。関係節が、いわゆる「外の関係」（寺村 1992）にある名詞を修飾する場合もある（例：yanıır yaw-yan tawış [雨 降る-PTCP.PST 音]「雨が降る音」）。名詞が「音」のような一部の結果随伴物である場合が主だが、いわゆる fact-S 構造（Comrie 1998）も見られる（例：minem yuval-yan xäbär-em [1SG.GEN いなくなる-PTCP.PST 知らせ-1SG.POSS]「私がいなくなったという知らせ」）。

b. 名詞節

名詞節は、基本的に上位節中で項として機能し、主に出来事を意味する節である。ただし、名詞句の構成要素となっているもの（例：monın şulay bul-yan-lıy-ı kürsätkeç-e [これ.GEN そうなる-PTCP.PST-NMLZ-POSS 指標-POSS]「これがそうなったことの指標」）、主節化したもの（例：Anda nik bar-uw-ıyız? [そこに なぜ 行く-VN-2PL.POSS]「そこになぜ行くんですか？」）もある。名詞節の主要部としては主に動名詞、形動詞、非定形コピュラ ikän（1.4.3 節を参照）が機能する（例：sineñ kil-üw-eñ [2SG.GEN 来る-VN-2SG.POSS]「君が来ること」、sineñ kem ikän-en-ne [2SG.GEN 誰 COP.NFIN-2SG.POSS-ACC]「君が誰であるかを」）。名詞節主要部（主に形動詞過去 -GAn、非定形コピュラ ikän、一部の非動詞述語）には、名詞化接辞 -IEK（1.4.1.1 節を参照）が現れうる（例：öy-dä sin bar-lıq-nı [家-LOC 2SG いる-NMLZ-ACC]「家に君がいることを」）。動名詞または形動詞に格または後置詞が後続して、節が副詞節的に機能する場合がある（例：bez mäktäp-tä uqi-yan-da [1PL 学校-LOC 学ぶ-PTCP.PST-LOC]「私たちが学校で学んでいたとき」）。本稿では、名詞節との構造的類似から、動名詞または形動詞に格または後置詞が後続して副詞節的に機能する節を、名詞節と同じく 5.1 節で扱うこととする。動名詞または形動詞が、補助的な述語（存在述語 bar / yuq「ある／ない」など）と複合述語を形成する場合がある（例：Penza-da bul-yan-ım bar. [ペンザ-LOC いる-PTCP.PST-1SG.POSS ある]「私はペ

¹⁷ この例では、叙述用法のみを持つ形容詞 kiräk「必要だ」が関係節の述語として機能していると考えられる。

ンザにいたことがある]、*Qıtay-ya bar-ası-m kil-ä*. [中国-DAT 行く-PTCP.FUTIII-1SG.POSS 来る-PRS]「私は中国に行きたい」。本稿ではこのような複合述語を含む文を「複合述語構文」と呼ぶ。複合述語構文は、名詞節＋主節述語からなる複文とも、単一の述部を持つ単文とも分析できるような形態統語的特徴を示す (菱山 2018)。本稿では、名詞節との構造的類似から、複合述語構文を名詞節と同じく 5.1 節で扱うこととする。

c. 副詞節

副詞節は、副動詞 (表 22) を主要部とする節である (定形動詞である条件形 *-sA* による節は定形節、動名詞または形動詞に格または後置詞が後続して副詞節的に機能する節は名詞節を含む)。副詞節は関係節名詞句、名詞節とは異なり、所有構造はとらない。主語は主格の名詞句によって表され、主要部に所有人称接辞は現れない (例: *sin kil-gäč* [2SG 来る-CVB]「君が来たら」)。

1.5.3. 文

述語は通常文末に現れるが、動詞述語は主語や他の構成要素に先行することもある (例: *Išet-te-m min bu xəbär-ne*. [聞く-PST-1SG 1SG これ 知らせ-ACC]「聞いた、私は、この知らせを」) (Berta 1998: 299)。

文は、述語の種類によって動詞述語文と非動詞述語文に分けられる。動詞述語文は定形動詞 (表 19) を述語とする文である。非動詞述語文は、述部が定形動詞以外であり、かつ述部に述語人称標識が付加しうる文である。非動詞述語文の述語としては、名詞類 (一部の後置詞や接語を含む場合もある) が機能しうる。名詞が述語である文 (例: *Min tatar*. [1SG タタール]「私はタタール人だ」) を名詞述語文、形容詞が述語である文 (例: *Sin matur*. [2SG 美しい]「君は美しい」) を形容詞述語文と呼ぶ (名詞類の下位分類については 1.4.1.2 節を参照)。述語に動詞 (非定形動詞、主に不定形) を含んでいても、述語人称標識 (代名詞型) の付加しうる文末要素が定形動詞以外のもの (例: *Min=dä yalÿš-ırÿa mömkin(-men)*. [1SG=も 間違う-INF かもしれない(-1SG)]「私も間違えるかもしれない」) は非動詞述語文を含む。非動詞述語文のうち、存在述語 *bar / yuq* 「ある／ない」を述部とする文に存在文 (例: *Awıl-da eš yuq*. [村-LOC 仕事 ない]「村に仕事はない」) と所有文 (例: *Minem mašina-m bar*. [1SG.GEN 車-1SG.POSS ある]「私は車を持っている (lit. 私の車がある)」) がある。位格名詞が述語である所在文 (例: *Min öy-dä*. [1SG 家-LOC]「私は家にいる」) や、奪格名詞が述語の文もある (例: *Min Qazan-nan*. [1SG カザン-ABL]「私はカザン出身だ」)。

文は、平叙文 (肯定文、否定文) と疑問文に分けられる。否定文の述語は、動詞の否定形 (例: *Bez sine kür-mä-de-k*. [1PL 2SG.ACC 見る-NEG-PST-1PL]「私たちは君を見なかった」)、もしくは *tügel* で否定される名詞類 (例: *Bu taš tügel*. [これ 石 COP.NEG]「これは石ではない」) である (Berta 1998: 299)。*bar* 「ある」の否定は *yuq* 「ない」によって表される (例: *Ani hič kür-gän-em yuq*. [それ.ACC 全く 見る-PTCP.PST-1SG.POSS ない]「それを私は全く見たことがな

い) (Berta 1998: 299)。yes/no 疑問文は、上昇イントネーションと随意的な疑問接語 =mE によって表される (例: Kür-de-ŋ=me? [見る-PST-2SG=Q] 「見たか?」) (Berta 1998: 299)。疑問詞疑問文では、疑問接語 =mE は現れない (例: Nigä kil-mä-de-ŋ? [なぜ 来る-NEG-PST-2SG] 「なぜ来なかった?」)。

2. 人称に関する通言語学的研究

本章では、人称に関する通言語学的研究の記述をまとめる。ここで人称に関する通言語学的研究の記述をまとめるのは、まずタタール語における人称標示が通言語的にどのようなタイプに該当するかを示したうえで、後に考察（主に第5章）でタタール語における人称標示の出現傾向を通言語的に位置づける際の参考にするためである。

以下、2.1 節で、人称標示のパラダイムの構造に関する研究である Cysouw (2003) の記述を、2.2 節で人称全般に関する研究である Siewierska (2004) の記述をまとめる。

2.1. Cysouw (2003)

Cysouw (2003: 40) は、3 つの単数人称の中には理論的に可能な 4 つのホモフォニー（異なる意味カテゴリーの実現）があるとし、以下の表 23 を挙げている。

表 23：単数ホモフォニーのありうるタイプ

	(Sa)	(Sb)	(Sc)	(Sd)	(Se)
Speaker	A	A	A	A	A
Addressee	B	B	B		
Other	C		A	B	

(Cysouw 2003: 40 をもとに筆者作成)

3 つ全ての人称が異なっている (Sa) は基本的なものであり、このような言語としてはラテン語が典型的な例であるという。よって Cysouw (2003: 40) は (Sa) のタイプを「ラテン語型」と呼んでいる。タタール語の単数人称標示は、このラテン語型に該当するといえる。

Cysouw (2003: 104) は、人称標示のパラダイムの構造のアウトラインとして以下の表 24 を挙げている。

表 24：人称標示のパラダイムの構造のアウトライン

		NON-SINGULAR					
SINGULAR	Speaker	1	1+2	Minimal inclusive	Inclusive	First person complex	
		Addressee	2	1+2+3			Augmented inclusive
			Other	3			1+3
							2+3
			3+3	Third person plural			

(Cysouw 2003: 104 をもとに筆者作成)

Cysouw (2003: 106) は、包括／除外の対立を持たない非単数のパラダイムに関して、1+2, 1+2+3, 1+3 のいずれも同じ形態素で標示されるタイプのパラダイムとしてラテン語型（表 25）とシンハラ語型（表 26）を挙げている。

表 25：ラテン語型パラダイム（直説法現在）

1	...-o	...-mus	1+2 1+2+3 1+3
2	...-s	...-tis	2+3
3	...-t	...-unt	3+3

（Cysouw 2003: 107 をもとに筆者作成）

Cysouw (2003: 107) はラテン語型パラダイムについて、「ウラル語族の屈折によくみられる。トルコ語の屈折にも見られる (Lewis 1967: 106-107)」と述べている。しかし、トルコ語の屈折において三人称は標示されず、代名詞のパラダイムも、三人称は指示代名詞と同形である（タタール語も同様であり、これについては 4.1.1 節で後述する）。よって、トルコ語とタタール語のパラダイムは Cysouw (2003: 108) に挙げられているシンハラ語型パラダイム（表 26）にも近いと筆者は考える。

表 26：シンハラ語型パラダイム（代名詞）

1	mamə	api	1+2 1+2+3 1+3
2	ohee	oheela	2+3
3	(demonstratives)		3+3

（Cysouw 2003: 108 をもとに筆者作成）

Cysouw (2003: 108) はシンハラ語型パラダイムについて、ラテン語タイプとわずかに違うだけであるが、三人称複数に特化した要素を持たない（三人称複数に三人称単数と同様に標示し、代名詞の場合は三人称が指示代名詞などで標示される）という特徴で定義されると述べている。Cysouw (2003: 108) によると、このパラダイムはユーラシアで見られるが稀である。

2.2. Siewierska (2004)

Siewierska (2004: 120-172) は人称の一致に関して、Corbett (2000: 178) によって導入された以下の用語を用いて記述している。

コントローラー (controller)	一致を決定する要素 (例: 主語)
ターゲット (target)	その形式が一致によって決定される要素 (例: 動詞)
領域 (domain)	一致が起こる統語的環境 (例: 節)
一致標識 (agreement marker)	ターゲットにおける一致の形式的な発現 (例: 接頭辞)

本稿では「人称の一致」ではなく「人称の標示」という表現を用いる。その理由は、人称標識が基本的に随意的だからである¹⁸。そのため、基本的に上記の用語は用いないが、便宜上、人称標示の起こりうる統語的まとまりは、上記の用語を用いて「領域」と呼ぶ。さらに、以下で挙げる人称の一致に関する通言語的傾向をもとに、本論でタタール語における人称標示の通言語的特徴を考察することがある。以下、ターゲット、コントローラー、一致標識、人称一致の消失についての記述をまとめる。

A. ターゲット

Siewierska (2004: 127) は、人称の一致の3つの主要なターゲットは、述語、被所有名詞、接置詞であり、通言語的に人称の一致は接置詞よりも被所有名詞で、被所有名詞よりも述語でより一般的であるとし、述語階層 (The predicate hierarchy) (図5) を提示している。

predicates > possessed nouns > adpositions

図5: 述語階層 (Siewierska 2004: 127)

Siewierska (2004: 128) はこの階層が通言語的にだけでなく、言語内的にも有効であると述べている¹⁹。以下、述語と被所有名詞についての記述をまとめる。

まず、述語について Siewierska (2004: 129) は、「西洋の文法的伝統は、自動詞述語の4つの意味クラスを区別した: 事象 (event) 述語、特性または性質 (quality) 述語、類 (class) 述語および位置 (locational) 述語である。4つの述語のそれぞれは、品詞カテゴリーと関連している。事象述語の場合は動詞、特性述語または性質述語の場合は形容詞、類述語の場合は名詞、位置述語の場合は副詞要素である」と述べている。続けて Siewierska (2004: 129) は、

¹⁸ 重複 (doubling) の一種と考えることもできる (野元 p.c.)。ただし、随意的な一致 (optional agreement) とみられることから、一致であることを否定するわけではない。本稿ではあくまで、中立的な表現として「人称の標示」を用いている。

¹⁹ Siewierska (2004: 128) は、この階層に当てはまらない言語 (ビルマ語など) を挙げている。チュルク諸語の言語は挙げられていないが、チュルク諸語にもこの階層に当てはまらない言語がある。例えば、サラール語とサリグ・ヨグル語 (いずれも南東語群) は、被所有名詞に付く所有人称接辞は持つが、述語に付く述語人称標識は持たない (Tenišev 1976a, b; Johanson 1998a: 52, 53)。

「Stassen (1997) が述語の 4 つの意味論的クラスの形態的なコード化の広範な通言語的研究で示したように、ほとんどの言語は 4 つのタイプの述部を一様な方法でコード化しない。形態的なコード化における違いの現れの 1 つは、人称一致標示の有無である。Stassen の調査によると、これはランダムではない」とし、述部の意味による人称一致標識の現れやすさを示した意味論的述語階層 (The semantic predicate hierarchy) (図 6) を提示している。

event > property > class, locational

図 6 : 意味論的述語階層 (Siewierska 2004: 132)

Siewierska (2004: 133) は、「自動詞述語において人称の一致を示すすべての言語は、他動詞述語においても人称の一致を持っている」と述べている。

次に被所有名詞について Siewierska (2004: 138) は、「名詞所有における所有者と被所有物の間の人称の一致に影響する主要な要因は、譲渡可能所有と譲渡不可能所有の区別である」、「もしある言語が譲渡可能名詞との人称の一致を持っているなら、その言語は譲渡不可能名詞との人称の一致も持っている」と述べ、被所有名詞階層 (The possessed noun hierarchy) (図 7) を提示している。

inalienable > alienable

図 7 : 被所有名詞階層 (Siewierska 2004: 138)

Siewierska (2004: 133) によると、最も一般的に、譲渡不可能名詞は身体部位、親族名称、空間名称、全体部分関係を表わすいくつかの名詞セットを包含する。Siewierska (2004: 143) は、Nichols (1988) など複数の研究者が「譲渡可能階層の中で譲渡不可能として表現される可能性が最も高い関係をとらえようとしてきた」とし、Nichols (1988: 572; 1992: 160) の譲渡不可能性階層 (The inalienability hierarchy) (図 8) を挙げている。

body parts and/or kinship terms > part-whole > spatial
relations > culturally basic possessed items > other

図 8 : 譲渡不可能性階層 (Siewierska 2004: 143)

B. コントローラー

Siewierska (2004: 148, 149) は、「多くの言語では、あるターゲットにおける、そしてある統語機能にとっての一致は義務的であるが、他の多くの言語でそれはコントローラーの特性に依存する」、「問題となっている特性のほとんどは、コントローラー固有の特徴および／または談話の特徴に関連していると考えられる」、「コントローラー固有の、および談話の特徴を決定する要因は、おなじみの話題性階層 (人称階層／有生性階層／アクセス可能性階層と

も呼ばれる)を構成するものである」と述べ、便宜上5つに分けた話題性階層のうちの1つとして、人称階層(The person hierarchy)(図9)を提示している。

1st > 2nd > 3rd

図9：人称階層(Siewierska 2004: 149)

人称階層について Siewierska (2004: 149, 150) は、「人称の一致を標示するほとんどの言語では、一致は3つ全ての人称に関係する」、「関係する人称が3つより少ない場合は人称階層から、一人称のみ、または一人称と二人称のみとの一致が予想される。前者は非常にまれである」、「一人称と二人称だけとの人称の一致は、より一般的である。特に、三人称の標識がないことを、ゼロによって一致が実現されるのではなく、一致の欠如と解釈する場合はそうである」と述べている。

C. 一致標識

一致標識について Siewierska (2004: 162) は、「生成文法の文献では、主に接辞/接語の区別に関連して、人称一致標識の形態音韻論的形式が議論の主題であった。生成文法学者の大多数の見解は、接辞のみが潜在的な一致の標識であり、一方、接語と弱形は代名詞的な項、統語的な投射の主要部や演算子であるというものである。一方、機能的・類型論的なパラダイムでは、人称一致標識の形態音韻論的形式には制限が課されない。とはいえ、文法化の過程で形態音韻論的变化と意味論的变化は平行して進むと仮定されるので、代名詞的なものから曖昧なものを経て統語的なものへの人称一致の義務性の増加は、それらの統語的独立性と音韻論の形態の減少に反映されると予想される。そして実際、これは大部分がそうである」と述べている。

Siewierska (2004: 162, 163) は、「代名詞的一致標識は弱形または接語によってしばしば実現する。統語的一致標識は必然的に接辞であり、しばしば時制、相または法と融合する。通言語的に最も一般的な一致標識は接辞である傾向がある」と述べ、弱形も義務的な場合があること、義務的な主語接語はより一般的であること、逆に、接辞が代名詞的な一致標識として機能することもある、ということに言及している。

D. 人称一致の消失

Siewierska (2004: 277) は人称一致の消失について、「ある言語における人称一致の不在は、消失によるものかもしれないし、それが全く発達しなかったという事実によるものかもしれない。不完全な人称一致パラダイムについても同じことが言える。それは減少の結果かもしれないし、または逆に、まだ発達途中なのかもしれない」と述べ、「多くの場合、上記の2つの可能性のどちらが当てはまるかを判断するのは困難だ」としている。続けて Siewierska (2004: 277-281) は、「典型的には、密接に系統的に関係した言語での人称一致の

存在は、消失の指標とみなされる」と述べ、言語接触や言語委縮の結果として人称一致標識を消失した、もしくは一致標識が減少した言語²⁰について言及している。Siewierska (2004: 280) は、「言語委縮の場合、人称標識は最も影響を受けやすい文法標識の1つであると思われる」と述べている。

²⁰ Siewierska (2004: 277-281) にはチュルク諸語に関する言及はない。言語接触の結果、人称一致標識を消失した、もしくは一致標識が減少したと考えられているチュルク諸語の言語にはサラール語とサリグ・ヨグル語がある（詳しくは6.2.2.6節で後述）。逆に、モンゴル諸語のダグール語やブリヤート語など、人称一致を新たに行うようになった言語もある（風間 p.c.）。

本論

「本論」は、第一部「タタール語における人称標識の出現傾向」と第二部「チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ」からなる。

第一部 タタール語における人称標識の出現傾向

本論第一部では、タタール語における人称標識の出現傾向について述べる。

本論第一部の構成は次の通りである。まず、第3章で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に、第4章で調査対象と調査方法について述べる。最後に、第5章で調査結果を示し、考察を行う。

3. タタール語の人称標識に関する先行研究

本章では、タタール語の所有接辞と述語人称標識（後述するように、それぞれの先行研究で呼び方が異なるが、便宜上、述語人称標識と総称する）およびこれらの標識が現れうる領域についての先行研究の記述をまとめ²¹、問題提起を行う。

タタール語に関する先行研究は主に、ソ連・ロシアの研究者によってタタール語もしくはロシア語で書かれたソ連・ロシアの先行研究と、それ以外の先行研究に分けられる。以下、20世紀以降のタタール語の研究史について簡潔にまとめる。

ソ連時代の主な研究としては、Alparov (1945)、Xangildin (1959)、形態論を扱った Wäliullina, Zinnätullina and Säğitov (1972) および Tumaşeva (1978) が挙げられる。ソ連崩壊後、音韻・形態・統語をカバーした三巻本の参照文法（第一版）Zakiev et al. (1992, 1993, 1995) が出版された。第一版はロシア語で書かれており、これをタタール語に訳したものが90年代末から2000年代初頭にかけて出版された。2010年代には、タタール語で書かれた第二版 Zäkiev et al. (2015, 2016, 2017) が出版されている。三巻本のほかに主なものとしては、形態論を扱った Xisamova (2006) が挙げられる。本稿では、特にソ連・ロシアで出版された先行研究を総称して「ソ連・ロシアの先行研究」と呼ぶ。

ロシアを除く欧米の研究者らによる研究の多くは、20世紀後半以降のものである。主なものとして、ドイツ語で書かれた Thomsen (1959), Schönig (1984), Ersen-Rasch (2009)、英語で書かれた Poppe (1963), Berta (1998) が挙げられる。日本の研究者による研究は少ない。主なものとして、服部四郎による5つの論文（服部 1940, 1941, 1972; Hattori 1975, 1983）および林 (1989a) が挙げられる。

以下、3.1節でソ連・ロシアの先行研究、3.2節でその他の先行研究の記述をまとめ、3.3

²¹ 先行研究の挙げる例文にグロスを付す際には、先行研究の記述を反映し、三人称の標識とされているものに三人称のグロスを付すことがある（三人称の標識とされるものに関する本稿の立場について、詳しくは4.1.1節を参照）。なお、ソ連・ロシアの先行研究では節とみなされていないものでも、本稿で節とみなすものについては、[]を用いて示す。

節で問題提起を行う²²。

3.1. ソ連・ロシアの先行研究

本節では、所有接辞と述語人称標識に関するソ連・ロシアの先行研究の記述をまとめる。本節で主に取り上げる先行研究は、Xangildin (1959), Zakiev et al. (1993), Xisamova (2006), Zäkiev et al. (2016, 2017) である。

以下、3.1.1 節で所有接辞、3.1.2 節で述語人称標識についての先行研究の記述をまとめる。

3.1.1. 所有接辞に関する記述

ソ連・ロシアの先行研究は、所有接辞（ロシア語 *affiksy prinadležnosti*、タタール語 *tartım qušimčaları*）として表 27 に示す諸形式を挙げている。

表 27 : 所有接辞 (Zäkiev et al. 2016)

	SG	PL
1	-(E)m	-(E)bEz
2	-(E)ŋ	-(E)GEz
3	-(s)E	-(s)E / -LArE

(Zäkiev et al. 2016: 38 をもとに筆者作成)

以下、先行研究の記述の枠組みに従い、所有者を表す方法、形動詞の動作主を表す方法、動名詞の動作主を表す方法に分けて、先行研究の記述をまとめる。

A. 所有者を表す方法

Zakiev et al. (1993: 31) は名詞の所有カテゴリーについて、「このカテゴリーの基本的な意味は所有である。このカテゴリーの特別な接辞によって、物の人称への所有が表され、被所有物と所有者の人称が同時に示される。よって、それは 3 つの人称の形式によって表される」と述べ、所有接辞(表 27) と、*bala*「子供」に所有接辞が接尾した例 (*bala-m* [子供-1SG.POSS] 「私の子ども」など) を挙げている。

続けて Zakiev et al. (1993: 32-33) は、一人称と二人称の所有が以下の 3 つの方法で表されるとしている²³。

²² ソ連・ロシアの先行研究とその他の先行研究を分けてまとめるのは、前者と後方で記述の枠組みが異なっているためである。

²³ Xisamova (2006: 101-102) も一人称と二人称の所有を表わす方法として同様の 3 つの方法を挙げ、分析法は三人称では可能ではないとしている。Zäkiev et al. (2016: 39) は一人称と二人称の所有を表わす方法として統合法と分析統合法の 2 つを挙げ、属格人称代名詞と所有接辞なしの名詞の組み合わせも所有を表わすとしている。

1) 対応する所有接辞によって表す**統合法**

- (3-1) Küz-lär-en çibär ikän, kem malay-ï sin?
目-PL-2SG.POSS 美しい COP.MOD 誰 男子-POSS 2SG
「お前の目は美しいな、誰の息子だお前は？」

(Zakiev et al. 1993: 32)

2) 属格人称代名詞（所有者）と名詞（被所有物）の組み合わせによって表す**分析法**

- (3-2) “Minnulla abzïy, sinen fiker?” dip sora-dï Yaqup.
PN おじさん 2SG.GEN 考え と 尋ねる-PST PN
“Minem fiker=me? Sineke niček, mineke şulay.”
1SG.GEN 考え=Q 君のもの どう 私のもの そう
『ミンヌラーおじさん、おじさんの考えは？』とヤクップは尋ねた。
『私の考えかい？君のと同じだよ。』

(Zakiev et al. 1993: 32)

3) 属格人称代名詞と、対応する所有接辞を持つ名詞の組み合わせによって表す**分析統合法**

- (3-3) Bu minem tuwyan awil-ïm.
これ 1SG.GEN 生まれの 村-1SG.POSS
「これは私の生まれ故郷だ。」

(Zakiev et al. 1993: 32)

それぞれのタイプの特徴として Zakiev et al. (1993: 33) は、「所有を表す1つ目の（統合）方法は文語でも口語でもほぼ同等の分布を示すが、2つ目の（分析）方法はより口語、3つ目の（分析統合）方法はより文語に特徴的である。さらに最後の方法はそれが持つ感情性が際立っている」としている。さらに、分析統合法の持つ感情性は、倒置によってより強まるとし、例として bala-m minem [子供-1SG.POSS 1SG.GEN] 「わが子よ」などを挙げている。

Zakiev et al. (1993: 33) は三人称の所有²⁴に関して、「物の三人称への所有は通常、三人称代名詞の属格形と、同じ人称の所有接辞を持った名詞の組み合わせで表される」としている（例：anıñ дәftär-e [それ.GEN ノート-3.POSS] 「その人のノート」）。Zakiev et al. (1993: 33) によると、三人称への所有は接辞付加のみでも表されうる（例：bala-sï [子供-3.POSS] 「（その人の）子供」、kitab-ï [本-3.POSS] 「（その人の）本」）。Zakiev et al. (1993: 34) は、「三人称の所有接辞を持った名詞は、人称代名詞だけでなく属格の名詞によっても限定され、ある物の別の物への所有を表す」とし、例として uquwçı-nıñ дәftär-e [生徒-GEN ノート-3.POSS] 「生徒のノート」などを挙げている。

Xangildin (1959: 80) は一・二人称の所有構造について、「一・二人称の所有構造は、物が

²⁴ この段落で挙げる例においては、先行研究の立場を反映し、所有接辞 -(s)E に三人称のグロスを付す。

人称（人間）に所有されることのみを表す。よって、一・二人称の所有構造における語は、同一の人称代名詞とのみ統語的關係を持ちうる」とし、例として **minem xezmät-em** [1SG.GEN 労働-1SG.POSS]「私の労働」、**sinej xezmät-ej** [2SG.GEN 労働-2SG.POSS]「君の労働」などを挙げている。続けて Xangildin (1959: 80) は、「また、このような構造では、被修飾部における接辞が省略され、**minem xezmät, sinej xezmät** のようにも発話される。なぜなら、代名詞の属格形は所有の概念も表すため、所有接辞の必要性が下がるからである。この構造はより口語的である。逆に、所有接辞が保持される場合は、属格人称代名詞が省略され得る (**kitab-ım**「私の本」、**kitab-ıj**「君の本」、**kitab-ibiz**「私たちの本」、**kitab-iyiz**「あなたたちの本」)。所有の概念を強調する必要のある際には、属格人称代名詞と所有接辞が同時に使用される」とし、属格人称代名詞と所有接辞が同時に使用される例として以下の例 (3-4) を挙げている。(3-4) では、他人の弟ではないことが強調されているという。

(3-4) Bu bit **minem enc-m!**
 これ EMPH 1SG.GEN 弟-1SG.POSS
 「こいつはおれの弟だ！」

(Xangildin 1959: 80)

Xangildin (1959: 80) は三人称の所有構造²⁵に関して、「人への所有も人以外の物への所有も表せるため、三人称の所有構造における名詞は、三人称の代名詞とも名詞とも統語的關係を持ちうる」として、代名詞が現れている例 (**anıj tormiş-i** [それ.GEN 生活-3.POSS]「彼の生活」) と、名詞が現れている例 (**ešče-nej tormiş-i** [労働者-GEN 生活-3.POSS]「労働者の生活」) を挙げている。三人称の所有構造において、従属部には様々な語が現れうることから、Xangildin (1959: 80, 81) は「三人称の所有構造の概念は非常に広く、不確定である。そのため、それは常に示されなければならない。よって、三人称の所有構造における語は通常、自身の従属部および接辞とともに発話される」とし、接辞や従属部が落ちるのは、(3-5) のように接辞が 2 つの語に共通の場合か、(3-6) のように従属部が 2 つの語に共通である場合²⁶ にのみ見られるとしている。

(3-5) bez-nej *respublika-biz-nij* barliq *kolhoz* hām *sovxo-lar-i*
 1PL-GEN 共和国-1PL-GEN 全ての コルホーズ と ソフホーズ-PL-3.POSS
 「我々の共和国の全てのコルホーズとソフホーズ」

(Xangildin 1959: 81)

²⁵ この段落で挙げる例においては、先行研究の立場を反映し、所有接辞 -(s)E に三人称のグロスを付す。

²⁶ (3-5) では、*sovxo*「ソフホーズ」に付いている複数接辞 *-lar* と所有接辞 *-i* が *kolhoz*「コルホーズ」にも共通であり、これらが *kolhoz*「コルホーズ」の方には現れていない。(3-6) では、従属部 *çiyä ayaçinij*「サクランボの木の」が *çäçäkläre*「花」と *çiyäläre*「サクランボ」の両方に共通であり、従属部が *çiyäläre*「サクランボ」の前には現れていない。

- (3-6) Čiyä ayač-ï-nün čäčäk-lär-e qoyıl-yan, läkin
 サクランボ 木-3.POSS-GEN 花-PL-3.POSS 散り落ちる-PRF しかし
čiyä-lär-e küren-miy äle.
 サクランボ-PL-3.POSS 見られる-NEG.PRS まだ
 「サクランボの木の花は落ちたが、サクランボはまだ見られない。」
 (Xangildin 1959: 81)

B. 形動詞の動作主を表す方法

Xisamova (2006) は、対象物、場所、時間を表わす名詞を修飾する形動詞の行為者人称を表す方法として、以下の3つを挙げている。

1) 被修飾語に付く所有接辞によって表す方法

- (3-7) [Söylä-yäčäk] süz-lär-eñ-ne is-eñ-dä tot.
 話す-PTCP.FUTII 言葉-PL-2SG.POSS-ACC 記憶-2SG.POSS-LOC 持つ.IMP.2SG
 「君は自分の話す言葉を覚えておけ。」
 (Xisamova 2006: 251)

2) 属格の名詞または代名詞と、被修飾語に付く所有接辞によって表す方法

- (3-8) Ah, [minem sayra-r] ñir-em urman ide.
 ああ 1SG.GEN 鳴く-PTCP.FUTII 場所-1SG.POSS 森 COP.PST
 「ああ、私が鳴く場所は森だったのだ。」
 (Xisamova 2006: 244)

3) 主格の名詞または代名詞によって表す方法

- (3-9) [Min tor-a toryan] šähär-neñ urta-sï-n-da bazar bul-ïp...
 1SG 住む-PTCP.PRSII 街-GEN 真ん中-POSS-n-LOC 市場 ある-CVB
 「私が住んでいる街の真ん中に市場があって…」
 (Xisamova 2006: 256)

Xisamova (2006: 226-256) は、形動詞が動名詞的に用いられる場合、行為を行う主体は以下の方法で表されるとしている²⁷。

1) 形動詞に付く所有接辞で表す方法（この場合は、主格または属格の代名詞または名詞によっても表され得る）

²⁷ 以下、先行研究に従い、三人称が主語の例文も挙げる。

- (3-10) [Kil-äse-ŋ]-ne aldan xəbär it-ärgä ide-ŋ.
 来る-PTCP.FUTIII-2SG.POSS-ACC 前もって 知らせ する-INF COP.PST-2SG
 「君は来ることを前もって知らせるべきだった。」
 (Xisamova 2006: 248)

- (3-11) [Jäy-neŋ üt-kän-e] sizel-miy=dä qal-dī.
 夏-GEN 過ぎる-PTCP.PST-POSS 感じられる-NEG.CVB=EMPH 残る-PST
 「夏が過ぎたことが感じられなかった。」
 (Xisamova 2006: 239)

- (3-12) [Yar-īm kem bul-ir-ī]-n bel-miy-m, min
 恋人-1SG.POSS 誰 なる-PTCP.FUTI-POSS-ACC 知る-NEG.PRS-1SG 1SG
 äle yalyüz yöriy-m.
 まだ 一人で 歩く.PRS-1SG
 「恋人が誰になるかは分からない、私はまだ一人で歩いている。」
 (Xisamova 2006: 244)

- (3-13) Taĵi Wildanov [xäzer orkestr kil-ep ĵit-äčäg-e]-n
 PN 今 オーケストラ 来る-CVB 達す-PTCP.FUTII-POSS-ACC
 xəbär it-te.
 知らせ する-PST
 「タジ・ウィルダノフは間もなくオーケストラが到着することを知らせた。」
 (Xisamova 2006: 251)

2) 主格または属格の代名詞または名詞によって表す方法

- (3-14) [Sin qayt-qan]-nī köt-ep, bar-miy tor-dī-m.
 2SG 帰る-PTCP.PST-ACC 待つ-CVB 行く-NEG.CVB いる-PST-1SG
 「君が帰るのを待って行かないでいた。」
 (Xisamova 2006: 239)

- (3-15) Äsma [minem qara-yan]-nī kür-de.
 PN 1SG.GEN 見る-PTCP.PST-ACC 見る-PST
 「エスマは私が見ているのを見た。」
 (Xisamova 2006: 239)

Zäkiev et al. (2016: 224-225) は、形動詞過去 -GAn を元に形成される二次的形式 -GAn

{bar/ yuq} 「～したことが {ある／ない}」²⁸について、主体は多くの場合、所有接辞と属格の名詞または代名詞によって表されるとし、例として (3-16, 3-17) などを挙げている。

- (3-16) Töp-lär-e-n-dä yat-qan-**im** bar,
 底-PL-POSS-n-LOC 横になる-PTCP.PST-1SG.POSS ある
 xäl jïy-ïp, kük-kä qara-p...
 力 集める-CVB 空-DAT 見る-CVB
 「私はその根元で横になっていたことがある、休んで、空を見て…」
 (Zäkiev et al. 2016: 225)

- (3-17) Menä niçä yil inde **yaña opera-niñ** säxnä-gä
 ほら いくつ 年 もう 新しい オペラ-GEN 舞台-DAT
 çiq-qan-ï yuq.
 出る-PTCP.PST-POSS ない
 「ほら、もう何年、新しいオペラが上演されていないことか。」
 (Zäkiev et al. 2016: 225)

Zäkiev et al. (2016: 225) は、主体が所有接辞なしで、属格の代名詞でも表されうるとし、例として (3-18) などを挙げている。

- (3-18) Äkiyät-lär-neñ altïn saray-ï-n-da **bez-neñ** inde yör-gän
 物語-PL-GEN 金 宮殿-POSS-n-LOC 1PL-GEN もう 歩く-PTCP.PST
 bar ide.
 ある COP.PST
 「物語の金の宮殿を私たちはもう歩いたことがあった。」
 (Zäkiev et al. 2016: 210)

Xisamova (2006: 249-250), Zäkiev et al. (2016: 237-238) は、形動詞未来 III -{A/y}sE をもとに作られるモーダル表現 -{A/y}sE {bar/ yuq} 「～しなければならない」と -{A/y}sE kil- 「～したい」について、動作主が所有接辞（および属格の名詞または代名詞）によって表されるとしている（例： **minem al-asï-m** bar [1SG.GEN 取る-PTCP.FUTIII-1SG.POSS ある] 「私は取らなければならない」、**minem jürlüysï-m** kil-ä [1SG.GEN 歌う.PTCP.FUTIII-1SG.POSS 来る-PRS] 「私は歌いたい」）。

²⁸ Zäkiev et al. (1993: 210) をはじめソ連・ロシアの先行研究では、形動詞や動名詞と、存在述語 bar / yuq 「ある／ない」などをもとに形成される二次的形式は、主節の述語であるとされている。本稿ではこのような構造（本稿では複合述語構文と呼ぶ）を、名詞節との構造的類似から、名詞節と同様に 5.1 節で扱う（1.5.2 節および 4.1.2 節を参照）

C. 動名詞の動作主を表す方法

Xisamova (2006: 268) は、動名詞も名詞のように所有接辞をとるが、名詞とは異なり、動名詞に付く所有接辞は、物がどの人称に所属しているかではなく、動詞が表す動作・状態の行為者・主体を表すとしている。Xisamova (2006: 268) は、動名詞の主体を表す方法として、以下の3つを挙げている。

1) 動名詞に付く所有接辞によって表す方法

- (3-19) [Sez-ne Qazan-da kür-üw-em]-ä çiksez şat,
2PL-ACC カザン-LOC 見る-VN-1SG.POSS-DAT 限りなく 嬉しい
Yabdulla äfände.
PN さん
「あなたにカザンでお会いできてとても嬉しいです、ガブドゥッラーさん。」
(Xisamova 2006: 268)

2) 属格の名詞もしくは代名詞と、動名詞に付く所有接辞によって表す方法

- (3-20) [**Gorodovoj-niñ** kil-mä-w-e-n]-ä Musa borçil-a
巡査-GEN 来る-NEG-VN-POSS-n-DAT PN 心配する-CVB
başla-dī.
始める:AUX-PST
「巡査が来ないことをムーサは心配し始めた。」
(Xisamova 2006: 268)

3) 主格の名詞もしくは代名詞によって表す方法（この場合、動名詞に所有接辞が付くことも付かないこともある）

- (3-21) [Qoyaş bayışi yağ-ı-n-nan qara quyı **bolit** çiy-uw-ı]
日没 方-POSS-n-ABL 黒い 濃い 雲 出る-VN-POSS
bez-ne tañin borçı-y başla-dī.
1PL-ACC さらに 心配させる-CVB 始める:AUX-PST
「日没の方向から黒く濃い雲が出るのが我々をさらに心配させ始めた。」
(Xisamova 2006: 268)

- (3-22) Köndägeçä, Fäyrüzä-se [**ul** kil-üw]-gä şatlan-dī.
いつものように PN-POSS それ 来る-VN-DAT 喜ぶ-PST
「いつものようにフェイリュゼはその人が来ることを喜んだ。」
(Xisamova 2006: 268)

Xisamova (2006: 266) は、「動名詞 **-uw** は頻繁に **bar** 『ある』 とともに用いられ、**-yan bar**, **-ası bar** 型の構造をなす。しかしこれらの構造は、表す文法的意味の面で少々異なる。**-yan bar** は過去における動作を、**-ası bar** は必要のモーダルの意味を、**-uw bar** は未来における可能性の意味を表す。この場合、それはより多く、所有接辞ありの状態 で用いられる」と述べ、以下の例 (3-23) などを挙げている。

- (3-23) Irtän qayt-ir-siñ, bala-m, büre-lär oçra-p
 朝 帰る-FUTI-2SG 子供-1SG.POSS 狼-PL 見られる-CVB
quy-uw-ï bar.
 置く:AUX-VN-POSS ある
 「朝帰るんだよ、狼が居合わせるかもしれないからね。」

(Xisamova 2006: 266)

Xisamova (2006: 266) によると、**-(U)w bar** が所有接辞なしで用いられた場合は可能性を表さず、過去もしくは現在の動作の断定を表す。Zakiev et al. (1993: 237) は、**-(U)w bar** について、人称は名詞的な方法によって、つまり任意の属格代名詞もしくは名詞と、義務的な所有接辞によって表されると述べている。

Zakiev et al. (2016: 165) は、可能性のモダリティを表わす形式として、所有接辞をとった動名詞 **-(U)w** と **bar** 「ある」の組み合わせに加え、**ixtimal, mömkin** 「～かもしれない」との組み合わせ (3-24, 3-25) を挙げている。

- (3-24) Keçkenä samoljot ul, oç-mïy qal-uw-ï ixtimal.
 小さい 飛行機 それ 飛ぶ-NEG.CVB 残る:AUX-VN-POSS かもしれない
 「それは小さい飛行機だ、飛ばないかもしれない。」

(Zakiev et al. 2016: 165)

- (3-25) Kem iryit-qan bul-uw-ï mömkin?
 誰 投げる-PRF なる-VN-POSS かもしれない
 「誰が投げた可能性があるのか？」

(Zakiev et al. 2016: 165)

3.1.2. 述語人称標識に関する記述

ソ連・ロシアの先行研究は、名詞述語などに接尾するものを述語性接辞 (ロシア語 *affiksy skazuemosti*、タタール語 *xäbärlek qušimčaları*) として名詞の文法カテゴリーに、動詞述語に接尾するものを人称接辞 (ロシア語 *ličnye affiksy*、タタール語 *zat qušimčaları*) として動詞の文法カテゴリーに入れている。以下、先行研究の記述を、述語性接辞と人称接辞に分けて

まとめる。

A. 述語性接辞

Xisamova (2006: 72), Zäkiev et al. (2016: 56) は、述語性接辞として表 28 に示す諸形式を挙げている。

表 28 : 述語性接辞 (Xisamova 2006; Zäkiev et al. 2016)

	SG	PL
1	-mEn	-bEz
2	-sEŋ	-sEz
3	-DEr	

(Xisamova 2006: 72; Zäkiev et al. 2016: 56 をもとに筆者作成)

述語性接辞に関して Xisamova (2006: 72), Zäkiev et al. (2016: 56) は、名詞が文において述語として機能することを示す接辞だとしている。Zäkiev et al. (2016: 56) は、述語性接辞が動詞の人称接辞と同様に、人称と数を同時に示すものだとしている。

Zäkiev et al. (2016: 56) は、述語性接辞のうち一・二人称を指すものは起源的に代名詞に、三人称のものは *tor-*「立つ」という動詞に遡ると述べている。

Zäkiev et al. (2016: 56) は、「述語性接辞は、述語となる位格の名詞にも付きうる」、「述語性の否定は *tügel* によって形成され、それに述語性接辞が付く」、「述語性接辞は通常、職業名詞に付く」と述べ、位格の名詞に付いた例として (3-26) を、否定の例として (3-27) を、職業名詞に付いた例として (3-28) を挙げている²⁹。

(3-26) a. **Min** yegerme ber **yaš-tä-men.**

1SG 二十 一 歳-LOC-1SG

「私は 21 歳だ。」

b. **Sez** **öy-dä-sez** ikän äle.

2PL 家-LOC-2PL COP.MOD まだ

「あなた (たち) はまだ家にいるのですね。」

(Zäkiev et al. 2016: 56)

(3-27) a. **Min** yazuwčï **tügel-men.**

1SG 作家 COP.NEG-1SG

「私は作家ではない。」

²⁹ 4.1.1 節で後述するように、本稿では *-DEr* を三人称の標識とはみなさない立場をとるが、例文 (3-28)c では先行研究の立場を反映し、*-DEr* に三人称のグロスを付した。

- b. **Sin** yazuwčï **tügel-seŋ.**
 2SG 作家 COP.NEG-2SG
 「君は作家ではない。」

(Zäkiev et al. 2016: 56)

- (3-28) a. **Uqïtuwčï-sïŋ.**
 教師-2SG
 「君は教師だ。」
- b. **Mašina** yörtüwče-**men.**
 車 運転者-1SG
 「私は車の運転手だ。」
- c. **Balta** osta-sï-**đir.**
 斧 名人-POSS-3
 「その人は斧の名人だ。」

(Zäkiev et al. 2016: 56)

ただし、Zäkiev et al. (2016: 57) によると、現代タタール文語において一・二人称の述語性接辞はあまり用いられず、以下の (3-29) のように、人称代名詞に取って代わられているという。

- (3-29) a. **Min** tegüwče.
 1SG 仕立屋
 「私は仕立屋だ。」
- b. **Sez** tegüwče(-lär).
 2PL 仕立屋(-PL)
 「あなた（たち）は仕立屋だ。」

(Zäkiev et al. 2016: 57)

Xisamova (2006: 72-73) は述語性接辞について、20 世紀初頭の文語ではよく見られたが、現代タタール語においては、感情表出またはモーダルのニュアンスとともに、つまり特に強調して言う必要があるときに主に使われると述べ、以下の例 (3-30) を挙げている。

- (3-30) a. **Min** uqïtuwčï-**mïn!**
 1SG 教師-1SG
 「私は教師だ！」
- b. **Sez** jawapli-**siz!**
 2PL 責任がある-2PL

「あなた（たち）に責任がある！」

(Xisamova 2006: 75)

Zäkiev et al. (2017: 118) は、名詞述語の主語との一致について、原則として主語と一致しないが、「特に強調して言う必要があるとき、または文体的な流暢さ、美しさが要求される場合は、主語と人称・数において一致する」とし、例として (3-31) などを挙げている。

(3-31) **Güzäl-seŋ** sin, **matur-siŋ** sin, **matur-siŋ.**
美しい-2SG 2SG 美しい-2SG 2SG 美しい-2SG
「君は美しい、君は美しい、美しい。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

B. 人称接辞

Xisamova (2006: 170) は、動詞の人称カテゴリーについて、動作主の人称・数を表わす接辞として人称接辞 I, II, III（それぞれ表 29, 30, 31）を挙げている³⁰。

表 29 : 人称接辞 I (Xisamova 2006)

	SG	PL
1	-mEn	-bEz
2	-sEŋ	-sEz
3	∅	-LAr

(Xisamova 2006: 170 をもとに筆者作成)

表 30 : 人称接辞 II (Xisamova 2006)

	SG	PL
1	-m	-K
2	-ŋ	-GEz
3	∅	-LAr

(Xisamova 2006: 170 をもとに筆者作成)

³⁰ 人称接辞 I（三人称の標識は除く）は、1.4.2 節で述べた「代名詞型の述語人称標識」（表 20）に、人称接辞 II（三人称の標識は除く）は「所有型の述語人称標識」（表 20）に、人称接辞 III は一人称を除く願望・命令形の標識（表 21）に相当する。

表 31 : 人称接辞 III (Xisamova 2006)

	SG	PL
2	∅	-(E)GEz
3	-sEn	-sEnnAr

(Xisamova 2006: 170 をもとに筆者作成)

人称接辞 I は現在形 (例: bar-a-m (bar-a-m_{in}) [行く-PRS-1SG])³¹、不確定過去形 (例: bar-yan-s_{in} [行く-PRF-2SG])、未来形 (例: bar-ir-m_{in} [行く-FUTI-1SG]、bar-ačaq-m_{in} [行く-FUTII-1SG]) に、人称接辞 II は確定過去形 (例: bar-d_i-q [行く-PST-1PL])、条件形 (例: bar-sa-ŋ [行く-COND-2SG])、意志形 (例: bar-iy-m [行く-OPT-1SG]) に付加し、人称接辞 III は命令形である (Xisamova 2006: 170)。

Zäkiev et al. (2016: 174) はタタール語の人称カテゴリーについて、2つの平行的なパラダイムに属する6つずつの形式があるとし、以下の表 32 に示す形式を挙げている³²。

表 32 : 人称接辞 (Zäkiev et al. 2016)

数	人称	人称接辞	
		I (完全形)	II (短形)
単数	1	-mEn	-m
	2	-sEŋ	-ŋ
	3	-∅	-∅
複数	1	-bEz	-K
	2	-sEz	-(E)GEz
	3	-∅LAr (-sEn)	-∅LAr (-sEnnAr)

(Zäkiev et al. 2016: 174 をもとに筆者作成)

Zäkiev et al. (2016: 174) によると、人称接辞 I は現在形、未来形、完了形に付き、人称接辞 II は直説法動詞の残りの過去諸形式と接続法 (条件形、願望形) に付く。

Zäkiev et al. (2017: 117) は、動詞述語の主語との一致について、「一・二人称の文では、主語と人称においても数においても常に一致する」と述べ、以下の例 (3-32, 3-33) などを挙げている。

³¹ Xisamova (2006: 178) は、現在形に付く一人称単数の接辞は短縮されており、完全形は口語や方言、詩で用いられるとしている。

³² 人称接辞 I (三人称の標識は除く) は、1.4.2 節で述べた「代名詞型の述語人称標識」(表 20) に、人称接辞 II (三人称の標識は除く) は「所有型の述語人称標識」(表 20) に相当する。Zäkiev et al. (2016: 174) は、三人称複数の欄のかわりに三人称命令形の形式を (人称接辞 I の三人称複数命令形として -sEn を、人称接辞 II の三人称複数命令形として -sEnnAr を) 挙げている。しかし、-sEn は三人称 (単複) 命令形、-sEnnAr は三人称複数命令形 (-sEn に複数の -LAr が付加した形式) である (表 21 を参照)。よって、表 32 のように示すのは適切ではない。

(3-32) **Min** tormiř-qa teř-em, tırnağ-ım belän yabiř-açaq-**mın**.
 1SG 人生-DAT 齒-1SG.POSS 爪-1SG.POSS で しがみつく-FUTII-1SG
 「私は人生に齒と爪でもってしがみつく。」

(Zäkiev et al. 2017: 117)

(3-33) **Xäzer bez** öcäw bul-dı-q.
 今 1PL 三人 なる-PST-1PL
 「今私たちは三人になった。」

(Zäkiev et al. 2017: 117)

続けて Zäkiev et al. (2017: 117, 118) は、「一・二人称では常に専用の接辞を取ることから、三人称の述語は接辞なしでも一・二人称の述語とは異なる。つまり、三人称の動詞述語も主語と人称で常に一致しているといえる」と述べ、以下の例 (3-34) を挙げている³³。

(3-34) a. **Alar** qayt-ti-**Ø**lar.
 それ.PL 帰る-PST-3PL
 「彼らは帰った。」
 b. **Uquwçı-lar** kit-te-**Ø**.
 生徒-PL 去る-PST-3SG
 「生徒たちは行った。」

(Zäkiev et al. 2017: 117)

ただし、Zäkiev et al. (2017: 118) によると、「稀に、過去・未来時制の形動詞による述語は、一・二人称の文でも主語と人称・数において一致しないことがある」といい、完了形の例 (3-35) と未来形の例 (3-36) が挙げられている。

(3-35) **Max bir-gän min,** mäs'älä-ne, *stal byt,* qabırğa-si belän
 やり損なう-PRF 1SG 問題-ACC こうしてみると 肋材-POSS で
quy-ma-yan.
 置く-NEG-PRF

「私は問題を拗らせてしまった、こうしてみると肋材を置かなかったようだ。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

³³ 4.1.1 節で後述するように、本稿では三人称の標識として -**Ø** をたてない立場をとるが、例文 (3-34) では先行研究の立場を反映し、-**Ø** をたてて三人称のグロスを付した。以下、同様に -**Ø** をたてて三人称のグロスを付すことがある。

- (3-36) Bu *kartina-ni* **bez** üz-ebez qara-yaçaq.
 これ 絵-ACC 1PL 自身-1PL.POSS 見る-FUTII
 「この絵は私たち自身が見る。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

Zäkiev et al. (1993: 89) は、人称が分析的に表現される傾向はモーダル形式 -mAKčE (意図) と -{A/y}sE (義務) に特徴的であるとしている。活用形 (例: al-maqčï-mïn [取る-VOL-1SG]、al-maqčï-siŋ [取る-VOL-2SG]) は代名詞がない場合にのみ極まれに用いられ、文体的なニュアンスを持っているという (3-37)。Zäkiev et al. (1993: 90) によると、この形式は動詞 bul- を伴った迂言的な構造 (3-38) に取って代わられている。

- (3-37) Bala-ŋ-ni qaya quy-maqčï-siŋ?
 子供-2SG.POSS-ACC どこへ 置く-VOL-2SG
 「お前は子供をどこへやるつもりだ？」

(Zäkiev et al. 1993: 90)

- (3-38) **Min** bar-maqčï **bul-a-m.**
 1SG 行く-VOL なる-PRS-1SG
 「私は行こうと思っている」

(Zäkiev et al. 1993: 90)

3.2. その他の先行研究

本節では、所有接辞と述語人称標識に関する、欧米 (ロシアを除く) や日本の研究者による先行研究の記述をまとめる。本節で取り上げる先行研究は、服部 (1941, 1950), 林 (1989a), Berta (1998), Ersen-Rasch (2009) である。

以下、3.2.1 節で所有接辞、3.2.2 節で述語人称標識についての先行研究の記述をまとめる。

3.2.1. 所有接辞に関する記述

林 (1989a: 622) は、表 27 と同様の形式を所属人称接辞と呼び、「所属人称接辞は、名詞語幹につき、所属関係を表わす (kəz 「娘」, kəz-əm 「私の娘」)」と述べている³⁴。

Berta (1998: 287) は、表 27 と同様の形式を *possessive suffixes* (所有接辞) と呼んでいる。Berta (1998: 297) は名詞句について、「もし修飾語が一人称もしくは二人称の代名詞なら、主要部はそれと一致する所有接辞を持つかもしれないし、持たないかもしれない」と述べ、

³⁴ 林 (1989a) は、本稿で k, q を用いて表記する音素を k のみを用いて、g, y を用いて表記する音素を g のみを用いて、i を用いて表記する音素を ə を用いて表記している。以下、林 (1989a) の挙げる例の表記は、林 (1989a) に従う。

例として *minëm defter(-ë)m* [1SG.GEN ノート(-1SG.POSS)] 「私のノート」を挙げている³⁵。

Ersen-Rasch (2009: 31) は、表 27 と同様の形式を *die Possessivsuffixe* (所有接辞) と呼んでいる。Ersen-Rasch (2009: 31) は、「時折、所有接辞は省略される」と述べ、例として *minem sumka-da* [1SG.GEN バッグ-LOC] “*bei mir in der Tasche*” (with me in the bag) を挙げ、所有接辞が現れている例 *minem sumka-m-da* [1SG.GEN バッグ-1SG.POSS-LOC] “*in meiner Tasche*” (in my bag) とは異なるドイツ語訳を当てている。

Ersen-Rasch (2009: 142) は、形動詞の特別な用法に関して、「関係節の主語を属格にし、主要部名詞に所有接辞を付すことも可能である。この場合主語は、既知のものや既に述べられたもの (テーマ) を表す」と述べ、以下の例 (3-39) を挙げている。

- (3-39) *Min elek iske ber yort-ta tor-a ide-m.*
 1SG 以前 古い 一家-LOC 住む-PRS COP.PST-1SG
[(Minem) Tor-yan] yort-ïm ike qatlî ide.
 1SG.GEN 住む-PTCP.PST 家-1SG.POSS 二階建て COP.PST
 「私は以前、古い家に住んでいた。私が住んでいた家は二階建てだった。」
 (Ersen-Rasch 2009: 142)

さらに、指摘しておくべき構造として Ersen-Rasch (2009: 142) は以下の例 (3-40, 3-41) を挙げている (原文におけるドイツ語訳も併せて示す。ドイツ語訳における太字は Ersen-Rasch (2009) による)。

- (3-40) a. [Yeget taši-yan] suw çîsmâ-dân ide.
 青年 運ぶ-PTCP.PST 水 泉-ABL COP.PST
 ‘Das Wasser, das **ein** junger Mann getragen hat, war aus der Quelle.’
 「ある青年の運んだ水は泉からだった。」
 b. [Yeget-nen taši-yan] suw-î çîsmâ-dân ide.
 青年-GEN 運ぶ-PTCP.PST 水-POSS 泉-ABL COP.PST
 ‘Das Wasser, das **der** junger Mann getragen hat, war aus der Quelle.’
 「その青年の運んだ水は泉からだった。」
 (Ersen-Rasch 2009: 142)

- (3-41) a. [Alsuw al-yan] kitap-nî uqî-dî-m.
 PN 買う-PTCP.PST 本-ACC 読む-PST-1SG
 ‘Das Buch, das Alsu gekauft hat, habe ich gelesen.’

³⁵ Berta (1998) は、本稿で ä, î, e, o, ö, x を用いて表記する音素をそれぞれ e, î, ë, ö, ð, χ を用いて表記している。以下、Berta (1998) の挙げる例の表記は、Berta (1998) に従う。

「アルスーが買った本を私は読んだ。」

- b. [Alsuw-niŋ al-yan] kitab-ı-n uqı-dı-m.
PN-GEN 買う-PTCP.PST 本-POSS-ACC 読む-PST-1SG

‘Das Buch, das Alsu gekauft hat (**und ihr gehört**), habe ich gelesen.’

「アルスーが買った (**彼女のものである**) 本を私は読んだ。」

(Ersen-Rasch 2009: 142)

Ersen-Rasch (2009: 142) によると、(3-40) において関係節の主語 *yeget* 「青年」は、主格で現れる (3-40)a では不定、属格で現れる (3-40)b では定であるという。一方、固有名詞なので当然「定」である *Alsuw* 「アルスー」が主語の (3-41) において、属格で現れる (3-41)b では、アルスーが本の持ち主でもあると解釈されるという。

Ersen-Rasch (2009: 150) は名詞節において、主格主語は主語が新情報であることを、属格主語は主語が旧情報であることを表すとし、形動詞を主要部とする名詞節の例 (3-42) を挙げている (原文におけるドイツ語訳も併せて示す。ドイツ語訳における太字は Ersen-Rasch (2009) による)。

- (3-42) a. [Sin kil-gän]-ne kür-de-m.
2SG 来る-PTCP.PST-ACC 見る-PST-1SG

“Ich habe gesehen, dass **du** gekommen bist.”

「君が来たのを私は見た。」

- b. [Sineŋ kil-gän-eŋ]-ne kür-de-m.
2SG.GEN 来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC 見る-PST-1SG

“Ich habe gesehen, dass **du** gekommen bist.”

「君が来たのを私は見た。」

(Ersen-Rasch 2009: 151)

Ersen-Rasch (2009: 151) は、ドイツ語で *sein* ‘be’ を持つ名詞節はタタール語で *buluw* もしくは *ikän* (*ikänlek*³⁶) で、*haben* ‘have’ を持つ名詞節は *buluw* もしくは *barliq* / *yuqliq* で表されるとし、以下の例 (3-43, 3-44) を挙げている。

- (3-43) a. [Zoya-niŋ uquwčï ikän-e]-n bel-ä-m.
PN-GEN 生徒 COP-POSS-ACC 知る-PRS-1SG

「私はゾヤが生徒であることを知っている。」

³⁶ *ikänlek* について Ersen-Rasch (2009: 151) は、文語でより多く見られ、より持続的な状態を表すために用いられるとしている。本稿では、非定形コピュラ *ikän* と名詞化接辞 *-lek* に分析する。

- b. [Zoya-niŋ uquwčï tügel-leg-e]-n bel-ä-m.
 PN-GEN 生徒 COP.NEG-NMLZ-POSS-ACC 知る-PRS-1SG
 「私はゾヤが生徒ではないことを知っている。」

(Ersen-Rasch 2009: 151)

- (3-44) a. [Bulat-niŋ aqča-sï bar-lïy-ï]-n bel-ä-m.
 PN-GEN 金-POSS ある-NMLZ-POSS-ACC 知る-PRS-1SG
 「私はブラットが金を持っていることを知っている。」

- b. [Bulat-niŋ aqča-sï yuq-lïy-ï]-n bel-ä-m.
 PN-GEN 金-POSS ない-NMLZ-POSS-ACC 知る-PRS-1SG
 「私はブラットがお金を持っていないことを知っている。」

(Ersen-Rasch 2009: 151)

Ersen-Rasch (2009: 152) は、ドイツ語の *ob* ‘whether’ が導く名詞節を表す方法がタタール語にいくつかあるとし、そのうちの1つとして、(3-45) にあるように *ikänlek* によって表される方法を挙げている。

- (3-45) [Zilä-neŋ *nemec* tel-e-n bel-ä=me yuq=mï *ikän-leg-e*]-n
 PN-GEN ドイツ 語-POSS-ACC 知る-PRS=Q 否=Q COP-NMLZ-POSS-ACC
 bel-miy-m.
 知る-NEG.PRS-1SG
 「ズィレがドイツ語ができるかどうかを私は知らない。」

(Ersen-Rasch 2009: 152)

3.2.2. 述語人称標識に関する記述

前節で述べたように、ソ連・ロシアの先行研究は、非動詞述語に付くものは述語性接辞であるとして、動詞述語に付く人称接辞と区別している。類似の区別をしている研究に、Berta (1998) がある。Berta (1998: 298) は、「定形節の述語が名詞類である場合、それはコピュラ接辞と共起しうる」と述べ、名詞類述語に付加するものを *copula suffixes* (コピュラ接辞) であるとみなしている。Berta (1998: 298) はコピュラ接辞のパラダイムを示しておらず、名詞類述語にコピュラ接辞が付加した例として以下の例 (3-46) を挙げている。

- (3-46) **Min** Qazan-nan-mñn.
 1SG カザン-ABL-1SG
 「私はカザン出身だ。」

(Berta 1998: 298)

一方 Berta (1998: 292-295) は、定形動詞に付加するものを *personal markers* (人称標識) と呼び、活用形ごとに形式を挙げている。以下の表 33 に、-GAn 過去形 (-GAn past) と単純過去形 (simple past) (それぞれ本稿で「完了形」、「過去形」と呼ぶものに相当する) に付加した例を示す。

表 33 : 人称標識 (Berta 1998)

	-GAn 過去	単純過去
1SG	-GAn-mĚn	-DĚ-m
2SG	-GAn-sĚŋ	-DĚ-ŋ
3SG	-GAn-Ø	-DĚ-Ø
1PL	-GAn-bĚz	-DĚ-K
2PL	-GAn-sĚz	-DĚ-GĚz
3PL	-GAn-nAr	-DĚ-lAr

(Berta 1998: 292-293 をもとに筆者作成)

Berta (1998: 298) は、主語と述語の間の人称の一致について、「述語が動詞である場合は通常義務的である」、「述語が名詞である場合、一致は通常起こるが、義務的ではない」と述べ、動詞述語文の例 (3-47) と名詞述語文の例 (3-48) を挙げている。

- (3-47) **Min** *ĵyŋlŋš-qa* *qal-dĭ-m.*
 1SG 集会-DAT 残る-PST-1SG
 「私は集会に残った。」

(Berta 1998: 298)

- (3-48) **BĚz** *kolĥozĉi.*
 1PL コルホーズ農民
 「私たちはコルホーズ農民だ。」

(Berta 1998: 298)

一方、服部 (1941), 林 (1989a), Ersen-Rasch (2009) は、名詞類述語に付くものと動詞述語に付くものを区別していない。以下、それぞれの先行研究の記述をまとめる。

服部 (1941)³⁷ は、-mən, -səŋ, -bəz, -səz, -lar (およびこれらの異形態) を「述語の人称語尾」とし、これらに強勢が来ないと述べている。さらに、これらの語尾が名詞、形容詞、動詞に

³⁷ 服部 (1941, 1950) は 林 (1989a) と同じく、本稿で *i* を用いて表記する音素を *ə* を用いて表記している。加えて服部 (1941, 1950) は、本稿で *y* を用いて表記する音素を *j* を用いて、*ä* を用いて表記する音素を *æ* を用いて表記している。以下、服部 (1941, 1950) の挙げる例の表記は、服部 (1941, 1950) に従う。

接尾した例（表 34, 35）を挙げている。

表 34：述語人称語尾（名詞・形容詞）（服部 1941）

	タタール人 だ	ここにゐる	美しい
1SG	tatár-mən	mondá-mən	matúr-mən
2SG	tatár-səŋ	mondá-səŋ	matúr-səŋ
3SG	tatár	mondá	matúr
1PL	tatár-bəz	mondá-bəz	matúr-bəz
2PL	tatár-səz	mondá-səz	matúr-səz
3PL	tatar-lár	monda-lár	matur-lár

（服部 1941: 70-71 をもとに筆者作成）

表 35：述語人称語尾（動詞）（服部 1941）

	書く 書いてゐる	書いたのだら う	書く筈だ	書くだらう
1SG	jaz-á-m(ən)	jaz-yán-mən	jaz-acáq-mən	jaz-ár-mən
2SG	jaz-á-səŋ	jaz-yán-səŋ	jaz-acáq-səŋ	jaz-ár-səŋ
3SG	jaz-á	jaz-yán	jaz-acáq	jaz-ár
1PL	jaz-á-bəz	jaz-yán-bəz	jaz-acáq-bəz	jaz-ár-bəz
2PL	jaz-á-səz	jaz-yán-səz	jaz-acáq-səz	jaz-ár-səz
3PL	jaz-á-lar	jaz-yán-nár	jaz-acaq-lár	jaz-ar-lár

（服部 1941: 70-71 をもとに筆者作成）

服部 (1941: 70) は、「これらの -mən (-m), -səŋ, -bəz, -səz, -lar は恐らく、代名詞 min (私)、sin (汝)、bez (吾々)、sez (汝等、貴方)、alar (彼等) と語源を同じくするもので、過去に於て、これらの代名詞に當る語が接尾して生じたものであらう。そしてそれがこれらの語尾に強勢のない原因であらうと思はれる」と述べている。ただし、表 34, 35 で太字で示した強勢の来る -lar について服部 (1941: 71) は、「これらの語尾 -lar ~ -nar は三人称代名詞 alár に當る形の縮小したものではなくて、単なる複数語尾（チュルク語の場合『複数語尾』といつてもよからう）であらうと思ふ。強勢がここにあるのはそのためであらう。従つて、私は之を述語の『三人称複数述語人称語尾』と看做さないつもりであつた（その他の -mən, -səŋ, -bəz, -səz は勿論述語人称語尾と看做す）」と述べている。

なお、服部 (1941: 68) は、「タタール語に於ける述語に接尾する人称語尾は一種ではない」と述べ、動詞 jaz-「書く」の過去形の変化（表 36）を挙げている。

表 36 : 述語人称語尾 (過去形) (服部 1941)

	SG	PL
1	jaz-də-m	jaz-də-q
2	jaz-də-ŋ	jaz-də-γəz
3	jaz-də	jaz-də-lar

(服部 1941: 68 をもとに筆者作成)

服部 (1950: 14-15) はトルコ語の述語人称語尾を、様々な自立形式につき、2つの形式の間に別の単語が現れる (例: sev-iyor **mu-sun** [愛する-PRS Q-2SG] 「君は愛しているか?」) という点から附属語としている。一方、タタール語の述語人称語尾については、「jzasəŋ <お前は書く>, kiləsəŋ <お前は来る>の /səŋ~seŋ/ は、トルコ語の seviyorsun の -sun に当る形式であるが、疑問を表す附属語 /mə~me/ <か>が、jzasəŋ mə, kiləsəŋ me のようにその後につく点より見て、附属形式であると考えられる」と述べている。

林 (1989a: 624) は、「動詞述語は、普通、文末におかれ、人称語尾は述語の末尾につけられる。人称語尾がない場合は、3人称と解釈される」、「述語または形動詞に、文や節の主語の人称を表示する接辞が付加されることがある」とし、述語の場合は以下の表 37 に挙げる人称語尾³⁸が用いられると述べている。

表 37 : 人称語尾 (林 1989a)

	人称語尾 B	人称語尾 A
1SG	-(m)En ³⁹	-m
2SG	-sEŋ	-ŋ
3SG	-∅	-∅
1PL	-bEz	-k
2PL	-sEz	-gEz
3PL	(-lAr)	(-lAr)

(林 1989a: 625 をもとに筆者作成)

林 (1989a: 624) は、「A の語尾は、過去形 (ここでは説明しないが、仮定形にも) に用いられ、他の場合は、B の語尾が用いられる。B の語尾は、動詞以外の述語にも用いられるが、省略されることもある」と述べ、動詞以外の述語に B の語尾が付加した例として以下の (3-49) などを挙げている。

³⁸ 人称語尾 B (三人称の標識は除く) は、1.4.2 節で述べた「代名詞型の述語人称標識」(表 20) に、人称語尾 A (三人称の標識は除く) は「所有型の述語人称標識」(表 20) に相当する。

³⁹ -m(En) の誤りであると考えられる。

- (3-49) **Min** tatar-mən.
 1SG タタール人-1SG
 「私はタタール人だ」

(林 1989a: 624)

Ersen-Rasch (2009: 12) は表 38 のものをタタール語の *die angehängten Personalpronomina* (接尾人称代名詞)⁴⁰であるとし、これが *šat* 「嬉しい」およびその否定形 *šat tügel* 「嬉しくない」に付加した例を示している。

表 38 : 接尾人称代名詞 (Ersen-Rasch 2009)

	SG	PL
1	-mEn	-bEz
2	-sEŋ	-sEz
3	∅	∅/-LAr

(Ersen-Rasch 2009: 12 をもとに筆者作成)

Ersen-Rasch (2009: 12) は、これらの形式が *Klitika* (接語) とも呼ばれるとしている。Ersen-Rasch (2009: 12) は、これらが現代タタール語ではよく省略され、その場合は人称代名詞がなければならないと述べている。Ersen-Rasch (2009: 26, 102, 115) は、動詞の現在形、完了形、未来形に関して、これらに接尾人称代名詞が付加すると説明している。

Ersen-Rasch (2009: 92, 121) は、動詞の過去形と条件形に、所有接辞を起源とする *die possessiven Personalsuffixe* (所有型人称接辞)⁴¹が付加するとしている。以下の表 39 に、所有型人称接辞が *köt-* 「待つ」の過去形と、*aŋla-* 「理解する」の条件形に付加した例を示す。

表 39 : 所有型人称接辞 (Ersen-Rasch 2009)

	過去形	条件形
1SG	köt-te-m	aŋla-sa-m
2SG	köt-te-ŋ	aŋla-sa-ŋ
3SG	köt-te	aŋla-sa
1PL	köt-te-k	aŋla-sa-q
2PL	köt-te-gez	aŋla-sa-ŋiz
3PL	köt-te-lär	aŋla-sa-lar

⁴⁰ 接尾人称代名詞 (三人称の標識は除く) は、1.4.2 節で述べた「代名詞型の述語人称標識」(表 20) に相当する。

⁴¹ 所有型人称接辞 (三人称の標識は除く) は、1.4.2 節で述べた「所有型の述語人称標識」(表 19) に相当する。

3.3. 問題提起

本節では、3.1 節と 3.2 節でまとめた先行研究の記述について問題提起を行う。以下、3.3.1 節で所有接辞について、3.3.2 節で述語人称標識について述べる。

3.3.1. 所有接辞について

本節では、以下、所有者を表わす方法（所有名詞句）、名詞を修飾する形動詞の動作主を表わす方法（関係節名詞句）、動名詞および動名詞的に用いられる形動詞の動作主を表わす方法（名詞節）に分けて先行研究の記述を整理し、問題提起を行う⁴²。

A. 所有者を表わす方法（所有名詞句）

Zakiev et al. (1993: 32-33) は、所有者を表わす 3 つの方法（統合法、分析法、分析統合法）を挙げ、（属格の名詞または代名詞と、所有接辞によって表される）分析統合法（例：**minem däftär-em** [1SG.GEN ノート-1SG.POSS] 「私のノート」）は文語的で、所有の概念を強調する際に用いられ、（属格人称代名詞によってのみ表され、所有接辞が現れない）分析法（例：**minem däftär** [1SG.GEN ノート] 「私のノート」）は一・二人称に限られ、口語的である、と記述している。しかし、所有人称接辞が現れない文語的な表現（例：**bez-nen ərə-ya qädär** [1PL.GEN 時代-DAT まで] 「紀元前 (lit. 私たちの時代まで)」）や、所有人称接辞が現れる口語的な表現（例：**Ä sinen isem-en** niček? [で 2SG.GEN 名前-2SG.POSS どう] 「で、君の名前は何かだ?」）も見られるため、筆者は所有人称接辞の出現傾向には文体以外の要因も大きく影響していると考えられる。

Ersen-Rasch (2009: 31) は、「時折、所有接辞は省略される」と述べ、所有接辞が現れていない例には、属格人称代名詞と主要部名詞の間に所有関係があるとは限らないことを示すドイツ語訳を付けている（例：**minem sumka-da** [1SG.GEN バッグ-LOC] “bei mir in der Tasche” (with me in the bag)）。しかし、所有接辞が現れていない例において、必ずしも属格人称代名詞と主要部名詞の間に（広義の）所有関係がないわけではない（例：**minem qul-da sineq qul** [1SG.GEN 手-LOC 2SG.GEN 手] 「私の手に君の手が（ある）」）。

B. 形動詞の動作主を表わす方法（関係節名詞句）

Xisamova (2006) は、名詞を修飾する形動詞の行為者人称を表す方法として、1) 被修飾

⁴² ソ連・ロシアの先行研究では、動名詞または形動詞が主要部の構造に関して、主格主語を持つ構造（例：**Sin kil-üw miña därt östä-de.** [2SG 来る-VN 1SG.DAT 情熱 加える-PST] 「君が来ることは私を鼓舞した」、**sin kil-äse yul** [2SG 来る-PTCP.FUTIII 道] 「君が来るべき道」）は従属節であるが、属格主語を持つ構造（例：**Sinen kil-üw miña därt östä-de.** [2SG.GEN 来る-VN 1SG.DAT 情熱 加える-PST] 「君の来ることは私を鼓舞した」）や、主語名詞句を持たない構造（例：**Qayt-uw-ım-a barı narsä äzär.** [帰る-VN-1SG.POSS-DAT すべてのもの 準備できた] 「私の帰ることにすべてのものが準備できている」）を節とみなしていない。本稿では、1.5.2 節で述べた節の定義に従い、これらの構造も節であるとみなす。

語に付く所有接辞で表す方法 (3-7)、2) 属格の名詞または代名詞と、被修飾語に付く所有接辞で表す方法 (3-8)、3) 主格の名詞または代名詞で表す方法 (3-9)、の 3 つを挙げている。以下に、それぞれの例を再掲する。

- (3-7) [Söylä-yäčäk] süz-lär-eŋ-ne is-eŋ-dä tot.
 話す-PTCP.FUTIII 言葉-PL-2SG.POSS-ACC 記憶-2SG.POSS-LOC 持つ.IMP.2SG
 「君は自分の話す言葉を覚えておけ。」
 (Xisamova 2006: 251)

- (3-8) Ah, [minem sayra-r] jir-em urman ide.
 ああ 1SG.GEN 鳴く-PTCP.FUTI 場所-1SG.POSS 森 COP.PST
 「ああ、私が鳴く場所は森だったのだ。」
 (Xisamova 2006: 244)

- (3-9) [Min tor-a toryan] šähär-neŋ urta-si-n-da bazar bul-ip...
 1SG 住む-PTCP.PRSII 街-GEN 真ん中-POSS-n-LOC 市場 ある-CVB
 「私が住んでいる街の真ん中に市場があって…」
 (Xisamova 2006: 256)

しかし、行為者が属格代名詞のみで表され、所有接辞が現れていない例も見られる (例：minem yarat-qan keše [1SG.GEN 好む-PTCP.PST 人] 「私の好きな人」)。

Ersen-Rasch (2009: 142) は、関係節 (3-40, 3-41) において、主格主語は主語が新情報であることを表わし、属格主語は主語が旧情報であることを表す (定の名詞の場合は所有者とも解釈される) としている。しかし、所有接辞が現れない場合もあることについては記述していない。

C. 動名詞および動名詞的に用いられる形動詞の動作主を表わす方法 (名詞節)

Xisamova (2006: 226-256) は、動名詞的に用いられる形動詞の行為主体を表わす 3 つの方法を挙げ、1) 形動詞に付く所有接辞で表されている例 (3-10)、2) 属格の代名詞または名詞と、形動詞に付く所有接辞で表されている例 (3-11)、3) 主格の代名詞または名詞と、形動詞に付く所有接辞で表されている例 (3-12)、4) 主格の代名詞または名詞と、形動詞に付く所有接辞で表されている例 (3-13)、5) 主格の代名詞または名詞で表されている例 (3-14)、を挙げている。以下に、それぞれの例を再掲する。

- (3-10) [Kil-äse-ŋ]-ne aldan xəbär it-ärgä ide-ŋ.
 来る-PTCP.FUTIII-2SG.POSS-ACC 前もって 知らせ する-INF COP.PST-2SG
 「君は来ることを前もって知らせるべきだった。」
 (Xisamova 2006: 248)
- (3-11) [Jäy-neŋ üt-kän-e] sizel-miy=dä qal-dī.
 夏-GEN 過ぎる-PTCP.PST-POSS 感じられる-NEG.CVB=EMPH 残る-PST
 「夏が過ぎたことが感じられなかった。」
 (Xisamova 2006: 239)
- (3-12) [Yar-īm kem bul-ir-ī]-n bel-miy-m, min
 恋人-1SG.POSS 誰 なる-PTCP.FUTI-POSS-ACC 知る-NEG.PRS-1SG 1SG
 äle yalyüz yöriy-m.
 まだ 一人 歩く.PRS-1SG
 「恋人が誰になるかは分からない、私はまだ一人で歩いている。」
 (Xisamova 2006: 244)
- (3-13) Taji Wildanov [xäzer orkestr kil-ep jüt-äçäg-e]-n
 PN 今 オーケストラ 来る-CVB 達す-PTCP.FUTII-POSS-ACC
 xəbär it-te.
 知らせ する-PST
 「タジ・ウィルダノフは間もなくオーケストラが到着することを知らせた。」
 (Xisamova 2006: 251)
- (3-14) [Sin qayt-qan]-nī köt-ep, bar-miy tor-dī-m.
 2SG 帰る-PTCP.PST-ACC 待つ-CVB 行く-NEG.CVB いる-PST-1SG
 「君が帰るのを待って行かないでいた。」
 (Xisamova 2006: 239)
- (3-15) Äsma [minem qara-yan]-nī kür-de.
 PN 1SG.GEN 見る-PTCP.PST-ACC 見る-PST
 「エスマは私が見ているのを見た。」
 (Xisamova 2006: 239)

しかし、属格人称代名詞が現れる場合の所有人称接辞の出現傾向については記述されていない。

動名詞の行為主体に関しては、これを表わす3つの方法を挙げ、1) 動名詞に付く所有接辞で表されている例 (3-19)、2) 属格の名詞または代名詞と、動名詞に付く所有接辞で表されている例 (3-20)、3) 主格の名詞または代名詞と、動名詞に付く所有接辞で表されている例 (3-21)、4) 主格の名詞または代名詞で表されている例 (3-22)、を挙げている。以下に、それぞれの例を再掲する。

- (3-19) [Sez-ne Qazan-da kür-üw-em]-ä çiksez šat,
 2PL-ACC カザン-LOC 見る-VN-1SG.POSS-DAT 限りなく 嬉しい
 ʷabdulla äfände.
 PN さん
 「あなたにカザンでお会いできてとても嬉しいです、ガブドゥッラーさん。」
 (Xisamova 2006: 268)

- (3-20) [**Gorodovoj-niŋ** kil-mä-w-e-n]-ä Musa borčil-a
 巡査-GEN 来る-NEG-VN-POSS-n-DAT PN 心配する-CVB
 başla-dī.
 始める:AUX-PST
 「巡査が来ないことをムーサは心配し始めた。」
 (Xisamova 2006: 268)

- (3-21) [Qoyaš bayişi yaŋ-ï-n-nan qara quyï **bolit** čiy-uw-ï]
 日没 方-POSS-n-ABL 黒い 濃い 雲 出る-VN-POSS
 bez-ne taŋin borči-y başla-dī.
 1PL-ACC さらに 心配させる-CVB 始める:AUX-PST
 「日没の方向から黒く濃い雲が出ることが我々をさらに心配させ始めた。」
 (Xisamova 2006: 268)

- (3-22) Köndägeçä, Fäyrüzä-se [**ul** kil-üw]-gä šatlan-dī.
 いつものように PN-POSS それ 来る-VN-DAT 喜ぶ-PST
 「いつものようにフェイリュゼはその人が来ることを喜んだ。」
 (Xisamova 2006: 268)

しかし、動名詞の行為者が属格代名詞のみで表され、所有接辞が現れていない例も見られる(例: **minem** kil-üw [1SG.GEN 来る-VN] 「私の来ること」)。

Ersen-Rasch (2009: 150) は、形動詞を持つ名詞節の例 (3-42) を挙げ、主格主語は主語が新情報であることを表わし、属格主語は主語が旧情報であることを表すとしている。しかし、所

有接辞が現れない場合もあることについては記述していない。

Zäkiev et al. (2016: 224-225) は、形動詞過去 -GAn を元に形成される二次的形式 -GAn {bar/ yuq} 「～したことが {ある/ ない}」について、1) 主体は多くの場合、所有接辞と属格の名詞または代名詞によって表される (3-16, 3-17)、2) 主体は所有接辞なしで、属格の代名詞でも表されうる (3-18)、としている。以下に、それぞれの例を再掲する。

- (3-16) Töp-lär-e-n-dä yat-qan-īm bar,
 底-PL-POSS-n-LOC 横になる-PTCP.PST-1SG.POSS ある
 xäl jïy-ïp, kük-kä qara-p...
 力 集める-CVB 空-DAT 見る-CVB
 「私は根元で横になっていたものだ、休んで、空を見て…」
 (Zäkiev et al. 2016: 225)

- (3-17) Menä ničä yil inde yaña opera-niñ säxnä-gä
 ほら いくつ 年 もう 新しい オペラ-GEN 舞台-DAT
 čiq-qan-ï yuq.
 出る-PTCP.PST-POSS ない
 「ほら、もう何年、新しいオペラが上演されていないことか。」
 (Zäkiev et al. 2016: 225)

- (3-18) Äkiyät-lär-neñ altin saray-ï-n-da bez-neñ inde yör-gän
 物語-PL-GEN 金 宮殿-POSS-n-LOC 1PL-GEN もう 歩く-PTCP.PST
 bar ide.
 ある COP.PST
 「物語の金の宮殿を私たちはもう歩いたことがあった。」
 (Zäkiev et al. 2016: 210)

Xisamova (2006: 249-250), Zäkiev et al. (2016: 237-238) は、形動詞未来 -{A/y}sE をもとに作られるモーダル表現 -{A/y}sE {bar/ yuq} 「～しなければならない」と -{A/y}sE kil- 「～したい」について、動作主が所有接辞（および属格の名詞または代名詞）によって表されるとしている。しかし、-GAn {bar/ yuq} 「～したことが {ある/ ない}」と同様に、-{A/y}sE {bar/ yuq} 「～しなければならない」と -{A/y}sE kil- 「～したい」も、主体が所有接辞なしで、属格の代名詞のみでも表されうる（例：Minem ašyysï kil-miy äle. [1SG 食べる.PTCP.FUTIII 来る-NEG.PRS まだ] 「私はまだ食べたくない」）。

以上の問題点を踏まえると、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、属格人称代名詞が現れる場合の主要部における所有人称接辞の出現傾向と、それに影響を与える要因を明らかにする必要があるといえる。

3.3.2. 述語人称標識について

本節では、述語人称標識に関する先行研究の記述を整理し、問題提起を行う。

先行研究の問題点は主に2つ挙げられる。1つ目は、述語人称標識の分類が先行研究によって異なっていること、2つ目は、述語人称標識の出現傾向についての記述が不十分であることである。

まず、1つ目の問題点についてである。以下の表 40 に、それぞれの先行研究が挙げる標識の名称をまとめる。

表 40：先行研究による述語人称標識の分類

	非動詞述語文	動詞述語文		
Xisamova (2006)	述語性接辞	人称接辞 I	人称接辞 II	人称接辞 III
Zäkiev et al. (2016)	述語性接辞	人称接辞 I	人称接辞 II	
Berta (1998)	コピュラ接辞	人称標識		
服部 (1941)	述語人称語尾 (一種ではない)			
林 (1989a)	人称語尾 B	人称語尾 A		
Ersen-Rasch (2009)	接尾人称代名詞 (接語)	所有型人称接辞		

Xisamova (2006), Zäkiev et al. (2016) および Berta (1998) は、非動詞述語に付くものは述語性接辞 (Xisamova 2006, Zäkiev et al. 2016) / コピュラ接辞 (Berta 1998) であるとして、動詞述語に付く人称接辞 (Xisamova 2006, Zäkiev et al. 2016) / 人称標識 (Berta 1998) と区別している。一方、服部 (1941), 林 (1989a), Ersen-Rasch (2009) はそのような区別をしていない。

Xisamova (2006), Zäkiev et al. (2016) は、人称接辞 I が現在形、完了形、未来形に、人称接辞 II は過去形と非直説法の形式 (条件形、願望形) に付くとし、Xisamova (2006: 170) は命令形を人称接辞 III として人称接辞に含めている。その他の先行研究のうち、林 (1989a: 624) は、A の語尾は過去形と条件形に用いられ、他の場合は B の語尾が用いられる (B の語尾は動詞以外の述語にも用いられるが、省略されることもある) と述べている。Ersen-Rasch (2009) は、接尾人称代名詞 (接語) が非動詞述語と動詞の現在形、完了形、未来形に、所有型人称接辞が過去形と条件形に付くとしている。

本稿では、以下に再掲する表 20 に示す形式を述語人称標識とみなす。本稿の立場について、詳しくは 4.1.1 節で述べる。

表 20 (再掲) : 述語人称標識

	代名詞型	所有型
1SG	-m(En)	-m
1PL	-bEz	-K
2SG	-sEŋ	-ŋ
2PL	-sEz	-GEz

次に、2 つ目の問題点についてである。述語人称標識について Xisamova (2006) または Zäkiev et al. (2017) では、1) 非動詞述語文ではその使用はまれで、主に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して述べる必要がある場合に用いられること (3-30)、2) 動詞述語文では、動詞の完了形 -GAn、未来 II 形 -(y)AčAK、意図形 -mAKčE など、一部の形式が述語である場合に現れないことがあること (3-35, 3-36)、が指摘されている。以下に、(3-30, 3-35, 3-36) を再掲する。

(3-30) a. **Min** uq̄ituwč̄i-**m̄in!**

1SG 教師-1SG

「私は教師だ！」

b. **Sez** jawapli-**s̄iz!**

2PL 責任がある-2PL

「あなた (たち) に責任がある！」

(Xisamova 2006: 75)

(3-35) *Max bir-ḡän min, mäs'älä-ne, stal byt, qabirya-si belän*
 やり損なう-PRF 1SG 問題-ACC こうしてみると 肋材-POSS で
quy-ma-yan.

置く-NEG-PRF

「私は問題を拗らせてしまった、こうしてみると肋材を置かなかったようだ。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

(3-36) *Bu kartina-ni bez üz-ebez qara-yačaq.*

これ 絵-ACC 1PL 自身-1PL.POSS 見る-FUTII

「この絵は私たち自身が見る。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

Berta (1998: 298) は、主語と述語の間の人称の一致について、「述語が動詞である場合は通常義務的である」、「述語が名詞である場合、一致は通常起こるが、義務的ではない」と述

べている。Ersen-Rasch (2009: 12) と林 (1989a: 624) は、動詞以外が述語の場合に述語人称標識が省略⁴³されうることについて記述している。しかし、これらの記述は定量的調査を行った上でのものではない。

以上の問題点を踏まえると、どの形式が述語人称標識であるかを定義した上で、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、主格代名詞が現れる場合の主要部における述語人称標識の出現傾向と、それに影響を与える要因を明らかにする必要があるといえる。

⁴³ 筆者は、述語人称標識が「省略」されているわけではないと考える。なぜなら、述語人称標識が現れている構造の方が容認度が低い場合があるからである (5.2 節で後述)。

4. タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法

本章では、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする目的で行った調査の対象と方法について述べる。

以下、4.1 節で調査対象、4.2 節で調査方法について述べる。

4.1. 調査対象

本節では以下、4.1.1 節で調査対象とした人称標識、4.1.2 節で調査対象とした人称標識が現れうる領域、4.1.3 節で調査対象とした人称標示構造について述べる。

4.1.1. 人称標識

筆者は、以下に再掲する表 1 に挙げた諸形式（人称代名詞を除く）を「人称標識」とみなし、これらの出現傾向を調査した。

表 1（再掲）：人称を標示する要素（タタール語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	min	-(E)m	-m(En)	-m
1PL	bez	-(E)bEz	-bEz	-K
2SG	sin	-(E)ŋ	-sEŋ	-ŋ
2PL	sez	-(E)GEz	-sEz	-GEz

以下、述語人称標識と、調査対象外とした標識について述べる。

A. 述語人称標識について

3.2.2 節および 3.3.2 節で、述語人称標識の分類や、代名詞型の述語人称標識を接辞とみなすか接語とみなすかは、先行研究によって異なっていることをみた。以下、それぞれについての本稿の立場について述べる。

まず、述語人称標識の分類についてである。3.3.2 節で述べたように、Xisamova (2006), Zäkiev et al. (2016), Berta (1998) は、非動詞述語に付くものは述語性接辞 (Xisamova 2006, Zäkiev et al. 2016) / コピュラ接辞 (Berta 1998) であるとして、動詞述語に付く人称接辞 (Xisamova 2006, Zäkiev et al. 2016) / 人称標識 (Berta 1998) と区別している。一方、服部 (1941), 林 (1989a), Ersen-Rasch (2009) はそのような区別をしていない。本稿は、非動詞述語と多くの動詞述語に付く人称標識が同一の形式であることから、服部 (1941), 林 (1989a), Ersen-Rasch (2009) に近い立場をとる。林 (1989a) が人称語尾 B、Ersen-Rasch (2009) が接尾人称代名詞とするものは、代名詞を起源とすることから「代名詞型の述語人称標識」、林

(1989a) が人称語尾 A、Ersen-Rasch (2009) が所有型人称接辞とするものは、所有接辞を起源とする可能性があることから「所有型の述語人称標識」と呼ぶ(チュルク諸語に関する先行研究である Johanson and Csató (1998) でも同様の用語 (pronominal type, possessive type) が用いられている。ただし、後述する理由により三人称の標識とされるものは含まない)。

次に、代名詞型の述語人称標識を接辞とみなすか接語とみなすかについてである。代名詞型の述語人称標識が接辞なのか接語なのかを明確に判断するのは難しい。服部 (1950: 8-16) は、附属語(接語に相当)と附属形式(接辞に相当)を見分ける以下の3つの原則を挙げている。

原則一：機能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式(即ち、「附属語」)である。

原則二：2つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。従って、問題の形式は附属語である。

原則三：結びついた2つの形式が互に位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。

服部 (1950: 14-15) は原則二(疑問接語 =mE が述語人称標識の後ろに現れること)から、タタール語の述語人称語尾(代名詞型の述語人称標識に相当)が附属形式(接辞)であると述べている(3.2.2節を参照)。しかし、代名詞型の述語人称標識は服部 (1941: 70) 自身も述べるように、後置された代名詞が起源であり、アクセントを持たないこと、述語として機能する様々な品詞にも付きうること(原則一)、といった接語的な特徴⁴⁴も持っている。これらことから、代名詞型の述語人称標識は、接辞と接語の中間段階にあると考えられる⁴⁵。よって、本稿では接辞とも接語ともせず、代名詞型の述語人称標識と呼ぶこととする(例文では便宜上、接辞境界の記号を用いて分析する。第二部で主に扱う他のチュルク諸語における類似の要素に関しても同様の立場をとる)。

B. 調査対象外とする標識について

本稿では、多くの先行研究が三人称所有接辞としている -(s)E、三人称の述語人称標識としている -DEr, -Ø, -LAr、一部の先行研究が人称標識に含めている願望・命令形(表 21)は人称標識に含めない立場をとる(本論第二部で主に扱う他のチュルク諸語における類似の要素に関しても、一部のものを除いて同様の立場をとる)。よって、これらは調査対象外とする。願望・命令形を人称標識に含めない理由は、願望・命令形の標識が、願望・命令を表

⁴⁴ 原則二、原則三に関連する現象として、接語 =GENa が代名詞型の述語人称標識の前にも後ろにも現れ得ることが挙げられる(例: Qol=yīna-mīn [奴隷=だけ-1SG]「私は奴隷に過ぎない」、Räxmätle-men=genä [感謝している-1SG=だけ]「私はただただ感謝している」)。

⁴⁵ 後述する定量的調査の結果(出現頻度の観点)からも、代名詞型の述語人称標識が接辞か接語かを明確にすることは難しい(複数の要因により、出現頻度が高い場合も低い場合もあるため)。

わす部分と人称・数を表わす部分に分けることができないこと、義務的であること（標識の出現傾向の問題が存在しないこと）である。以下、多くの先行研究が三人称標識としているものを人称標識に含めない理由について述べる。

多くの先行研究が三人称所有接辞としている $-(s)E$ 、三人称の述語人称標識としている $-DEr$ 、 $-\emptyset$ 、 $-LAr$ を人称標識に含まない立場をとるのは、これらの標識が三人称という人称を標示しているわけではないためである。

まず、多くの先行研究が三人称所有接辞としている $-(s)E$ についてである。本稿では、所有接辞 $-(s)E$ が、所有などの関係のみを標示する接辞であり、三人称という人称を標示しているわけではないとの立場をとる。以下、トルコ語に関して類似の主張をしている2つの先行研究（竹内 (1988) および Kunduracı (2015)）の記述をまとめる。

トルコ語および他のチュルク諸語において三人称を認めない立場をとる竹内 (1988: 32) は、チュルク諸語の「第3人称」語尾（三人称所有接辞に相当）について、「これらは『第3人称』語尾ではなく、限定語尾として人称からはずすべきである。その理由は、第1・2人称には単複の区別があるのに、『第3人称』では単複同形でもよいこと、2つ以上の名詞をまとめて、それらがまとまった名詞句であることを示すためにはたらくこと」であるとし、前の名詞に限定されていることを示している例としてトルコ語の *yaz tatil-i* [夏 休み- $(s)I$]「夏休み」などを挙げている。さらに竹内 (1988: 32, 33) は、「第1・2人称では、つぎのように人称語尾の省略が可能である」が、『第3人称』では省略が可能ではない」とし、一人称の例としてトルコ語の *benim ev(-im)* [わたしの 家(-1SG.POSS)]「私の家」を、三人称の例としてトルコ語の *o-nun ev-i (*ev)* [かれ・かの女の 家- $(s)I$]「彼の家」を挙げている。

Kunduracı (2015) は、トルコ語で三人称所有接辞とされてきた接辞 $-(s)I$ が、人称、数、*aitlik*（関係）の3つではなく *aitlik*（関係）のみを標示する *aitlik eki*（関係接辞）であると主張している。その根拠として Kunduracı (2015: 45-49) は、1) $-(s)I$ の分布が一・二人称の接辞に比べて制限されていること、2) 三人称所有句において数の一致がないこと、3) 動詞において三人称の一致がないこと、を挙げている。

トルコ語において従来三人称所有接辞とされてきた接辞 $-(s)I$ が三人称を表わさないと主張するこれら2つの先行研究が挙げる根拠は全て、タタール語の対応物 $-(s)E$ にも当てはまる。

さらに、所有接辞 $-(s)E$ が三人称を標示しているわけではないのは、名詞句だけでなく節でも同様であると筆者は考える。例えば、非人称文（例：*Aqça-sız yäšä-p bul-miy.* [金-なしの 生きる-CVB なる:AUX-NEG.PRS]「金なしで生きることができない」）が名詞節として埋め込まれた場合、主要部に所有接辞 $-(s)E$ が現れうる（例：*aqça-sız yäšä-p bul-ma-yan-liy-i-n* [金-なしの 生きる-CVB なる:AUX-NEG-PTCP.PST-NMLZ-POSS-ACC]「金なしで生きることができないことを」）。非人称文に文法的な主語は存在しないため、主要部に現れる所有接辞 $-(s)E$ は、三人称の主語を表わしているわけではない。さらに、名詞節の主語が一・二人称であるにも関わらず、主要部に所有接辞 $-(s)E$ が現れている例も観察される（5.1節で後述）。

次に、先行研究が三人称の述語人称標識であるとしている **-DEr**, **-Ø**, **-LAr** についてである。ソ連・ロシアの先行研究は、述語性接辞の三人称標識として **-DEr** を、人称接辞の三人称単数標識として **-Ø** を、三人称複数標識として **-LAr** をたてている (3.1.2 節を参照)。その他の先行研究の多くは、三人称 (単数) 標識として **-Ø**、三人称複数標識として **-LAr** をたてている (3.2.2 節を参照)。本稿では、1) **-DEr** をモダリティ標識とみなし、2) 三人称標識として **-Ø** をたてず、3) **-LAr** を主語の複数性のみを標示する標識であるとみなす。

まず、**-DEr** についてである。トルコ語および他のチュルク諸語において三人称を認めない立場をとる竹内 (1988: 34) は「第三人称」とされることのある **dir~(tir~)** について、「第 1・2 人称の形は人称代名詞の後置によって生じた形であるのに対して、『第 3 人称』は **tur-**「立ちどまる, そこにいる」という動詞語幹を起源としている。**dir~(tir~)** は話し手の確認ムードを示す付属語であって、『第 3 人称』とはどうてい言うことができない。事実これは文の動作主が第 1・2 人称であっても用いることができる」とし、例としてトルコ語の **Bunu bil-iyor-sunuz=dur.** [これ.ACC 知る-PRS-2PL=MOD]「これを知っていらっしゃるのですね」などを挙げている。タタール語についても、Zäkiev et al. (2016: 56) は述語性接辞のうち一・二人称を指すものは起源的に代名詞に、三人称のものは **tor-**「立つ」という動詞に遡ると述べている (3.1.2 節を参照)。さらに、タタール語においても **=DEr** は多くの場合推量を表し、一人称および二人称の標識の後にも表れることができる (例: **artist-mïn=dür** [アーティスト-1SG=MOD]「私はアーティストなのだろう」)。よって本稿では、**=DEr** を三人称の標識ではなく、モダリティ標識であるとみなす。

次に **-Ø** についてである。Zäkiev et al. (2017: 117, 118) は動詞述語文における人称の一致について、「一・二人称では常に専用の接辞を取ることから、三人称の述語は接辞なしでも一・二人称の述語とは異なる。つまり、三人称の動詞述語も主語と人称で常に一致しているといえる」とし、林 (1989a: 624) は、「動詞述語は、普通、文末におかれ、人称語尾は述語の末尾につけられる。人称語尾がない場合は、3 人称と解釈される」としている (3.1.2 節および 3.2.2 節を参照)。しかし、Zäkiev et al. (2017: 118) 自身も述べているように、主語が一・二人称でも述語人称標識が現れない例が見られる (3-35, 3-36)。以下に、(3-35, 3-36) を再掲する。

(3-35) *Max bir-gän min, mäs'älä-ne, stal byt, qabırğa-si belän*
 やり損なう-PRF 1SG 問題-ACC こうしてみると 肋材-POSS で
quy-ma-yan.
 置く-NEG-PRF

「私は問題を拗らせてしまった、こうしてみると肋材を置かなかったようだ。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

- (3-36) Bu *kartina-ni* bez üz-ebez qara-yaçaq.
 これ 絵-ACC 1PL 自身-1PL.POSS 見る-FUTII
 「この絵は私たち自身が見る。」

(Zäkiev et al. 2017: 118)

さらに、Zäkiev et al. (2016: 57) が (3-29) を挙げて述べているように、非動詞述語文では主語が一・二人称でも述語人称標識が現れないことが一般的である。以下に (3-29) を再掲する。

- (3-29) a. **Min** tegüwçe.
 1SG 仕立屋
 「私は仕立屋だ。」
 b. **Sez** tegüwçe(-lär).
 2PL 仕立屋(-PL)
 「あなた(たち)は仕立屋だ。」

(Zäkiev et al. 2016: 57)

以上のように、標識が現れていないからといって必ずしも三人称と解釈できない場合があることから、三人称の述語人称標識として $-\emptyset$ をたてることは適切ではない。よって本稿では、三人称単数の標識として $-\emptyset$ をたてない立場をとる。

最後に $-LAr$ についてである。竹内 (1988: 35-38) は、トルコ語における動詞の人称について、『第3人称』の語尾は単数でゼロ (—)，複数では人称語尾ではなく複数語尾が接尾する」と述べている。タタール語においても、三人称複数標識とされている $-LAr$ は複数接辞と同形である。服部 (1941: 71) は強勢の来る $-LAr$ について、「これらの語尾 $-lar \sim -nar$ は三人称代名詞 *alár* に當る形の縮小したものではなくて、単なる複数語尾 (チュルク語の場合『複数語尾』といつてもよからう) であらうと思ふ。強勢がここにあるのはそのためであらう。従つて、私は之を述語の『三人称複数述語人称語尾』と看做さないつもりであつた」と述べている⁴⁶。本稿では、この標識が三人称という人称は標示せず、主語の複数性のみを標示する標識であるとみなす。

これらのことから本稿では、先行研究が三人称の標識としている $-(s)E$, $-DEr$, $-\emptyset$, $-LAr$ を

⁴⁶ ただし服部 (1941: 70-71) は、現在形に付く三人称複数の語尾 $-LAr$ はアクセントを持たないことから、これが人称代名詞 *alar* 「彼等」起源の人称語尾であると主張している (3.2.2 節を参照)。本稿では、現在形に付く $-LAr$ も、主語の複数性のみを標示する標識であるとみなす。なぜなら、1.4.1.2 節で述べたように、*alar* は指示代名詞であり、これが起源であるとしても、人称を標示しているわけではないと言えるからである。

人稱標識には含まない立場をとり、これらの標識を調査対象外とする⁴⁷。

4.1.2. 人稱標識が現れうる領域

所有人称接辞が現れうる領域は明確に分けられない場合があるが、便宜上、以下の表 41 のように分類する。

表 41：所有人称接辞が現れうる領域

領域		主要部
名詞句	所有名詞句	名詞類
	関係節名詞句	名詞類、形動詞
名詞節		非定形動詞（動名詞・形動詞） コピュラ、非動詞述語

以下、それぞれについて説明する。

A. 名詞句

名詞句のうち調査対象となるのは、所有名詞句と関係節名詞句である。以下、それぞれについて述べる。

a. 所有名詞句

所有名詞句は、所有構造をとる名詞句のうち、関係節名詞句を除いたものである（定義と例については 1.5.2 節も参照）。本稿では、特に属格人称代名詞が従属部である所有名詞句を扱う。

所有名詞句には、従属部と主要部が（親族関係や全体部分関係などを含んだ広義の）所有関係にあるもの（例：**minem ene-m** [1SG.GEN 弟-1SG.POSS]「私の弟」）だけでなく、主要部が格をとって後置詞的に機能する補助名詞であるもの（例：**minem yan-ïm-da** [1SG.GEN 横-1SG.POSS-LOC]「私の隣に」）も含む。このような例は、構造的・機能的に所有人称接辞をとりうる後置詞句（例：**minem turi(-m)-da** [1SG.GEN（語幹）(-1SG.POSS)-LOC]「私について」）に近いといえる⁴⁸。

⁴⁷ ただし本稿では、例えば三人称命令形 **-sEn** が存在することなどから、タタール語に三人称のカテゴリー自体は存在するとの立場をとる。三人称に関しては、4.2 節で述べる方法論上、調査が困難であるという問題もある。

⁴⁸ 補助名詞と後置詞は、語幹が語彙的意味を持つかどうかで区別する（補助名詞は語彙的意味を持っており、後置詞は持っていない）。所有人称接辞をとりうる後置詞は **xaqta, turida**「～について」である（1.4.3 節を参照）。類似の機能を持つ 2 つの後置詞のみが所有人称接辞をとりうること、所有人称接辞の出現頻度が非常に低いこと（5.1 節で後述）から、表 41 に後置詞句は含めていない。後置詞句に関する調査結果は、便宜上、所有名詞句（主要部が格をとって後置詞的に機能する補助名詞）に関する調査結果と併せて示す。

所有文（1.5.3 節を参照）は叙述所有を表わすが、構造的には所有名詞句と存在述語 **bar/** **yuq** 「ある／ない」からなる（例：**Minem ene-m bar.** [1SG.GEN 弟-1SG.POSS ある]「私には弟がいる（lit. 私の弟がいる）」）。よって、所有名詞句には所有文中の所有名詞句も含める。

b. 関係節名詞句

関係節名詞句は、関係節が従属部で、被修飾名詞が主要部である名詞句である。主格人称代名詞が現れる構造（例：**min yaz-yan kitap** [1SG 書く-PTCP.PST 本]「私が書いた本」）が一般的である（菱山 2020a: 39）が、このような構造は所有人称接辞が現れないため、調査対象となりえない。本稿では、関係節中に属格人称代名詞が現れている構造（例：**minem yarat-qan artist-ım** [1SG.GEN 好む-PTCP.PST アーティスト-1SG.POSS]「私の好きなアーティスト」）を扱う。属格人称代名詞が関係節外にある構造（例：**minem awirt-qan ayak-ım** [1SG.GEN 痛む-PTCP.PST 足-1SG.POSS]「私の痛む足」）は、関係節名詞句ではなく所有名詞句に含まれる。ただし、属格人称代名詞が関係節の内部にある（関係節名詞句）か、外部にある（所有名詞句）かの判断が困難なことがある。例えば、**Minem köt-kän yeget-em bar.** [1SG.GEN 待つ-PTCP.PST 青年-1SG.POSS ある] は、絶対存在文「私が待っている男の人が、いる」であれば属格人称代名詞が関係節の内部にあり（関係節名詞句）、所有文「私には、（私が／私を）待っている男の人がいる」であれば属格人称代名詞が関係節の外部にある（所有名詞句）と考えられる。本稿では、文脈上明らかに所有名詞句であると考えられるものを除き、人称代名詞と形動詞の間に意味的に主述関係が認められるものは、関係節名詞句として扱う。

関係節名詞句には、名詞化した形動詞を主要部とする名詞化関係節（例：**minem yaz-yan-nar-ım** [1SG.GEN 書く-PTCP.PST-PL-1SG.POSS]「私の書いたもの」）も含む。名詞化関係節は複数接辞を持つものが多いが、複数接辞を持たない場合は構造的に名詞節と区別できない。例えば、**minem söylä-gän-em** [1SG.GEN 話す-PTCP.PST-1SG.POSS]「私が話したこと」は、話した内容を指示していれば名詞化関係節、話したという出来事を指示していれば名詞節と解釈される。よって、このような例が名詞化関係節か名詞節かは、文脈から判断する必要がある。

述語人称標識が現れうる領域は、定形節である（定形節の定義については 1.5.2 節を参照）。第 3 章で取り上げた多くの先行研究の記述から、非動詞述語と動詞述語で述語人称標識の出現頻度が大きく異なることが予想されるため、調査対象は大きく非動詞述語文と動詞述語文に分ける（非動詞述語文と動詞述語文の定義については 1.5.3 節を参照）。非動詞述語文は、主に名詞述語文と形容詞述語文を調査対象とした（名詞と形容詞の定義については 1.4.1.2 節を参照）。コンピュータ小辞 **ide** には所有型の述語人称標識が現れうるが、これは調査対象に含まないこととした。

B. 名詞節

名詞節は、非定形動詞（動名詞・形動詞）、コンピュータ、非動詞述語（多くの場合名詞化接辞 -IEK をとる）を主要部とする節である（定義と例については 1.5.2 節も参照）。ただし、主要部（主に動名詞）と同形の名詞が存在しうするため、名詞句か名詞節かの判断が困難なことがある（例：**minem** **čaqir-uw-īm** [1SG.GEN 招く-VN-1SG.POSS]「私の招くこと」／**minem** **čaqiruw-īm** [1SG.GEN 招待(状)-1SG.POSS]「私の招待(状)」）。本稿では、文脈上明らかに名詞であると考えられるものを除き、人称代名詞と主要部要素（複数接辞を持たないもの）の間に主述関係が認められるものは名詞節として扱う。

名詞節には、動名詞または形動詞に格または後置詞が後続して、節が副詞節的に機能するもの（例：**bez** **mäktäp-tä** **uqi-yan-da** [1PL 学校-LOC 学ぶ-PTCP.PST-LOC]「私たちが学校で学んでいたとき」）も含む。ただし、このようなものは多くの場合所有構造をとらず、この点で副動詞（表 22）を主要部とする副詞節に類似している（所有構造をとった例も見られることから、調査対象に含む。詳しくは 5.1 節で後述する）。

主節化した名詞節（例：**Anda** **nik** **bar-uw-iyiz?** [そこに なぜ 行く-VN-2PL.POSS]「そこになぜ行くんですか？」）、名詞節と構造的に類似している複合述語構文（例：**Qitay-ya** **bar-ası-m** **kil-ä.** [中国-DAT 行く-PTCP.FUT-1SG.POSS 来る-PRS]「私は中国に行きたい」）も、名詞節と同じく 5.1 節で扱う（ただし、5.1 節で後述するように、コーパスのタグ付けの問題により定量的調査は困難である）。

4.1.3. 人称標示構造

まず、所有人称接辞が現れうる領域における人称標示構造について述べる。3.1.1 節で述べたように、ソ連・ロシアの先行研究は、所有を表わす 3 つの方法（統合法、分析法、分析統合法）や、非定形動詞の動作主を表わす複数の方法を挙げている。本稿では、人称標示構造には、1) 所有人称接辞が付加した主要部のみからなる「統合型」の構造、2) 従属部（属格人称代名詞または属格人称代名詞を含んだ関係節）と、所有人称接辞なしの主要部からなる「分析型」の構造、3) 従属部（属格人称代名詞または属格人称代名詞を含んだ関係節）と、所有人称接辞が付加した主要部からなる「分析統合型」の構造、の 3 つがあるとみなし、これらの構造を総称して「所有構造」と呼ぶ。以下に、それぞれの構造の例を挙げる。

統合型

at-īm [馬-1SG.POSS]「私の馬」(名詞句)

yarat-qan **keše-m** [好む-PTCP.PST 人-1SG.POSS]「私の好きな人」(名詞句)

kil-üw-em [来る-VN-1SG.POSS]「私の来ること」(名詞節)

分析型

minem at [1SG.GEN 馬] 「私の馬」 (名詞句)

minem yarat-qan keşe [1SG.GEN 好む-PTCP.PST 人] 「私の好きな人」 (名詞句)

minem kil-üw [1SG.GEN 来る-VN] 「私の来ること」 (名詞節)

分析統合型

minem at-**im** [1SG.GEN 馬-1SG.POSS] 「私の馬」 (名詞句)

minem yarat-qan keşe-**m** [1SG.GEN 好む-PTCP.PST 人-1SG.POSS] 「私の好きな人」 (名詞句)

minem kil-üw-**em** [1SG.GEN 来る-VN-1SG.POSS] 「私の来ること」 (名詞節)

次に、述語人称標識が現れうる領域についてである。所有人称接辞が現れうる構造と並行して、人称標示構造には、1) 述語人称標識が付加した主要部のみからなる「統合型」の構造、2) 主語 (主格人称代名詞) と、述語人称標識なしの主要部からなる「分析型」の構造、3) 主語 (主格人称代名詞) と、述語人称標識が付加した主要部からなる「分析統合型」の構造、の3つがあるとみなす。以下に、それぞれの構造の例を挙げる

統合型

Tatar-**mîn**. [タタール人-1SG] 「私はタタール人だ。」 (定形節)

Bar-maqçï-**mîn**. [行く-VOL-1SG] 「私は行くつもりだ。」 (定形節)

分析型

Min tatar. [1SG タタール人] 「私はタタール人だ。」 (定形節)

Min bar-maqçï. [1SG 行く-VOL] 「私は行くつもりだ。」 (定形節)

分析統合型

Min tatar-**mîn**. [1SG タタール人-1SG] 「私はタタール人だ。」 (定形節)

Min bar-maqçï-**mîn**. [1SG 行く-VOL-1SG] 「私は行くつもりだ。」 (定形節)

本稿は、従属部または主語に人称代名詞が現れる場合に、主要部に人称標識が出現する場合も出現しない場合もあることに着目し、その出現傾向を明らかにすることを目的とする⁴⁹。よって、調査対象は主に**分析型**と**分析統合型** (従属部または主語が、主要部の前方に現れる単一人称代名詞であるもの) である。従って、以下のものは調査対象外とした。

⁴⁹ 名詞節では、主格名詞句が出現している場合にも、主要部に所有人称接辞が現れることも現れないこともある。主格名詞句が現れる構造は、特に主節化したもので多く見られる。主格人称代名詞は所有人称接辞と一致するわけではないため、主要部に所有人称代名詞が現れている場合、基底の属格人称代名詞が何らかの要因で表層に主格人称代名詞として現れていると考えられる (詳しくは5.1節で後述)。よって、主格人称代名詞が現れる構造における所有人称接辞は調査対象外とする。

- a. 統合型の構造
- b. 従属部または主語と主要部が倒置された構造(例:**bala-m minem** [子供-1SG.POSS 1SG.GEN] 「わが子よ」)
- c. 従属部または主語が人称代名詞以外の要素(再帰代名詞の人称形や代名詞化した限定詞)であるもの(例:**üz-em-neŋ yalyış-ım** [自身-1SG.POSS-GEN 過ち-1SG.POSS] 「私自身の過ち」、**Barı-bız=da bel-ä-bez.** [全ての-1PL.POSS=も 知る-PRS-1PL] 「私たち全員が知っている」)
- d. 従属部または主語が人称代名詞を含む等位名詞句であるもの(例:**Min häm sin yaz-a-bız.** [1SG と 2SG 書く-PRS-1PL] 「私と君が書く」)
- e. 述語が人称代名詞を含む複数の主語項をとるもの(例:**Min sine, sin mine tabış-ti-q.** [1SG 2SG.ACC 2SG 1SG.ACC 見つけ合う-PST-1PL] 「私は君を、君は私を見つけた」)

主要部が等位構造である場合は、それを1つの句とみなし、末尾における人称標識の出現頻度を問題にする。例えば、所有名詞句 **minem tormış häm ijat-ım** [1SG.GEN 人生 と 作品-1SG.POSS] 「私の人生と作品」のような例において問題にするのは、主要部である等位名詞句全体 **tormış häm ijat** 「人生と作品」の末尾に所有人称接辞が現れているかどうかであり、等位名詞句の前部要素 **tormış** 「人生」に所有人称接辞が現れているかどうかは問題としない。

4.2. 調査方法

4.1 節で述べた調査対象に関してコーパス調査およびインフォーマント調査を行った。以下、4.2.1 節でコーパス調査、4.2.2 節でインフォーマント調査について述べる。

4.2.1. コーパス調査

コーパス調査では、人称標識の出現頻度を調べた。以下、コーパスと検索方法について述べる。

A. コーパス

使用したコーパスは、タタール語のオンラインコーパス **Corpus of Written Tatar** (以下 CWT) である。以下、CWT の概要について <http://www.corpus.tatar/tt> を要約する。なお、CWT の構築について論じた論文に Sayxunov, İbrahimov and Sälimcanov (2012) などがあ

る。
CWT は、総語数約 5 億語 (2021 年 6 月現在) のタグ付きコーパスである⁵⁰。収録されているテキストのうちマスメディアの記事が約 60%、文学作品が約 35%、人文系の学術論文

⁵⁰ ただし、タグ付けは自動で行われているためか、必ずしも正確ではない。よって、調査ではタグの使用を慎重に検討し、問題ないと判断した場合に使用することとした。

が約 5%を占める⁵¹。CWT は 2012 年 3 月 15 日のサービス開始以来、段階的に拡充されてきた。2014 年 8 月 14 日にはバージョン 2 にアップグレードされ、総語数が約 4500 万語から約 1 億 1600 万語に増加した。2018 年 11 月 27 日にはバージョン 3 にアップグレードされ、総語数が約 1 億 1600 万語から約 3 億 5600 万語に増加、ソースの数が約 1 万 6000 となった。2019 年 10 月 20 日にはバージョン 4 にアップグレードされ、総語数が約 3 億 5600 万語から約 5 億語に増加、ソースの数も約 1 万 7000 となり、タグの正確性が向上した。調査は、バージョン 4 の時（2019 年 10 月 20 日以降）に行った。

以下、CWT の検索画面（図 10）を示し、検索方法を説明する。

Search the Corpus of Tatar language

мин	1-5	<input type="checkbox"/>
татар*	1-1	<input type="checkbox"/>
<sent>	1-1	<input type="checkbox"/>
Word 4	1-1	<input type="checkbox"/>
Word 5	1-1	<input type="checkbox"/>
Word 6		<input type="checkbox"/>

Start typing an author or book name and choose from the drop down list!

Find! Clear

Complex morphological search (Instruction, List of tags)

N-gram based search, where $1 \leq N \leq 6$ (for example: "a*<n>", "(эшлэ)", "(ат*)", "*r??", "", ""')

Enable KWIC (align sentences by key word).

Corpus Query Language (CQL) and POSIX extended regular expressions. [Examples]

Show sources separately for each sentence (old style).

Количество совпадений: 1091

Айдар Халим. Кыйбла: Хикәяләр, новеллалар (2005)

Беләм мин татарларны.

шахталарында күп күрдем мин татарны.

Альберт Хәсәнов. Данәгәл / Роман (2012)

Мин Курган татары.

(татар) +и<cop>, <aog>, <n>, <nom>, <p3>, <px3sp>, <sg>, <sg>
Ишурев В.Д., Жидеңче палата. Повестылар, хикәяләр - Нәшрият: Татарстан китап нәшрияты, 2007 ел.]

図 10 : CWT の検索画面

検索画面には、Word 1 から Word 6 まで、6 つの検索窓がある。本稿では Word 1 を検索窓 1、Word 2 を検索窓 2 のように呼ぶ。検索窓 1 から検索窓 5 までは、右に次の検索窓の要素との距離を入力することができる。初期設定では 1-1 となっている。例えば、次の検索窓の要素との距離を 1-5 として検索すると、2 つの語の間に語もしくは記号が 0-4 個ある例が得

⁵¹ データの主な問題点は次の通りである。1) タタール語の文法書や、20 世紀初頭の文学作品も含まれている点（調査の際は、文法書の例は取り除き、20 世紀初頭の文学作品は、問題となる接辞形式が現代語と異なる場合は取り除いた）、2) 同じ例文が複数ヒットすることがある点（調査の際は、重複例は取り除いた）、3) 文字化けしたデータが含まれている点（調査の際は、判読不可能なものは取り除いた）。

られる。検索窓に語を入力する場合は、キリル文字正書法（1.3.1 節を参照）で入力する必要がある。検索窓にはタグや記号も入力することができる。例えば、図 10 で検索窓 3 に入力されている <sent> は、ピリオド、疑問符、感嘆符などの「文末記号」を意味するタグである。タグの一覧は、検索ボタン Find! の下にある List of tags をクリックすると見ることができる。記号は基本的に正規表現のものを使うことができる。他に、検索窓 2 に入力されているアスタリスク (*) は、「0 文字以上の任意の文字列」を意味する。よって、татар* と入力して検索すると、татарларны や татары のように、татар に接辞が付いた形もヒットする。ヒット数は、検索結果の最上部に表示される。各例文の上の水色のセルには出典が示される。検索で指定した語は、例文中で赤字で示される。例文中の語にカーソルを合わせると、その語に付されたタグが表示される。図 10 では、3 つ目の例文の татары (tatar-ï [タタール人-POSS]「～のタタール人」) にカーソルを合わせており、<n> (名詞)、<nom> (主格)、<px3sp> (三人称単数所有接辞)、<aor> (動詞の未来 I 形) などのタグが付されていることが分かる⁵²。例文の左側にある 2 つのマークのうち、左側のマークをクリックすると音声を聞くことができ、右側のマークをクリックすると前後の文脈 (それぞれ 2 文ずつ) を見ることができる。

B. 調査方法

主に標本調査を行った。検索結果を表計算ソフトに貼り付け、目視で検索ノイズ (以下、ノイズ)⁵³ を除去しながら、標本を人称・数ごとに 50 例または 100 例ずつ (一・二人称単複 4 通りの合計は 200 例または 400 例) 抽出し、人称標識の出現数を目視で数えた。調査は 4.1.2 節で述べたように複数の領域を対象に行ったため、具体的な検索手順は対象とする領域によって異なっている。よって、具体的な検索手順は次節で個別に示すこととする。統計分析としてはカイ二乗検定を行った。有意差が認められた場合は必要に応じて残差分析を行った。有意水準は 5% とした。

4.2.2. インフォーマント調査

インフォーマント調査では、主に筆者が作成した例文の容認度を調べた。

インフォーマントは、ロシア連邦タタールスタン共和国カザンで 1973 年に生まれ、2021 年現在もカザンに在住のタタール語母語話者の男性 R. Y. 氏である (本稿では以下、特にことわりのない限り「インフォーマント」は R. Y. 氏を指す)。R. Y. 氏はロシア語とのバイリンガルであり、専門のペルシャ語をはじめ、多くの言語の知識を有する。インフォーマントには主に作例の容認度を確認していただいた。容認度は「容認可能」、「違和感がある」、「容認不可」の 3 段階を設定した。「違和感がある」と判定された例の頭には ? (違和感が強い場合は ??) を、「容認不可」と判定された例の頭には * を付す。

⁵² 名詞である татар「タタール人」に <aor> (動詞の未来 I 形) のタグがつけられていることから、タグは綴りに応じて機械的に付けられていると考えられる。

⁵³ 意図したものとは異なる検索結果のこと。調査では、重複した例、文字化けした例もノイズとして除去した。

5. タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察

本章では、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする目的で行った調査の結果について述べ、それに関して考察を行う。

調査の結果から、人称標識の出現傾向とそれに影響している主な要因（後述の個別具体的な要因を除く）は、以下に再掲する表2の通りであることが分かった。

表2（再掲）：人称標識の出現傾向とそれに影響している主な要因

人称標識	主な要因	出現傾向
所有人称接辞	人称・数	2SG 標識 > 1PL 標識
	主要部要素の種類	述語 > 被所有名詞 > 後置詞的名詞
	従属部と主要部の距離	非隣接 > 隣接
述語人称標識	標識の種類	所有型 > 代名詞型
	主要部要素の種類	動詞 > 形容詞 > 名詞
	節の種類	非動詞述語文：その他 > =mE 疑問文 動詞述語文：主節 > 引用節

これらの出現傾向は、2.2 節で挙げた通言語的傾向に沿っているものと沿っていないものがある。所有人称接辞の人称・数による出現傾向は、人称階層（図 9）に沿っていない一方、主要部要素の種類による出現傾向は、述語階層（図 5）に沿っている。述語人称標識の主要部要素の種類による出現傾向は、意味論的述語階層（図 6）に沿っている。

以下、5.1 節で所有人称接辞、5.2 節で述語人称標識の出現傾向に関する調査結果を示し、考察を行う。

5.1. 所有人称接辞の出現傾向

本節では、属格人称代名詞が従属部である名詞句・名詞節における所有人称接辞の出現傾向について述べる。

調査の結果、従属部に属格人称代名詞が現れている場合、主に、**1) 人称・数**、**2) 主要部要素の種類**、**3) 従属部と主要部の距離**、が所有人称接辞の出現頻度に影響していることが分かった（後述の所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因を除く）。より具体的には、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いこと、2) 後置詞句や、後置詞的に機能する補助名詞が主要部の名詞句で出現頻度が低く、動名詞や一部の形動詞が主要部の名詞節で出現頻度が高いこと、3) 従属部と主要部が隣接している場合に出現頻度が低く、隣接していない場合に高いこと、が分かった。

これらの調査結果から本節では、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向は、人称階層（図 9）が示す通言語的な傾向には沿っておらず、接辞の長さ、指示対象の数といった要因が関係している可能性があること、2)

後置詞句や、後置詞的に機能する名詞が主要部の名詞句で出現頻度が低く、動名詞や非定形コンピュータ *ikänlek* が主要部の名詞節で出現頻度が高いことは、述語階層（図 5）が示す通言語的な傾向に沿っていること、一方、所有人称接辞が譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で現れやすいという傾向は見られず、被所有名詞階層（図 7）が示す通言語的な傾向には沿っていないこと、3) 従属部と主要部が隣接している場合に出現頻度が低く、隣接していない場合に高いことは、従属部と主要部の距離が離れるほど、それらの関係が所有人称接辞なしでは分かりにくくなるためであること、を主張する。

以下、まず調査結果を名詞句（所有名詞句、関係節名詞句）、名詞節に分けて述べる。便宜上、後置詞句についての調査結果は、所有名詞句（後置詞的に機能する補助名詞を主要部とするもの）についての調査結果と併せて示す。最後に、調査結果に関する考察を述べる。

A. 名詞句

a. 所有名詞句

調査の結果、1) 所有人称接辞の出現頻度は主に、人称・数、従属部と主要部の距離、主要部要素の種類、によって異なること、2) 所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因があること、3) 一部のロシア語直訳的表現では所有人称接辞が現れないこと、が分かった。

まず、所有人称接辞の全体的な出現頻度について述べる。調査の結果、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いことが分かった。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を入力し検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記のように、この調査では人称・数以外の条件を指定せずに検索した。よって以下、この調査の結果を、「所有名詞句における所有人称接辞の全体的な出現頻度」として、他の調査結果と比較することがある。上記の手順で調査したところ、以下の表 42 に示すような結果が得られた⁵⁴。

⁵⁴ 本稿における表では以下、1) カッコ内に示す割合は小数点第二位を四捨五入したものである（よって、割合の合計は必ずしも 100.0%にならない）、2) 人称標識ありの数値となしの数値のうち、より多い方を太字で示す。

表 42：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（全体）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	59 (59.0)	41 (41.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	12 (12.0)	88 (88.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	84 (84.0)	16 (16.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	48 (48.0)	52 (52.0)	100 (100.0)
計	203 (50.8)	197 (49.3)	400 (100.0)

表 42 における人称・数による所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(3) = 107.33, p < .05$)。残差分析を行ったところ、一人称複数標識の出現頻度が有意に低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことが示された。

インフォーマント調査の結果も、コーパス調査の結果と相関している。分析統合型の (5-1, 5-2)a と分析型の (5-1, 5-2)b を作成し容認度を調べたところ、分析型の例のうち一人称複数の (5-1)b は「容認可能」で、二人称単数の (5-2)b は「違和感がある」という。

(5-1) 「私たちの車は壊れた。」

- a. **Bez-nen mašina-biz** watil-dī.
1PL-GEN 車-1PL.POSS 壊れる-PST
- b. **Bez-nen mašina** watil-dī.
1PL-GEN 車 壊れる-PST

(5-2) 「君の車は壊れた。」

- a. **Sineŋ mašina-ŋ** watil-dī.
2SG-GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST
- b. **?Sineŋ mašina** watil-dī.
2SG-GEN 車 壊れる-PST

次に、従属部と主要部の距離について述べる。従属部と主要部が隣接している場合と、従属部と主要部の間に形容詞が一語ある場合の所有人称接辞の出現頻度を調べた結果、従属部と主要部の間に要素が介在している場合、所有人称接辞の出現頻度が高い傾向があることが分かった。調査手順は以下の通りである。

従属部と主要部が隣接している場合

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「名詞」を意味するタグ <n> を入力して検索する。

- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

従属部と主要部の間に形容詞が一語ある場合

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「形容詞」を意味するタグ <adj> を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 3 に「名詞」を意味するタグ <n> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 43, 44 に示すような結果が得られた。

表 43：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（従属部と主要部が隣接している場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	50 (50.0)	50 (50.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	12 (12.0)	88 (88.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	82 (82.0)	18 (18.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	42 (42.0)	58 (58.0)	100 (100.0)
計	186 (46.5)	214 (53.5)	400 (100.0)

表 44：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（従属部と主要部の間に形容詞が一語介在する場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	86 (86.0)	14 (14.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	54 (54.0)	46 (46.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	94 (94.0)	6 (6.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	83 (83.0)	17 (17.0)	100 (100.0)
計	317 (79.3)	83 (20.8)	400 (100.0)

表 43 と表 44 における所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(1)=91.90, p<.05$)。よって、従属部と主要部が隣接している場合に比べて、従属部と主要部の間に形容詞が一語介在している場合の方が所有人称接

辞の出現頻度が有意に高いと言える。

インフォーマント調査の結果も、コーパス調査の結果と相関している。CWT から抽出された (5-3)a から所有人称接辞を削除した (5-3)b を作成し、容認度を調べた結果、(5-3)b は違和感があるという。続いて、(5-3)b から *töp* 「主な」を削除した (5-3)c の容認度を調べた結果、(5-3)c も違和感があるが、c よりも b の方が違和感が強いという。

(5-3) 「私の (主な) 仕事は牛の乳しぼりだ。」

a.	<u>Minem</u>	<u>töp</u>	<u>eš-em</u>	sïyir	saw-uw.
	1SG.GEN	主な	仕事-1SG.POSS	牛	絞る-VN
b.	^{??} Minem	<u>töp</u>	<u>eš</u>	sïyir	saw-uw.
	1SG.GEN	主な	仕事	牛	絞る-VN
c.	[?] Minem		<u>eš</u>	sïyir	saw-uw.
	1SG.GEN		仕事	牛	絞る-VN

次に、主要部要素の種類について述べる。調査の結果、主要部要素が格をとって後置詞的に機能する補助名詞 (1.4.1.2 節を参照) である場合、所有人称接辞の出現頻度が低い傾向があることが分かった。主要部要素が格をとって後置詞的に機能する補助名詞には、相対的な位置関係を表わす名詞 (例: *yan* 「横」、*art* 「後ろ」、*al(d)* 「前」など) に加え、与格をとって後置詞 *öçen* 「～のために」に類似する機能を果たす名詞 (例: *fayda* 「利益」、*xaq* 「権利」、*xörmät* 「名誉」) がある。これらはいずれも多くの場合、後置詞と同様に従属部と隣接している (例: *minem yan(-im)-da* [1SG.GEN 横(-1SG.POSS)-LOC] 「私の横に」、*bez-neç fayda(-biz)-ya* [1PL.GEN 利益(-1PL.POSS)-DAT] 「私たちのために」)。

まず、相対的な位置関係を表わす名詞について述べる。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として、検索窓 2 に相対的な位置関係を表わす名詞とアスタリスク (例: *ян**) を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 45, 46 に示すような結果が得られた (相対的な位置関係を表わす名詞のうち、表 45 に *yan* 「横」、表 46 に *art* 「後ろ」に関する結果を代表として示す)。

表 45：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（yan「横」が主要部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	20 (20.0)	80 (80.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	3 (3.0)	97 (97.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	27 (27.0)	73 (73.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	7 (7.0)	93 (93.0)	100 (100.0)
計	57 (14.3)	343 (85.8)	400 (100.0)

表 46：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（art「後ろ」が主要部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	17 (17.0)	83 (83.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	1 (1.0)	99 (99.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	47 (47.0)	53 (53.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	15 (15.0)	85 (85.0)	100 (100.0)
計	80 (20.0)	320 (80.0)	400 (100.0)

表 42（所有名詞句全体）と表 45, 46 おける所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（表 42 と表 45： $\chi^2(1)=121.46, p<.05$ 、表 42 と表 46： $\chi^2(1)=82.72, p<.05$ ）。よって、相対的な位置関係を表わす名詞が主要部の場合は、所有人称接辞の出現頻度が有意に低いと言える。

インフォーマント調査の結果も、コーパス調査の結果と相関している。CWT から抽出した分析型の (5-4, 5-5)a と、それらに筆者が所有人称接辞を加えた分析統合型の (5-4, 5-5)b の容認度を調べたところ、一人称複数の場合は分析統合型の (5-4)b が違和感があり、二人称単数の場合は分析型の (5-5)a の方が違和感があるという。

(5-4) 「その人はいつも私たちの側にいる。」

- a. UI härwaqit **bez-neŋ yan-da.**
 それ いつも 1PL-GEN 横-LOC
- b. ?UI härwaqit **bez-neŋ yan-ibiz-da.**
 それ いつも 1PL-GEN 横-1PL.POSS-LOC

(5-5) 「その人はいつも君の側にいる。」

- a. ?Ul härwaqit **sineŋ** yan-da.
 それ いつも 2SG.GEN 横-LOC
- b. Ul härwaqit **sineŋ** yan-ïŋ-da.
 それ いつも 2SG.GEN 横-2SG.POSS-LOC

ただしインフォーマントは、(5-5)a は違和感があるとしながらも、よく使われていると述べた。(5-4, 5-5) の結果と比べると、分析型の容認度が高めであり、コーパス調査の結果との相関がみられる。

次に、与格をとって後置詞 *öçen* 「～のために」に類似する機能を果たす名詞について述べる。コーパス調査の対象とした名詞は、比較的用例数の多い *fayda* 「利益」と *xaq* 「権利」である。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として、検索窓 2 に *файда*<dat>* または *хак*<dat>* (<dat> は「与格」を意味するタグ) のいずれかを入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 50 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 47, 48 に示すような結果が得られた。

表 47：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（主要部 *fayda* に与格が付加し後置詞的に機能する場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	0 (0.0)	50 (100.0)	50 (100.0)
1PL (bezneŋ)	0 (0.0)	50 (100.0)	50 (100.0)
2SG (sineŋ)	4 (8.0)	46 (92.0)	50 (100.0)
2PL (sezneŋ)	6 (12.0)	44 (88.0)	50 (100.0)
計	10 (5.0)	190 (95.0)	200 (100.0)

表 48：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（主要部 xaq に与格が付加し後置詞的に機能する場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	2 (4.0)	48 (96.0)	50 (100.0)
1PL (bezneŋ)	0 (0.0)	50 (100.0)	50 (100.0)
2SG (sineŋ)	3 (6.0)	47 (94.0)	50 (100.0)
2PL (sezneŋ)	0 (0.0)	50 (100.0)	50 (100.0)
計	5 (2.5)	195 (97.5)	200 (100.0)

表 42（所有名詞句全体）と表 47, 48 における所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（表 42 と表 47 : $\chi^2(1)=121.88, p<.05$ 、表 42 と表 48 : $\chi^2(1)=137.05, p<.05$ ）。よって、与格をとって後置詞 öčen 「～のために」に類似する機能を果たす名詞が主要部の場合は、所有人称接辞の出現頻度が有意に低いと言える。

インフォーマント調査の結果も、コーパス調査の結果と相関している。CWT から抽出した分析型の (5-6 ~ 5-8)a と、それらに筆者が所有人称接辞を加えた分析統合型の (5-6 ~ 5-8)b の容認度を調べた結果、分析型の (5-6 ~ 5-8)a は「容認可能」で、分析統合型の (5-6 ~ 5-8)b は「違和感がある」という。

(5-6) 「その人らは私たちのために働かない。」

- a. Alar bez-neŋ fayda-ya ešlä-miy-lär.
 それ.PL 1PL-GEN 利益-DAT 働く-NEG.PRS-PL
- b. [?]Alar bez-neŋ fayda-biz-ya ešlä-miy-lär.
 それ.PL 1PL-GEN 利益-1PL.POSS-DAT 働く-NEG.PRS-PL

(5-7) 「永遠に生きたい、君のために！」

- a. Mänge yäšä-rgä teliy-m, sineŋ xaq-qa!
 永遠に 生きる-INF 望む.PRS-1SG 2SG.GEN 権利-DAT
- b. [?]Mänge yäšä-rgä teliy-m, sineŋ xaq-iŋ-a!
 永遠に 生きる-INF 望む.PRS-1SG 2SG.GEN 権利-2SG.POSS-DAT

(5-8) 「あなた（たち）のために二曲演奏します。」

- a. Sez-neŋ xörmät-kä ike jir bašqar-a-m.
 2PL-GEN 名誉-DAT 二 歌 演奏する-PRS-1SG

b. ³Sez-neŋ xörmät-egez-gä ike jür başqar-a-m.

2PL-GEN 名誉-2PL.POSS-DAT 二 歌 演奏する-PRS-1SG

続いて、所有人称接辞をとりうる後置詞 *xaqta*, *turida* 「～について」を主要部とする後置詞句における所有人称接辞の出現頻度を調査したところ、所有名詞句全体における所有人称接辞の出現頻度（表 42）に比べて非常に低いことが分かった。

検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に *xaqta* または *tuŋyda*、もしくは対応する所有人称接辞を持つ形式 (*xaqymda*, *xaqybyzda*, *xaqynda*, *xaqygyzda*, *tuŋymda*, *tuŋybyzda*, *tuŋynda*, *tuŋygyzda*) を入力して検索し、ヒット数を調べたところ、以下の表 49, 50 に示すような結果が得られた。

表 49：人称代名詞を持つ後置詞句における所有人称接辞の出現頻度 (*xaqta* 「～について」が主要部の場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (<i>minem</i>)	43 (3.1)	1329 (96.9)	1372 (100.0)
1PL (<i>bezneŋ</i>)	1 (0.1)	688 (99.9)	689 (100.0)
2SG (<i>sineŋ</i>)	53 (4.3)	1188 (95.7)	1241 (100.0)
2PL (<i>sezneŋ</i>)	3 (0.4)	760 (99.6)	763 (100.0)
計	100 (2.5)	3965 (97.5)	4065 (100.0)

表 50：人称代名詞を持つ後置詞句における所有人称接辞の出現頻度 (*turida* 「～について」が主要部の場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (<i>minem</i>)	47 (3.1)	1457 (96.9)	1504 (100.0)
1PL (<i>bezneŋ</i>)	1 (0.2)	629 (99.8)	630 (100.0)
2SG (<i>sineŋ</i>)	81 (10.2)	713 (89.8)	794 (100.0)
2PL (<i>sezneŋ</i>)	5 (0.7)	692 (99.3)	697 (100.0)
計	134 (3.7)	3491 (96.3)	3625 (100.0)

よって、主要部が後置詞的に機能する名詞である場合（表 45～48）、および後置詞である場合（表 49, 50）は、所有人称接辞の出現頻度が所有名詞句全体（表 42）に比べて非常に低いと言える。

以上述べてきた調査結果から、所有人称接辞の出現頻度には主に、人称・数、従属部と主

要部の距離、主要部要素の種類、が影響しているといえる（この結果に関する考察は、本節末で後述する）。

なお、これらの諸要因のほかに、所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因もあることが分かった。主要部が名詞以外の名詞類（形容詞・数詞・代名詞）である場合 (5-9 ~ 5-11)a、主要部に副詞派生接辞 **-čA** が付加する場合 (5-12)a、従属部と主要部の間に再帰代名詞 **üz** が介在する場合 (5-13)a である。いずれの場合も、調査の限りでは分析型の例はほとんど抽出されず⁵⁵、以下の例文 (5-9 ~ 5-13)a から所有人称接辞を削除した分析型の (5-9 ~ 5-13)b はインフォーマントに「容認不可」と判断された。

(5-9) 「君は私の大切な人だ。」

- | | | | | |
|----|------|---------------------|--------------------------|--|
| a. | Sin | <u>minem</u> | <u>qäderle-m.</u> | |
| | 2SG | 1SG.GEN | 大切な-1SG.POSS | |
| b. | *Sin | <u>minem</u> | <u>qäderle.</u> | |
| | 2SG | 1SG.GEN | 大切な | |

(5-10) 「私たちはあなたたちを二人とも信じない！」

- | | | | | |
|----|------|-----------------------|-----------------------------|----------------------|
| a. | Bez | <u>sez-neñ</u> | <u>ike-gez-gä=dä</u> | ışan-miŷ-biz! |
| | 1PL | 2PL-GEN | 二-2PL.POSS-DAT=も | 信じる-NEG.PRS-1PL |
| b. | *Bez | <u>sez-neñ</u> | <u>ike-gä=dä</u> | ışan-miŷ-biz! |
| | 1PL | 2PL-GEN | 二-DAT=も | 信じる-NEG.PRS-1PL |

(5-11) 「あなたたちのうち、どちらがより美しいか？」

- | | | | |
|----|-------------------------|-------------------------|-------------------|
| a. | <u>Sez-neñ</u> | <u>qaysi-viž</u> | matur-raq? |
| | 2PL-GEN | どれ-2PL.POSS | 美しい-COMP |
| b. | * <u>Sez-neñ</u> | <u>qaysi</u> | matur-raq? |
| | 2PL-GEN | どれ | 美しい-COMP |

(5-12) 「私の考えでは、統一国家試験は必要だ。」

- | | | | | |
|----|-----------------------|----------------------------|--------|--------|
| a. | <u>Minem</u> | <u>fiker-em-čä,</u> | BDI | kiräk. |
| | 1SG.GEN | 考え-1SG.POSS-ADVLZ | 統一国家試験 | 必要だ |
| b. | * <u>Minem</u> | <u>fiker-čä,</u> | BDI | kiräk. |
| | 1SG.GEN | 考え-ADVLZ | 統一国家試験 | 必要だ |

⁵⁵ 従属部と主要部の間に再帰代名詞 **üz** が介在する場合に関して、所有人称接辞が現れていない例が1例抽出された (**minem üz köč** [1sg 自身の力] 「私の自身の力」)。この例は詩の一節であり、特殊な例であると考えられる。

(5-13) 「私たち自身の間に、友情というものがあるのか？」

a.	<u>Bez-neŋ</u>	<u>üz</u>	<u>ara-büz</u> -da	dusliq	digän	närsä	bar=mī?
	1PL-GEN	自身の	間-1PL.POSS-LOC	友情	という	もの	ある=Q
a.	* <u>Bez-neŋ</u>	<u>üz</u>	<u>ara</u> -da	dusliq	digän	närsä	bar=mī?
	1PL-GEN	自身の	間-LOC	友情	という	もの	ある=Q

副詞派生接辞 -čA および再帰代名詞 *üz* は所有人称接辞を義務的にする要素であると考えられる。主要部が名詞以外の名詞類（形容詞・数詞・代名詞）である場合に所有人称接辞が義務的なのは、これらが名詞的に機能していることを示すために所有人称接辞が必要であるためだと考えられる。

一方、一部のロシア語直訳的表現では所有人称接辞が現れないことが分かった。これは、所有人称標識を持たず、分析的な構造のみを持つロシア語の影響であると考えられる。まず、*minem qaraš-qa* [1SG.GEN 見方-DAT] 「私の見方では」である。インフォーマントによると、これはロシア語 *na moj vzgljad* の直訳的な表現だという。CWT からこの表現は 580 例抽出されたが、主要部名詞 *qaraš* に所有人称接辞がついた *minem qaraš-īm-a* [1SG.GEN 見方-1SG.POSS-DAT] は 1 例も抽出されなかった⁵⁶。インフォーマントによると、所有人称接辞が付いた *minem qaraš-īm-a* [1SG.GEN 見方-1SG.POSS-DAT] は「私の見方では」という意味では「容認不可」であるという。次に、*bez-neŋ era-ya qädär* [1PL-GEN 時代-DAT まで] 「紀元前 (lit. 私たちの時代まで)」である。インフォーマントによると、これはロシア語 *do našej èry* の直訳的な表現だという。CWT からこの表現は 2689 例抽出されたが、主要部名詞 *era* に所有人称接辞がついた *bez-neŋ era-büz-ya qädär* [1PL-GEN 時代-1PL.POSS-DAT まで] は 1 例も抽出されなかった。インフォーマントによると、所有人称接辞が付いた *bez-neŋ era-büz-ya qädär* [1PL-GEN 時代-1PL.POSS-DAT まで] は「違和感がある」という。

b. 関係節名詞句

調査の結果、所有名詞句と同様に関係節名詞句でも、1) 人称・数や、従属部（属格人称代名詞）と主要部の距離が所有人称接辞の出現頻度に影響していること、2) 所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因があること、が分かった。

まず、コーパス調査の結果について述べる。コーパス調査の対象としたものは以下の 2 つである。

- ① 関係節の述部が形動詞（過去 -GAn、未来 I-(V)r、未来 II-(y)AčAK、未来 III-{A/y}sE）である関係節名詞句（属格人称代名詞、形動詞、主要部名詞が隣接しているもの、例：
minem yarat-qan artist-īm [1SG.GEN 好む-PTCP.PST アーティスト-1SG.POSS] 「私の好きなア

⁵⁶ 文副詞として機能している例を抽出するため、検索窓 3 に「コンマ」を意味するタグ <cm> を入力して検索した。

一テスト)。形動詞現在 I-(U)wčE は動作主を表わす名詞のみを修飾しうるため、調査対象にはなりえない (1.4.2 節を参照)。形動詞現在 II -{A/y} toryan は、その構成に -GAn を含むこと (1.4.2 節を参照)、用例数が少ないことから、調査対象外とした。

- ② 主要部が名詞化した形動詞過去 -GAn である名詞化関係節 (属格人称代名詞と主要部が隣接しており、主要部に複数接辞 -LAr が付加しているもの、例: minem yaz-yan-nar-ım [1SG.GEN 書く-PTCP.PST-PL-1SG.POSS]「私の書いたもの」)。名詞化関係節には他の形動詞を持つものもあるが、用例数が少ないため調査対象外とした。主要部に複数接辞 -LAr が付加しているものを対象としたのは、1) 名詞化関係節は多くの場合、主要部に -LAr が付加しているため、2) -LAr が付加していない場合は文脈を見なければ名詞節と区別できないため、である (4.1.2 節を参照)。

調査の結果、所有名詞句と同様に関係節名詞句でも、1) 人称・数により所有人称接辞の出現頻度が異なり、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高い傾向が見られること、2) 従属部 (属格人称代名詞) と主要部が隣接している場合に比べて、隣接していない場合に所有人称接辞の出現頻度が高いこと、が分かった⁵⁷。調査手順は以下の通りである。

形動詞過去が述部である関係節を持つ名詞句

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「形動詞過去 -GAn (名詞修飾用法)」を意味するタグ <gpr_past> を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 3 に「名詞」を意味するタグ <n> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら形動詞過去 -GAn が述部である関係節を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

形動詞未来が述部である関係節を持つ名詞句

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「形動詞未来 I~III (名詞修飾用法)」を意味するタグ <gpr_fut>, <gpr_fut2>, <gpr_fut3> のいずれかを、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 3 に「名詞」を意味するタグ <n> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら形動詞未来 I~III が述部である関係節をすべて抽出して合算⁵⁸し、所有人称接辞のある例とない例の

⁵⁷ 主要部要素の種類による所有人称接辞の出現傾向に関しては調査を行っていない。これについては今後の課題とする。

⁵⁸ 形動詞未来 I~III は、それぞれの抽出数が少なかったため、合算することとした。

数を数える。

名詞化した形動詞過去が主要部である名詞化関係節

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「形動詞過去 -GAn (動名詞用法)」⁵⁹を意味するタグ <ger_past> と「複数」を意味するタグ <pl> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら名詞化した形動詞過去 -GAn が主要部である名詞化関係節を人称・数ごとに 50 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 51～53 に示すような結果が得られた。

表 51：人称代名詞を持つ関係節名詞句における所有人称接辞の出現頻度（形動詞過去 -GAn が述部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	80 (80.0)	20 (20.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	44 (44.0)	56 (56.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	94 (94.0)	6 (6.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	79 (79.0)	21 (21.0)	100 (100.0)
計	297 (74.3)	103 (25.8)	400 (100.0)

表 52：人称代名詞を持つ関係節名詞句における所有人称接辞の出現頻度（形動詞未来 I~III が述部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	286 (89.1)	35 (10.9)	321 (100.0)
1PL (bezneŋ)	143 (67.5)	69 (32.5)	212 (100.0)
2SG (sineŋ)	72 (94.7)	4 (5.3)	76 (100.0)
2PL (sezneŋ)	28 (82.4)	6 (17.6)	34 (100.0)
計	529 (82.3)	114 (17.7)	643 (100.0)

⁵⁹ 名詞化関係節の主要部は、修飾用法の形動詞が名詞化したものであるが、CWT では、名詞化関係節の主要部（名詞化した形動詞）に形動詞の動名詞用法を意味するタグが付与されている。よって、名詞化した形動詞を抽出する際には、動名詞用法を意味するタグを用いた。

表 53：人称代名詞を持つ名詞化関係節における所有人称接辞の出現頻度（名詞化した形動詞過去 -GAn が主要部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	36 (72.0)	14 (28.0)	50 (100.0)
1PL (bezneņ)	9 (18.0)	41 (82.0)	50 (100.0)
2SG (sineņ)	42 (84.0)	8 (16.0)	50 (100.0)
2PL (sezneņ)	24 (48.0)	26 (52.0)	50 (100.0)
計	111 (55.5)	89 (44.5)	200 (100.0)

表 51～53 における人称・数による所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、いずれにおいても有意差が認められた（表 51： $\chi^2(3) = 71.17, p < .05$ 、表 52： $\chi^2(3) = 50.26, p < .05$ 、表 53： $\chi^2(3) = 51.56, p < .05$ ）。残差分析を行ったところ、表 51, 53 では一人称複数標識の出現頻度が有意に低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことが、表 52 では一人称複数標識の出現頻度が有意に低く、一・二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことが示された。

さらに、表 51（属格人称代名詞と主要部の間に形動詞が介在している関係節名詞句）と表 53（属格人称代名詞と主要部が隣接している名詞化関係節）における所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2(1) = 21.54, p < .05$ ）。よって、従属部（属格人称代名詞）と主要部が隣接している場合に比べて、従属部（属格人称代名詞）と主要部が隣接していない場合の方が所有人称接辞の出現頻度が有意に高いと言える。

なお、表 51, 52 における所有人称接辞の出現頻度は、従属部と主要部の間に形容詞が一語介在している所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（表 44）に近い。以下に、表 44 を再掲する。

表 44（再掲）：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（従属部と主要部の間に形容詞が一語介在する場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	86 (86.0)	14 (14.0)	100 (100.0)
1PL (bezneņ)	54 (54.0)	46 (46.0)	100 (100.0)
2SG (sineņ)	94 (94.0)	6 (6.0)	100 (100.0)
2PL (sezneņ)	83 (83.0)	17 (17.0)	100 (100.0)
計	317 (79.3)	83 (20.8)	400 (100.0)

表 51, 52 と表 44 における所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差があるとは言えないことが示された（表 51 と表 44 : $\chi^2(1)=2.80, p>.05$ 、表 52 と表 44 : $\chi^2(1)=1.47, p>.05$ ）。

インフォーマント調査の結果も、コーパス調査の結果と相関している。関係節名詞句（属格人称代名詞と主要部の間に形動詞が一語介在）は、分析型の (5-14, 5-15)b が「違和感がある」と判定された。

(5-14) 「私たちの書いた本」

- | | | | |
|----|-----------|-------------|------------|
| a. | [Bez-neŋ | yaz-yan] | kitab-ibiz |
| | 1PL-GEN | 書く-PTCP.PST | 本-1PL.POSS |
| b. | ?[Bez-neŋ | yaz-yan] | kitab |
| | 1PL-GEN | 書く-PTCP.PST | 本 |

(5-15) 「君の書いた本」

- | | | | |
|----|---------|-------------|------------|
| a. | [Sineŋ | yaz-yan] | kitab-iŋ |
| | 2SG-GEN | 書く-PTCP.PST | 本-2SG.POSS |
| b. | ?[Sineŋ | yaz-yan] | kitab |
| | 2SG-GEN | 書く-PTCP.PST | 本 |

名詞化関係節（属格人称代名詞と主要部が隣接）の場合は分析型の容認度がやや高く、一人称複数の (5-16)b は「容認可」、二人称単数の (5-17)b は「違和感がある」と判定された。

(5-16) 「私たちの書いたものは彼らにとって面白くない。」

- | | | | | | |
|----|----------|-------------------------|-----------|-------|---------|
| a. | [Bez-neŋ | yaz-yan-nar-ibiz] | alar-ya | qiziq | tügel. |
| | 1PL-GEN | 書く-PTCP.PST-PL-1PL.POSS | それ.PL-DAT | 面白い | COP.NEG |
| b. | [Bez-neŋ | yaz-yan-nar] | alar-ya | qiziq | tügel. |
| | 1PL-GEN | 書く-PTCP.PST-PL | それ.PL-DAT | 面白い | COP.NEG |

(5-17) 「君の書いたものは彼らにとって面白くない。」

- | | | | | | |
|----|---------|-------------------------|-----------|-------|---------|
| a. | [Sineŋ | yaz-yan-nar-iŋ] | alar-ya | qiziq | tügel. |
| | 2SG-GEN | 書く-PTCP.PST-PL-1PL.POSS | それ.PL-DAT | 面白い | COP.NEG |
| b. | ?[Sineŋ | yaz-yan-nar] | alar-ya | qiziq | tügel. |
| | 2SG-GEN | 書く-PTCP.PST-PL | それ.PL-DAT | 面白い | COP.NEG |

以上の調査結果から、所有名詞句と同様に関係節名詞句でも、人称・数や、従属部と主要部の距離が、所有人称接辞の出現頻度に影響していると言える（この結果に関する考察は、

本節末で後述する)。

なお、所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因として、主部が名詞化関係節(複数接辞なし)、述部が名詞であるコピュラ文が挙げられる。インフォーマントによると、CWTから抽出された分析統合型の(5-18)aから筆者が所有人称接辞を削除した分析型の(5-18)bは「容認不可」だという。

(5-18)「私が一番恐れるのはコンクールだ。」

a.	[Minem	ij	qurq-qan- im]	—	<i>konkurs-lar.</i>
	1SG.GEN	最も	恐れる-PTCP.PST-1SG.POSS		コンクール-PL
b.	*[Minem	ij	qurq-qan]	—	<i>konkurs-lar.</i>
	1SG.GEN	最も	恐れる-PTCP.PST		コンクール-PL

このような構造で所有人称接辞が義務的である理由としては、所有人称接辞がないと関係節+主要部名詞(例:minem ij qurq-qan *konkurs-lar*「私が最も恐れるコンクール」)と表面的な構造上の違いがなくなってしまうことが挙げられる。

B. 名詞節

調査の結果、1)名詞句に比べて所有人称接辞の出現頻度が高めであること、2)名詞句と同様に、人称・数、主要部要素の種類、従属部と主要部の距離が、所有人称接辞の出現頻度に影響していること、3)所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因があること、が分かった。

まず、コーパス調査の結果について述べる。

コーパス調査の対象とした名詞節は、主要部が動名詞 -(U)w、名詞節主要部として機能する4つの形動詞のうち、過去 -GAn、未来 II -(y)AçAK、未来 III -{A/y}sE の3つ、非定形コピュラ *ikän* に名詞化接辞 -IEK が後続した *ikänlek* である名詞節である。これらを調査対象とした理由は、1)形動詞未来 I -(V)r は、コーパスのタグ付けの問題により抽出が困難なため(例えば、*tatar*「タタール」や *batir*「勇者」のように、-(V)r で終わる名詞に形動詞未来 I を意味するタグが付与されているため、大量のノイズがヒットしてしまう)、2) *ikän* は、非定形コピュラ以外に条件、意外性の用法も持っている(1.4.3節を参照)ため、非定形コピュラとして機能しているもののみを抽出するのが困難なため(*ikänlek* であればそのような問題がないため)、である。

調査の結果、1)名詞節(動名詞または非定形コピュラ *ikänlek* が主要部)では、名詞句に比べて所有人称接辞の出現頻度が高いこと、2)名詞句と同様に、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いこと、3)名詞句と同様に、主要部の種類によって所有人称接辞の出現頻度が異なること、が分かった。調査手順は以下の通りである。

動名詞を主要部とする名詞節

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 とし、検索窓 2 に「動名詞」を意味するタグ <ger> を入力して検索する⁶⁰。
- ③ 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら動名詞を主要部とする名詞節を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える⁶¹。

形動詞を主要部とする名詞節

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 とし、検索窓 2 に「形動詞過去 -GAn (動名詞的用法)」⁶²を意味するタグ <ger_past> または「形動詞未来 II -(y)AçAK (動名詞的用法)」を意味するタグ <ger_fut2> または「形動詞未来 III -{A/y}sE 形 (動名詞的用法)」を意味するタグ <ger_fut3> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら形動詞を主要部とする名詞節を人称・数ごとに最大 50 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える⁶³。

非定形コピュラ ikänlek を主要部とする名詞節

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 とし、検索窓 2 に икәнле* を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら非定形コピュラ ikänlek を主要部とする名詞節を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の方法で調査したところ、以下の表 54～58 に示すような結果が得られた。

⁶⁰ 最大距離を 5 に設定した理由は、これ以上にするとノイズの割合が高くなり、目視による除去が困難になると判断したためである。本稿で行った他の調査も、同様の理由で最大距離を 5 に設定している場合がある。

⁶¹ 4.1.2 節で述べたように、動名詞と名詞が同形となるもの（例：çaqiruw 「招くこと、招待」）もあるが、調査では属格人称代名詞と動名詞の間に主述関係が認められれば名詞節とみなした。ただし、動名詞に複数接辞 -LAr が付加しているものは名詞であるとみなし、ノイズとして処理した。

⁶² ソ連・ロシアの先行研究では、形動詞の名詞節述語としての機能を「動名詞的機能」と呼んでいる（3.1.1 節を参照）。CWT のタグも、動名詞を意味する ger (gerund の略) を含んでいる。

⁶³ ただし、形動詞に格が後続しない主格項の名詞節および複合述語構文はノイズとして除去した。これは、CWT において、(所有人称接辞を含む) 接辞が付加していない形動詞には「修飾用法」を意味するタグ (<gpr_past> など) が、接辞が付加している形動詞には「動名詞用法」を意味するタグ (<ger_past> など) が基本的に付与されているためである。

表 54: 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (動名詞が主要部の場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	93 (93.0)	7 (7.0)	100 (100.0)
1PL (bezneņ)	62 (62.0)	38 (37.0)	100 (100.0)
2SG (sineņ)	97 (97.0)	3 (3.0)	100 (100.0)
2PL (sezneņ)	87 (87.0)	13 (13.0)	100 (100.0)
計	339 (84.8)	61 (15.3)	400 (100.0)

表 55: 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞過去 -GAn が主要部の場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	18 (36.0)	32 (64.0)	50 (100.0)
1PL (bezneņ)	6 (12.0)	44 (88.0)	50 (100.0)
2SG (sineņ)	45 (90.0)	5 (10.0)	50 (100.0)
2PL (sezneņ)	37 (74.0)	13 (26.0)	50 (100.0)
計	106 (53.0)	94 (47.0)	200 (100.0)

表 56: 人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度 (形動詞未来 II -(y)AčAK が主要部の場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	50 (100.0)	0 (0.0)	50 (100.0)
1PL (bezneņ)	50 (100.0)	0 (0.0)	50 (100.0)
2SG (sineņ)	50 (100.0)	0 (0.0)	50 (100.0)
2PL (sezneņ)	35 (100.0)	0 (0.0)	35 (100.0)
計	185 (100.0)	0 (0.0)	185 (100.0)

表 57：人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度（形動詞未来 III -{A/y}sE が主要部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	42 (84.0)	8 (16.0)	50 (100.0)
1PL (bezneŋ)	29 (58.0)	21 (42.0)	50 (100.0)
2SG (sineŋ)	50 (100.0)	0 (0.0)	50 (100.0)
2PL (sezneŋ)	26 (89.7)	3 (10.3)	29 (100.0)
計	147 (82.1)	32 (17.9)	179 (100.0)

表 58：人称代名詞を持つ名詞節における所有人称接辞の出現頻度（非定形コピュラ ikänlek が主要部の場合）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	78 (78.0)	22 (22.0)	*100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	76 (76.0)	24 (24.0)	*100 (100.0)
2SG (sineŋ)	94 (94.0)	6 (6.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	86 (86.0)	14 (14.0)	100 (100.0)
計	334 (83.5)	63 (16.5)	400 (100.0)

*一人称単数では 100 例中 2 例、一人称複数では 100 例中 1 例で所有接辞 -(s)E が現れている。これらは所有人称接辞なしの数値に含めた。

表 42（所有名詞句全体）と表 56（動名詞が主要部の名詞節）、表 42 と表 58（非定形コピュラ ikänlek が主要部の名詞節）における所有人称接辞の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、いずれにおいても有意差が認められた（表 42 と表 56： $\chi^2(1)=105.82, p<.05$ 、表 42 と表 58： $\chi^2(1)=97.21, p<.05$ ）⁶⁴。よって、名詞節（動名詞または非定形コピュラ ikänlek が主要部）では、所有名詞句に比べて所有人称接辞の出現頻度が有意に高いといえる。

表 54, 55, 57, 58 における人称・数による所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、いずれにおいても有意差が認められた（表 54： $\chi^2(3)=57.31, p<.05$ 、表 55： $\chi^2(3)=75.87, p<.05$ 、表 57： $\chi^2(3)=31.94, p<.05$ 、表 58： $\chi^2(3)=14.73, p<.05$ ）。残差分析を行ったところ、表 54, 55, 57 では一人称複数標識の出現頻度が有意に低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことが、表 58 では二人称単数標識の出現頻度が有意に高い

⁶⁴ 形動詞が主要部の名詞節（表 55~57）は、一つ前の注で述べたように、主格項のものをノイズとして除去せざるを得なかったため、不完全なデータである。よって、名詞句との比較においては分析対象外とした。

ことが示された。

表 55 ~ 57 (形動詞が主要部の名詞節) における所有人称接辞の出現頻度 (合計) についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(2) = 125.37, p < .05$)。残差分析を行ったところ、主要部が形動詞過去の場合 (表 55) の出現頻度が有意に低く、主要部が形動詞未来 II の場合 (表 56) の出現頻度が有意に高いことが示された。よって、名詞節でも主要部の種類によって所有人称接辞の出現頻度が異なると言える。

さらに、属格人称代名詞と主要部 (動名詞) が隣接している名詞節を対象に調査を行ったところ、属格人称代名詞と主要部の距離も所有人称接辞の出現頻度に影響していることが分かった。調査手順は以下の通りである。

動名詞を主要部とする名詞節 (属格人称代名詞と主要部が隣接)

- ① 検索窓 1 に属格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 とし、検索窓 2 に「動名詞」を意味するタグ <ger> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら動名詞を主要部とする名詞節を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 59 に示すような結果が得られた。

表 59 : 人称代名詞を持つ名詞節 (動名詞が主要部) における所有人称接辞の出現頻度 (従属部と主要部が隣接している場合)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	91 (91.0)	9 (9.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	34 (34.0)	66 (66.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	93 (93.0)	7 (7.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	55 (55.0)	45 (45.0)	100 (100.0)
計	273 (68.3)	127 (31.8)	400 (100.0)

表 54 と表 59 における所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(1) = 30.29, p < .05$)。よって、名詞節でも名詞句と同様に、従属部 (属格人称代名詞) と主要部が隣接している場合に比べ、隣接していない場合に所有人称接辞の出現頻度が有意に高いと言える。

なお、非定形コピュラ *ikänlek* を主要部とする名詞節では、従属部に一人称の属格人称代名詞が現れているにも関わらず、主要部に所有接辞 *-(s)E* が現れている例が 200 例中 3 例見られた。以下に、非定形コピュラ *ikänlek* を主要部とする名詞節で、主要部に所有接辞

-(s)E が現れている 3 例のうち 2 例を挙げる。

(5-19) [Minem Džordž ikän-leg-e]-n ayir-uw qiyin=mī?
 1SG.GEN PN COP.NFIN-NMLZ-POSS-ACC 分ける-VN 難しい=Q
 「私がジョージであることを見分けるのは難しいか？」

(5-20) Vadi keše-lär=dä bel-sen [bez-neŋ kem ikän-leg-e]-n.
 普通の 人-PL=も 知る-IMP.3 1PL.GEN 誰 COP-NMLZ-POSS-ACC
 「普通の人たちも、私達が誰であるかを知ってほしい。」

このような構造が見られる理由については、今後検討する必要がある。なお、主語の人称・数に関係なく主要部に -(s)E が現れる名詞節として、**bez bar-ī-n** [1PL いる-POSS-ACC] 「私たちがいることを」のような例も挙げられる。

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。インフォーマントによると、筆者が作成した分析統合型の名詞節 (5-21 ~ 5-24)a から所有人称接辞を削除した分析型の名詞節 (5-21 ~ 5-24)b は「違和感がある」という。人称・数、主要部要素の種類、従属部と主要部の距離で容認度に差は見られなかった。

(5-21) 「その人は、私たちが来るのを待っている。」

a.	UI	[bez-neŋ	kil-üw-ebez]-ne	köt-ä.
	それ	1PL-GEN	来る-VN-1PL.POSS-ACC	待つ-PRS
b.	?UI	[bez-neŋ	kil-üw]-ne	köt-ä.
	それ	1PL-GEN	来る-VN-ACC	待つ-PRS-

(5-22) 「その人は、君が来るのを待っている。」

a.	UI	[sineŋ	kil-üw-eŋ]-ne	köt-ä.
	それ	2SG.GEN	来る-VN-2SG.POSS-ACC	待つ-PRS
b.	?UI	[sineŋ	kil-üw]-ne	köt-ä.
	それ	2SG.GEN	来る-VN-ACC	待つ-PRS

(5-23) 「その人は、私たちがいつ来たかを知っている。」

a.	UI	[bez-neŋ	qayčan	kil-gän-ebez]-ne	bel-ä.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-1PL.POSS-ACC	知る-PRS
b.	?UI	[bez-neŋ	qayčan	kil-gän]-ne	bel-ä.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS

(5-24) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

a.	UI	[sineŋ	qayčan	kil-gän-eŋ]-ne	bel-ä.
	それ	2SG.GEN	いつ	来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC	知る-PRS
b.	?UI	[sineŋ	qayčan	kil-gän]-ne	bel-ä.
	それ	2SG.GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS

以上の調査結果から、名詞句と同様に名詞節でも、人称・数、主要部要素の種類、属格人称代名詞と主要部の距離が、所有人称接辞の出現頻度に影響していると言える（この結果に関する考察は、本節末で後述する）。

所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因としては、名詞節が主格項であり、主要部が形動詞または非定形コピュラ *ikän* である場合（複合述語構文を除く）が挙げられる。インフォーマントによると、分析統合型 (5-25, 5-26)a の所有人称接辞を削除した分析型 (5-25, 5-26)b は「容認不可」になるという。

(5-25) 「私たちがどこにいたかは明らかだ。」

a.	[Bez-neŋ	qayda	bul-yan-ibiz]	bilgele.
	1PL-GEN	どれ.LOC	いる-PTCP.PST-1PL.POSS	明らか
b.	*[Bez-neŋ	qayda	bul-yan]	bilgele.
	1PL-GEN	どれ.LOC	いる-PTCP.PST	明らか

(5-26) 「私たちがどこにいたかは明らかだ。」

a.	[Bez-neŋ	qayda	ikän-ebez]	bilgele.
	1PL-GEN	どれ.LOC	COP.NFIN-1PL.POSS	明らか
b.	*[Bez-neŋ	qayda	ikän]	bilgele.
	1PL-GEN	どれ.LOC	COP.NFIN	明らか

これは、主要部が名詞的に機能することを示すためには、所有または格のいずれかが必要であるためだと考えられる。

ここまでは主に、節内に属格人称代名詞が現れ、上位節中で項として機能する名詞節について扱った。以下では、主格人称代名詞が現れる名詞節、副詞的に機能する名詞節、主節化した名詞節、複合述語構文について述べる。

a. 主格人称代名詞が現れる名詞節

主格人称代名詞が現れる名詞節でも、所有人称接辞が出現する場合がある。そのような名詞節における主格人称代名詞は多くの場合、(5-27, 5-28) のように、名詞節述語の直前位置

(焦点位置)に現れている⁶⁵。

- (5-27) [Keşe-lär yazmıŝ-ï-n nâq menä sez xäl it-üw-egez]-ne
人-PL 運命-POSS-ACC まさに 2PL 解決する-VN-2PL.POSS-ACC
härwaqıt is-tä tot-arya kiräk.
いつも 記憶-LOC 持つ-INF 必要だ
「人々の運命をまさにあなた(たち)が決めるということを常に覚えておく必要がある。」

- (5-28) [Säxnä-gä nâq menä min çiy-ası-m]-nï
舞台-DAT まさに 1SG 出る-PTCP.FUTIII-1SG.POSS-ACC
ike köñ aldan bel-de-m.
二 日 前に 知る-PST-1SG
「舞台にまさに私が出るということを、私は二日前に知った。」

主格人称代名詞は述語人称標識と一致するのであって、所有人称接辞と一致するわけではない。よって、このような構造では情報構造上の要因により、基底の属格人称代名詞が表層で主格で現れていると考えられる。主格人称代名詞は、属格所有構造の内部要素ではない(主要部と意味的な主述関係の結びつきはあるが、構造的には結びついていない)。よって、動詞直前位置という生起位置に加え、主格であることも主語を際立たせる(焦点化する)効果を持っていると考えられる。この問題について、詳しくは稿を改めて議論したい。

b. 副詞的に機能する名詞節

動名詞または形動詞に格や後置詞が後続して、節が副詞的に機能する場合がある。

動名詞 -(U)w に基づく主な形式 (Zakiev et al. (1992: 343-346), Ersen-Rasch (2009: 152) のいずれか、もしくはいずれも挙げる形式) には、-(U)w-GA 「～するとすぐに」、-(U)w-čA 「～することによると」、-(U)w belän 「～すると」、-(U)w {arqasında / säbäple} 「～したせいで」、-(U)w-GA qaramastan 「～するにも関わらず」がある。

形動詞過去 -GAn に基づく主な形式 (Xisamova (2006: 263-264), Zakiev et al. (1992: 349-352) のいずれか、もしくはいずれも挙げる形式) には、-GAn-GA, -GAn-GA kürä, -GAn öčen 「～したので」、-GAn-nAn 「～したことから」、-GAn-da 「～したとき」、-GAn-čA, -GAn-day 「～したように」、-GAn sayın 「～するたび」、-GAn {kebek / ŝikelle / ŝıman / töŝle} 「～したように」、-GAn qädär 「～するほど」、-GAn(-čE)-GA {qädär / xätle}, -GAn-GA čaqlı, -GAn-GA-čA

⁶⁵ İŝsever (2003: 1028, 1034) によると、トルコ語において動詞それ自体を含んだ動詞前位置は焦点領域 (focus field) であるという。ここでは、トルコ語と同じくチュルク諸語に属するタタール語でも、動詞前位置が焦点位置であると仮定するが、タタール語における語順と情報構造との関係がトルコ語と同じであるかどうかは、検討が必要である。

「～するまで」、-GAn-nAn birle 「～して以来」、-GAn-nAn soŋ 「～した後」がある。

形動詞未来 I-(V)r に基づく主な形式 (Xisamova (2006: 264), Zakiev et al. (1992: 348), Ersen-Rasch (2009: 115) のいずれか、もしくはいずれも挙げる形式) には、-(V)r öčen 「～するために」、-(V)r aldinnan, -mas borin 「～する前に」、-mAs-tAn 「～することなく」、-(V)r -mAs 「～するやいなや」がある。

しかし、これらの形式を持つ節は、名詞節を対象とした上述の定量的調査で 1 例も抽出されなかった。これらの形式を対象に、以下の手順で追加調査を行った。

- ① 検索窓 1 に形動詞 (動名詞的用法) または動名詞を意味するタグを (接辞を持つ形式の場合はその接辞を意味するタグも追加して) 入力する。例えば、-GAn-dA 「～したとき」を抽出する場合は、形動詞過去 (動名詞的用法) を意味するタグ <ger_past> と、位格を意味するタグ <loc> を入力する。
- ② 後置詞が続く形式の場合は、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として検索窓 2 に後置詞を入力して検索する。例えば、-GAn sayin 「～するたび」を抽出する場合は、検索窓 2 に後置詞 caen を入力する。
- ③ 検索結果を観察し、属格主語と所有人称接辞の有無を調べる。

上記の手順で調査したところ、多くは (5-29, 5-30) のように、節の主語が主格で現れることが確認された。

(5-29) [Min kil-gän-dä] ul monda ide.
 1SG 来る-PTCP.PST-LOC それ これ.LOC COP.PST
 「私が来た時、その人はここにいた。」

(5-30) [Bez baqça-ya ker-üw-gä] öy eč-e-n-nän äniy kil-ep čiq-ti.
 1PL 庭-DAT 入る-VN-DAT 家 中-POSS-n-DAT 母 来る-CVB出る-PST
 「私たちが庭に入ると、家の中から母が出てきた。」

一部の形式に関しては、(5-31, 5-32) のように所有構造もとりうるが、主格主語を持つ構造と比べて出現頻度が低く、一般的ではないことが分かった。

(5-31) Bügen kibet-tän anī [telä-gän-eŋ] qädär]
 今日 店-ABL それ.ACC 望む-PTCP.PST-2SG.POSS ほど
 sat-ip al-irya mömkin.
 買う-CVB 取る-INF 可能だ
 「今日は店でそれを君の好きなだけ買うことが出来る。」

(5-32) [Bez-neŋ niček yazıl-uw-ya qaramastan]

1PL-GEN どう 書かれる-VN-DAT 関わらず

üz-läre-n-čä ešlä-yäčäk-lär.

自身-PL.POSS-n-ADV LZ 働く-FUTII-PL

「我々がどう登録されるかに関わらず、奴らは自分たちのしたいようにする。」

ただし、動名詞に副詞派生接辞 -čA (1.4.1.1 節を参照) が付加した形式である -(U)w-čA 「～するところによると」は、所有構造のみをとり、所有接辞は義務的であることが分かった。CWT からは所有接辞の付いていない例は抽出されず、インフォーマントによると分析統合型の (5-33)a から所有接辞を削除した分析型の (5-33)b は「容認不可」になるという。

(5-33) 「私たちが信じるところによると…」

a. bez-neŋ išan-uw-ibiz-ča...

1PL-GEN 信じる-VN-1PL.POSS-ADV LZ

b. *bez-neŋ išan-uw-ča...

1PL-GEN 信じる-VN-1PL.POSS-ADV LZ

c. 主節化した名詞節

調査の結果、主節化した名詞節では、所有接辞が現れるのが一般的であることが分かった。主節化した名詞節は、内部に焦点要素が現れ、文末の動詞が名詞的な形式 (動名詞) をとるという点で、上代日本語の「係り結び」に類似していると言える。例えば、以下の (5-34) では接語 =GENA 「～だけ」が係助詞のように機能し、berenče 「初めて」を焦点化している。

(5-34) Bu šähär-gä minem berenče=genä kil-üw-em.

この 街-DAT 1SG.GEN 初めて=だけ 来る-VN-1SG.POSS

「この街に私が来るのは初めてだ (lit. この街に私は初めてだけ来るのだ)。」

CWT から抽出された例を観察すると、(5-34) のように接語 =GENA 「～だけ」と序数詞 (特に berenče 「一番目、初めて」) が現れている例のほか、疑問詞が現れている例が多く見られた。接語 =GENA に先行する要素および疑問詞は焦点を持つことから、主節化した名詞節には、これらの焦点要素をさらに強調する機能があると考えられる。

Zäkiev et al. (2017: 127) はこれを主要文肢が動名詞である単文としており、行為者は原則として所有接辞によって表され、属格の従属部によっても示されると述べている。

調査の結果、CWT からは、統合型と分析統合型の例 (5-35, 5-36a) は多く抽出されたが、分析型の例は (5-37) のみが抽出された。インフォーマントによると、分析統合型の (5-36)a から所有人称接辞を削除した分析型の (5-36)b は「違和感がある」もしくは「容認不可」に

なるという。

- (5-35) Bu yaq-lar-da nişlä-p yör-üw-eñ?
この 辺-PL-LOC 何をする-CVB 歩く-VN-2SG.POSS
「この辺で何をしているんだ？」

(5-36) 「なぜなら、私がこれについて君から聞くのは初めてだから。」

- a. Čönki minem bu turıda sin-nän berenče išet-üw-em.
なぜなら 1SG.GEN これ について 2SG-ABL 初めて 聞く-VN-1SG.POSS
- b. ?Čönki minem bu turıda sin-nän berenče išet-üw.
なぜなら 1SG.GEN これ について 2SG-ABL 初めて 聞く-VN

- (5-37) “Ä sez-neñ qaya bar-uw?” dip, radioalyčqa işaräläde Taymas.
で 2PL-GEN どこ.DAT 行く-VN
『で、あなたはどこへ行くんですか？』と、タイムスは受信機に信号を送った。」

主節化した名詞節は、以下の (5-38) のような名詞節を補部とするコピュラ文から発展したのではないかと筆者は考える。

- (5-38) Yuq, bu [minem berenče kil-üw-em].
いいえ これ 1SG.GEN 初めて 来る-VN-1SG.POSS
「いや、来るのはこれが初めてだ (lit. いや、これは私の初めて来ることだ)。」

この仮説は、通言語学的研究の記述からも支持される。Heine and Reh (1984), Harris and Campbell (1995), Harris (2001) によると、分裂文は2つの名詞類もしくは名詞化された節がコピュラによって結びついた等式文が起源であると想定されることが多い。Shinzato (2011: 449) によると、日本語の係り結びもこの一般化に適合する。主格の人称代名詞が現れた (5-39) のような構造も見られるが、これは、主節化が最も進んだものであるといえる。

- (5-39) Min sez-gä inde öčenče tapqır kil-üw-em.
1SG 2PL-DAT もう 三番目 回 来る-VN-1SG.POSS
「私があなただのところに来るのはもう3回目だ。」

主節化した名詞節と、それ以外の構文での焦点化の違いにも触れるべきであるが、焦点について、詳しくは稿を改めて議論したい。

d. 複合述語構文

複合述語構文の主な述語は、-(U)w bar 「～かもしれない」、-GAn {bar / yuq} 「～したことが {ある／ない}」、-{A/y}sE {bar / yuq} 「～する必要がある {ある／ない}」、-{A/y}sE kil- 「～したい」である。複合述語構文は、3.1.1 節で挙げた (3-16~3-18) のように、所有構造をとりうる。

形動詞を含む複合述語構文では、3.1.1 節で挙げた (3-18) のような分析型の構造も見られる。インフォーマントによると、筆者が作成した以下の分析統合型の (5-40~5-43)a から所有人称接辞を削除した分析型の (5-40~5-43)b は、(5-41)b が「違和感がある」と判定され、他は「容認可能」であるという。

(5-40) 「私たちは日本にいたことがある。」

- | | | | | |
|----|----------------|--------------------|----------------------|-------------|
| a. | Bez-neŋ | <i>Japonija-dä</i> | bul-yan-ibiz | bar. |
| | 1PL-GEN | 日本-LOC | いる-PTCP.PST-1PL.POSS | ある |
| b. | Bez-neŋ | <i>Japonija-dä</i> | bul-yan | bar. |
| | 1PL-GEN | 日本-LOC | いる-PTCP.PST | ある |

(5-41) 「君は日本にいたことがある？」

- | | | | | |
|----|---------------------------|--------------------|----------------------|----------------|
| a. | Sineŋ | <i>Japonija-dä</i> | bul-yan-iŋ | bar=mi? |
| | 2SG.GEN | 日本-LOC | いる-PTCP.PST-2SG.POSS | ある=Q |
| b. | [?] Sineŋ | <i>Japonija-dä</i> | bul-yan | bar=mi? |
| | 2SG.GEN | 日本-LOC | いる-PTCP.PST | ある=Q |

(5-42) 「私たちはオシポシマク⁶⁶を食べたい。」

- | | | | | |
|----|----------------|-----------------|--------------------------|---------------|
| a. | Bez-neŋ | <i>öčpočmaq</i> | ašiyis-biz | kil-ä. |
| | 1PL-GEN | オシポシマク | 食べる.PTCP.FUTIII-1PL.POSS | 来る-PRS |
| b. | Bez-neŋ | <i>öčpočmaq</i> | ašiyis | kil-ä. |
| | 1PL-GEN | オシポシマク | 食べる.PTCP.FUTIII | 来る-PRS |

(5-43) 「君はオシポシマクを食べたい？」

- | | | | | |
|----|--------------|-----------------|--------------------------|------------------|
| a. | Sineŋ | <i>öčpočmaq</i> | ašiyis-iŋ | kil-ä=me? |
| | 2SG.GEN | オシポシマク | 食べる.PTCP.FUTIII-2SG.POSS | 来る-PRS=Q |
| b. | Sineŋ | <i>öčpočmaq</i> | ašiyis | kil-ä=me? |
| | 2SG.GEN | オシポシマク | 食べる.PTCP.FUTIII | 来る-PRS=Q |

⁶⁶ タタール料理の名称。「三角形」を意味し、その名の通り角切りにした肉とジャガイモ、玉ねぎをパン生地で三角の形に包み焼いたもの (櫻間・中村・菱山 2017: 133)。

一方、動名詞を含む複合述語を持つ構文では、所有接辞が現れるのが一般的であることが分かった。CWT から分析型の例は抽出されず、インフォーマントによると、以下の分析統合型の (5-44 ~ 5-46)a から所有人称接辞を削除した分析型の (5-44 ~ 5-46)b は「容認不可」になるという。

(5-44) 「君は私たちにとって必要になるかもしれない。」

- a. **Sineḡ** bez-gä kiräk bul-uw-**iḡ** bar.
 2SG.GEN 1PL-DAT 必要な なる-VN-2SG.POSS ある
- b. ***Sineḡ** bez-gä kiräk bul-uw bar.
 2SG.GEN 1PL-DAT 必要な なる-VN ある

(5-45) 「私は君を失うかもしれない。」

- a. **Minem** sine yuḡalt-uw-**iḡm** ixtimal.
 1SG.GEN 2SG.ACC 失う-VN-1SG.POSS かもしれない
- b. ***Minem** sine yuḡalt-uw ixtimal.
 1SG.GEN 2SG.ACC 失う-VN かもしれない

(5-46) 「私たちは何のせいで忘れっぽい聴衆になりうるか？」

- a. **Bez-neḡ** närsä arqa-si-n-da onituwčan tḡḡlawč-i-lar
 1PL-GEN 何 後-POSS-n-LOC 忘れっぽい 聞き手-PL
 bul-uw-**iḡbiḡ** mömkin?
 なる-VN-1PL.POSS かもしれない
- b. ***Bez-neḡ** närsä arqa-si-n-da onituwčan tḡḡlawč-i-lar
 1PL-GEN 何 後-POSS-n-LOC 忘れっぽい 聞き手-PL
 bul-uw mömkin?
 なる-VN かもしれない

複合述語構文では、(5-47~5-49) のように主格主語が現れる場合も多い。これらは、所有構造をとるものに比べ、より主節らしい構造であるといえる。

(5-47) Irtägä ul keše namazli bulir da,

- min** adaš-qan-nar-dan bul-uw-**iḡm**=da bar bit.
 1SG 迷う-PTCP.PST-PL-ABL なる-VN-1SG.POSS=も ある EMPH

「明日その人が入信し、私が迷える者たちの一人になる可能性もあるのだ。」

(5-48) Šundiy matur qoş-lar-ni min barı tik räsem-dä=genä
 そのような 美しい 鳥-PL-ACC 1SG ただ 写真-LOC=だけ
 kür-gän-em bar.
 見る-PTCP.PST-1SG.POSS ある
 「そのような美しい鳥を私は写真でだけ見たことがある。」

(5-49) Min yäşä-w-em-neñ maqsat-ı-n bel-äse-m
 1SG 生きる-VN-1SG.POSS-GEN 目的-POSS-ACC 知る-PTCP.FUTIII-1SG.POSS
 kil-ä.
 来る-PRS
 「私は自分の生きる目的を知りたい。」

主格主語が現れる例の中には、(5-50) のように所有接辞が現れていない例も見られる。

(5-50) Min üz-em=dä Ufa-da tözeleş-lär-dä eşlä-gän bar.
 1SG 自身-1SG.POSS=も ウファ-LOC 建設-PL-LOC 働く-PTCP.PST ある
 「私自身もウファの建設現場で働いたことがある。」

以上の調査結果から、本節の最初で述べたように、従属部に属格人称代名詞が現れている名詞句・名詞節では、主に、1) 人称・数、2) 主要部要素の種類、3) 従属部と主要部の距離、が所有人称接辞の出現頻度に影響していると言える(所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因を除く)。より具体的には、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高い、2) 後置詞句や、後置詞的に機能する補助名詞が主要部の名詞句で出現頻度が低く、動名詞や一部の形動詞が主要部の名詞節で出現頻度が高い、3) 従属部と主要部が隣接している場合に出現頻度が低く、隣接していない場合に高い、と言える。以下、それぞれの要因について考察する。

1) 人称・数

人称・数による所有人称接辞の出現頻度は、その機能(所有者を標示するか主語を標示するか)や現れる領域(名詞句か名詞節か)に関わらず、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという共通の傾向を示している。この傾向は、人称階層(図9)が示す通言語的傾向(1st > 2nd > 3rd)には沿っていない⁶⁷。筆者は、以下で述べる要因が、人称・数による所有人称接辞の出現頻度に影響を与えている可能性があると考えられる。

1つ目の考えられる要因は、所有人称接辞の長さである。単数人称の所有人称接辞は 0-1

⁶⁷ ただし、江畑 (p.c.) によると、2 > 1 > 3 の言語も少なくはなく、1, 2 (SAP) > 3 も有力な考えである。

音節（一人称単数 $-(E)m$ 、二人称単数 $-(E)\eta$ ）であるのに対し、複数人称の所有人称接辞は 1-2 音節（一人称複数 $-(E)bEz$ 、二人称複数 $-(E)GEz$ ）であり、複数人称の標識のほうが長い。そのため、複数人称の標識は経済性の観点から落ちやすい可能性がある。しかし、この仮説では、なぜ一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いのかは説明できない。

一人称複数標識の出現頻度が最も低いことは、もう 1 つの考えられる要因「指示対象の数」によって説明できる。複数人称代名詞のうち、二人称複数の代名詞 *sez* は二人称単数の敬称も表しうる。よって、人称代名詞を、指示対象の単数性の高い順に左から並べると、 $1SG, 2SG > 2PL > 1PL$ となる。この仮説は、所有者が一人（「私」や「君」）である場合に、所有人称接辞が落ちにくいように感じるというインフォーマントの感覚と合致する。しかし、この仮説では、二人称単数標識の出現頻度が最も高いことは説明できない。また、この仮説の妥当性を確かめるには、二人称複数代名詞の指示対象が二人称複数か二人称単数敬称かで所有人称接辞の出現頻度に差があることを示す必要があるが、同形であるため定量的調査による検証は困難である。そのため、本稿では可能性を指摘するにとどめておきたい。

なお、本論第二部で後述するが、一人称複数標識の出現頻度が最も低いという傾向は、他の主なチュルク諸語にも共通してみられる。一人称単複の標識が同形であるサラール語でも、一人称複数を指示する場合に標識の出現頻度が低い（原 2019）。このことから、複数のチュルク諸語で一人称複数標識の出現頻度が低いのは、一人称複数という人称・数の持つ特性が影響している可能性がある（8.1 節を参照）。

2) 主要部要素の種類

所有人称接辞は、後置詞句や後置詞的に機能する名詞が主要部の名詞句で出現頻度が低く（表 45~50）、動名詞や非定形コピュラ *ikänlek* が主要部の名詞節で出現頻度が高い（表 54, 58）。これは、人称の一致が接置詞よりも被所有名詞で、被修飾名詞よりも述語でより一般的であるという、述語階層（図 5）が示す通言語的な傾向（*predicates > possessed nouns > adpositions*）に沿っている。一方、所有人称接辞が譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で現れやすいという傾向は見られなかった。タタール語では、譲渡不可能名詞でも所有人称接辞が現れない例が多く見られる（例：*minem qul-da sineŋ qul* [1SG.GEN 手-LOC 2SG.GEN 手]「私の手に君の手（がある）」）。CWT を用いて定量的調査を行ったところ、被所有名詞が譲渡可能か不可能かによって、所有人称接辞の出現頻度に上記のような傾向は見られなかった（例えば、一人称単数が所有者で、被所有名詞が譲渡可能名詞 *sumka*「バッグ」または譲渡不可能名詞 *qul*「手、腕」である場合、所有人称接辞の出現頻度は前者が 50 例中 15 例、後者が 50 例中 14 例であった）。よって、タタール語の所有名詞句では、所有人称接辞の出現傾向に被所有名詞の譲渡可能性はあまり関わっていないと考えられる。これは、人称の一致が譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で起こりやすいという、被所有名詞階層（図 7）が示す通言語的な傾向（*inalienable > alienable*）には沿っていない。

3) 従属部と主要部の距離

所有人称接辞は、従属部と主要部が隣接している場合に出現頻度が低く、隣接していない場合に高い傾向がある（表 43, 44、表 54, 59）。これは、従属部と主要部の距離が離れるほど、それらの関係が所有人称接辞なしでは分かりにくくなるためであると考えられる。

以上の3つの要因は相互作用しうる。例えば、所有人称接辞の出現頻度を高める要因が重なった場合は、所有人称接辞の出現頻度はさらに高くなる（例えば、表 44 を見ると、従属部と主要部が隣接していない所有名詞句における二人称単数標識の出現頻度は 94.0%と非常に高い）。逆に、所有人称接辞の出現頻度を低める要因が重なった場合は、所有人称接辞の出現頻度はさらに低くなる（例えば、表 45 を見ると、主要部が位置関係名詞 *yan* 「横」である場合の一人称複数標識の出現頻度は 3.0%と非常に低い）。加えて、これら3つの要因以外に、所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因も存在する。所有人称接辞を義務的にする個別具体的な要因（主要部が名詞以外の名詞類である場合 (5-9~5-11)a、主要部に副詞派生接辞 *-čA* が付加する場合 (5-12)a、従属部と主要部の間に再帰代名詞 *üz* が介在する場合 (5-13)a、主部が複数接辞を持たない名詞化関係節で、述部が名詞であるコピュラ文の場合 (5-18)a、名詞節が主格項であり、主要部が形動詞または非定形コピュラ *ikän* である場合 (5-25, 5-26)a）は当然、所有人称接辞の出現頻度に影響を与える3つの要因よりも強力に作用する。

タタール語の所有人称接辞は、主要部要素の種類による出現傾向（後置詞的な要素よりも被所有名詞で、被修飾名詞よりも述語でより出現頻度が高いという点）では通言語的な傾向に沿っている一方、人称・数による出現傾向（一人称複数標識よりも二人称単数標識の出現頻度の方が高いという点）および、譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で出現頻度が高いという傾向が見られないという点で、通言語的な傾向に沿っていない。ただし、人称・数による出現傾向はタタール語に特有のものではなく、他のチュルク諸語や近隣の別系言語にも共通してみられる。これについては第二部で後述する。

5.2. 述語人称標識の出現傾向

本節では、人称代名詞が主語である定形節における述語人称標識の出現傾向について述べる。

調査の結果、述語人称標識の出現傾向は主に、**1) 標識の種類、2) 主要部（述語）の種類、3) 節の種類**、によって異なることが分かった。より具体的には、1) 所有型の標識に比べ、代名詞型の標識の出現頻度が低いこと、2) 述語人称標識の出現頻度は、述語が非動詞述語である場合に低く、動詞述語である場合に高いこと、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語（特に感情やモダリティを表わす形容詞）で高いこと、動詞述語文では、動詞が意図形 *-mAKčE*、（結果状態を表わす）完了形 *-GAn* である場合に低いこと、3) 非動詞述語文では疑問接語 *=mE* が現れる疑問文（以下、*=mE* 疑問文）で述語人称標識の出現

頻度が特に低いこと、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いこと、が分かった。

これらの調査結果から本節では、1) 所有型の標識に比べて代名詞型の標識の出現頻度が低いのは、代名詞型の標識の方が独立性が高い (4.1.1 節で述べたように、接語的な特徴を持つ) ためであること、2) 述部要素の種類による述語人称標識の出現頻度は大まかに「動詞>形容詞>名詞」であるといえ、この傾向は意味論的述語階層 (図 6) が示す通言語的な傾向に沿っていること、3) 非動詞述語を持つ =mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いのは、非動詞述語文で述語人称標識が主に強調して述べる必要がある場合に用いられる、つまり疑問モダリティとは相容れない断言モダリティを表わすことが多いためであること、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低い、これは主節主語の視点が関係しているためであること、を主張する。

以下、まず調査結果を示し、最後に、調査結果に関する考察を行う。

まず最初に、人称代名詞が主語である非動詞述語文 (名詞述語文、形容詞述語文) と動詞述語文における述語人称標識の全体的な出現頻度について述べる。調査の結果、述語人称標識の出現頻度は、1) 非動詞述語文で低く、動詞述語文で高いこと、2) 非動詞述語文では、述語が名詞である場合よりも形容詞である場合に高いこと、が分かった。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 に主格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 として検索窓 2 に、1) 「名詞」を意味するタグ <n> と「主格」を意味するタグ <nom>、2) 「形容詞」を意味するタグ <adj>、3) 「動詞」を意味するタグ <v>、の 3 つのうちいずれかを、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として検索窓 3 に文末記号を意味するタグ <sent> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 60~62 に示すような結果が得られた。

表 60 : 人称代名詞を持つ名詞述語文 (主節) における述語人称標識の出現頻度

人称代名詞	述語人称標識 (代名詞型)		計
	あり	なし	
1SG (min)	3 (3.0)	97 (97.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
計	3 (0.8)	397 (99.3)	400 (100.0)

表 61：人称代名詞を持つ形容詞述語文（主節）における述語人称標識の出現頻度

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	11 (11.0)	89 (89.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	8 (8.0)	92 (92.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	7 (7.0)	93 (93.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	8 (8.0)	92 (92.0)	100 (100.0)
計	34 (8.5)	366 (91.5)	400 (100.0)

表 62：人称代名詞を持つ動詞述語文（主節）における述語人称標識の出現頻度

人称代名詞	述語人称標識		計
	あり	なし	
1SG (min)	98 (98.0)	2 (2.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	99 (99.0)	1 (1.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
計	397 (99.3)	3 (0.8)	400 (100.0)

表 60～62 における述語人称標識の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(2) = 1039.45, p < .05$)。残差分析を行ったところ、名詞述語（表 60）、形容詞述語（表 61）で述語人称標識の出現頻度が有意に低く、動詞述語（表 62）で述語人称標識の出現頻度が有意に高いことが示された。ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、名詞述語（表 60）と形容詞述語（表 61）における述語人称標識の出現頻度（合計）に有意差が認められた ($\chi^2(1) = 27.23, p < .017$)。よって、1) 述語人称標識の出現頻度は、非動詞述語文で有意に低く、動詞述語文で有意に高い、2) 非動詞述語文では、述語が名詞である場合よりも形容詞である場合に述語人称標識の出現頻度が有意に高い、と言える。

形容詞述語文で述語人称標識が現れている 34 例のうち 25 例は、(5-51) のように、動詞の不定形 + *tiyeš* 「～する必要がある」⁶⁸ が述語の文であった（詳しくは後述）。

(5-51) **Sez** *šunī* *aŋla-rya* **tiyeš-sez.**
 2PL それ.ACC 理解する-INF 必要だ-2PL

⁶⁸ 動詞の不定形を含んでいるため、単なる形容詞述語文とは言えない側面を持っている。本稿では、1.5.3 節で述べた非動詞述語文の定義に従い、動詞の不定形 + 形容詞が述語である文を形容詞述語文であるとみなす。*tiyeš* 以外にも、不定形と共起する形容詞が存在する（例：Očraš-*irya riza*. [会う-INF 賛成だ]「会うことに賛成だ」）。

「あなたはそれを理解しなければなりません。」

動詞述語文で述語人称標識が現れていない3例はすべて、(5-52)のように、完了形 -GAn が述語の文であった（詳しくは後述）。

(5-52) **Min inde andiy xäl-lär-gä künek-kän.**
 1SG もう そんな 状況-PL-DAT 慣れる-PRF
 「私はもうそんな状況に慣れている。」

以下、非動詞述語と動詞述語に分けて、具体的な述語における述語人称標識の出現頻度について述べる。調査対象は、以下の表 63 に示す述語とした⁶⁹。以下、非動詞述語、動詞述語の順に調査結果を述べる。

表 63：調査対象の述語

述語		現れうる標識
非動詞述語	名詞	代名詞型
	形容詞	
動詞述語	完了形	
	意図形	
	未来 II 形	
	現在形	
	過去形	所有型

A. 非動詞述語

非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度は、1) 名詞述語よりも形容詞述語（特に感情やモダリティを表わす形容詞）で高いこと、2) =mE 疑問文で特に低いこと、が分かった。

まず、コーパス調査の結果について述べる。コーパス調査の結果、šat「嬉しい」、räxmätle「感謝している」などの感情を表わす述語や、上述の tiyeš「必要だ」などのモダリティを表わす述語で述語人称標識の出現頻度が高めであることが分かった。以下に、感情形容詞 šat「嬉しい」に述語人称標識が現れている例 (5-53) を挙げる。

⁶⁹ 非動詞述語は、代表的なものとして名詞述語と形容詞述語を選んだ。動詞述語は、先行研究（3.1.2 節を参照）に述語人称標識が現れないことがある形式として挙げられている完了形、意図形、未来 II 形に加え、それ以外の形式のうち代表的なものとして、現在形と過去形を選んだ。

(5-53) Min sineŋ belän tanış-uw-ya bik šat-mîn.
 1SG 2SG.GEN と 知り合う-VN-DAT とても 嬉しい-1SG
 「私は君と知り合えてとてもうれしい。」

まず、名詞述語および形容詞述語における述語人称標識の出現数（統合型と分析統合型の出現数）を調べた。検索窓 1 に述語人称標識の付いた非動詞述語を入力して検索し、ヒット数を調べたところ、以下の表 64 に示すような結果が得られた（調査で入力したものうち、主なもの 10 個を掲載した）。

表 64：非動詞述語における述語人称標識の出現数

			1SG	1PL	2SG	2PL	計
名詞	<i>student</i>	「生徒だ」	0	0	0	0	0
	<i>soldat</i>	「兵士だ」	4	0	0	0	4
	<i>yeget</i>	「青年だ」	2	0	28	1	31
	<i>möselman</i>	「ムスリムだ」	31	5	5	0	41
	<i>tatar</i>	「タタール人だ」	170	10	2	2	184
形容詞	<i>jawabli</i>	「責任がある」	15	21	4	2	42
	<i>äzer</i>	「準備できた」	486	548	33	7	1074
	<i>šat</i>	「嬉しい」	2553	1027	2	2	3584
	<i>räxmätle</i>	「感謝している」	3250	1650	1	1	4902
	<i>tiyeš</i>	「必要だ」	1281	11972	2059	1240	16552

表 63 から、特に感情を表わす形容詞（*šat* 「嬉しい」、*räxmätle* 「感謝している」）、モーダルを表わす形容詞（*tiyeš* 「必要だ」）が述語である場合に、述語人称標識の出現数が多いことが分かる。ただし、=mE 疑問文では、述語人称標識の出現数が少ないことが分かった。検索窓 1 に述語人称標識と疑間接語 =mE の付いた非動詞述語（表 64 で述語人称標識の出現数が多いもの）（例：*tatar-siŋ=mi* [タタール-2SG=Q] 「君はタタール人か？」）を入力して検索し、ヒット数を調べた結果、以下の表 65 に示すような結果が得られた。

表 65：非動詞述語における述語人称標識の出現数 (=mE 疑問文)

			1SG	1PL	2SG	2PL	計
名詞	möselman	「ムスリムだ」	0	0	0	0	0
	tatar	「タタール人だ」	0	0	0	0	0
形容詞	šat	「嬉しい」	0	0	2	1	3
	räxmätle	「感謝している」	0	0	0	0	0
	tiyeš	「必要だ」	18	35	5	1	59

表 64 と表 65 を比べると、=mE 疑問文 (表 65) では =mE が現れていない文 (表 64) に比べて、述語人称標識の出現数が少ないことが分かる⁷⁰。

次に、主格人称代名詞が主語で、感情形容詞またはモーダル形容詞が述語である文における述語人称標識の出現頻度を調べた。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 にいずれかの人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 として検索窓 2 に非動詞述語とアスタリスク (例: mar*) を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として検索窓 3 に「文末記号」を意味するタグ <sent> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズ⁷¹を目視で除去しながら人称・数ごとに 100 例ずつ (100 例に満たない場合は全て) 抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 66, 67 に示すような結果が得られた。

⁷⁰ この調査では、1) 述語によって総頻度が異なること、2) 分析型の出現数が分からないことから、述語人称標識の出現率が高いのか低いのかの判断は付かない。菱山 (2020b) では、CWT がバージョン 3 の時点で、分析型の出現数 (ただし、ノイズの数を抑えるために前の検索窓の要素との距離を 1-5 に設定したことから、全数は得られず) も対象に調査を行い、1) 感情またはモーダルを表わす語が述語である場合に、述語人称標識の出現率が高いこと、2) =mE 疑問文では述語人称標識の出現率が低いこと、を示した。規模が大きくなったバージョン 4 で同様の調査を行うことは難しかったため、本稿では述語人称標識の出現数を示すにとどめた。

⁷¹ 便宜上、Min bik šat. [1SG とても 嬉しい]「私は (知り合えて) とても嬉しいです」のような慣用表現も、文末記号を含めて全く同じ表記である場合は、出典が異なってもノイズ (重複例) として処理した。

表 66：人称代名詞を持つ非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（形容詞述語 *šat* 「嬉しい」が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	30 (30.0)	70 (70.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	17 (17.0)	83 (83.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	0 (0.0)	13 (100.0)	13 (100.0)
2PL (sez)	1 (7.1)	13 (92.9)	14 (100.0)
計	48 (21.1)	179 (78.9)	227 (100.0)

表 67：人称代名詞を持つ非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（形容詞述語 *tiveš* 「必要だ」が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	17 (17.0)	83 (83.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	39 (39.0)	61 (61.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	28 (28.0)	72 (72.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	36 (36.0)	64 (64.0)	100 (100.0)
計	120 (30.0)	280 (70.0)	400 (100.0)

表 66, 67 と表 61（形容詞述語全般を対象とした調査の結果）における述語人称標識の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、表 66, 67 と表 61 の間に有意差が認められた（表 66 と表 61 : $\chi^2(1) = 15.87, p < .05$ 、表 67 と表 61 : $\chi^2(1) = 59.47, p < .05$ ）。よって、感情形容詞 *šat* 「嬉しい」とモーダル形容詞 *tiveš* 「必要だ」が述語の場合、形容詞全般が述語の場合に比べて述語人称標識の出現頻度が有意に高いと言える。

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。インフォーマント調査では、名詞述語文 (5-54, 5-55) と形容詞述語文 (5-56, 5-57) において、述語人称標識が現れている例の容認度を調べた。調査の結果、述語の種類（名詞か形容詞か、感情形容詞か否か）による容認度の差は見られなかったが、疑問文では述語人称標識が現れている例 (5-55, 5-57)b が「容認不可」と判定された。

名詞述語文（肯定文）

(5-54) 「私は学生です。」

- a. **Min** *student.*
1SG 学生

- b. **Min** *student-mĭn.*
 1SG 学生-1SG

名詞述語文（疑問文）

(5-55) 「君は学生？」

- a. **Sin** *student=mĭ?*
 2SG 学生=Q
- b. ***Sin** *student-siŋ=mĭ?*
 2SG 学生-2SG=Q

形容詞述語文（肯定文）

(5-56) 「私は（とても）嬉しい。」

- a. **Min** **(bik)** *šat.*
 1SG （とても） 嬉しい
- b. **Min** **(bik)** *šat-mĭn.*
 1SG （とても） 嬉しい-1SG

形容詞述語文（疑問文）

(5-57) 「君は（本当に）嬉しい？」

- a. **Sin** **(činnan=da)** *šat=mĭ?*
 2SG （本当に） 嬉しい=Q
- b. ***Sin** **(činnan=da)** *šat-siŋ=mĭ?*
 2SG （本当に） 嬉しい-2SG=Q

以上の調査結果から、非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度は、1) 名詞述語よりも形容詞述語（特に感情やモダリティを表わす形容詞）で高く、2) =mE 疑問文で特に低い、と言える（これらの結果に関する考察は、本節末で後述する）。

B. 動詞述語文

動詞述語文では、述語人称標識の出現頻度が、1) 特に動詞が意図形、（結果状態を表わす）完了形である場合に低いこと、2) 主節に比べて引用節で低いこと、が分かった。

先行研究には、主格人称代名詞が現れる文で、完了形 -GAn、未来 II 形 -(y)AčAK に述語人称標識が現れていない例 (3-35, 3-36) が挙げられているが、調査の結果、現在形 -A/y、過去形 -DE に述語人称標識が現れていない例も見られた。以下にそれぞれの例を挙げる。

現在形

- (5-58) *Krijašen portnoj ul-ï-n sin uqit-a?*
クリヤシェン 裁縫士 息子-POSS-ACC 2SG 教える-PRS
「クリヤシェンの裁縫士の息子をお前が教えているのか？」

過去形

- (5-59) *Soraw-nï berenče min bir-de.*
質問-ACC 一番目 1SG 与える-PST
「質問を最初に私がした。」

コーパス調査は、完了形 -GAn、未来II形 -(y)AčAK、意図形 -mAKčE、現在形 -A/y、過去形 -DE を持つ主節および、完了形 -GAn、現在形 -A/y、過去形 -DE を持つ引用節を対象に調査を行った。調査の結果、述語人称標識の出現頻度は、1) 述語が意図形 -mAKčE、次いで完了形 -GAn (特に結果状態を表わすもの) である場合に比較的低いこと、2) 引用節では主節に比べて低めであること、が分かった。

まず、主節について行った調査の結果について述べる。調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓1に人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を1-5として検索窓2にそれぞれの動詞形式を意味するタグ(完了形 <past>、未来II形 <fut2>、現在形 <pres>、過去形 <ifi> のいずれか)⁷²を、次の検索窓の要素との距離を1-1として検索窓3に文末記号を意味するタグ <sent> を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら人称・数ごとに100例ずつ(100例に満たない場合は全て)抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表68~72に示すような結果が得られた。

⁷² 意図形はタグが2種類(<fut_plan>、<pre_fplan>)あり、それらが正確に使い分けられていない。例えば、文末述語として機能する意図形でも、後に何らかの接辞が付いているもの(例: ... bar-maqčï-siŋ. [行く-VOL-2SG]「君は行くつもりだ」)には <fut_plan> が、接辞が付いていないもの(例: ... bar-maqčï. [行く-VOL]「行くつもりだ」)には <pre_fplan> が付与されている。よって、タグは使用せず、代わりに *макчы* または *мәкче* を入力した。

表 68：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（完了形が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	62 (62.0)	38 (38.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	60 (60.0)	40 (40.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	77 (77.0)	23 (23.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	90 (90.0)	10 (10.0)	100 (100.0)
計	289 (72.3)	111 (27.8)	400 (100.0)

表 69：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（意図形が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	7 (28.0)	18 (72.0)	25 (100.0)
1PL (bez)	8 (80.0)	2 (20.0)	10 (100.0)
2SG (sin)	14 (23.7)	45 (76.3)	59 (100.0)
2PL (sez)	3 (9.7)	28 (90.3)	31 (100.0)
計	32 (25.6)	93 (74.4)	125 (100.0)

表 70：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（未来 II 形が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	99 (99.0)	1 (1.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	99 (99.0)	1 (1.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
計	398 (99.5)	2 (0.5)	400 (100.0)

表 71：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（現在形が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
計	400 (100.0)	0 (0.0)	400 (100.0)

表 72：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（過去形が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（所有型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
計	400 (100.0)	0 (0.0)	400 (100.0)

表 68～70 における述語人称標識の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(4)=312.69, p<.05$)。残差分析を行ったところ、表 69（意図形）と表 68（完了形）で述語人称標識の出現頻度が有意に低いという結果が示された。よって、述語人称標識の出現頻度は、意図形と完了形で低めであると言える。

完了形に関してさらに調査を行った結果、結果状態（結果としての恒常的状态、性質）を表わす場合に述語人称標識の出現頻度が特に低いことが分かった（完了形の機能については 1.4.2 節を参照）。以下、調査した動詞のうち、比較的用例数の多かった 3 つの動詞 *künek-kän* [慣れる-PRF] 「慣れている」、*oxša-yan* [似る-PRF] 「似ている」、*öylän-gän* [結婚する-PRF] 「結婚している」における述語人称標識の出現頻度（それぞれ表 73, 74, 75）を示す。

表 73：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（künek-kän「慣れている」が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	3 (7.1)	39 (92.9)	42 (100.0)
1PL (bez)	16 (16.0)	84 (84.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	0 (0.0)	2 (100.0)	2 (100.0)
2PL (sez)	2 (50.0)	2 (50.0)	4 (100.0)
計	21 (14.2)	127 (85.8)	148 (100.0)

表 74：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（oxša-yan「似ている」が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	35 (38.0)	57 (62.0)	92 (100.0)
1PL (bez)	10 (47.6)	11 (52.4)	21 (100.0)
2SG (sin)	59 (66.3)	30 (33.7)	89 (100.0)
2PL (sez)	41 (71.9)	16 (28.1)	57 (100.0)
計	145 (56.0)	114 (44.0)	259 (100.0)

表 75：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（öylän-gän「結婚している」が述語である主節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	2 (11.8)	15 (88.2)	17 (100.0)
1PL (bez)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
2SG (sin)	1 (6.2)	15 (93.8)	16 (100.0)
2PL (sez)	0 (0.0)	18 (100.0)	18 (100.0)
計	3 (5.8)	49 (94.2)	52 (100.0)

表 73～75 と表 68（完了形全般を対象とした調査の結果）における述語人称標識の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、表 73～75 と表 68 の間に有意差が認められた（表 73 と表 68： $\chi^2(1) = 148.23, p < .05$ 、表 74 と表 68： $\chi^2(1) = 18.50, p < .05$ 、表 75 と表 68： $\chi^2(1) = 88.94, p < .05$ ）。よって、完了形は結果状態を表わす場合に述語人称標識の出現頻度が有意に低いと言える。

次に、引用節について行った調査の結果について述べる。調査の結果、引用節では主節に比べて述語人称標識の出現頻度が低いことが分かった。以下に、述語人称標識が現れていない述語を持つ引用節の例 (5-60) を挙げる。

(5-60) **Min** quš-ti dip äyt-egez!
 1SG 命じる-PST と 言う-IMP.2PL
 「私が命じた、と行ってください！」

調査手順は以下の通りである。

- ① 検索窓 1 に主格人称代名詞を、次の検索窓の要素との距離を 1-5 として検索窓 2 にそれぞれの動詞形式を意味するタグ（完了形 <past>、現在形 <pres>、過去形 <ifi> のいずれか）を、次の検索窓の要素との距離を 1-1 として検索窓 3 に引用標識 дип を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら人称・数ごとに 100 例ずつ（100 例に満たない場合は全て）抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 76～78 に示すような結果が得られた。

表 76：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（完了形が述語である引用節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	3 (8.1)	34 (91.9)	37 (100.0)
1PL (bez)	1 (10.0)	9 (90.0)	10 (100.0)
2SG (sin)	3 (33.3)	6 (66.7)	9 (100.0)
2PL (sez)	11 (78.6)	3 (21.4)	14 (100.0)
計	18 (25.7)	52 (74.3)	70 (100.0)

表 77：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（現在形が述語である引用節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（代名詞型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	78 (78.0)	22 (22.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	69 (82.1)	15 (17.9)	84 (100.0)
2SG (sin)	30 (55.6)	24 (44.4)	54 (100.0)
2PL (sez)	21 (72.4)	8 (27.6)	29 (100.0)
計	198 (74.2)	69 (25.8)	267 (100.0)

表 78：人称代名詞を持つ動詞述語文における述語人称標識の出現頻度（過去形が述語である引用節の場合）

人称代名詞	述語人称標識（所有型）		計
	あり	なし	
1SG (min)	66 (66.0)	34 (34.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	45 (91.8)	4 (8.2)	49 (100.0)
2SG (sin)	13 (56.5)	10 (43.5)	23 (100.0)
2PL (sez)	7 (58.3)	5 (41.7)	12 (100.0)
計	131 (71.2)	53 (28.8)	184 (100.0)

表 74 と表 68（完了形が述語である主節に関する調査結果）、表 75 と表 71（現在形が述語である主節に関する調査結果）、表 76 と表 72（過去形が述語である主節に関する調査結果）における述語人称標識の出現頻度（合計）についてカイ二乗検定を行ったところ、それぞれの間には有意差が認められた（表 74 と表 68： $\chi^2(1) = 56.95, p < .05$ 、表 75 と表 71： $\chi^2(1) = 115.30, p < .05$ 、表 76 と表 72： $\chi^2(1) = 126.72, p < .05$ ）。よって、引用節では主節に比べて述語人称標識の出現頻度が有意に低いと言える。

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。

完了形は、結果状態を表わす場合と間接経験を表わす場合で異なる結果となった。まず、結果状態を表わす場合である。CWT から抽出された分析型の (5-61, 5-62)a の述語に筆者が述語人称標識を付した分析統合型の (5-61, 5-62)b の容認度を調べた結果、分析統合型の (5-61, 5-62)b は「容認不可」であるという。

(5-61) 「私たちはまだ結婚していない。」

- a. **Bez** äle öylän-mä-gän.
 1PL まだ 結婚する-NEG-PRF

- b. ***Bez** äle öylän-mä-gän-bez.
 1PL まだ 結婚する-NEG-PRF-1PL

(5-62) 「私たちは紙を読むことを学んでいない。」

- a. **Bez** qäyöz-dän uqi-rya öyrän-mä-gän.
 1PL 紙-ABL 読む-INF 学ぶ-NEG-PRF
- b. ***Bez** qäyöz-dän uqi-rya öyrän-mä-gän-bez.
 1PL 紙-ABL 読む-INF 学ぶ-NEG-PRF-1PL

インフォーマントによると、(5-61, 5-62)b のように言った場合は感情表出が感じられるが、これらの文脈では非常に不自然に聞こえるため容認不可であるという。感情表出のニュアンスは非動詞述語文における述語人称標識に特徴的であり、結果状態を表わす完了形の動詞がより形容詞的であることを示していると言えよう。次に、間接経験を表わす場合である。CWT から抽出された分析統合型の (5-63)a と、その述語から筆者が述語人称標識を削除した分析型の (5-63)b の容認度を調べた結果、分析型の (5-63)b は「容認不可」であるという。

(5-63) 「私は聞きながら眠りに落ちたようだ。」

- a. **Min** tñlïy tñlïy yoqi-ya kit-kän-men.
 1SG 聞く.CVB 聞く.CVB 眠り-DAT 去る-PRF-1SG
- b. ***Min** tñlïy tñlïy yoqi-ya kit-kän.
 1SG 聞く.CVB 聞く.CVB 眠り-DAT 去る-PRF

意図形は、述語人称標識の有無で容認度の差が見られなかった。インフォーマントによると、分析統合型の (5-64)a と、それをもとに筆者が作成した分析型の (5-64)b はいずれも「容認可能」であり、両者の間でニュアンスの差も感じられないという。

(5-64) 「私は行くつもりだ。」

- a. **Min** bar-maqči-mïn.
 1SG 行く-VOL-1SG
- b. **Min** bar-maqči.
 1SG 行く-VOL

未来 II 形は、述語人称標識がない分析型の構造の方が自然な場合もあることが分かった。インフォーマントによると、CWT から抽出された述語人称標識がない 2 つの分析型の例のうち、(5-65)a は「容認不可」だが、(5-66)a は「容認可能」であるという。これらに筆者が述語人称標識を付した分析統合型の (5-65, 5-66)b については、(5-65)b は「容認可能」だが、

(5-66)b は「違和感がある」という⁷³。

(5-65) 「その人を私は自分に振り向かせてみせる！」

- | | | | | |
|----|-------------|------------|-----------------|--------------------------|
| a. | *Ani | min | üz-em-ä | qarat-açaq! |
| | それ.ACC 1SG | | 自身-1SG.POSS-DAT | 見させる-FUTII |
| b. | Ani | min | üz-em-ä | qarat-açaq- min ! |
| | それ.ACC 1SG | | 自身-1SG.POSS-DAT | 見させる-FUTII-1SG |

(5-66) 「その人とは君が住むことはない、私が住む。」

- | | | | | | |
|----|--------------------------|--------------|--------------------|-------------------|------------------------|
| a. | Aniñ | belän | sin tor-ası | tügel, min | tor-açaq. |
| | それ.GEN と | | 2SG 住む-PTCP.FUTIII | COP.NEG 1SG | 住む-FUTII |
| b. | [?] Aniñ | belän | sin tor-ası | tügel, min | tor-açaq- min . |
| | それ.GEN と | | 2SG 住む-PTCP.FUTIII | COP.NEG 1SG | 住む-FUTII-1SG |

現在形と過去形は、主節述語として用いられる場合、述語人称標識が多くの場合義務的であることが分かった。インフォーマントによると、CWT から抽出された分析統合型の (5-67, 5-68)a から述語人称標識を削除した分析型の (5-67, 5-68)b は「容認不可」になるという。

現在形

(5-67) 「私は今来る。」

- | | | | |
|----|-------------|-------|------------|
| a. | Min | xäzer | kil-ä-m. |
| | 1SG | 今 | 来る-PRS-1SG |
| b. | *Min | xäzer | kil-ä. |
| | 1SG | 今 | 来る-PRS |

過去形

(5-68) 「私は前もって来た。」

- | | | | |
|----|-------------|-------|------------|
| a. | Min | aldan | kil-de-m. |
| | 1SG | 前もって | 来る-PST-1SG |
| b. | *Min | aldan | kil-de. |
| | 1SG | 前もって | 来る-PST-1SG |

ただし、引用節では述語人称標識が現れない構造も許容されるようであり、これはコーパス

⁷³ 分析型の構造の方が自然であるとされた (5-66) は、主語が動詞直前位置に来ており、主語に焦点があると考えられる。現在形と過去形に述語人称標識が現れていない (5-58, 5-59) も、この点で同様である。これらの例の類似性から、述語人称標識の不生起と述語の生起位置（焦点）との関わりが考えられるが、これについては稿を改めて議論したい。

調査の結果と相関している。インフォーマントは述語人称標識を落とすことができる例として、引用節の例 (5-69) を挙げた。

現在形

(5-69) Min xäzer kil-ä, dip, köt-ep utür-a.
1SG 今 来る-PRS と 待つ-CVB 座る:AUX-PRS
「私が今来る、と（その人は）待っている。」(R. Y. 氏作例)

これらのことから、動詞述語文では述語人称標識の出現頻度が、1) 特に動詞が意図形、(結果状態を表わす) 完了形である場合に低い、2) 主節に比べて引用節で低い、と言える(これらの結果に関する考察は、以下で後述する)。

以上の調査結果から、本節の最初で述べたように、述語人称標識の出現傾向は主に、1) **標識の種類**、2) **主要部(述語)の種類**、3) **節の種類**、によって異なると言える。より具体的には、1) 所有型の標識に比べ、代名詞型の標識の出現頻度が低い、2) 述語人称標識の出現頻度は、述語が非動詞述語である場合に低く、動詞述語である場合に高い、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語(特に感情やモダリティを表わす形容詞)で出現頻度が高い、動詞述語文では、特に動詞が意図形 -mAKčE、(結果状態を表わす) 完了形 -GAn の動詞である場合に低い、3) 非動詞述語文では =mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低い、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低い、と言える。以下、それぞれの要因について考察する。

1) 標識の種類

所有型の標識は過去形と条件形に、代名詞型の標識はその他の述語に付加しうる。過去形(表 71) とその他(表 60, 61, 68~71) に関する調査結果から、標識の種類による出現頻度は「所有型>代名詞型」であると言える。これは、所有接辞を起源とする可能性のある所有型に比べ、人称代名詞を起源とするより接語的な性格を持つ代名詞型の方が独立性が高いためであると考えられる⁷⁴。

2) 主要部(述語) 要素の種類

調査の結果、述語人称標識の出現頻度は、述語が非動詞述語である場合に低く、動詞述語である場合に高いこと、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語で高いこと、が分かった。このことから、主要部要素の種類による述語人称標識の出現頻度は大まかに「動詞>

⁷⁴ Siewierska (2004: 162) は、一致標識が代名詞的なものから曖昧なものを経て統語的なものへと文法化する場合、人称一致の義務性は増加するとしている(2.2 節を参照)。この記述から、独立性の高い標識は独立性の低い標識に比べて義務性が低い傾向があると考えられる。

形容詞>名詞」であると言え、この傾向は意味論的述語階層（図6）が示す通言語的な傾向（event>property>class, locational）に沿っている（2.2節で述べたように、典型的には動詞がeventを、形容詞がpropertyを、名詞がclassを表わす）⁷⁵。

非動詞述語文では、特に感情やモダリティを表わす形容詞が述語である場合に述語人称標識の出現頻度が高いことが分かった。これは、非動詞述語文ではその使用はまれで、主に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して述べる必要がある場合に用いられる、という Xisamova (2006: 72-73) の記述通りの結果である。

動詞述語文では、特に意図形 -mAKčE と完了形 -GAn（特に結果状態を表わす場合）で述語人称標識の出現頻度が低いことが分かった⁷⁶。これは、これらの形式の名詞類的な性格が、非定形動詞形成接辞に由来する定形動詞接辞⁷⁷の中でも特に強いことを示していると言える。それぞれ異なる観点からではあるが、人称標示以外にこれら形式の名詞類的性格を示すものは次の通りである。Berta (1998: 294) によると、意図形 -mAKčE は複合接辞 (complex suffix) である（おそらく動名詞 -mAK と派生接辞 -čE からなる）。この接辞の名詞類的性格の強さは、否定接辞 -mA（表18）と共起せず、否定コピュラ tügel と共起することにも表れている（1.4.2節を参照）。完了形 -GAn は結果状態（結果としての恒常的状态、性質）を表わす場合、形容詞に近い。なお、Hayasi (1993) によれば、現代ウイグル語の動詞述語でも、タタール語の意図形 -mAKčE と完了形 -GAn に相当する形式でのみ述語人称標識が義務的ではない（6.2.2.6節を参照）。

3) 節の種類

調査の結果、非動詞述語文では =mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低く、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いことが分かった。

=mE 疑問文で述語人称標識の出現頻度が低めである理由としては、述語人称標識が主に強調して述べる必要がある場合に用いられる、つまり疑問モダリティとは相容れない断言モダリティを表わすことが多いことが挙げられる。

引用節において述語人称標識の出現頻度が低いのは、主節主語の視点が関係しているためであろう。例えば、(5-69) では、主節主語にとって引用節主語（待っている人）は三人称であり、待っている人は頭の中で「彼／彼女はもうすぐ来る」と考えているはずである。(5-60) は二人称複数または二人称単数敬称に対する命令文であるが、命令された聞き手は第三

⁷⁵ 要因の一つとして、動詞述語は時制などの接辞があるため、人称標識との組み合わせがやや固定的であるのに対し、名詞述語は無数にあり、人称標識との組み合わせが固定的ではないことも挙げられる（風間 p.c.）。

⁷⁶ ただし、インフォーマント調査の結果（(5-61)～(5-64)を参照）から分かるように、意図形は述語人称標識の有無が容認度に影響しないのに対し、完了形は述語人称標識の有無が容認度に影響する（間接経験を表わす場合は述語人称標識がないと容認度が低いのに対し、結果状態を表わす場合は述語人称標識があると容認度が低い）という違いがある。

⁷⁷ 1.4.2節で述べたように、林 (1989a: 624) の記述に基づけば、時制・相を表わす接辞のうち、過去 -DE 以外の形式は、副動詞または形動詞に由来する。

者に、「彼／彼女が命じた」と言うはずである。よって、これらの引用節述語の主語は三人称であるという意識が働くため、人称標識が現れていないと考えることができる。以下に、(5-69, 5-60) を再掲する。

(5-69) Min xäzer kil-ä, dip, köt-ep utür-a.
 1SG 今 来る-PRS と 待つ-CVB 座る:AUX-PRS
 「私が今来る、と（その人は）待っている。」

(5-60) Min quš-ti dip äyt-egez!
 1SG 命じる-PST と 言う-IMP.2PL
 「私が命じた、と言ってください！」

ただし、類似の文でも人称標識が現れる場合がある (5-70)。

(5-70) Anda=da sin kil-de-ŋ dip köt-ep utür-miy-lar.
 それ.LOC=も 2SG 来る-PST-2SG と 待つ-CVB 座る-NEG.PRS-PL
 「そこでも彼らは、君が来たと、待ってはいない。」

これら3つの要因のうち、1)と2)はある程度重なっている。なぜなら、所有型と代名詞型のどちらの標識が現れうるかは主要部(述語)によって決まっているからである。1)の要因はなく、2)の要因だけがあるともできるが、全体として見た場合、代名詞型は出現頻度が非常に低い場合があるのに対し、所有型はそうではないことから、1)の要因があることは否定できない。

なお、述語人称標識は所有人称接辞とは異なり、人称・数による出現頻度に明確な傾向は見られなかった。人称階層(図9)によれば、二人称の標識に比べ一人称の標識の出現頻度が高いことが予想される。しかし、調査結果(表60~62, 66~78)に対してカイ二乗検定および残差分析を行った結果、そのような一貫した傾向は見られないことが示された。

所有人称接辞と述語人称標識を人称標識として総合して考えると、人称標識の出現傾向は概ね述語階層(図5)が示す通言語的な傾向(predicates > possessed nouns > adpositions)に沿っているものの、非動詞述語における述語人称標識の出現頻度の低さが際立っていると見える。これは、非動詞述語で人称を標示しない周辺言語との言語接触によるものである可能性がある(言語接触の影響の可能性については、第9章で後述する)。

第二部 チュルク諸語におけるタタール語の位置づけ

本論第二部では、タタール語を除く主なチュルク諸語⁷⁸における人称標識の出現傾向を調査し、チュルク諸語におけるタタール語の位置づけを試みる。本章で主に扱う言語は、文章語を持ち、それぞれの語群（以下に再掲する表3を参照）の主要な（話者数の多い）言語であるトルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）、カザフ語（北西語群）、サハ語（北東語群）、チュヴァシ語（オグル語群）である。加えて、人称標示に関して特徴的な言語として、現代ウイグル語、サラール語、サリグ・ヨグル語（いずれも南東語群）も取り上げる。以下、Johanson (1998b: 82) によるチュルク諸語の分類（表3）と、Johanson and Csató (1998: xvi-xvii) によるチュルク諸語の地理的分布（図1）を再掲する（ただし、表3では本稿で主に扱う言語を太字で、図2では本稿で主に扱う言語を赤い下線で示した）。

表3（再掲）：チュルク諸語の分類 (Johanson 1998b)

分類			現代語
Common Turkic	南西（オグズ）語群	西	トルコ語 ガガウズ語 アゼルバイジャン語
		東	トルクメン語
	北西（キプチャク）語群	西	クムク語 カラチャイ語 バルカル語 クリミアタタール語 カライム語
		北	タタール語 バシキール語
		南	カザフ語 カラカルパク語 ノガイ語 キルギス語
	南東（ウイグル）語群	西	ウズベク語
		東	現代ウイグル語（サラール語）（サリグ・ヨグル語）
	北東（シベリア）語群	北	サハ語
		南	トゥヴァ語 トファ語 ハカス語 ショル語 アルタイ語
	アルグ語群		（ハラジ語）
オグル語群		チュヴァシ語	

(Johanson 1998b: 82, 87 をもとに筆者作成)

⁷⁸ 本稿では、特にことわりのない限り、ラテン文字正書法を用いる言語（主にトルコ語、ウズベク語）は正書法に従って表記し、キリル文字正書法を用いる言語（主にカザフ語、チュヴァシ語）はラテン文字転写して表記する（ラテン文字転写は筆者による）。ロシア語の音韻体系に従って発音される（ロシア語と同じつづりの）ロシア語からの借用語は、タタール語と同様に、Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式を用いて表記する（異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す）。

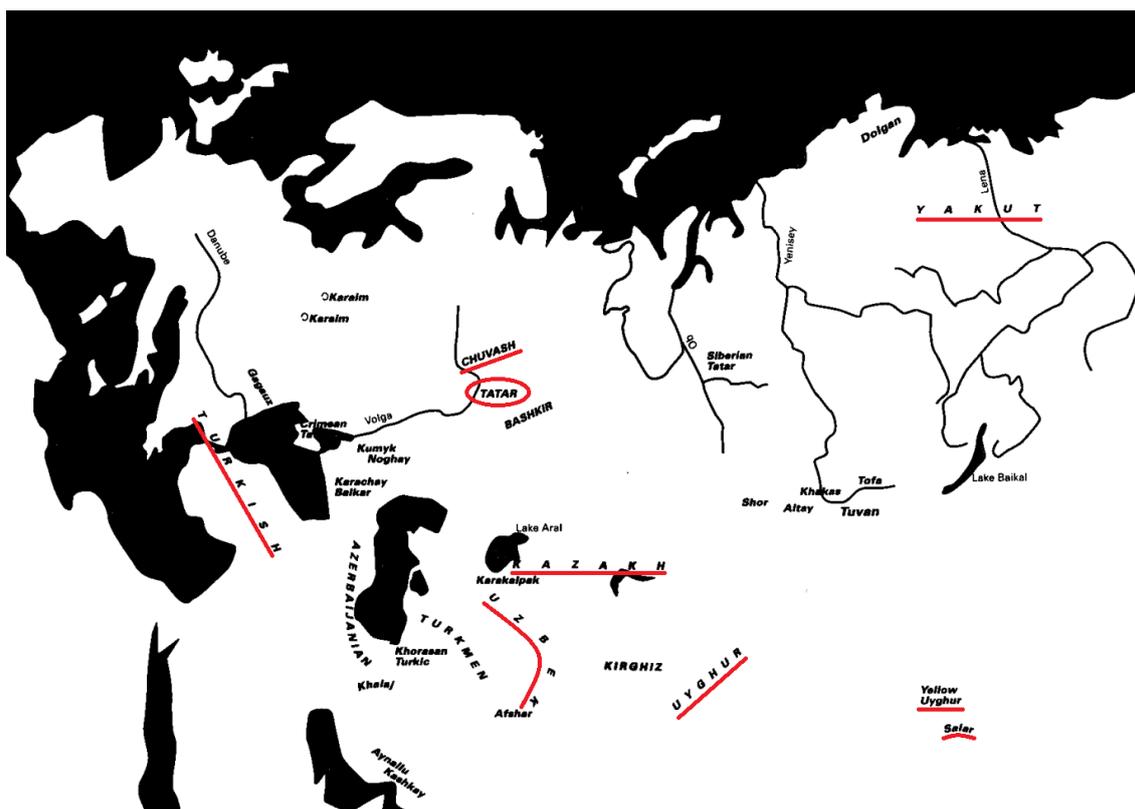


図1 (再掲) : チュルク諸語の地理的分布 (Johanson and Csató 1998: xvi-xvii)

第二部では、タタール語の人称標識の出現頻度が Common Turkic に属する主な言語の中では低いことを明らかにし、これが言語接触の影響である可能性を提示する。

本論第二部の構成は次の通りである。まず、第6章で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に、第7章で調査対象と調査方法について述べる。最後に、第8章で調査結果を示し、考察を行う。

6. チュルク諸語の人称標識に関する先行研究

本章では、チュルク諸語の所有人称接辞と述語人称標識（それぞれの先行研究で呼び方が異なるが、便宜上、述語人称標識と総称する）およびこれらの標識が現れうる領域についての先行研究⁷⁹の記述をまとめ、問題提起を行う。以下、6.1 節でチュルク諸語全般に関する先行研究、6.2 節で個別言語に関する先行研究の記述をまとめ、6.3 節で問題提起を行う。

6.1. チュルク諸語全般に関する先行研究

本節では以下、6.1.1 節で所有接辞、6.1.2 節で述語人称標識に関する記述をまとめる。

⁷⁹ 先行研究で挙げられているラテン文字表記の例については、先行研究にある通りに表記する。先行研究の挙げる例文にグロスを付す際には、先行研究の記述を反映し、三人称の標識とされているものに三人称のグロスを付すことがある（チュルク諸語における三人称標識に関する本稿の立場については、4.1.2 節を参照）。

6.1.1. 所有接辞に関する記述

チュルク諸語全般の構造の概説である Johanson (1998a: 39) は所有接辞について、「所有接辞は典型的に所有を表わし、英語の所有代名詞の機能と対応する。それらは所有者の人称と数を示す $-(I)m$, $-(I)\eta$, $-(s)I(n)$, $-(I)mIz$, $-(I)\eta Iz$, $-LArl(n)$ のような形を示すことが多い。一人称と二人称の複数形は、複数要素 $-Iz$ を含む」と述べている。

チュルク諸語における名詞の所有カテゴリーに関する先行研究である Dmitriev (1956: 34) は、「基本的な方法、つまり所有接辞によって表される統合的な方法以外に、所有カテゴリーを表すさらに 2 つの方法がある。基本的に 3 つのタイプは全て同一の意味を持つ」と述べ、2 つ目のタイプとして、属格人称代名詞と所有接辞によって統語的にも形態的にも表されるタイプ、3 つ目のタイプとして、ロシア語や他のヨーロッパの言語と同様に所有関係が属格人称代名詞のみによって統語的に表されるタイプがあるとし、以下のトルクメン語の例 (6-1) を挙げている。

(6-1) 「私の馬」(トルクメン語)

- a. **meniŋ at-ïm**
1SG.GEN 馬-1SG.POSS
- b. **meniŋ at**
1SG.GEN 馬

(Dmitriev 1956: 34)

Dmitriev (1956: 34) は、「これら 3 つのタイプのうちどれがどのような場合に最も用いられるかという問題は、文法の領域だけでなく、文体の領域にも関わっている」として、それぞれのタイプの特徴について、「3 つ目のタイプ (例: *meniŋ at*) は、8 世紀のオルホン碑文にも見られるため、これをロシア語の影響で生まれた構造であるとするのは正しくない。*meniŋ at-ïm* のような表現では、二重の方法で表されている『私の』という概念が強調されているが、*at-ïm* という構造では明らかに、重心が *at* という語にある」と述べている。さらに、「*meniŋ at* のタイプは文語よりもむしろ会話で用いられる。これは一定の感情性にも関係しているが、個人的なものではなく、いわば集団的な性格のものである」と述べ、以下のバシキール語の例 (6-2) を挙げている。

- (6-2) **Beð-ðeŋ yer-ðär** yer tügel.
1PL-GEN 場所-PL 場所 COP.NEG
「私たちの場所は、場所ではない。」(バシキール語)

(Dmitriev 1956: 34)

Dmitriev (1956: 34) は 3 つ目のタイプについてさらに、「このタイプが一・二人称単複でのみ、一部の言語では一・二人称の複数でのみ用いられることは注意に値する」としている。個人的な感情については 4 つ目の方法、つまり 2 つ目のタイプを並べ替えた構造が表すとし、以下のバシキール語の例 (6-3) を挙げている (原文におけるロシア語訳も併せて示す)。

- (6-3) a. **Meniŋ at-ïm** yuŋal-dï.
 1SG.GEN 馬-1SG.POSS いなくなる-PST
 “Moj kon' propal.”
- b. **At-ïm minen** yuŋal-dï.
 馬-1SG.POSS 1SG.GEN いなくなる-PST
 “Kon'-to moj propal.”
 「私の馬がいなくなった。」(バシキール語)

(Dmitriev 1956: 34)

Johanson (1998a: 47) は非定形動詞における人称標識について、「動作名詞と形動詞は一般的に所有型の人称接辞を取る」、「ほとんどの単純な副動詞は人称標識を持たないが、サハ語ではそれらは一般的に人称と数で活用する」、「より複雑な副動詞語尾は人称標識を含むことが多い」とし、トルコ語の形動詞とサハ語の副動詞の例 (6-4)などを挙げている。

- (6-4) a. **gel-diğ-im**
 来る-PTCP.PST-1SG.POSS
 「私が {来る/来た} こと」(トルコ語)
- b. **bar-am-mïn**
 行く-CVB-1SG
 「私が行ってから」(サハ語)

(Johanson 1998a: 47)

続けて Johanson (1998a: 47) は、「単純な条件形はほとんどアクセントのある所有型の人称接辞を取る」とし、トルコ語の条件副動詞の例 (6-5) を挙げている。

- (6-5) **gel-se-m**
 来る-COND-1SG
 「私が来るなら」(トルコ語)

(Johanson 1998a: 47)

Johanson (1998a: 60) は補文節について、「それらは主に所有人称標識をとり、上位節における統語的機能は格標識や後置詞で標示される。主語との形式的な関係は主に属格構造に対応する。主格も使われることが多い」とし、属格構造の例としてトルコ語の例 (6-6)a、主格の例としてチュヴァシ語の例 (6-6)b を挙げている。

- (6-6) a. **Orhan'-ın bil-diğ-i**
 PN-GEN 知る-PTCP.PST-POSS
 「オルハンの知っていること」(トルコ語)
- b. **ača-sem kay-n-i**
 子供-PL 行く-PTCP.PST-NMLZ
 「子供たちが行ったこと」(チュヴァシ語)

(Johanson 1998a: 60)

主語の格について Johanson (1998a: 60) は、「主語がどちらの格もとれる場合、属格標示は『特定性』を表わす傾向がある」とし、以下のトルコ語の例 (6-7) を挙げている。

- (6-7) **para/para-nın kaybol-duğ-u**
 金/金-GEN なくなる-PTCP.PST-POSS
 「{金/その金} のなくなったこと」(トルコ語)

(Johanson 1998a: 60)

関係節について Johanson (1998a: 61) は、「動作が帰する参与者実体を指示し、形動詞に基づく。それらは名詞句の主要部としても用いられうる」、「それらは主要部を限定することもできる」と述べ、名詞句の主要部として用いられている例として現代ウイグル語の例 (6-8)a、主要部を限定している例としてアゼルバイジャン語の例 (6-8)bなどを挙げている。

- (6-8) a. **éyt-qan-lir-iñiz**
 言う-PTCP.PST-PL-2PL.POSS
 「あなた(たち)の言った(こと)」(現代ウイグル語)
- b. **[oχu-duy-um] kitab**
 読む-PTCP.PST-1SG.POSS 本
 「私が読んだ本」(アゼルバイジャン語)

(Johanson 1998a: 61)

Johanson (1998a: 62) は、主要部が第一行為項以外の実体、つまり他の行為項や、時間・場所・方向・源・手段などを表わす実体とも同一指示的でありえると述べている。Johanson

(1998a: 62) によると、そのような関係節で、修飾する節と主要部名詞の正確な関係は語用論的な手段でのみ確立され、これはいかなる特定の第一行為項の指示対象をも指示しない「非人称」表現を許す。Johanson (1998a: 62) は、非人称表現として以下のウズベク語の例 (6-9) などを挙げている。

- (6-9) [bår-yân] yèr
 行く-PTCP.PST 場所
 「(誰かが) 行った場所」(ウズベク語)

(Johanson 1998a: 62)

Johanson (1998a: 62) は、「第一行為項は主語によって、例えば主語代名詞によって表されうる」と述べ、以下のタタール語とチュヴァシ語の例 (6-10) などを挙げている。

(6-10) 「君が見た人」(a. タタール語、b. チュヴァシ語)

- a. [sin kör-gen⁸⁰] kěšě
 2SG 見る-PTCP.PST 人
 b. [esě kur-nă] etem
 2SG 見る-PTCP.PST 人

(Johanson 1998a: 62)

Johanson (1998a: 62) は、「第一行為項は所有人称標識によっても表されうる。この標識は、構造の主要部に付加されうる」、「特定の存在を指す対応する主語は通常、属格に立つ」と述べ、以下のウズベク語の例 (6-11) などを挙げている。

(6-11) 「私が書いた本」(ウズベク語)

- a. [yâz-yân] kitâb-im
 書く-PTCP.PST 本-1SG.POSS
 b. [men(-iŋ) yâz-yân] kitâb-im
 1SG-GEN 書く-PTCP.PST 本-1SG.POSS

(Johanson 1998a: 62)

Johanson (1998a: 62) は、「人称標識は形動詞にも付加されうる。トルコ語と部分的にアゼルバイジャン語はこれらの場合、特別なタイプの従属化接辞 -DIK, -(y)AcAK などを用いる」、「人称標識の存在は属格主語を要求する」と述べ、以下のトルコ語の例 (6-12) などを挙げている。

⁸⁰ 動詞語幹の母音が誤っている (正しくは kür-)。

- (6-12) a. [otur-duğ-um] köy
 住む-PTCP.PST-1SG.POSS 村
 「私が住む (住んだ) 村」 (トルコ語)
- b. [Orhan'-ın gör-düğ-ü] adam
 PN-GEN 見る-PTCP.PST-POSS 男
 「オルハンの見ている (見た) 男」 (トルコ語)

(Johanson 1998a: 63)

Johanson (1998a: 63) によると、トルコ語の gör-düğ-ün at [見る-PTCP.PST-2SG.POSS 馬] 「君の見た馬」、ye-diğ-im et [食べる-PTCP.PST-1SG.POSS 肉] 「私の食べた肉」のような関係構造は、キルギス語タイプの sen kör-gön at [2SG 見る-PTCP.PST 馬] 「君が見た馬」、men ğe-gen et [1SG 食べる-PTCP.PST 肉] 「私が食べた肉」に対応するが、特に第一行為項の指示対象が非話題かつ不特定であり、主要部が場所を表わす場合に、トルコ語も後者のタイプを用いるという (6-13)。

- (6-13) [su ak-an] yer
 水 流れる-PTCP.PRS 場所
 「水が流れる場所」 (トルコ語)

(Johanson 1998a: 63)

チュルク諸語の分類に関する先行研究である Schönig (1997) は、チュルク諸語の関係節 (主要部名詞が関係節の主語と同一でないもの) における標示法 (marking strategies) について記述している。Schönig (1997: 266) によると、中央アジア西部の言語 (ウズベク語、カザフ語、トルクメン語) などは、主要部名詞につく所有接辞が関係節の主語を表す構造を規則的に用いる一方で、「極西」の言語 (チュヴァシ語、ヴォルガ・ウラル・コーカサスのキプチャク系言語⁸¹) と、「極東」の言語 (現代ウイグル語やイェニセイ川流域の言語など) はこのような構造を規則的に用いず、主要部名詞にも形動詞にも所有接辞が付かないタイプの構造を用いるという。

6.1.2. 述語人称標識に関する記述

Johanson (1998a: 41) は名詞類述語における人称標識 (personal markers) について、「一人称と二人称の標識 (第一行為項 (first actant) の人称と数を示す主語代表物 (subject representatives)) は、人称代名詞から発展したアクセントの置かれないコピュラ要素である」とし、トルコ語、バシキール語、キルギス語の名詞述語文の例 (6-14) を挙げている。

⁸¹ タタール語はヴォルガ・ウラル・コーカサスのキプチャク系言語 (Volga-Ural-Caucasus Kipchak: VUC Kipchak) に含まれる (Schönig 1997: 276)。

- (6-14) a. **Ev-de-yim.**
 家-LOC-1SG
 「私は家にいる。」(トルコ語)
- b. **Min yađıwsı-mın.**
 1SG 作家-1SG
 「私は作家だ。」(バシキール語)
- c. **Men qıryız-mın.**
 1SG キルギス人-1SG
 「私はキルギス人だ。」(キルギス語)

(Johanson 1998a: 41)

続けて三人称について Johanson (1998a: 41) は、「コンピュータとしての人称標識はほとんどない」、「一部の言語では三人称において、*turur*『立つ』に由来する *-Dir* タイプのアクセントの置かれない接辞が用いられる」と述べ、人称標識が現れない例としてカザフ語とハカス語の例 (6-15) を挙げている。

- (6-15) a. **Dos-ım zaqsı adam.**
 友達-1SG.POSS 良い 男
 「私の友達はいいい男だ。」(カザフ語)
- b. **Ol toyısçı.**
 それ 労働者
 「その人は労働者だ。」(ハカス語)

(Johanson 1998a: 41)

Johanson (1998a: 45) は定形動詞における人称標識 (*personal markers*) について、「最も周辺の屈折要素は人称標識(第一行為項の人称と数を示す主語代表物)である。一・二人称の標識の支配的なタイプは、名詞類の後に用いられるもの、つまり代名詞起源のアクセントの置かれない標識である」とし、トルコ語とキルギス語の動詞述語文の例 (6-16) を挙げている。

- (6-16) a. **Gel-iyor-sun.**
 来る-PRS-2SG
 「君は来ている。」(トルコ語)
- b. **Kel-e-biz.**
 来る-PRS-1PL
 「私たちは来る。」(キルギス語)

(Johanson 1998a: 45)

続けて Johanson (1998a: 45) は三人称について、「標示されないか、時々 turur 『立つ』 に由来する -Dir タイプのアクセントの置かれない接辞によって標示される。特定の thematic stems⁸²、特に単純過去は、アクセントの置かれる所有型の接辞を取る」と述べ、ウズベク語の単純過去形の例 (6-17) を挙げている。

(6-17) Kël-di-m.

来る-PST-1SG

「私は来た。」(ウズベク語)

(Johanson 1998a: 45)

6.2. 個別言語に関する先行研究

本節では以下、6.2.1 節で所有接辞、6.2.2 節で述語人称標識に関する記述をまとめる。

6.2.1. 所有接辞に関する記述

本節では以下、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語、チュヴァシ語、その他の言語(サラール語、サリグ・ヨグル語)に関する先行研究の記述をまとめる。

6.2.1.1. トルコ語

Göksel and Kerslake (2005: 69) によると、トルコ語の所有接辞は以下の表 79 の通りである⁸³。

表 79 : トルコ語の所有接辞 (Göksel and Kerslake 2005)

	SG	PL
1	-(I)m	-(I)mIz
2	-(I)n (FAM) -(I)nIz (FOR)	-(I)nIz
3	-(s)I(n)	-lArI(n)

(Göksel and Kerslake 2005: 69 をもとに筆者作成)

以下、名詞句、関係節、名詞節に分けて先行研究の記述をまとめる。

⁸² アスペクト的、モーダルの、時間的な概念を表わす接辞である thematic suffixes (Johanson 1998b: 114) をとった形式を指すと考えられる。

⁸³ タタール語と同様に、多くのチュルク諸語の文法形態素は、母音調和や子音交替に従って、一部の音が交替する。本稿では以下、本文中や表、注において、タタール語以外のチュルク諸語の形態素も、交替する部分を大文字で表した代表形を用いて表記することがある。

A. 名詞句

Göksel and Kerslake (2005: 274) は、所有名詞句における属格標示された代名詞に関して、対応する所有標識がある場合は通常省略され、(6-18) のように、それが節の主語でもある場合は現れないとしている。

- (6-18) Anahtar-lar-ım-ı kaybet-ti-m.
カギ-PL-1SG.POSS-ACC 失う-PST-1SG
「私はカギをなくした。」

(Göksel and Kerslake 2005: 274)

属格標示された代名詞が用いられる条件として Göksel and Kerslake (2005: 277, 278) は、以下の3つを挙げている。

a. 被所有物が他の何かと比較されている場合

- (6-19) Burası bizim ev-imiz-den daha sıcak.
ここ 1PL.GEN 家-1PL.POSS-ABL より 暖かい
「ここは私たちの家より暖かい。」

(Göksel and Kerslake 2005: 277)

b. 所有者に焦点が当たっている場合

- (6-20) Ahmet bugün çok sevinçli.
PN 今日 とても 嬉しい
Öğretmen en çok o-nun yazı-sı-n-ı beğen-miş.
教師 最も とても それ-GEN 作文-POSS-n-ACC 気に入る-PRF
「アフメットは今日とても嬉しい。先生は彼の作文を一番気に入ったそうだ。」

(Göksel and Kerslake 2005: 277)

c. 会話の最初の文、もしくは話者が新しい話題を導入する文において

- (6-21) Ayşe, benim anahtar-ım nerede?
PN 1SG.GEN 鍵-1SG.POSS どこに
「アイシェ、私のカギはどこ？」

(Göksel and Kerslake 2005: 278)

Göksel and Kerslake (2005: 184) は、インフォーマルな文体では、特に属格標示された従属部が一・二人称代名詞である場合、しばしば属格所有構造の主要部が所有接辞なしになるが、このような構造 (6-22, 6-23) は、属格標示された代名詞の使用条件を満たす文脈 (a~c) での

み起こると述べている。

- (6-22) Burası **bizim** ev-den daha sıcak.
ここ 1PL.GEN 家-ABL より 暖かい
「ここは私たちの家より暖かい。」

(Göksel and Kerslake 2005: 184)

- (6-23) Nerede **sen-in** çocuk-lar?
どこ 2SG-GEN 子供-PL
「君の子供たちはどこ？」

(Göksel and Kerslake 2005: 184)

なお、所有存在文における主要部の所有標示の省略は許容されず、よって以下の例 (6-24) の araba 「車」に付いている所有接辞は義務的であるという。

- (6-24) **Siz-in** araba-nız var mı?
2PL-GEN 車-2PL.POSS ある=Q
「あなた（たち）は車を持っていますか？ (lit. あなたの車がありますか?)」

(Göksel and Kerslake 2005: 184)

林 (1989b: 1389) は、前に属格名詞句がある場合、原則として所有人称接辞は省略できないとしつつ、「一人称複数の場合、共同所有を強調するため、所有人称接辞を省くことがある」と述べ、以下の例 (6-25) を挙げている。

- (6-25) a. **bizim** ev
1PL.GEN 家
「わが家（われわれが共同でもつ1軒の家）」
b. **bizim** ev-imiz
1PL.GEN 家-1PL.POSS
「われわれの家（われわれがそれぞれもっている家、という意味にもとれる）」

(林 1989b: 1389)

林 (2013: 60) は、「まれに被修飾語に所有人称接尾辞が付かない場合がある。所有者が1人称の場合が多いが、他の人称でも見られる。『君の車』や『彼（女）の車』と対比される『私の車』ではなく、たったひとつの対象として『私の車』と言う場合に、所有人称接尾辞が消えるようだ」と述べ、以下の例 (6-26) を挙げている。

- (6-26) a. **bizim** araba
 1PL.GEN 車
 「私たちの車」
- b. **benim** oğlan
 1SG.GEN 息子
 「私の息子」
- c. **Zeynep'in** Mustafa
 PN-GEN PN
 「ゼイネプのムスタファ⁸⁴」

(林 2013: 60)

Csató (2019) は、属格の所有者と所有接辞なしの被所有物に基づく「非規範的な所有構造⁸⁵」では、参照枠が対話者にとって既知の世界に限られるため、共感や親愛のニュアンス、もしくは否定的な含蓄を伴った親和性 (familiality) の概念が表されると主張している。Csató (2019: 85-86) は、非規範的な所有構造として以下の例 (6-27) などを挙げている。

- (6-27) **bizim** köy
 1PL.GEN 村
 「私たちの村」

(Csató 2019: 85-86)

対して「規範的な所有構造」では、主要部名詞が所有者の数・人称と一致した所有接辞を持っているとし、以下の (6-28) などを挙げている。所有者が代名詞である場合、その使用は統語的には任意だが、特定の文脈では意味論的・語用論的に動機づけられうるとしている。

- (6-28) (**bizim**) köy-ümüz
 (1PL.GEN) 村-1PL.POSS
 「私たちの村」

(Csató 2019: 86)

Csató (2019: 91) は、非規範的な所有構造が譲渡不可能所有の場合のみ可能だとする Schroeder (1999) の主張に対し、以下の反例 (6-29) を挙げている。

⁸⁴ ムスタファがゼイネプの夫あるいは息子の場合 (林 2013: 60)。

⁸⁵ 口語・インフォーマルな使用域や非標準変種で用いられる (Csató 2019: 87)。

(6-29) **Benim** canta kayıp.
 1SG.GEN かばん なくなった
 「私のかばんがなくなった。」

(Csató 2019: 91)

さらに Csató (2019: 92-95) は、非規範的な所有構造は指示対象が定の場合のみ可能で、新しいトピックの導入では用いられないとする Öztürk, Taylan and Zimmer (2015) の主張に対し、以下の反例 (6-30) を挙げている。

(6-30) **Bizim** kız var ya...
 1PL.GEN 女の子 いる でしょう
 「私たちの (知っているあの) 女の子がいるでしょう…」

(Csató 2019: 95)

B. 関係節

Göksel and Kerslake (2005: 438) によると、最も典型的な関係節のタイプは非定形であり、形動詞接辞 -(y)An, -DIK, -(y)AcAK のうちいずれかを含む。Göksel and Kerslake (2005: 443) は、「-DIK と -(y)AcAK による節は属格所有構造を持つ、つまり形動詞は主語と一致する所有接辞を持ち、主語が名詞句として別個に表される場合は属格となる」とし、以下の例 (6-31) を挙げている。

(6-31) [**benim kork-tuğ-um**] bazı hayvan-lar
 1SG.GEN 恐れる-PTCP.PST-1SG.POSS いくつかの 動物-PL
 「私が恐れるいくつかの動物」

(Göksel and Kerslake 2005: 443)

C. 名詞節

Göksel and Kerslake (2005: 405) は、トルコ語の名詞節が構造的に定形と非定形の2つのタイプに分けられるとしている。Göksel and Kerslake (2005: 405) によると、定形の名詞節は de- 「言う」、iste- 「望む」などの動詞の主語または目的語として生起し、非定形の名詞節は動詞要素が従属化接辞である -mAK, -mA, -DIK, -(y)AcAK, -(y)Iş のいずれかで標示されるものである。以下、非定形の名詞節とされているものについて述べる。

Göksel and Kerslake (2005: 405) によると、-DIK または -(y)AcAK で標示されるすべての名詞節および -mA または -(y)Iş で標示されるほとんどの名詞節で、主語は動名詞に付される所有接辞によって示される。Göksel and Kerslake (2005: 405) は、主語は属格標示された

名詞句によっても示され、その場合、名詞節は完全な属格所有構造をとるとし、以下の例 (6-32, 6-33) を挙げている。

- (6-32) [(**Sen-in**) piyano çal-dığ-ın]-1 bil-miyor=du-m.
 2SG-GEN ピアノ 弾く-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC 知る-NEG.PRS=COP.PST-1SG
 「君がピアノを弾いたのを私は知らなかった。」

(Göksel and Kerslake 2005: 405)

- (6-33) [(**Sen-in**) piyano çal-ma-n]-1 bekle-di-ler.
 2SG-GEN ピアノ 弾く-VN-2SG.POSS-ACC 待つ-PST-PL
 「君がピアノを弾くのを彼らは期待した。」

(Göksel and Kerslake 2005: 405)

6.2.1.2. ウズベク語

Kononov (1960: 86) によると、ウズベク語の所有接辞は以下の表 80 の通りである。

表 80 : ウズベク語の所有接辞 (Kononov 1960)

	SG	PL
1	-(i)m	-(i)miz
2	-(i)ng	-(i)ngiz
3	-(s)i	

(Kononov 1960: 86 をもとに筆者作成)

以下、名詞句、関係節、名詞節に分けて先行研究の記述をまとめる。

A. 名詞句

Kononov (1960: 86) は、ウズベク語において所有関係が、1) 形態的方法 (例: ota-**m** [父-1SG.POSS] 「私の父」)、2) 形態統語的方法 (例: **mening** ota-**m** [1SG.GEN 父-1SG.POSS] 「私の父」)、3) 統語的方法、の3つの方法で表されるとしている。統語的方法について Kononov (1960: 88) は、「この方法は主に口語と詩で見られ、原則、一人称複数で用いられる」、「この意味で、二人称複数の代名詞もより低い頻度で見られる」と述べ、一人称複数の例 (6-34) と二人称複数の例 (6-35) を挙げている。

- (6-34) a. **biz-ning** uy b. **biz-ning** kitob c. **biz-ning** Hamid
 1PL-GEN 家 1PL-GEN 本 1PL-GEN PN
 「私たちの家」 「私たちの本」 「私たちのハミド」

(Kononov 1960: 88)

- (6-35) “**Siz-ning** *zveno*-dan xotir-im jam, holajon”, de-di
 2PL-GEN 班-ABL 記憶-1SG.POSS 完全な おばさん 言う-PST
 Rustam.
 PN

『あなたの班について私は安心してあります、おばさん』とルスタムは言った。」

(Kononov 1960: 88)

B. 関係節

ウズベク語の形動詞の主語標示について Kononov (1960: 364, 365) は、(6-36) の例を挙げている。Kononov (1960: 365) によると、現代標準ウズベク語では、形動詞が -gan, -yotgan, -digan の場合、(6-36)c のような構造が優勢であるという。

- (6-36) a. [(mening) yoz-gan] xat-im
 1SG.GEN 書く-PTCP.PST 手紙-1SG.POSS
 b. [men yoz-gan] xat-im
 1SG 書く-PTCP.PST 手紙-1SG.POSS
 c. [men yoz-gan] xat
 1SG 書く-PTCP.PST 手紙
 「私が書いた手紙」

(Kononov 1960: 364, 365)

C. 名詞節

Kononov (1960: 370, 372) は、ウズベク語の名詞節⁸⁶において、主語は (6-36) と同様の方法で表されるとし、(6-37~6-42) を挙げている。

主要部に付く所有接辞で表す方法 ((6-36)a と同様)

- (6-37) [Sen bilan gaplash-ma-gan-im] yaxshi.
 2SG と 話す-NEG-PTCP.PST-1SG.POSS 良い
 「私が君と話さなかったことはよい。」

(Kononov 1960: 369)

⁸⁶ Kononov (1960) はロシア語で *razvernutoe dopolnenie* (日本語では補文節という訳の方が近い) と呼んでいる。

- (6-38) [Xat-ni ber-ayotgan-**ing**]-ni va [undan javop
 手紙-ACC 与える-PTCP.PRS-2SG.POSS-ACC そして それ.ABL 返事
 ol-ayotgan-**ing**]-ni biror kishi ko‘r-ib
 取る-PTCP.PRS-2SG.POSS-ACC ある 人 見る-CVB
 qol-ma-sin!
 残る:AUX-NEG-IMP.3

「君が手紙を出しているのを、そして彼から返事を受け取っているのを、誰かが見る
 ことの無いように！」

(Kononov 1960: 372)

属格の名詞・代名詞と、主要部に付く所有接辞で表す方法 ((6-36)a と同様)

- (6-39) [Yo‘lchi-ning Hashar-ga kel-gan-**i**] Nuri-ning
 PN-GEN ハシヤル-DAT 来る-PTCP.PST-POSS PN-GEN
 qulog‘-i-ga yet-gach...
 耳-POSS-DAT 達する-CVB

「ヨルチがハシヤルに来たことがヌリの耳に届くと…」

(Kononov 1960: 370)

- (6-40) Men [Karim-ning kel-gan-**i**]-ni bil-a-man.
 1SG PN-GEN 来る-PTCP.PST-POSS-ACC 知る-PRS-1SG

「私はカリムが来たのを知っている。」

(Kononov 1960: 372)

主格の名詞・代名詞と、主要部に付く所有接辞で表す方法 ((6-36)b と同様)

- (6-41) [Ilm-i eski ekan-lig-**i**] shu bugun ma‘lum
 知識-POSS 古い COP-NMLZ-POSS それ 今日 明らかに
 bo‘l-di=mi?
 なる-PST=Q

「その人の知識が古いことは、まさに今日明らかになったのか？」

(Kononov 1960: 370)

- (6-42) [Men u-ni tani-sh-**im**]-ni qayer-dan bil-di-ngiz?
 1SG それ-ACC 知る-VN-1SG.POSS-ACC どこ-ABL 知る-PST-2PL

「私的那个人を知っていることをどこから知りましたか？」

(Kononov 1960: 373)

6.2.1.3. カザフ語

中嶋 (2013: 13) によると、カザフ語の所有接尾辞は以下の表 81 の通りである⁸⁷。

表 81 : カザフ語の所有接尾辞 (中嶋 2013)

	SG	PL
1	-(I)m	-(I)mIz
2	-(I)η (FAM)	-LAr(I)η (FAM)
	-(I)ηIz (FOR)	-LAr(I)ηIz (FOR)
3	-(s)I	

(中嶋 2013: 13 をもとに筆者作成)

以下、名詞句、関係節、名詞節に分けて先行研究の記述をまとめる。

A. 名詞句

中嶋 (2013: 15) は、「人称代名詞の属格形と、所有接尾辞はよく呼応して用いられます。人称代名詞の属格形は省略されても、所有接尾辞は一般に省略できません (ただし、біздің《私たちの》と сіздің《あなたの》は、呼応する所有接尾辞が省略されることがあります).」と記述している。

Muhamedowa (2016: 82) は、カザフ語の属格所有構造における代名詞と所有人称接辞の省略に関して記述している。代名詞の省略に関しては、「所有者が一人称もしくは二人称の代名詞によって表される場合、指示対象が 2 つ目の名詞の所有接辞によって示されるため、代名詞は省略されうる」とし、以下の例 (6-43) を挙げている。

- (6-43) **(Meniη)** aya-m alpīs-ta.
 1SG.GEN 兄-1SG.POSS 六十-LOC
 「私の兄は 60 歳だ。」

(Muhamedowa 2016: 82)

所有人称接辞の省略に関しては、「口語カザフ語では、属格標示された名詞が一人称複数の代名詞である場合のみ、主要部の所有接辞が省略されうる」と述べ、以下の例 (6-44) を挙げている。

⁸⁷ 中嶋 (2013: 13) によると、一・三人称における複数の標示には、必要に応じて複数接尾辞 -LAr が所有接尾辞に先行して付加される。Muhamedowa (2016: 230) は、-LAr(I)η のみを 2PL の標識であるとしている。Kirchner (1998: 323) は、-(I)η のみを 2SG の、-(I)ηIz のみを 2PL の、-(s)I を 3SG の、-LArI を 3PL の標識であるとしている。

- (6-44) **Bizdiñ _____ üy** Qazaqstan.
 1PL.GEN 家 カザフスタン
 「我々の家はカザフスタンだ。」

(Muhamedowa 2016: 82)

B. 関係節

カザフ語の関係節について Muhamedowa (2016: 36-42) は、節の主語が属格人称代名詞と所有接辞によって表されている例 (6-45)、主格人称代名詞によって表されている例 (6-46)a、所有接辞によって表されている例 (6-46)b を挙げている。

- (6-45) [**meniñ** tap-qan] aylıy-**im**
 1SG.GEN 見つける-PTCP.PST 給料-1SG.GEN
 「私の稼いだ給料」

(Muhamedowa 2016: 37)

- (6-46) a. [**men** kir-gen] esik
 1SG 入る-PTCP.PST 扉
 b. [kir-gen] esig-**im**
 入る-PTCP.PST 扉-1SG.POSS
 「私が入った扉」

(Muhamedowa 2016: 41)

C. 名詞節

Muhamedowa (2016: 31) は、「非定形の目的語節は、kör- 『見る』、žaz- 『書く』、bil- 『知る』などの他動詞の目的語として機能し、従属化接辞 -GAn, -AtIn, -(U)w のうちの1つを含む。これらの接辞には所有と格の接辞が後続する」とし、名詞節の例 (6-47 ~ 6-49) を挙げている。

- (6-47) [Dombıra šert-etin-**ij**]-di bil-me-p-pin.
 ドンブラ 弾く-PTCP.PRS-2SG.POSS-ACC 知る-NEG-IND.PST-1SG
 「君がドンブラを引くことを私は知らなかったようだ。」

(Muhamedowa 2016: 31)

- (6-48) Bolat [**ake-m-niñ** qayda eken-**i**]-n sura-dī.
 PN 父-1SG.POSS-GEN どこに COP-POSS-ACC 尋ねる-PST
 「ボラットは、私の父がどこにいるのかを尋ねた。」

(Muhamedowa 2016: 35)

- (6-49) K^{ör}-e-miz, [Amerika-da ol qalay ömir
見る-PRS-1PL アメリカ-LOC それ どのように 人生
sür-etin-i]-n.
進める-PTCP.PRS-POSS-ACC

「その人がアメリカでどんな風に生きるかを我々は見ただろう。」

(Muhamedowa 2016: 32)

6.2.1.4. サハ語

江畑 (2020: 43) によると、サハ語の所有接辞は以下の表 82 の通りである⁸⁸。

表 82 : サハ語の所有接辞 (江畑 2020)

	SG	PL
1	-(I)m	-BIt
2	-(I)ŋ	-GIt
3	-(t)E	-LErE

(江畑 2020: 43 をもとに筆者作成)

以下、名詞句、関係節、名詞節に分けて先行研究の記述をまとめる。

A. 名詞句

サハ語は属格を欠いており、2つの名詞(2つ目が所有接辞を持つ)を含む構造が所有名詞構造として機能する (Stachowski and Menz 1998: 421, 428)。所有接辞を持つ名詞は、(6-50)のように人称代名詞に先行されることもある (Stachowski and Menz 1998: 428)。

- (6-50) a. min ebe-m
1SG 祖母-1SG.POSS
「私の祖母」
b. ehigi ak-kīt
2PL 馬-2PL.POSS
「あなたたちの馬」

(Stachowski and Menz 1998: 428)

⁸⁸ Stachowski and Menz (1998: 422) は、3SG の標識として -(t)A を、3PL の標識として -LArA を挙げている。

江畑 (p.c.) によると、サハ語の所有名詞句において、主要部における所有接辞は義務的である。

B. 関係節

サハ語は属格を欠いているため、関係節の主語は格標示されない (Stachowski and Menz 1998: 428)。江畑 (2020: 83) はサハ語の関係節について、「底の名詞が形動詞節の主語に相当しないときには、底の名詞に所有型標示が付加される」と述べ、以下の例 (6-51) を挙げている。江畑 (p.c.) によると、サハ語の関係節の主要部名詞における所有接辞は義務的である。

- (6-51) [min aak-ar] xahiat-**im**
1SG 読む-VN.PRS 新聞-1SG.POSS
「私が読む新聞」

(江畑 2020: 83)

Stachowski and Menz (1998: 428) はサハ語の関係節について、「トルコ語とは異なり、関係節の第一行為項は主要部名詞に標示される」と述べ、以下の例 (6-52) を挙げている。

- (6-52) a. [kör-büt] sir-**bit**
見る-PTCP.PST 場所-1PL.POSS
「私たちが見た場所」
b. [olor-but] jie-**m**
住む-PTCP.PST 家-1SG.POSS
「私が住んだ家」

(Stachowski and Menz 1998: 428)

C. 名詞節

江畑 (2020: 66) は、名詞述語が名詞節に現れる場合について、「名詞語幹に所有接辞が付加され述語として働く」と述べ、主語項の名詞節の例 (6-53) を挙げている。

- (6-53) [kini kim-e] miexe naada-ta suox.
それ 誰-3SG.POSS 1SG.DAT 必要-ABE ない
「彼が誰であるのかは、私には必要のないことだ。」

(江畑 2020: 66)

江畑 (2020: 83) によると、サハ語の動詞形式のうち名詞節述語として働くのは形動詞のみであり、名詞節中の主語の人称・数は、形動詞に付加された所有型標示により示される。以下の主語項の例 (6-54) では、形動詞に 3SG 主語を標示する 3SG 所有接辞が付加されている。

- (6-54) [Bu kuoska xan-tan kel-bit-e] billi-bet.
 この 猫 どこ-ABL 来る-VN.PST-3SG.POSS 分かる-NEG.PRS.3SG
 「この猫はどこから来たのかわからない。」
 (江畑 2020: 83)

Stachowski and Menz (1998: 431) は、補文節は形動詞+格接辞に基づくと述べ、目的語項の例 (6-55) を挙げている。

- (6-55) [Vanya utuy-a sit-ar-ĩ]-n kör-dü-m.
 PN 眠る-CVB 横たわる-PTCP.PRS-3SG.POSS-ACC 見る-PST-1SG
 「ヴァーニャが寝ているのを私は見た。」
 (Stachowski and Menz 1998: 431)

しかし、いずれの先行研究も主語が一・二人称である例を挙げておらず、所有接辞が義務的であるかどうかについての言及はない。江畑 (p.c.) によると、主語が一・二人称である場合も含め、サハ語の名詞節では主要部における所有接辞は義務的である。

6.2.1.5. チュヴァシ語

Clark (1998: 438) によると、チュヴァシ語の所有接辞は以下の表 83 の通りである⁸⁹。

表 83 : チュヴァシ語の所有接辞 (Clark 1998)

	SG	PL
1	-(Ǟ)m	-(Ǟ)mǞr
2	-U	-(Ǟ)r
3	-ě, -i	

(Clark 1998: 438 をもとに筆者作成)

以下、名詞句とその他に分けて先行研究の記述をまとめる。

⁸⁹ 三人称標識は、語幹末が子音の場合には -ě が、母音と一部の子音である場合には -i が付く (Clark 1998: 438)。

A. 名詞句

Krueger (1961: 113, 116) は、チュヴァシ語で人称所有 (personal possession) を表す 3 つの方法を挙げている。Krueger (1961: 113) は 1 つ目の方法として、英語などと同じく、“my, our, your...” に当たる人称代名詞の属格形⁹⁰を用いる方法 (例: *manän laša* [1SG.GEN 馬]「私の馬」) を挙げている。Krueger (1961: 113, 116) は、所有を表す上記の方法はチュヴァシ語で非常に一般的なものであるが、他のチュルク諸語でも見られるもうひとつの重要な方法があるとし、所有者が誰であることを示すために語に接辞 (表 83) を付加する方法 (例: *iväl-äm* [息子-1SG.POSS]「私の息子」) を挙げている。さらに Krueger (1961: 113, 116) は、もし話者が何の所有なのかを完全に明確にしたい場合、上に挙げた 2 つの方法を組み合わせるとしている (例: *manän iväl-äm* [1SG.GEN 息子-1SG.POSS]「私の息子」)。この方法は主に所有者を強調するために用いられるという。Krueger (1961: 118) によると、現代チュヴァシ語では、一・二人称複数の所有人称形態素は、分析的な形式に大きくとってかわられている。例えば、*iväl-ämär* [息子-1PL.POSS] の代わりに *pirën iväl* [1PL.GEN 息子] (いずれも「私たちの息子」) が用いられるという。

Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 270) によると、一・二人称の形式の生産性は現代語では低下しており、日常会話でこれらの形式の使用は非常にまれである (伝承や詩歌で良く見られる) という。特に、物が一人称のものであることは、文脈によって人称接辞なしでも表すことができるため、一人称の形式の使用は日常会話ではよりまれであるという。

Pavlov (2014: 56-58) は、「一人称への所有を表わすために、現在は統語的な方法が主に用いられている。つまり、人称代名詞の属格形または再帰人称代名詞の主格形と名詞の組み合わせである」、「二人称への所有はチュヴァシ語において統語的な方法によっても表されるが、一人称よりは少ない」と述べ、統語的な方法の例として以下の (6-56, 6-57) などを挙げている。

(6-56) *Yakku muči-sen kil-ě pirën kil-ten inše mar.*
 PN おじさん-PL.GEN 家-POSS 1PL.GEN 家-ABL 遠い COP.NEG

「ヤコヴおじさんたちの家は私たちの家から遠くない。」

(Pavlov 2014: 57)

(6-57) *Värsä-ččen sirën kolxoz sač-ě pekk-i*
 戦争-まで 2PL.GEN コルホーズ 園-POSS ような-NMLZ
tavra-ra=ta šuk=čč.

周り-LOC=も ない=COP.PST

「戦争まで、あなた (たち) のコルホーズ農場のようなのは周りにもなかった。」

(Pavlov 2014: 58)

⁹⁰ 単数の属格人称代名詞は短縮形 *man* (1SG.GEN), *san* (2SG.GEN) を持つ (Krueger 1961: 113)。

B. その他

Andreev (1961: 164) は、形動詞未来 *-As* が所有接辞をとりうることについて記述している。Andreev (1961: 164) は、形動詞 *-As* が所有接辞をとるのは、*pur* 「ある」、*śuk* 「ない」と結びつく場合 (6-58)、または *kil-* 「来る」と結びつく場合 (6-59) の2通りであると述べている。

(6-58) **Epě** sana **man-ass-ǎm** **śuk.**
 1SG 2SG.DAT/ACC 忘れる-PTCP.FUT-1SG.POSS ない
 「私は君を忘れることはない。」

(Andreev 1961: 165)

(6-59) **San-ran** **uyrāl-ass-ǎm** **kil-mest** **man.**
 2SG-ABL 別れる-PTCP.FUT-1SG.POSS 来る-NEG.PRS.3SG 1SG.GEN
 「君と別れたくない、私は。」

(Andreev 1961: 188)

形動詞 *-As* が限られた場合にのみ所有接辞をとる理由について Andreev (1961: 164) は、形動詞の動詞性が高まるにつれ、名詞の文法カテゴリーである所有接辞をとる能力を失っていったためであると述べている。Andreev (1961: 164) によると、形動詞が所有接辞をとる2通りの構造は、かつての状態の名残であるという。

6.2.1.6. その他の言語

本節では、本章で主に扱う言語であるトルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語、チュヴァシ語以外の言語として、人称標示に関して特徴的な言語であるサラール語およびサリグ・ヨグル語（いずれも南東語群）の所有接辞に関する先行研究の記述をまとめる。

Tenišev (1976a: 103; 1976b: 51) によると、サラール語とサリグ・ヨグル語の所有接辞は、それぞれ以下の表 84, 85 の通りである。

表 84 : サラール語の所有接辞 (Tenišev 1976a)

	SG	PL
1	-(I)m	
2	-(I)ŋ	
3	-(s)I	

(Tenišev 1976a: 103 をもとに筆者作成)

表 85 : サリグ・ヨグル語の所有接辞 (Tenišev 1976b)

	SG	PL
1	-(ŋ)	
2		
3	-(s)I	

(Tenišev 1976b: 51 をもとに筆者作成)

Tenišev (1976a: 104; 1976b: 53) は、いずれの言語においても所有関係が3つの方法、つまり統合法、分析統合法、分析法で表されるとしている。サラール語について Tenišev (1976a: 104) は、3つの方法の違いが感情に関係しているとし、統合法は感情の点では中立、分析統合法と分析法は感情的な表現であると記述している。Tenišev (1976b: 53) によると、サリグ・ヨグル語では統合分析法が最も頻繁に実現する。

Tenišev (1976b: 54) はサラール語とサリグ・ヨグル語の所有人称接辞について、「チュルク諸語の所有カテゴリーではすべての人称が自身の標識を持っているが、サラール語とサリグ・ヨグル語の2言語だけがこの規則の例外である。サラール語では複数における人称形式が消失している。サリグ・ヨグル語のパラダイムはサラール語よりも不完全であり、二人称単数と三人称単数の標識のみが比較的しっかり残っている。これら二言語における所有カテゴリーの形態的表現の薄れは、所有を分析的な形式で表す中国語の影響で説明できる。この言語の影響をより長く経験したサリグ・ヨグル語では、崩壊のプロセスがサラール語よりも進んでいる」と述べている。

原 (2019: 231) は、サラール語の属格人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度を調査し、以下の表 86 に示すような結果を得ている。

表 86 : サラール語の所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG	26 (70.3)	11 (29.7)	37 (100.0)
1PL	3 (10.7)	25 (89.3)	28 (100.0)
2SG	22 (73.3)	8 (26.7)	30 (100.0)
2PL	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
計	52 (54.2)	44 (45.8)	96 (100.0)

(原 2019: 231 をもとに筆者作成)

原 (2019: 231) は一人称複数の場合のみ出現割合が 10.7%と低い原因として、马伟 (2013) が指摘した所有人称接辞の省略条件が関係していると分析している。马伟 (2013: 51-53) は、サラール語において単複同形である一人称所有人称接辞 *-im* は、所有者が聞き手を含む「私

たち」(包括)である場合は出現しないと述べている。

6.2.2. 述語人称標識に関する記述

本節では以下、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語、チュヴァシ語、その他の言語(現代ウイグル語)に関する先行研究の記述をまとめる。

6.2.2.1. トルコ語

Göksel and Kerslake (2005: 88, 89) によると、トルコ語の person markers (人称標識) は以下の表 87 の通りである。なお、Göksel and Kerslake (2005) は人称標識としてグループ 1 から 4 の 4 種類を挙げているが、以下の表 88 には、本稿の議論に関わるグループ 1 (タタール語の所有型の標識に相当) とグループ 2 (タタール語の代名詞型の標識に相当) のみを挙げる。

表 87 : トルコ語の人称標識 (Göksel and Kerslake 2005)

	グループ 2	グループ 1
1SG	-(y)Im	-m
1PL	-(y)Iz	-k
2SG (FAM)	-sIn	-n
2PL / 2SG (FOR)	-sIz	-nIz
3SG		
3PL	(-lAr)	(-lAr)

(Göksel and Kerslake 2005: 88, 89 をもとに筆者作成)

Göksel and Kerslake (2005: 127) は、述語における人称・数(一・二人称)の標示に関して、「一人称もしくは二人称の主語を持つすべての文で、述語への適切な人称接辞の付加は、主語が文において代名詞によって別個に示されているかどうかに関わらず義務的(唯一の例外は代名詞化した限定詞を主語として持つ文)である」と述べ、以下の例(6-60)を挙げている。

- (6-60) (Ben) yorgun-um.
 1SG 疲れている-1SG
 「私は疲れている。」

(Göksel and Kerslake 2005: 127)

Göksel and Kerslake (2005: 132) は代名詞化した限定詞 (pronominalized determiners) について、包括的な集団を指す hep-imiz [all-1PL.POSS] ‘all of us’ / hep-iniz [all-2PL.POSS] ‘all of you’ が

主語の場合、述語における一・二人称複数標示は義務的である (6-61) が、それ以外のものが主語である場合は基本的に随意的である (6-62) としている。

(6-61) **Hep-imiz** tatil-de deniz kıyı-sı-n-a gid-iyor-uz.
 すべて-1PL.POSS 休日-LOC 海 岸-POSS-n-DAT 行く-PRS-1PL
 「私たちは全員、休暇に海岸に行く。」

(Göksel and Kerslake 2005: 132)

(6-62) **Hiçbir-imiz** bugün sokağ-a çık-ma-dı(-k).
 誰も-1PL.POSS 今日 通り-DAT 出る-NEG(-1PL)
 「私たちの誰も、今日は外出しなかった。」

(Göksel and Kerslake 2005: 132)

6.2.2.2. ウズベク語

Boeschoten (1998: 364) によると、ウズベク語の personal suffixes (人称接辞) は以下の表 88 の通りである。

表 88 : ウズベク語の人称接辞 (Boeschoten 1998)

	代名詞型	所有型
1SG	-man	-m
1PL	-miz	-K ⁹¹
2SG	-san	-ng
2PL	-siz	-ngiz
3SG	-Ø ⁹²	-Ø
3PL	(-lar)	(-lar)

(Boeschoten 1998: 364 をもとに筆者作成)

Kononov (1960: 349) は、代名詞型の人称接辞 (述語性接辞) が名詞述語に付加した例として、以下の例 (6-63) などを挙げている。なお、人称代名詞は冗長であり、現代語では主に文体的に必要な場合に随意的に用いられるとしている。

⁹¹ 日高 (2020: 39) は、「Boeschoten (1998: 364) では所有型の一人称複数接辞を -k/-q としているが、管見の限りでは所有型の一人称複数接辞に -q を用いるという記述は他に見られない」と述べている。ここでは Boeschoten (1998: 364) の記述に基づき、-K とした。

⁹² 日高 (2020: 39) によると、継続、意志には -Ø が、非過去、伝聞過去には -di が、現在進行には -ti が付加する。

- (6-63) (Men) sog'-man.
 1SG 元気な-1SG
 「私は元気だ。」

(Kononov 1960: 349)

Kononov (1960: 350) は、述語性接辞の省略は2つの場合に観察されると述べている。1つ目は、口語において(述語の名詞が文末に置かれ、下降イントネーションがある場合)、2つ目は同種の述語と従属節の述語においてであるとし、口語の例(6-64)と同種の述語の例(6-65)を挙げている。

- (6-64) Hamrobuvi: Rais-i bo'l-ma-sa sekretar-i bor=dir.
 PN 長-POSS いる-NEG-COND 秘書-POSS いる=MOD
 「ハンロブヴィ：『長がいないなら秘書がいるだろう。』」
 Saltanat: Men, men sekretar'.
 PN 1SG 1SG 秘書
 「サルタナト：『私だ、私が秘書だ。』」

(Kononov 1960: 350)

- (6-65) Mavlon: Shosh-ma, Dehqonboy! Hozir sen brigadir emas,
 PN 急ぐ-NEG.IMP PN 今 2SG 班長 COP.NEG
 men brigadir-man.
 1SG 班長-1SG
 「マヴロン：『急ぐな、デフコンボイ！もうお前は班長じゃない、私が班長だ！』」

(Kononov 1960: 350)

Kononov (1960: 351) は、「主語と述語の人称・数における一致は、一人称と二人称でのみ義務的である。つまり、主語が人称代名詞、再帰代名詞、(所有接辞を持つ)不定代名詞によって表される場合である」と述べ、以下の例(6-66)を挙げている。

- (6-66) a. Men yoz-a-man.
 1SG 書く-PRS-1SG
 「私は書く。」
 b. Sen o'quvchi-san.
 2SG 生徒-2SG
 「君は生徒だ。」

- c. **Hamma-miz kel-di-k.**
 皆-1PL.POSS 来る-PST-1PL
 「私たちみんなが来た。」
- d. **O‘z-im yoz-di-m.**
 自身-1SG.POSS 書く-PST-1SG
 「私自身が書いた。」

(Kononov 1960: 351)

6.2.2.3. カザフ語

Muhamedowa (2016: 165) によると、カザフ語の **agreement markers** (一致標識) は以下の表 89 の通りである⁹³。

表 89 : カザフ語の一致標識 (Muhamedowa 2016)

	代名詞型	所有型
1SG	-MIn	-m
1PL	-MIz	-K
2SG	-sIŋ (FAM) -sIz (FOR)	-ŋ
2PL	-sIŋdAr (FAM) -sIz(dAr) (FOR)	-ŋdAr (FAM) -ŋIz(dAr) (FOR)
3	-Ø, -dI	-Ø

(Muhamedowa 2016: 165 をもとに筆者作成)

名詞類述語文に関して Muhamedowa (2016: 2) は、「代名詞型の一致接辞はコピュラ標識として機能する」と述べ、以下の例 (6-67) を挙げている。

- (6-67) **Men qazaq-pīn.**
 1SG カザフ人-1SG
 「私はカザフ人だ。」

(Muhamedowa 2016: 2)

⁹³ Kirchner (1998: 326) は表 89 の標識 (ただし、代名詞型で -sIŋ、所有型で -ŋ のみを 2SG の標識としている) を **personal markers** (人称標識) と呼んでいる。Kirchner (1998: 324) は、名詞類述語文に現れるコピュラとして -MIn (1SG), -MIz (1PL), -sIŋ (2SG), -sIz (2PL), -Ø (3) を挙げ、同様の標識がほとんどの定形動詞形式に現れるとしている。これらのうち -sIz は一人の聞き手に対して用いられる場合は敬意を表わすとしている。中嶋 (2013: 69, 132-134) は、表 89 の所有型の標識を「動詞人称接尾辞」と呼び (ただし、2SG 敬称の標識として -ŋIz を挙げている)、代名詞型の標識を「人称助詞」と呼んでいる。

加えて Muhamedowa (2016: 3) は、「コピュラ標識は一・二人称単数の人称代名詞に付く場合、省略されうる」とし、以下の例 (6-68) を挙げている。

- (6-68) Awil-dij molda-si **men(-min).**
 村-GEN ムッラー-POSS 1SG(-1SG)
 「この村のムッラーは私だ。」

(Muhamedowa 2016: 3)

動詞述語文に関して Muhamedowa (2016: 165) は、「人称と数を示す一致標識は、定形動詞の最終要素として現れる」と述べている。

中嶋 (2013: 132) は、人称助詞 (表 89 の代名詞型の標識に相当) について、「一・二人称が主語となる文では、人称代名詞は省略されても、通常人称助詞は省略できません。」と述べている。

6.2.2.4. サハ語

江畑 (2020: 72) によると、サハ語の主語の人称・数を標示する接尾辞は以下の表 90 の通りである。なお、江畑 (2020) は、名詞述語につく形式 (表 90 のコピュラ型と同形) を「コピュラ接辞」と呼んでいる。

表 90 : サハ語の主語の人称・数を標示する接尾辞 (江畑 2020)

	コピュラ型	所有型
1SG	-BIn	-(I)m
1PL	-BIt	-BIt
2SG	-GIn	-(I)ŋ
2PL	-GIt	-GIt
3SG	-Ø	-(t)E
3PL	-LEr	-LErE

(江畑 2020: 72 をもとに筆者作成)

サハ語では名詞述語文でも動詞述語文でも人称・数の標示が義務的である (江畑 p.c.)。サハ語は副動詞にも人称・数の標示がされうる点で特徴的だが、江畑 (2020: 83) によると副動詞における標示は任意の場合がある。

6.2.2.5. チュヴァシ語

Pavlov (2014: 229) によると、チュヴァシ語の人称接辞は以下の表 91 の通りである。

表 91 : チュヴァシ語の人称接辞 (Pavlov 2014)

	SG	PL
1	-Ăp -Ăm	-Ăp-Ăr -Ăm-Ăr
2	-Ăn	-Ø-Ăr
3	-ě ⁹⁴	-ě-ś, -śě

(Pavlov 2014: 229 をもとに筆者作成)

Andreev (1966: 60) は、「他のチュルク諸語に特徴的な、名詞類述語における人称標識は、チュヴァシ語には存在しない」と述べ、名詞述語文の例 (6-69)a と形容詞述語文の例 (6-69)b を挙げている。

- (6-69) a. Epě inžener.
1SG エンジニア
「私はエンジニアだ。」
- b. Esě sámräk.
2SG 若い
「君は若い。」

(Andreev 1966: 60)

Krueger (1961: 184) は、「チュヴァシ語における一致は、主語の人称・数と一致する動詞に限られる」と述べている。Clark (1998: 444) は、(形動詞過去に由来する) 完了形 -nĂ (否定 -mAn) には、人称・数が人称標識によって標示されないことについて記述している。

6.2.2.6. その他の言語

本節では、本章で主に扱う言語であるトルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語、チュヴァシ語以外の言語として、人称標示に関して特徴的な言語である現代ウイグル語 (南東語群) の述語人称標識に関する先行研究の記述をまとめる。

新田 (2015: 13) によると、現代ウイグル語の人称接辞は以下の表 92 の通りである。表 92 には、本稿の議論に関わる人称接辞 I (タタール語の所有型の標識に相当) と人称接辞 II (タタール語の代名詞型の標識に相当) のみを挙げ、人称接辞 III は割愛する。

⁹⁴ 現在形では脱落するが、痕跡として、先行する現在形接辞末の t が口蓋化し、これが超分節的な形態素として機能する (例: lar-at' [座る-PRS.3SG] 「座っている」) (Pavlov 2014: 232)。

表 92 : 現代ウイグル語の人称接辞 (新田 2015)

	人称接辞 II	人称接辞 I
1SG	-män	-m
1PL	-miz	-q
2SG (FAM)	-sän	-ŋ
2SG (FOR)	-siz	-ŋiz
2PL (FAM)	-silär	-ŋlar
2PL (FOR)	-sizlär	-ŋizlar
3	(-Dur)	-Ø

(新田 2015: 13 をもとに筆者作成)

Hayasi (1993) は、表 92 の人称接辞 II にあたる形式 (三人称を除く) を *personal enclitics* (人称接語) と呼んでいる。Hayasi (1993: 109) は、現代ウイグル語の人称接語が述語の義務的な要素ではなく、文が一・二人称の主語を持っていてもしばしば省略されるとしている。Hayasi (1993: 117) はエリシテーション調査の結果から、「述語が人称接語を義務的な要素として必要とするか否かは、その述語が動詞 *bol-* の補語になりうるかどうかに関係している。つまり、人称接語は *bol-* 『なる』の補語になり得る述語においては義務的ではない (逆もしかり)」と結論付けている。*bol-* がコピュラとしても機能することから Hayasi (1993: 117) は、「*bol-* の補語の位置に現れうる述語は (述語となるために本来はコピュラを必要とした) 二次的な述語であり、*bol-* の補語になれない述語はそれ自身で (コピュラの助けなしで) 述語になれる一次的な述語である」ことが推測されるとしている。もしそうであれば、結論を「人称接語は一次的な述語では義務的だが、二次的な述語では随意的である」と言い換えることができる。Hayasi (1993: 117) は述べている。

Hayasi (1993: 116) によると、調査で扱った現代ウイグル語の述語のうち人称接語が義務的でないものには *ikän* (タタール語のモーダル小辞 *ikän* に相当) を除く非動詞述語 (6-70) および動詞の意図形 *-maqçi* (6-71) (タタール語の意図形 *-mAKçE* に相当) と形動詞完了 *-kan* (6-72) (タタール語の完了形 *-GAn* に相当) がある。

- (6-70) a. Män oquvüçi.
 b. Oquvüçi-män.
 c. Män oquvüçi-män.
 1SG 生徒-1SG
 「私は生徒だ。」

(Hayasi 1993: 116)

- (6-71) a. Män Beyjiŋ-gä bar-maqči.
 b. Beyjiŋ-gä bar-maqči-män.
 c. Män Beyjiŋ-gä bar-maqči-män.
 1SG 北京-DAT 行く-VOL-1SG
 「私は北京に行く予定だ。」

(Hayasi 1993: 116)

- (6-72) a. Män xatä qil-ɣan.
 b. xatä qil-ɣan-män.
 c. Män xatä qil-ɣan-män.
 1SG ミス する-PTCP.PST-1SG
 「私はミスをした。」

(Hayasi 1993: 116)

6.3. 問題提起

本節では、6.1 節と 6.2 節でまとめた先行研究の記述を整理し、問題提起を行う。以下、まず所有接辞について、次に述語人称標識について述べる。

A. 所有接辞

チュルク諸語全般に関する先行研究および、個別言語（属格を持たず、所有接辞が義務的なサハ語を除く）に関する先行研究は、統合型、分析統合型に加え、所有接辞が現れない分析型の所有名詞句について記述している。分析統合型の所有名詞句に関して、チュルク諸語全般に関する先行研究 Dmitriev (1956: 34)、チュヴァシ語に関する先行研究 Krueger (1961: 113, 116) は、所有者を強調する構造であるとしている。トルコ語に関する先行研究 Csató (2019: 86) は、トルコ語では分析統合型にあたる構造が「規範的な所有構造」であるとしている。一方、分析型の所有構造に関しては、多くの先行研究が口語で、特に一人称複数の場合に見られるとしている。以下、表 93 に分析型の所有名詞句に関する先行研究の記述を簡潔にまとめる。

表 93 : 分析型の所有名詞句に関する先行研究の記述

言語	記述
チュルク諸語全般	文語よりもむしろ会話で用いられる。集団的な性格の感情性に関係する。一・二人称単複でのみ、一部の言語では一・二人称の複数でのみ用いられる。(Dmitriev 1956: 34)
トルコ語	インフォーマルな文体で、特に一・二人称の場合にしばしばみられる。ただし所有存在文では許容されない。(Göksel and Kerslake 2005: 184)
	一人称複数の場合、共同所有を強調するため所有人称接辞を省くことがある。(林 1989b: 1389)
	一人称の場合が多いが、他の人称でも見られる。対比される「私の車」ではなく、たったひとつの対象として「私の車」と言う場合に、所有人称接尾辞が消える。(林 2013: 60)
	口語・インフォーマルな使用域や非標準変種で用いられる非規範的な所有構造であり、親和性の概念を表す。(Csató 2019)
ウズベク語	主に口語と詩で見られ、原則一人称複数で用いられるが、二人称複数でもより低い頻度で見られる。(Kononov 1960: 88)
カザフ語	一人称複数の場合のみ、口語で主要部の所有接辞が省略されうる。(Muhamedowa 2016: 82)
	一人称複数と二人称単数敬称の場合は所有接尾辞が省略されることがある。(中嶋 2013: 15)
チュヴァシ語	一・二人称複数の人称所有形態素は、分析的な構造に大きくとってかわられている。(Krueger 1961: 118)
	日常会話で一・二人称の形式（特に一人称の形式）の使用は非常にまれである。(Sergeev, Andreeva and Kotleev 2012: 270)
	二人称も分析的な構造で表されるが、一人称よりも少ない。(Pavlov 2014: 57, 58)
その他の言語 (サラール語)	感情的な表現である。(Tenišev 1976a: 104)
	従属部が一人称複数の代名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が著しく低い。(原 2019: 231)

チュルク諸語全般に関する研究である Dmitriev (1956: 34) は、分析型の構造が集団的な性格の感情性に関係すると述べており、これはトルコ語に関する先行研究で挙げられている共同所有、親和性といったものに近いと考えられる。しかし、先行研究の記述は原 (2019) を除き、いずれも定量的調査を行った上でのものではない。さらに、関係節名詞句と名詞節

に関しては、分析型の構造についての記述が見当たらない。よって、タタール語以外の主なチュルク諸語の所有名詞句、関係節名詞句、名詞節を対象に、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、それぞれの言語における所有人称接辞の出現傾向を明らかにする必要がある。

B. 述語人称標識

チュルク諸語の個別言語に関する先行研究は、それぞれの言語における述語人称標識およびその出現傾向について記述している。以下、表 94 に述語人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述を簡潔にまとめる。

表 94：述語人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述

言語	記述
トルコ語	一人称もしくは二人称の主語を持つすべての文で、述語への適切な人称接辞の付加は、主語が文において代名詞によって別個に示されているかどうかに関わらず義務的である。(Göksel and Kerslake 2005: 127)
ウズベク語	主語と述語の人称・数における一致は、一人称と二人称でのみ義務的である。(Kononov 1960: 351) 口語において、等位述語と従属節の述語において、省略されうる。(Kononov 1960: 350)
カザフ語	コピュラ標識は一・二人称単数の人称代名詞に付く場合、省略されうる。(Muhamedowa 2016: 3)
サハ語	人称・数の標示は義務的である。(江畑 p.c.)
チュヴァシ語	名詞類述語における人称標識は存在しない。(Andreev 1966: 60) 一致は主語の人称・数と一致する動詞に限られる。(Krueger 1961: 184)
その他の言語 (現代ウイグル語)	人称接語は述語の義務的な要素ではなく、文が一・二人称の主語を持っていてもしばしば省略される。人称接語は bol-『なる』の補語になり得る述語においては義務的ではない。(Hayasi 1993: 109, 117)

先行研究の記述によれば、述語人称標識はトルコ語とサハ語では義務的であり、ウズベク語とカザフ語では限られた場合に、現代ウイグル語ではしばしば省略され、チュヴァシ語では一部の動詞にしか現れない。しかし、これらの記述はいずれも定量的調査を行った上でのものではない。実際は、トルコ語でも述語人称標識が現れない例が見られ、カザフ語でも一・二人称単数の人称代名詞以外の要素が述語の場合に述語人称標識が現れない例が見られる。よって、タタール語以外の主なチュルク諸語の定形節を対象に、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、それぞれの言語における述語人称標識の出現傾向を明らかにする必要がある。

7. チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の対象と方法

本章では、主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向を明らかにする目的で行った調査の対象と方法について述べる。

以下、7.1 節で調査対象、7.2 節で調査方法について述べる。

7.1. 調査対象

調査対象の言語は、1) それぞれの語群の代表的な（話者数の多い）言語であること、2) 筆者がある程度の知識を持ち、分析を行える言語であること、3) 次節で述べる調査方法による調査が可能な言語であること、の3つの条件に当てはまるトルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）、カザフ語（北西語群）、チュヴァシ語（オグル語群）とする。

調査対象の人称標識は、タタール語と同じく所有人称接辞と述語人称標識（代名詞型・所有型）とし、三人称標識と願望・命令形は調査対象外とした。以下に、それぞれの言語における、調査対象の人称標示要素を示す（表 95～98）。

表 95：人称を標示する要素（トルコ語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	ben	-(I)m	-(y)Im	-m
1PL	biz	-(I)mIz	-(y)Iz	-k
2SG	sen	-(I)n	-sIn	-n
2PL	siz	-(I)nIz	-sIz	-nIz

表 96：人称を標示する要素（ウズベク語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	men	-(i)m	-man	-m
1PL	biz	-(i)miz	-miz	-k
2SG	sen	-(i)ng	-san	-ng
2PL	siz	-(i)ngiz	-siz	-ngiz

表 97：人称を標示する要素（カザフ語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	men	-(I)m	-MIn	-m
1PL	biz	-(I)mIz	-MIz	-K
2SG.FAM	sen	-(I)ŋ	-sIŋ	-ŋ
2SG.FOR	siz	-(I)ŋIz	-sIz	-ŋIz

表 98：人称を標示する要素（チュヴァシ語）

	人称代名詞 (主格形)	人称標識		
		所有人称接辞	述語人称標識	
			代名詞型	所有型
1SG	ep(ě)	-(Ă)m	-Ăp	-Ăm
1PL	epir	-(Ă)mĂr	-ĂpĂr	-ĂmĂr
2SG	es(ě)	-U	-Ăn	
2PL	esir	-(Ă)r	-Ăr	

トルコ語、ウズベク語、チュヴァシ語の二人称複数標識は、タタール語と同様に二人称単数(敬称)も表す。一方カザフ語では、これらの言語の二人称複数標識に相当する形式 -(I)ŋIz, -sIz, -ŋIz が二人称単数(敬称)のみを表わす。二人称複数標識は、二人称単数(親称)標識に複数接辞が後続した形式 -(I)ŋ-dAr, -sIz-dAr, -ŋ-dAr, -(I)ŋIz-dAr, -sIz-dAr, -ŋIz-dAr である。本稿では、他の言語と対照する都合上、他の言語の標識と形式的に対応する標識のみを調査対象とすることとした。よって、カザフ語の二人称複数標識は調査対象外とした。

チュヴァシ語の述語人称標識は、定形動詞に義務的に現れる(文法化が進んでおり、動詞の屈折形式と一体化している場合がある)。他の多くのチュルク諸語とは異なり、明示的かつ義務的な三人称単複の標識を持つため、述語人称標識の現れない定形動詞形式は存在しない。よって、チュヴァシ語に関しては所有人称接辞のみを調査対象とした。

調査対象の人称標識が現れうる領域および人称標示構造は、基本的にタタール語と同様である(4.1.2 節の表 41 および 4.1.3 節を参照)。ただし、トルコ語では関係節の主語の人称・数が、主要部名詞ではなく形動詞に標示される(例: **benim kork-tuğ-um bazı hayvan-lar** [1SG.GEN 恐れる-PTCP.PST-1SG.POSS いくつかの 動物-PL] 「私が恐れるいくつかの動物」)。

7.2. 調査方法

7.1 節で述べた調査対象に関してコーパス調査およびインフォーマント調査を行った。以下、コーパス調査とインフォーマント調査についてそれぞれ述べる。

7.2.1. コーパス調査

コーパス調査では、人称標識の出現頻度を調べた。以下、コーパスと調査方法について述べる。

A. コーパス

使用したコーパスの名称は以下の表 99 の通りである。

表 99 : 使用したコーパス

言語	コーパスの名称
トルコ語	TS Corpus v2
ウズベク語	O‘zbek tilining ta‘limiy korpusi (ウズベク語教育コーパス)
カザフ語	Almaty Corpus of Kazakh
チュヴァシ語	Čävaš čělxin ikčělcellě šüpsi (チュヴァシ語二言語コーパス)

以下、それぞれのコーパスおよび検索方法について説明する。

a. トルコ語コーパス TS Corpus v2

トルコ語コーパス TS Corpus v2 (以下 TSC) は、総語数約 4 億 9 千万語 (2021 年 4 月現在) のタグ付きコーパスであり、オンライン紙やブログなどの様々なインターネット上のソースから構成される BOUN WebCorpus をソースとして使用している (以上、<https://tscorpus.com/corpora/ts-corpus-v2/> を要約)。なお、TSC の構築に関して論じた論文に、Sezer and Sezer (2013), Sezer (2017) などがある。以下、図 11, 12 に検索画面を示し、検索方法について説明する。

TS Corpus v2: Another Corpus by TS Corpus

Standard Query

ben
ve
sen

Query mode: Simple query (case-sensitive) TS Corpus Documentation

Number of hits per page: 50

Restriction: None (search whole corpus)

Start Query Reset Query

図 11 : TSC の検索画面①

Your query "ben ve sen" (case-sensitive) returned 15 matches in 2 different texts (in 491,360,398 words [2 texts]; frequency: 0.03 instances per million words), ordered randomly [0.065 seconds]

No	Filename	Solution 1 to 15	Page 1 / 1
1	1	04 2007 03:14 AM serkan konak muratcan ertürk spor müzik sema ...	ben ve sen güzel kızlarla arkadaş olmak tabikide Şubat 04 2007 08:29 AM hakkı acar
2	1	Ne güzel yazmışsın Seldacığım .İçimden geçen şeyleri yazıya dökebilmede çok başarılı değillimdir	ben ve sen bunu çok iyi yapıyorsun . Sanırım bu yazdıklarını o gün orada onunla
3	1	ve çektiğimiz son dumanımız oldu aynı sigaradan ... Konuştuk biraz , biraz	ben ve sen sonra ... Dedim ki , ölene kadar o yanm sigara orda kalacak
4	1	Eğer Bohm haklıysa , ben ve masa , ben ve ağaç ,	ben ve sen , benle düşmanım aynı şeydir . Ama dünyayı klasik algılama modelinde oluşturulan
5	1	yaşamında ; işte o da ben olmak istiyorum zirvede tek ben ;	ben ve sen . . Ceren çekingen bir şekilde gülümser .. Ceren : artık gitsem
6	1	severek - ihanet etmeden öldüler - Kale , teşekkür canımcığım zaten çoğunluk	ben ve sen gibi düşünüyor . hayatta kalandan kastım dizide devam eden durumu söylüyorum .
7	1	kelimelerini bulmaz . Bu aralıktaki herhangi tek karakter [b - s]en ,	ben ve sen kelimelerini bulur . (Aralıklar artan düzende olmalıdır .) Herhangi bir
8	2	Ya da sen varya sen , filan falan . Ya da	ben ve sen , filan falan . Sonra Sicilya usulü olsun dedik . Bir otelin
9	2	bakıma ruhun çekim noktaları şeklinde görülürler . Örneğin Koç - Terazı karıştığı	ben ve sen arasındaki ikilemi , tek başına kalmakla , ortaklaşa hareketi , Boğa -
10	1	. bunların kimisi mantığa el verir kimisi vermez . . ama	ben ve sen vs . vv . küçük emrah olarak görmüyorsak no problem ... ark
11	1	Eğer Bohm haklıysa , ben ve masa , ben ve ağaç ,	ben ve sen , benle düşmanım aynı şeydir . Ama dünyayı klasik algılama modelinde oluşturulan
12	2	bana başka yetenekler gösterebilirsin . Ama şurada , şu iki saat içinde	ben ve sen eğit iki insanız . Ben sadece seni sana göstermenin tecrübesini edindim .
13	1	eğer o aşın heyecana alışık değilse . koç ve Kova burcu ,yani	ben ve sen . bu fena bir bağlantı değil , ikimizde meraklıyız , her ne
14	1	eğer o aşın heyecana alışık değilse . koç ve Kova burcu ,yani	ben ve sen . bu fena bir bağlantı değil , ikimizde meraklıyız , her ne
15	1	bir kez kendisiyle dünyanın geri kalanı arasında ayırım yapabileceği aşamaya ulaştığında .	ben ve sen diyebildiğinde , dışı içten ayrılabilirdiğinde , dünyadan kendisine ya da kendisinden dünyaya

図 12 : TSC の検索画面②

画面上部の検索窓には、記号を含む文字列もしくはタグを入力することができる。検索窓は1つしかないが、改行して入力することで、複数の語を指定して検索することができる。例えば、図 11 にあるように入力して検索すると、図 12 にあるように、ben ve sen [1SG と 2SG]「私と君」という句を含む例がヒットする。ヒット数は、検索結果画面の最上部に表示される。例文の出典（ファイル名）は、検索結果画面の左から二列目に数字で示される。

b. ウズベク語コーパス O‘zbek tilining ta‘limiy korpusi

ウズベク語コーパス O‘zbek tilining ta‘limiy korpusi (ウズベク語教育コーパス、以下 OTTK)

は、ベータ版サイト **O‘zbek tili milliy korpusi**（ウズベク語ナショナルコーパス）にある総語数不明のタグなしコーパスであり、電子教科書、辞書、メディアリソース、電子定期行物などを収録している（以上、<http://uzschoolcorpara.uz/> を要約）。以下、図 13 に検索画面を示し、検索方法について説明する。

Sayt test rejimida ishlamoqda!

 Kirish

Korpus

So'z yoki so'z birikmasi

Parametrlar CQL Bigramma Izlash

6572 ta yozuvdan 20 tasi ko'rsatilmoqda!

... va zamonaviy shaharlar ko'p. Ularning har biri	bizning	g'urur-iftixorimizdir. Ularning timsolida biz...
... yashab, kamol topmoqdamiz. Yurtimiz boyliklari -	bizning	boyligimiz, uning yutuqlari - bizning yutug'imiz...
... dunyo madaniyati rivojiga katta hissa qo'shgan.	Bizning	xalqimiz qadim zamonlardan buyon o'troq hayot...
... yasashga harakat qilishadi. Bu esa o'troq hayot	bizning	qon-qonimizga singib ketganini ko'rsatadi...
... yurakdagi Hellados - ko'ngildagi Vatan haqidadir.	Bizning	buyuk ajdodlarimiz doimo Vatanga muhabbat tuyg'usi...
... quvg'in qilib, boshqa o'lkalarga, jumladan,	bizning	diyorimizga ham ko'chirtirib yuborgan.
Aziz o'quvchi,	bizning	mamlakatimizda go'zal, qadimiy va zamonaviy...
... tuprog'ini ko'z qarachig'idek asrab yashash -	bizning	eng oliy burchimiz. Vatanni sevmalik - eng ulug'...
... aholisining deyarli yuz foizi savodli ekani	bizning	ulkan ma'naviy boyligimizdir.
... Zardushtiylikning qadimiy kitobi «Avesto» ham	bizning	diyorimizda - ko'hna Xorazm zaminida yaratilgan...
... bilan yaratilgan kitoblarning eng ulug'uvchan	bizning	buyuk ajdodimiz Imam Buxoriy nomi bilan hadlin...

図 13 : OTTK の検索画面

画面上部、**Korpus**（コーパス）の右側の窓をクリックすると、コーパスの種類を選ぶことができる（2021年5月現在、OTTKのみ選択可）。**So'z yoki so'z birikmasi**（語もしくは句）の右側の検索窓に語もしくは句を入力し、画面右の **izlash**（検索）をクリックすると、検索結果が表示される。検索窓は1つしかないが、スペースを挟んで二語目以降を入力すれば、句や文を検索することができる。検索で正規表現を含めた記号一般は用いることができない。表示された例文をクリックすると、さらに広い前後の文脈を参照することができる。

c. カザフ語コーパス **Almaty Corpus of Kazakh**

カザフ語コーパス **Almaty Corpus of Kazakh**（以下 NCKL）は、総語数約4千万語（2021年4月現在）のタグ付きコーパスであり、文学、学術、評論などのジャンルのテキストをバランスよく収録している（以上、<http://web-corpora.net/KazakhCorpus/search/> を要約）。以下、図 14 に検索画面を示し、検索方法について説明する。

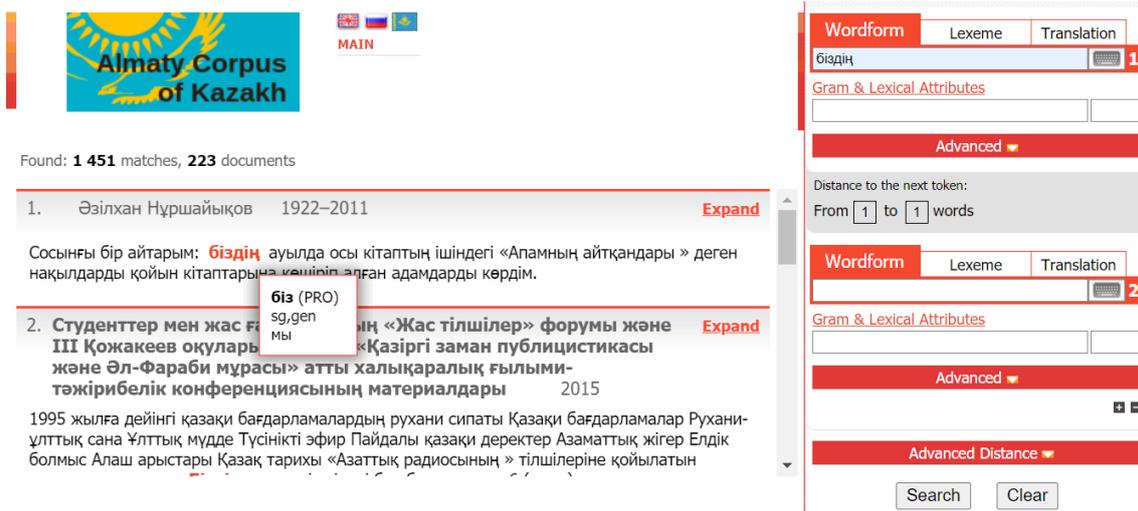


図 14 : NCKL の検索画面

画面右に複数の検索窓がある。一列目の検索窓 **Wordform** には、キリル文字正書法で語形を入力することができ、一部の正規表現を含めた記号も使用することができる。二列目の検索窓 **Gram & Lexical Attributes** には、タグを入力して、一語目の品詞や、その語に付加する形態素を指定することができる。ヒット数は検索結果画面の最上部に表示される。出典は各例文の上に表示され、右側の **Expand** をクリックすると、さらに広い文脈を見ることができる。語にカーソルを合わせると、その語に付されたタグが表示される。図 14 は、**біздің** (**biz-dij** [1PL-GEN]「私たちの」) にカーソルを合わせた画面を示したものであり、**PRO** (代名詞)、**sg** (単数)、**gen** (属格)、**біз** のロシア語訳 **мы** が表示されている。

d. チュヴァシ語コーパス Čăvaš čělxin ikčělxellě süpsi

チュヴァシ語コーパス Čăvaš čělxin ikčělxellě süpsi (チュヴァシ語二言語コーパス、以下 CCIS) は、総語数約 836 万語 (2021 年 4 月 2 日現在) のタグなしコーパスである。多くの例文にロシア語訳が付いている。2021 年 4 月現在、断続的に更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われており、総語数も日々増え続けている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストなどを含む (<https://corpus.chv.su/content/about.html>)。以下、図 15 に検索画面を示し、検索方法について説明する。

Шырав

Шыра

[+] хушма опцисем

Шырав ёсё:

манӑн (тёпё: *мана*) сӑмах форми ҫинчен тёплёнрех пӑхма пултаратӑр.

Мён тӑвас ёнтё манӑн!

[Что мне делать?](#)

VI // .

Сирён хӑвӑртрах киле ҫитес килет пулӑ, **манӑн** та вӑхӑт питех ҫук, — эплё ҫаплах-ха сирён христианӑн йӑваш чёрине ытла та пысӑк хурлӑх кӑнӑ ҫав ӑссӑр Болла ёсёле аппаланатӑп.

[И вам, я уверен, хочется скорее добраться до дому, да и у меня все время теперь занято делами этого молодого сумасброда Боллы, и какому жестокому испытанию он подверг вашу христианскую кротость.](#)

VI // .

図 15 : CCIS の検索画面

画面上部の検索窓に、キリル文字正書法で語形を入力し、**Шыра**（検索）と書かれた検索ボタンをクリックすると、その語形を含む例文が表示される。一語のみ検索可能であり、記号を用いることはできない（2021年6月現在）。例文の出典は右下に表示され、クリックすると文脈を見ることができる。ロシア語訳は、チュヴァシ語例文の下に青字で表示される。ヒット数は表示されないが、1ページに最大20例ずつ表示されるため、画面下部に表示されるページ数に20を掛けた数に、最終ページの例数を足すことでヒット数を求めることができる。

B. 調査方法

主に標本調査を行った。検索結果を表計算ソフトに貼り付け、目視でノイズを除去しながら、標本を人称・数ごとに50例または100例ずつ（一・二人称単複の合計は200例または400例）抽出し、人称標識の出現数を目視で数えた。調査は複数の言語の複数の領域を対象に行ったため、具体的な検索手順は対象とする領域によって異なっている。よって、具体的な検索手順は次節で個別に示すこととする。統計分析としてはカイ二乗検定を行った。有意差が認められた場合は必要に応じて残差分析を行った。有意水準は5%とした。

7.2.2. インフォーマント調査

インフォーマント調査では、主に筆者が作成した例文の容認度を調べた。調査に協力して頂いたインフォーマントの情報を以下の表 100 に示す。

表 100 : インフォーマント情報

氏名	母語	生年	性別	出身地
O. T. 氏	トルコ語	1991	男	トルコ共和国イスタンブール
Z. F. 氏	ウズベク語	1997	女	ウズベキスタン共和国サマルカンド
M. D. 氏	カザフ語	1996	女	カザフスタン共和国アルマティ
A. G. 氏	チュヴァシ語	1999	男	ロシア連邦チュヴァシ共和国

容認度は「容認可能」、「違和感がある」、「容認不可」の3段階を設定した。「違和感がある」と判定された例文の頭には ? (違和感が強い場合は ??) を、「容認不可」と判定された例文の頭には * を付す。

8. チュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する調査の結果と考察

本章では、主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向を明らかにする目的で行った調査の結果について述べ、それに関して考察を行う。

調査の結果、タタール語における人称標識の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）よりは低いことが分かった。

以下、8.1 節で所有人称接辞の出現傾向、8.2 節で述語人称標識の出現傾向に関する調査結果を示し、考察を行う。

8.1. 所有人称接辞の出現傾向

本節では、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語における所有人称接辞の出現傾向に関して行った調査の結果を述べる。

調査の結果、1) タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは低いこと、2) トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっており、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が高いというタタール語と同様の傾向が見られること、3) 主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、4) トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句と名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れること、が分かった。

先行研究の記述（第6章を参照）および調査結果から本節では、1) 多くのチュルク諸語において、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が高いという傾向が共通している可能性があること、2) タタール語を含めた主なチュルク諸語で一人称複数標識の出現頻度が低いのは、一人称複数という人称・数の持つ特性が影響している可能性があること、3) チュルク諸語の中で所有人称接辞が最も衰退しているサリグ・ヨグル語において、本来は二人称単数を表わしたであろう形式 $-(I)\eta$ が残存していることと、本稿で定量的調査を行った5言語（タタール語、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語）において、二人称単数の所有人称接辞の出現頻度が高いことは、関連している可能性があること、4) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が高いという傾向は、牧地マリ語（ウラル語族フィン・ウゴル諸語）でも見られるため、チュルク諸語に限られないこと、を主張する。

以下、まず調査結果を名詞句（所有名詞句、関係節名詞句）、名詞節に分けて示し、最後に調査結果に関する考察を行う。

A. 名詞句

a. 所有名詞句

調査の結果、1) タタール語の所有名詞句における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは低いこと、2) トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なること、3) 主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、が分かった。

まず、それぞれの言語における所有人称接辞の全体的な出現頻度について述べる。調査手順は以下の通りである。

- ① それぞれの言語のコーパスの検索窓に、それぞれの言語の属格人称代名詞を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える⁹⁵。

この調査では、人称・数以外の条件を指定せずに検索した。よって以下、この調査の結果を、所有名詞句における所有人称接辞の全体的な出現頻度として、タタール語の調査結果（表 42）と比較する。

上記の手順で調査したところ、以下の表 101～104 に示すような結果が得られた。

表 101：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（トルコ語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (benim)	97 (97.0)	3 (3.0)	100 (100.0)
1PL (bizim)	78 (78.0)	22 (22.0)	100 (100.0)
2SG (senin)	97 (97.0)	3 (3.0)	100 (100.0)
2PL (sizin)	96 (96.0)	4 (4.0)	100 (100.0)
計	368 (92.0)	32 (8.0)	400 (100.0)

⁹⁵ チュヴァシ語の二人称単数所有接辞 -U は、格接辞が後続する場合、-Ā に弱化することがある（例：sanān śum-ā-n-ta [2SG.GEN 横-2SG.POSS-n-LOC] 「君の横に」）。また、主に与対格接辞が後続する場合、表層では現れないことがある（例：sanān vsvod-na [2SG.GEN 小隊.2SG.POSS-DAT/ACC] 「君の小隊に」）。ただし、格接辞は所有接辞の後に現れる異形態が後続することから、基底では格接辞の前に二人称単数所有接辞があると考えられる（所有接辞がない場合は vsvod-a となる）。よって、vsvod-na のような形式も二人称単数所有接辞を持つ形式とみなす。

表 102：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（ウズベク語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (mening)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
1PL (bizning)	75 (75.0)	25 (25.0)	100 (100.0)
2SG (sening)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2PL (sizning)	99 (99.0)	1 (1.0)	100 (100.0)
計	374 (93.5)	26 (6.5)	400 (100.0)

表 103：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（カザフ語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (meniñ)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
1PL (bizdiñ)	39 (39.0)	61 (61.0)	100 (100.0)
2SG.FAM (seniñ)	100 (100.0)	0 (0.0)	100 (100.0)
2SG.FOR (sizdiñ)	86 (86.0)	14 (14.0)	100 (100.0)
計	325 (81.3)	75 (18.8)	400 (100.0)

表 104：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（チュヴァシ語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (manän)	15 (15.0)	85 (85.0)	100 (100.0)
1PL (pirëñ)	4 (4.0)	96 (96.0)	100 (100.0)
2SG (sanän)	77 (77.0)	23 (23.0)	100 (100.0)
2PL (sirëñ)	*32 (32.0)	68 (68.0)	100 (100.0)
計	128 (32.0)	272 (68.0)	400 (100.0)

*32 例中 3 例で二人称単数標識 -U が現れている。

比較のため、以下にタタール語の所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（表 42）を再掲する。

表 41 (再掲) : 人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度 (タタール語)

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	59 (59.0)	41 (41.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	12 (12.0)	88 (88.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	84 (84.0)	16 (16.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	48 (48.0)	52 (52.0)	100 (100.0)
計	203 (50.8)	197 (49.3)	400 (100.0)

表 42, 101 ~ 104 から、1) タタール語の所有名詞句における所有人称接辞の全体的な出現頻度が、チュヴァシ語よりは高いが、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは低いこと、2) トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なること、が分かる。

対応する所有人称接辞が現れている例は、400 例中タタール語が 203 例 (50.8%) であるのに対し、トルコ語が 368 例 (92.0%)、ウズベク語が 374 例 (93.5%)、カザフ語が 325 例 (81.3%)、チュヴァシ語が 123 例 (41.0%) である。表 42, 101 ~ 104 における所有人称接辞の出現頻度 (合計) についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(4) = 566.03, p < .05$)。残差分析を行ったところ、ウズベク語 (表 102)、トルコ語 (表 101)、カザフ語 (表 103) における所有人称接辞の出現頻度が有意に高く、タタール語 (表 42)、チュヴァシ語 (表 104) における所有人称接辞の出現頻度が有意に低いことが示された。ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、タタール語 (表 42) とチュヴァシ語 (表 104) における所有人称接辞の出現頻度 (合計) に有意差が認められた ($\chi^2(1) = 28.99, p < .005$)。よって、タタール語の所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度は、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは有意に低く、チュヴァシ語よりは有意に高いと言える。

5.1 節で述べたように、タタール語では人称・数によって所有人称接辞の出現頻度が異なり、二人称単数標識の出現頻度が最も高く、一人称複数標識の出現頻度が最も低い (表 42)。調査の結果、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度は人称・数によって異なることが分かった (表 101 ~ 104)。いずれの言語でも一人称複数標識の出現頻度が最も低く、この傾向は特に所有人称接辞の出現頻度が全体的に高いトルコ語、ウズベク語、カザフ語で顕著に見られた。ウズベク語とカザフ語に関しては、先行研究 (ウズベク語については Kononov (1960: 88)、カザフ語については中嶋 (2013: 15)) の記述通り、一人称複数および二人称複数 (カザフ語は二人称単数敬称) の場合のみ所有人称接辞が現れない例が見られた。所有人称接辞の出現頻度が全体的に低いチュヴァシ語では、二人称単数標識の出現頻度の高さが顕著に見られた。表 101 ~ 104 における人称・数による所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、いずれにおいても有意差が認められた (表 101 : $\chi^2(3) = 35.60, p < .05$ 、表 102 : $\chi^2(3) = 75.20, p < .05$ 、表 103 : χ^2

(3) = 164.81, $p < .05$ 、表 104 : $\chi^2(3) = 142.37, p < .05$ 。残差分析を行ったところ、いずれにおいても一人称複数標識の出現頻度が有意に低いことが示された(表 104 に関しては、二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことも示された)。よって、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語では、一人称複数標識の出現頻度が有意に最も低い(チュヴァシ語では加えて二人称単数標識の出現頻度が有意に最も高い)と言える。

インフォーマント調査の結果、一人称複数の場合は分析型の構造 (8-1~8-4)b がトルコ語は「違和感がある」、それ以外の言語はタタール語の (5-1)b と同じく「容認可」と判定された。所有人称接辞の出現頻度が全体的に低いチュヴァシ語は、分析統合型の構造 (8-4)a が「容認不可」とされた。

トルコ語

(8-1) 「私たちの車は壊れた。」

- a. **Bizim araba-mız** bozul-du.
1PL.GEN 車-1PL.POSS 壊れる-PST
- b. **?Bizim araba** bozul-du.
1PL.GEN 車 壊れる-PST

ウズベク語

(8-2) 「私たちの車は壊れた。」

- a. **Biz-ning mashina-miz** buzil-di.
1PL-GEN 車-1PL.POSS 壊れる-PST
- b. **Biz-ning mashina** buzil-di.
1PL.GEN 車 壊れる-PST

カザフ語

(8-3) 「私たちの車は壊れた。」

- a. **Biz-diñ mašina-miz** buzil-dī.
1PL-GEN 車-1PL.POSS 壊れる-PST
- b. **Biz-diñ mašina** buzil-dī.
1PL.GEN 車 壊れる-PST

チュヴァシ語

(8-4) 「私たちの車は壊れた。」

- a. ***Pirën mašină-măr** šēmērēl-č-č.
1PL.GEN 車-1SG.POSS 壊れる-PST-3SG

- b. Pirën mašină šëmëřěl-č-ě.
1PL.GEN 車 壊れる-PST-3SG

以下に、タタール語の (5-1) を再掲する。

(5-1) 「私たちの車は壊れた。」

- a. Bez-neŋ mašina-büz watıl-dī.
1PL.GEN 車-1PL.POSS 壊れる-PST
- b. Bez-neŋ mašina watıl-dī.
1PL.GEN 車 壊れる-PST

一方、二人称単数の場合、トルコ語、ウズベク語、カザフ語はタタール語の (5-2)b と同じく、分析型の構造 (8-5~8-8)b が「違和感がある」と判定された。チュヴァシ語では分析型の構造は「容認可」と判定された。チュヴァシ語では他の標識に比べて二人称単数標識の出現頻度の高さが顕著であり、インフォーマント調査でも分析統合型の構造 (8-8)a が一人称複数とは異なり「容認可」と判定された。

トルコ語

(8-5) 「君の車は壊れた。」

- a. Sen-in araba-n bozul-du.
2SG.GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST
- b. [?]Sen-in araba bozul-du.
2SG.GEN 車 壊れる-PST

ウズベク語

(8-6) 「君の車は壊れた。」

- a. Sening mashina-ng buzil-dī.
2SG.GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST
- b. [?]Sening mashina buzil-dī.
2SG.GEN 車 壊れる-PST

カザフ語

(8-7) 「君の車は壊れた。」

- a. Seniŋ mašina-n buzil-dī.
2SG.GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST

- b. [?]Seniŋ mašina buzil-dī.
2SG.GEN 車 壊れる-PST

チュヴァシ語

(8-8) 「君の車は壊れた。」

- a. Sanān mašin-u šēmērēl-č-ě.
2SG.GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST-3SG
- b. Sanān mašina šēmērēl-č-ě.
2SG.GEN 車 壊れる-PST-3SG

以下に、タタール語の (5-2) を再掲する。

(5-2) 「君の車は壊れた。」

- a. Sinen mašina-n watil-dī.
2SG.GEN 車-2SG.POSS 壊れる-PST
- b. [?]Sinen mašina watil-dī.
2SG.GEN 車 壊れる-PST

なお、チュヴァシ語では二人称複数代名詞 *sirēn* が現れる場合に主要部に二人称単数標識 -U が現れている例が 32 例中 3 例で見られた (例: *sirēn šāln-u* [2PL.GEN 弟-2SG.POSS] 「あなたの弟」)。これは、他の調査対象言語では見られなかった現象である。

タタール語の所有名詞句では、主要部が格をとって後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低い傾向が見られる (5.1 節を参照)。調査の結果、トルコ語、ウズベク語、カザフ語ではそのような傾向は見られないことが分かった。全体的な出現頻度に関する調査で分析した例のうち、主要部が位置関係名詞である例のすべてで所有人称接辞が現れていた。インフォーマント調査でも、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では、分析型の例 (8-9 ~ 8-14) は「違和感がある」または「容認不可」と判定された。

トルコ語

(8-9) 「その人はいつも私たちの隣にいる。」

- a. O herzaman bizim yan-ımız-da.
それ いつも 1PL.GEN 横-1PL.POSS-LOC
- b. *O herzaman bizim yan-da.
それ いつも 1PL.GEN 横-LOC

(8-10) 「その人はいつも君の隣にいる。」

- a. O herzaman sen-in yan-in-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-2SG.POSS-LOC
- b. *O herzaman sen-in yan-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-LOC

ウズベク語

(8-11) 「その人はいつも私たちの隣にいる。」

- a. U doim biz-ning yon-imiz-da.
それ いつも 1PL-GEN 横-1PL.POSS-LOC
- b. ?U doim biz-ning yon-da.
それ いつも 1PL-GEN 横-LOC

(8-12) 「その人はいつも君の隣にいる。」

- a. U doim sening yon-ing-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-2SG.POSS-LOC
- b. *U doim sening yon-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-LOC

カザフ語

(8-13) 「その人はいつも私たちの隣にいる。」

- a. Ol ärqašan biz-din žan-ïmiz-da.
それ いつも 1PL-GEN 横-1PL.POSS-LOC
- b. ?Ol ärqašan biz-din žan-da.
それ いつも 1PL-GEN 横-LOC

(8-14) 「その人はいつも君の隣にいる。」

- a. Ol ärqašan senin žan-ïn-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-2SG.POSS-LOC
- b. *Ol ärqašan senin žan-da.
それ いつも 2SG-GEN 横-LOC

所有人称接辞の出現頻度が全体的に低いチュヴァシ語では、一人称複数の場合は分析統合型の例 (8-15)a が「容認不可」と判定されたが、二人称単数の場合は分析型も分析統合型も「容認可」とあるという。この結果は、主要部が「車」である (8-4, 8-8) と同様の結果であり、主要部名詞が後置詞的に機能する補助名詞か否かによって容認度に差は見られなか

った。

チュヴァシ語

(8-15) 「その人はいつも私たちの隣にいる。」

- a. *Vál yalanax pirěn śum-āmār-ta.
それ いつも 1PL.GEN 横-1PL.POSS-LOC
- b. Vál yalanax pirěn śum-ra.
それ いつも 1PL.GEN 横-LOC

(8-16) 「その人はいつも君の隣にいる。」

- a. Vál yalanax sanăn śum-u-n-ta.
それ いつも 2SG.GEN 横-2SG.POSS-n-LOC
- b. Vál yalanax sanăn śum-ra.
それ いつも 2SG.GEN 横-LOC

以上の調査結果から、1) タタール語の所有名詞句における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは低い、2) トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっている、3) 主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られない、と言える（これらの結果に関する考察は、本節末で後述する）。

b. 関係節名詞句

調査の結果、トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句では、所有人称接辞がほとんどの場合現れることが分かった。

まず、コーパス調査の結果について述べる。コーパス調査の手順は以下の通りである。

- ① それぞれの言語のコーパスの検索窓に、それぞれの言語の属格人称代名詞を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、所有名詞句を人称・数ごとに100例ずつ抽出する過程で関係節名詞句も抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、トルコ語、ウズベク語、カザフ語に関する調査では、抽出されたすべての例で所有人称接辞が出現していた（分析型の例は抽出されなかった）。タタール語の関係節名詞句では分析型の例がある程度見られることから（5.1節を参照）、トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句では、タタール語の関係節名詞句に比べて所有人

称接辞の出現頻度が高いといえる。チュヴァシ語に関する調査では、関係節名詞句が4例しか抽出されなかった。これは、チュヴァシ語の関係節が多くの場合所有構造をとらないからであると考えられる。チュヴァシ語の関係節では(8-17)のように、主語は多くの場合主格で現れる。

- (8-17) [esir yert-se p̄ir-akan] propagandā
 2PL 行く-CVB 行く:AUX-PTCP.PRS プロパガンダ
 「あなた(たち)が行っているプロパガンダ」

関係節の主語が属格で現れている4例のうち、主要部に所有人称接辞が現れているものが2例、現れていないものが2例であった。以下に、所有人称接辞が現れている例と現れていない例を1例ずつ挙げる。

- (8-18) [sanān sav-nā] tus-u
 2SG.GEN 好む-PTCP.PST 友-2SG.POSS
 「君の好きな友達」

- (8-19) [manān yurat-nā] yurā-sene
 1SG.GEN 好む-PTCP.PST 歌-PL.DAT/ACC
 「私の好きな歌を」

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。インフォーマント調査は、基本的に所有構造が用いられるトルコ語、ウズベク語、カザフ語を対象に行った。

トルコ語のインフォーマント O. T. 氏によると、筆者が作成した分析統合型の構造(8-30, 8-31)a から所有人称接辞を削除した分析型の構造(8-30, 8-31)b は「容認不可」であるという。

(8-30) 「私たちの書いた本」

- a. [bizim yaz-dıġ-ımız] kitap
 1PL.GEN 書く-PTCP.PST-1PL.POSS 本
 b. *[bizim yaz-dık] kitap
 1PL.GEN 書く-PTCP.PST 本

(8-31) 「君の書いた本」

- a. [senin yaz-dıġ-ın] kitap
 2SG.GEN 書く-PTCP.PST-2SG.POSS 本

b.	*[senin	yaz-dik]	kitap
	2SG.GEN	書く-PTCP.PST	本

ウズベク語のインフォーマント Z. F. 氏によると、筆者が作成した分析統合型の構造 (8-32, 8-33)a から所有人称接辞を削除した分析型の構造 (8-32, 8-33)b は「容認不可」という。

(8-32) 「私たちの書いた本」

a.	[biz-ning	yoʻz-gan]	kitob-imiz
	1PL.GEN	書く-PTCP.PST	本-1PL.POSS
b.	*[biz-ning	yoʻz-gan]	kitob
	1PL.GEN	書く-PTCP.PST	本

(8-33) 「君の書いた本」

a.	[sening	yoʻz-gan]	kitob-ing
	2SG.GEN	書く-PTCP.PST	本-2SG.POSS
b.	*[sening	yoʻz-gan]	kitob
	2SG.GEN	書く-PTCP.PST	本

なお、最も自然な表現は、主格主語が現れる構造（例： **biz yoʻz-gan** kitob [1PL 書く-PTCP.PST 本] 「私たちが書いた本」）であるという。これは、Kononov (1960: 365) の記述通りである (6.2.1.2 節を参照)。

カザフ語のインフォーマント M. D. 氏によると、筆者が作成した以下の (8-34, 8-35) のうち、分析型の (8-34, 8-35)b は「違和感がある」という。

(8-34) 「私たちの書いた本」

a.	[biz-diŋ	žaz-yan]	kitab-ïmiz
	1PL.GEN	書く-PTCP.PST	本-1PL.POSS
b.	?[biz-diŋ	žaz-yan]	kitap
	1PL.GEN	書く-PTCP.PST	本

(8-35) 「君の書いた本」

a.	[seniŋ	žaz-yan]	kitab-ïŋ
	2SG.GEN	書く-PTCP.PST	本-2SG.POSS
b.	?[seniŋ	žaz-yan]	kitap
	2SG.GEN	書く-PTCP.PST	本

なお、最も自然な表現は、ウズベク語と同様に主格主語が現れる構造（例：biz yaz-yan kitap [1PL 書く-PTCP.PST 本]「私たちが書いた本」）であるという。

以上のように、トルコ語とウズベク語では分析型が「容認不可」と判定されており、「違和感がある」と判定されたタタール語 (5-14, 5-15) とカザフ語 (8-34, 8-35) に比べて容認度が低い。以下に、タタール語の (5-14, 5-15) を再掲する。

(5-14) 「私たちの書いた本」

a.	[Bez-neŋ	yaz-yan]	kitab-ibiz
	1PL-GEN	書く-PTCP.PST	本-1PL.POSS
b.	?[Bez-neŋ	yaz-yan]	kitab
	1PL-GEN	書く-PTCP.PST	本

(5-15) 「君の書いた本」

a.	[Sineŋ	yaz-yan]	kitab-iŋ
	2SG-GEN	書く-PTCP.PST	本-2SG.POSS
b.	?[Sineŋ	yaz-yan]	kitab
	2SG-GEN	書く-PTCP.PST	本

以上の調査結果から、トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句では、所有人称接辞がほとんどの場合現れると言える。タタール語の関係節名詞句では分析型の構造もある程度見られることから (5.1 節を参照)、タタール語の関係節名詞句における所有人称接辞の出現頻度は、トルコ語、ウズベク語、カザフ語より低いと言える（これらの結果に関する考察は、本節末で後述する）。

B. 名詞節

調査の結果、関係節名詞句と同様、トルコ語、ウズベク語、カザフ語の名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れることが分かった。

まず、コーパス調査の結果について述べる。コーパス調査の手順は以下の通りである。

- ① それぞれの言語のコーパスの検索窓に、それぞれの言語の属格人称代名詞を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出する過程で名詞節の例も抽出し、所有人称接辞のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下で述べるような結果が得られた。

トルコ語に関する調査では、所有人称接辞が出現していない例が 1 例 (8-26) 見られた。この例は、トルコ語で所有人称接辞の出現頻度が最も低い一人称複数主語であり、動名詞 **-mA** が主要部の例である。

- (8-36) [Bizim böyle mahrum bırakıl-ma] neden-i bu=dur.
 1PL.GEN こう 欠乏した 放される-VN 原因-POSS これ=MOD
 「私たちがこのように恵まれない状態になったことの原因はこれだ。」

ウズベク語、カザフ語に関する調査では、抽出されたすべての例で所有人称接辞が出現していた。

チュヴァシ語に関する調査では、名詞節と複合述語構文の例が数例しか抽出されなかった。これは、チュヴァシ語の名詞節が多くの場合所有構造をとらないからであると考えられる。チュヴァシ語の名詞節で、主語は多くの場合 (8-37) のように主格で現れ、主要部は名詞化標識 **-i** をとる。

- (8-37) [Esir mën tuy-n-i]-ne, [şav tuyäm mën
 2PL 何 感じる-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC その 気持ち 何
 yatı-i]-ne pël-es kil-et=i sirën?
 名前の-NMLZ-DAT/ACC 知る-PTCP.FUT 来る-PRS.3SG=Q 2PL.GEN
 「あなた (たち) が何を感じたかを、その気持ちが何という名前であるかを知りたくないですか？」

名詞節の例は、所有構造を持つ (8-38) の 1 例のみが抽出された。この例では、動名詞的な性格が強い形動詞未来 **-As** に、チュヴァシ語で最も出現頻度の高い二人称単数の所有接辞が現れている。

- (8-38) [Sanän üläm kun kur-ass-u] şak turam-ran
 2SG.GEN 未来 日 見る-PTCP.FUT-2SG.POSS この 片-ABL
 kil-et.
 来る-PRS.3SG
 「お前が未来を生きることは、この (パンの) 切れ端 (を食べるかどうか) にかかっている。」

先行研究が挙げる (6-58, 6-59) のような一部の構文 (タタール語の複合述語構文に相当) では、主語が属格で標示され、形動詞に所有人称接辞が付くことがある。調査では 2 例抽出されたが、いずれも形動詞未来 **-As** と二人称単数の所有接辞を持つ例であった。

(8-39) Ančax **sanān** šivār-ass-u kil-et pul’?
 しかし 2SG.GEN 寝る-PTCP.FUT-2SG.POSS 来る-PRS.3SG MOD
 「でも君は寝たいでしょう？」

(8-40) **Sanān** morjak pul-ass-u kil-et=i?
 2SG.GEN 水兵 なる-PTCP.FUT-2SG.POSS 来る-PRS.3SG=Q
 「君は水兵になりたいか？」

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。インフォーマント調査は、基本的に所有構造が用いられるトルコ語、ウズベク語、カザフ語を対象に行った。

トルコ語のインフォーマント O. T. 氏によると、筆者が作成した分析統合型の名詞節 (8-41~8-44)a から所有人称接辞を削除した分析型の名詞節 (8-41~8-44)b は「容認不可」であるという。

(8-41) 「その人は、私たちが来るのを待っている。」

- | | | | | |
|----|----|----------------|--------------------|-----------|
| a. | O | [bizim | gel-me-miz]-i | bekliyor. |
| | それ | 1PL.GEN | 来る-VN-1PL.POSS-ACC | 待つ.PRS |
| b. | *O | [bizim | gel-me]-yi | bekliyor. |
| | それ | 1PL.GEN | 来る-VN-ACC | 待つ.PRS |

(8-42) 「その人は、君が来るのを待っている。」

- | | | | | |
|----|----|----------------|--------------------|-----------|
| a. | O | [senin | gel-me-n]-i | bekliyor. |
| | それ | 2SG.GEN | 来る-VN-2SG.POSS-ACC | 待つ.PRS |
| b. | *O | [senin | gel-me]-yi | bekliyor. |
| | それ | 2SG.GEN | 来る-VN-ACC | 待つ.PRS |

(8-43) 「その人は、私たちがいつ来たかを知っている。」

- | | | | | | |
|----|----|----------------|----------|--------------------------|-----------|
| a. | O | [bizim | ne zaman | gel-diğ-imiz]-i | bil-iyor. |
| | それ | 1PL.GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-1PL.POSS-ACC | 知る-PRS |
| b. | *O | [bizim | ne zaman | gel-diğ]-i | bil-iyor. |
| | それ | 1PL.GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-ACC | 知る-PRS |

(8-44) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

- | | | | | | |
|----|----|-----------------|----------|--------------------------|-----------|
| a. | O | [sen-in | ne zaman | gel-diğ-in]-i | bil-iyor. |
| | それ | 2SG.GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC | 知る.PRS |

b.	*O	[sen-in	ne zaman	gel-diğ]-i	bil-iyor.
	それ	2SG-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS

ウズベク語のインフォーマント Z. F. 氏によると、筆者が作成した分析統合型の名詞節 (8-45 ~ 8-48)a から所有人称接辞を削除した分析型の名詞節 (8-45 ~ 8-48)b は「容認不可」であるという⁹⁶。

(8-45) 「その人は、私たちが来るのを待っている。」

a.	U	[biz-ning	kel-ish-imiz]-ni	kut-a-di.
	それ	1PL-GEN	来る-VN-1PL.POSS-ACC	待つ-PRS-3
b.	*U	[biz-ning	kel-ish]-ni	kut-a-di.
	それ	1PL-GEN	来る-VN-ACC	待つ-PRS-3

(8-46) 「その人は、君が来るのを待っている。」

a.	U	[sening	kel-ish-ing]-ni	kut-a-di.
	それ	2SG-GEN	来る-VN-2SG.POSS-ACC	待つ-PRS-3
b.	*U	[sening	kel-ish]-ni	kut-a-di.
	それ	2SG-GEN	来る-VN-ACC	待つ-PRS-3

(8-47) 「その人は、私たちがいつ来たかを知っている。」

a.	U	[biz-ning	qachon	kel-gan-imiz]-ni	bil-a-di.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-1PL.POSS-ACC	知る-PRS-3
b.	*U	[biz-ning	qachon	kel-gan]-ni	bil-a-di.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS-3

(8-48) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

a.	U	[sening	qachon	kel-gan-ing]-ni	bil-a-di.
	それ	2SG-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC	知る-PRS-3
b.	*U	[sening	qachon	kel-gan]-ni	bil-a-di.
	それ	2SG-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS-3

カザフ語のインフォーマント M. D. 氏によると、筆者が作成した分析統合型の名詞節 (8-49 ~ 8-52)a から所有人称接辞を削除した分析型の名詞節 (8-49 ~ 8-52)b は「容認不可」であるという。

⁹⁶ Z. F. 氏によると、(8-45) の biz-ning は biz-ni、(8-46) の sening は seni の方がより自然であるという。Sjoberg (1963: 84) では、属格が -ni で現れうることが指摘されている。

(8-49) 「その人は、私たちが来るのを待っている。」

- | | | | | |
|----|-----|----------|--------------------|-----------|
| a. | Ol | [biz-diŋ | kel-üw-imiz]-di | küt-e-di. |
| | それ | 1PL-GEN | 来る-VN-1PL.POSS-ACC | 待つ-PRS-3 |
| b. | *Ol | [biz-diŋ | kel-üw]-di | küt-e-di. |
| | それ | 1PL-GEN | 来る-VN-ACC | 待つ-PRS-3 |

(8-50) 「その人は、君が来るのを待っている。」

- | | | | | |
|----|-----|---------|--------------------|-----------|
| a. | Ol | [seniŋ | kel-üw-iŋ]-di | küt-e-di. |
| | それ | 2SG-GEN | 来る-VN-2SG.POSS-ACC | 待つ-PRS-3 |
| b. | *Ol | [seniŋ | kel-üw]-di | küt-e-di. |
| | それ | 2SG-GEN | 来る-VN-ACC | 待つ-PRS-3 |

(8-51) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

- | | | | | | |
|----|-----|----------|-------|--------------------------|-----------|
| a. | Ol | [biz-diŋ | qašan | kel-gen-imiz]-di | bil-e-di. |
| | それ | 1PL-GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-1PL.POSS-ACC | 知る-PRS-3 |
| b. | *Ol | [biz-diŋ | qašan | kel-gen]-di | bil-e-di. |
| | それ | 1PL-GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-ACC | 知る-PRS-3 |

(8-52) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

- | | | | | | |
|----|-----|---------|-------|--------------------------|-----------|
| a. | Ol | [seniŋ | qašan | kel-gen-iŋ]-di | bil-e-di. |
| | それ | 2SG-GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC | 知る-PRS-3 |
| b. | *Ol | [seniŋ | qašan | kel-gen]-ni | bil-e-di. |
| | それ | 2SG-GEN | いつ | 来る-PTCP.PST-ACC | 知る-PRS-3 |

以上のように、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では分析型が「容認不可」と判定されており、同様の構造が「違和感がある」と判定されたタタール語 (5-21~5-24)b に比べて容認度が低い。以下に、タタール語の (5-21~5-24) を再掲する。

(5-21) 「その人は、私たちが来るのを待っている。」

- | | | | | |
|----|-----|----------|--------------------|---------|
| a. | Ul | [bez-neŋ | kil-üw-ebez]-ne | köt-ä. |
| | それ | 1PL-GEN | 来る-VN-1PL.POSS-ACC | 待つ-PRS |
| b. | ?Ul | [bez-neŋ | kil-üw]-ne | köt-ä. |
| | それ | 1PL-GEN | 来る-VN-ACC | 待つ-PRS- |

(5-22) 「その人は、君が来るのを待っている。」

a.	UI	[sineŋ	kil-üw-eŋ]-ne	köt-ä.
	それ	2SG.GEN	来る-VN-2SG.POSS-ACC	待つ-PRS
b.	?UI	[sineŋ	kil-üw]-ne	köt-ä.
	それ	2SG.GEN	来る-VN-ACC	待つ-PRS

(5-23) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

a.	UI	[bez-neŋ	qayčan	kil-gän-ebez]-ne	bel-ä.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-1PL.POSS-ACC	知る-PRS
b.	?UI	[bez-neŋ	qayčan	kil-gän]-ne	bel-ä.
	それ	1PL-GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS

(5-24) 「その人は、君がいつ来たかを知っている。」

a.	UI	[sineŋ	qayčan	kil-gän-eŋ]-ne	bel-ä.
	それ	2SG.GEN	いつ	来る-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC	知る-PRS
b.	?UI	[sineŋ	qayčan	kil-gän]-ne	bel-ä.
	それ	2SG.GEN	いつ	来る-PTCP.PST-ACC	知る-PRS

以上の調査結果から、トルコ語、ウズベク語、カザフ語の名詞節では、所有人称接辞がほとんどの場合現れると言える。タタール語の名詞節では分析型の構造もある程度見られることから (5.1 節を参照)、タタール語の名詞節における所有人称接辞の出現頻度は、トルコ語、ウズベク語、カザフ語より低いと言える (これらの結果に関する考察は、以下で後述する)。

所有人称接辞に関する調査の結果、本節の最初でも述べたように、1) タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、Common Turkic に属する主な言語 (トルコ語、ウズベク語、カザフ語) より低いこと、2) トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっており、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が高いというタタール語と同様の傾向が見られること、3) 主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、4) トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句と名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れること、が分かった。タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度が Common Turkic に属する主な言語 (トルコ語、ウズベク語、カザフ語) より低いのは、言語接触の影響による可能性があるかと筆者は考える。言語接触の影響の可能性については、第9章で後述する。以下、特に人称・数に着目して考察

を行う。

タタール語では、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向が見られる(5.1節を参照)。全体的な出現頻度は異なるものの、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっており、一人称複数標識の出現頻度が最も低いというタタール語と同様の傾向が見られる。さらに、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向も、所有人称接辞の出現頻度が比較的低いチュヴァシ語で見られる。これらのことから、多くのチュルク諸語において、一人称複数標識の出現頻度が他に比べて低く、二人称単数標識の出現頻度は高いという傾向が共通している可能性がある。

サラール語では、複数人称の形式が失われ、本来は単数人称の形式であったと考えられる $-(I)m, -(I)ŋ$ が複数人称も表しているが(6.2.1.6節の表84を参照)、原(2019)の調査によると、一人称単数の属格代名詞を持つ場合より一人称複数の属格代名詞を持つ場合の方が一人称所有接辞 $-(I)m$ の出現頻度が低い(6.2.1.6節の表86を参照)⁹⁷。このことから、タタール語を含めた主なチュルク諸語で一人称複数標識の出現頻度が低いのは、一人称複数という人称・数の持つ特性が影響している可能性がある。その特性としては、先行研究が挙げる「共同所有」、「親和性」、「集団的な性格の感情性」といったもの(第6章を参照)が考えられるが、根源的なものとして、一人称複数のみがすべての人称(話し手+聞き手+それ以外)を含む可能性があること(2.1節の表24~26を参照)が挙げられる。すべての人称を含む場合が生じるとなると、そもそも人称を標示する意味があまりないと言える。今後は、これらの特性の影響がどの程度あるか、特に一人称複数標識がすべての人称を含むか否かで所有人称接辞の出現頻度に差があるかどうかを調査する必要がある。なお、马伟(2013:51-53)によると、サラール語の一人称所有人称接辞 $-im$ は、所有者が聞き手を含む「私たち」(包括)である場合は出現しない(6.2.1.6節を参照)。

サラール語よりも不完全なパラダイムを持つサリグ・ヨグル語では、本来は二人称単数を表わしたであろう形式 $-(I)ŋ$ が一・二人称単複を表わす(6.2.1.6節の表85を参照)。チュルク諸語の中で所有人称接辞が最も衰退しているサリグ・ヨグル語において、本来は二人称単数を表わしたであろう形式 $-(I)ŋ$ が残存していることと、本稿で定量的調査を行った5言語(タタール語、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語)において、二人称単数の所有人称接辞の出現頻度が高いことは、関連している可能性がある。二人称単数標識の出現頻度が高い理由については、今後さらに考察する必要がある。

なお、一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が高いという傾向が見られるのはチュルク諸語に限られない。タタール語と同じくウラル・ヴォルガ地域で話される牧地マリ語(ウラル語族フィン・ウゴル語派)の所有名詞句を対象に筆者が行った

⁹⁷ 表86における人称・数による所有人称接辞の出現頻度(標本数の少ない二人称複数を除く)についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた($\chi^2(2) = 29.54, p < .05$)。残差分析を行ったところ、一人称複数で所有人称接辞の出現頻度が有意に低いことが示された。

調査⁹⁸によると、牧地マリ語でも一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという同様の傾向が見られた（表 105）。調査で抽出された例（8-53, 8-54）および、比較のためタタール語の所有名詞句に関する調査結果（表 42）も併せて示す。

表 105：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（牧地マリ語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (məjən)	63 (63.0)	37 (37.0)	100 (100.0)
1PL (memnan)	38 (38.0)	62 (62.0)	100 (100.0)
2SG (təjən)	85 (85.0)	15 (15.0)	100 (100.0)
2PL (tendan)	68 (68.0)	32 (32.0)	100 (100.0)
計	254 (63.5)	146 (36.5)	400 (100.0)

(8-53) Memnan školə-što marij jəlmə-m tunem-aš
 1PL.GEN 学校-INE マリ 言語-ACC 学ぶ-INF
 nigö toreš ogəl.
 誰も 反対の COP.NEG.3SG
 「私たちの学校では、マリ語を学ぶのに誰も反対ではない。」

(8-54) Nataša, tide təjən mur-et.
 PN これ 2SG.GEN 歌-2SG.POSS
 「ナターシャ、これは君の歌だ。」

表 42 (再掲)：人称代名詞を持つ所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度（タタール語）

人称代名詞	所有人称接辞		計
	あり	なし	
1SG (minem)	59 (59.0)	41 (41.0)	100 (100.0)
1PL (bezneŋ)	12 (12.0)	88 (88.0)	100 (100.0)
2SG (sineŋ)	84 (84.0)	16 (16.0)	100 (100.0)
2PL (sezneŋ)	48 (48.0)	52 (52.0)	100 (100.0)
計	203 (50.8)	197 (49.3)	400 (100.0)

⁹⁸ 牧地マリ語のオンラインコーパス Meadow Mari Corpora の Main Corpus（総語数 263 万語のタグ付きコーパス、メディアとウィキペディアの記事を収録）を使用。1 つ目の検索窓に属格人称代名詞（1SG мыйын, 1PL мемнан, 2SG тыйын, 2PL тендан）を入力して検索。検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、所有名詞句を人称・数ごとに 100 例ずつ抽出し、所有人称接辞（1SG -(e)m, 1PL -na, 2SG -(e)t, 2PL -da）のある例とない例の数を数えた。

表 105 における人称・数による所有人称接辞の出現頻度についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(1)=48.88, p<.05$)。残差分析を行ったところ、一人称複数標識の出現頻度が有意に低く、二人称単数標識の出現頻度が有意に高いことが示された。

今後は、なぜこのような傾向が見られるのかを解明すること、所有人称接辞を持つ他の言語に関しても類似の調査を行い、同様の傾向が通言語的に見られるかどうかを調べる必要がある⁹⁹。

8.2. 述語人称標識の出現傾向

本節では、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現傾向について述べる。

調査の結果、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）でも述語人称標識が現れない例が見られるが、タタール語に比べて少なく、容認度も低いことが分かった。よって、タタール語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現頻度は、トルコ語、カザフ語より低いと言える。

先行研究の記述（第 6 章を参照）および調査結果から本節では、言語による述語人称標識の、（人称代名詞から接語への、形の上での）「文法化の度合い」（Hayasi 1993: 117）の違いが、言語による述語人称標識の出現頻度の差と関係している可能性がある一方で、述語人称標識の「文法化の度合い」が同程度であっても、言語間や同一言語内で述語人称標識の出現頻度に差が見られる場合もあることについて述べる。

以下、まず調査結果について述べ、最後に、調査結果に関する考察を述べる。

まず、コーパス調査の結果について述べる。コーパス調査は、トルコ語とカザフ語の名詞述語文・形容詞述語文を対象に行った。トルコ語は TSC で次の検索窓の要素との距離を指定することができないため、人称代名詞と述語が隣接している例のみを抽出した。ウズベク語は OTTK の検索窓が 1 つしかなく、タグが付与されていないため、定形節に関する調査が困難である。よって、ウズベク語は調査対象外とした。調査手順は以下の通りである。

トルコ語

- ① TSC で、検索窓の一行目にいずれかの人称代名詞を、二行目に「名詞または形容詞」を意味するタグ (`_Noun_Adj`) を、三行目に「句読点」を意味するタグ `_Punc` を入力して検索する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら名詞述語文・形容詞述語文を人称・数ごとに 50 例ずつ抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

⁹⁹ Johanson (2002: 18) によると、社会において支配的な言語における頻度パターンが、支配される側の言語にコピーされうる。よって、もしウラル語族全般で同様の傾向が見られないのであれば、ウラル・ヴォルガ地域で支配的であったタタール語における所有人称接辞の頻度パターンが、牧地マリ語にコピーされた可能性が考えられる。

カザフ語

- ① NCKL で、1つ目の検索窓にいずれかの人称代名詞を入力し、Position in the sentence を Beginning に設定する。次の検索窓の要素との距離を 1-10 とし、2つ目の検索窓に「名詞または形容詞」を意味するタグ (N|A) を入力し、Position in the sentence を End に設定する。
- ② 検索結果の一部を表計算ソフトに貼り付け、ノイズを目視で除去しながら名詞述語文・形容詞述語文を人称・数ごとに最大 50 例ずつ抽出し、述語人称標識のある例とない例の数を数える。

上記の手順で調査したところ、以下の表 106, 107 に示すような結果が得られた。

表 106 : 人称代名詞を持つ名詞述語文・形容詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (トルコ語)

人称代名詞	述語人称標識		計
	あり	なし	
1SG (benim)	45 (90.0)	5 (10.0)	50 (100.0)
1PL (bizim)	46 (92.0)	4 (8.0)	50 (100.0)
2SG (senin)	46 (92.0)	4 (8.0)	50 (100.0)
2PL (sizin)	48 (96.0)	2 (4.0)	50 (100.0)
計	185 (92.5)	15 (7.5)	200 (100.0)

表 107 : 人称代名詞を持つ名詞述語文・形容詞述語文における述語人称標識の出現頻度 (カザフ語)

人称代名詞	述語人称標識		計
	あり	なし	
1SG (meniñ)	32 (74.4)	11 (25.6)	43 (100.0)
1PL (bizdiñ)	14 (100.0)	0 (0.0)	14 (100.0)
2SG.FAM (seniñ)	15 (93.8)	1 (6.2)	16 (100.0)
2SG.FOR (sizdiñ)	3 (100.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
計	64 (84.2)	12 (15.8)	76 (100.0)

表 106 から分かるように、トルコ語の名詞述語文と形容詞述語文では、すべての人称・数で述語人称標識が現れない例が見られた。このことから、6.2.2.1 節で挙げた、Göksel and Kerslake (2005: 127) の「一人称もしくは二人称の主語を持つすべての文で、述語への適切な

人稱接辞の付加は、主語が文において代名詞によって別個に示されているかどうかに関わらず義務的である」という記述は正確ではないといえる。

表 107 から分かるように、カザフ語の名詞述語文と形容詞述語文では、特に一人称単数が主語の場合に述語人稱標識が現れない例が比較的多く見られた。6.2.2.3 節で述べたように、Muhamedowa (2016: 3) は、「コピュラ標識は一・二人称単数の人稱代名詞に付く場合、省略されうる」と記述しているが、述語人稱標識が現れていない 12 例はいずれも、述語が人稱代名詞以外であった。

タタール語の調査結果（表 60, 61）と比較すると、トルコ語とカザフ語の名詞述語文・形容詞述語文では、タタール語の名詞述語文・形容詞述語文よりも述語人稱標識の出現頻度が高いことが分かる。以下に、表 60, 61 を再掲する。

表 60 (再掲) : 人稱代名詞を持つ名詞述語文 (主節) における述語人稱標識の出現頻度 (タタール語)

人稱代名詞	述語人稱標識		計
	あり	なし	
1SG (min)	3 (3.0)	97 (97.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	0 (0.0)	100 (100.0)	100 (100.0)
計	3 (0.8)	397 (99.3)	400 (100.0)

表 61 (再掲) : 人稱代名詞を持つ形容詞述語文 (主節) における述語人稱標識の出現頻度 (タタール語)

人稱代名詞	述語人稱標識		計
	あり	なし	
1SG (min)	11 (11.0)	89 (89.0)	100 (100.0)
1PL (bez)	8 (8.0)	92 (92.0)	100 (100.0)
2SG (sin)	7 (7.0)	93 (93.0)	100 (100.0)
2PL (sez)	8 (8.0)	92 (92.0)	100 (100.0)
計	34 (8.5)	366 (91.5)	400 (100.0)

表 106, 107, 61 における所有人称接辞の出現頻度 (合計) についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(2) = 449.65, p < .05$)。残差分析を行ったところ、トルコ語とカザフ語の名詞述語文・形容詞述語文における所有人称接辞の出現頻度 (トルコ語が表

106、カザフ語が表 107) は、タタール語の形容詞述語文における所有人称接辞の出現頻度 (表 60) に比べて有意に高いことが示された。

トルコ語、カザフ語のいずれにおいても、一人称単数が主語の場合、自分の名前を名乗る表現で述語人称標識が現れない例が複数見られた。以下に例を 1 例ずつ挙げる。

トルコ語

- (8-55) Alo Mehmet ben Nehir.
もしもし PN 1SG PN
「もしもしメフメット、私はネヒル。」

カザフ語

- (8-56) Men Murat.
1SG PN
「私はムラットだ。」

名乗りの表現以外で、述語人称標識が現れていない例を以下に 1 例ずつ挙げる。トルコ語の例 (8-57) では、名詞述語 Türk「トルコ人」には一人称単数の標識が現れているが、Alman「ドイツ人」には二人称単数の標識は現れていない。カザフ語の例 (8-58) では、形容詞述語 žalyız「孤独な」に一人称単数の標識も二人称単数の標識も現れていない。

トルコ語

- (8-57) Ben Türk-üm, o Fransız, sen Alman.
1SG トルコ人-1SG それ フランス人 2SG ドイツ人
「私はトルコ人、彼はフランス人、君はドイツ人だ。」

カザフ語

- (8-58) Sen=de žalyız, men=de žalyız...
2SG=も 孤独な 1SG=も 孤独な
「君も孤独、私も孤独だ。」

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。インフォーマント調査は、トルコ語、カザフ語の名詞述語文・形容詞述語文を対象に行った。

トルコ語では、名乗りの表現 (8-59)b を除き、述語人称標識の現れていない分析型の例 (8-60~8-63)b は、人称・数、文の種類、述語の種類に関わらず「容認不可」と判定された。

(8-59) 「私はオヌルだ。」

- a. **Ben** Onur-**um**.
1SG PN-1SG
- b. **Ben** Onur.
1SG PN

(8-60) 「私は学生だ。」

- a. **Ben** öğrenci-**yim**.
1SG 学生-1SG
- b. ***Ben** öğrenci.
1SG 学生-1SG

(8-61) 「君は学生？」

- a. **Sen** öğrenci=**mi-sin**?
2SG 学生=Q-2SG
- b. ***Sen** öğrenci=**mi**?
2SG 学生=Q

(8-62) 「私は嬉しい。」

- a. **Ben** sevinçli-**yim**.
1SG 嬉しい-1SG
- b. ***Ben** sevinçli.
1SG 嬉しい

(8-63) 「君は嬉しい？」

- a. **Sen** sevinçli-**sin**.
2SG 嬉しい-2SG
- b. ***Sen** sevinçli.
2SG 嬉しい

カザフ語では、述語人称標識の現れていない分析型の例 (8-64 ~ 8-68)b は、(8-64, 8-65)b が「容認可～違和感がある」、(8-66 ~ 8-68) が「違和感がある～容認不可」と判定された。

(8-64) 「私はマリヤムです。」

- a. **Men** Mariyam-**mïn**.
1SG PN-1SG

- b. [?]**Men** Mariyam.
1SG PN

(8-65) 「私は学生です。」

- a. **Men** *student-pin*.
1SG 学生-1SG
- b. [?]**Men** *student*.
1SG 学生

(8-66) 「君は学生？」

- a. **Sen** *student-siq=be?*
2SG 学生-2SG=Q
- b. ^{??}**Sen** *student=pe?*
2SG 学生=Q

(8-67) 「私は嬉しい」

- a. **Men** *quwaništi-min*.
1SG 嬉しい-1SG
- b. ^{??}**Men** *quwaništi*.
1SG 嬉しい

(8-68) 「君は嬉しい？」

- a. **Sen** *quwaništi-siq=ba?*
2SG 嬉しい-2SG=Q
- b. ^{??}**Sen** *quwaništi=mi?*
2SG 嬉しい=Q

タタール語の同様の例文 (5-54~5-57) では、分析型が一般的であり、疑問文 (5-55, 5-57) では分析統合型の (5-55, 5-57)b が「容認不可」と判定された。このことから、トルコ語とカザフ語では、タタール語に比べて分析型の容認度が低いことが分かる。以下に、タタール語の (5-54~5-57) を再掲する。

(5-54) 「私は学生です。」

- a. **Min** *student*.
1SG 学生

- b. **Min** *student-mĭn.*
 1SG 学生-1SG

(5-55) 「君は学生？」

- a. **Sin** *student=mĭ?*
 2SG 学生=Q
- b. ***Sin** *student-siŋ=mĭ?*
 2SG 学生-2SG=Q

(5-56) 「私は（とても）嬉しい。」

- a. **Min** **(bik)** *šat.*
 1SG （とても） 嬉しい
- b. **Min** **(bik)** *šat-mĭn.*
 1SG （とても） 嬉しい-1SG

(5-57) 「君は（本当に）嬉しい？」

- a. **Sin** **(činnan=da)** *šat=mĭ?*
 2SG （本当に） 嬉しい=Q
- b. ***Sin** **(činnan=da)** *šat-siŋ=mĭ?*
 2SG （本当に） 嬉しい-2SG=Q

以上の調査結果から、この節の最初で述べたように、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）でも述語人称標識が現れない例が見られるが、タタール語に比べて少なく、容認度も低いことが分かる。よって、タタール語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現頻度は、トルコ語、カザフ語より低いと言える。以下、調査結果に関して考察を行う。

先行研究の記述によると、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語では述語人称標識が基本的に義務的であり、現代ウイグル語ではタタール語と同様に述語人称標識が随意的な場合があり、チュヴァシ語では述語人称標識が定形動詞にのみ現れ、その他の動詞や非動詞述語には現れない（第6章を参照）。

調査の結果と先行研究の記述から、タタール語における述語人称標識の全体的な出現頻度は、Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）よりは低いと考えられる。

現代ウイグル語における述語人称標識の出現傾向は、タタール語と類似しているといえる。6.2.2.6 節で述べたように、Hayasi (1993: 116) によると現代ウイグル語の述語のうち人称標識が義務的でないものには非動詞述語および動詞の意図形 *-maqçi*（タタール語の意図

形 **-mAKčE** に相当) と形動詞完了 **-ran** (タタール語の完了形 **-GAn** に相当) がある。5.2 節で述べたように、タタール語の非動詞述語文では述語人称標識の出現頻度が低く、動詞述語文のうち動詞の意図形 **-mAKčE** または完了形 **-GAn** が述語である文では述語人称標識が現れない分析型の例が比較的多くみられる。5.2 節では、意図形 **-mAKčE** と完了形 **-GAn** の名詞類的な性格が、非定形動詞形成接辞に由来する定形動詞接辞の中でも特に強いことについて述べた。6.2.2.6 節で述べたように、林 (1993: 117) によると、現代ウイグル語の意図形 **-maqči** と形動詞完了 **-ran** は、動詞 **bol-** の補語になりうる (述語となるために本来はコピュラを必要とした) 二次的な述語であり、同様に名詞類的な性格が強いと考えられる。

Hayasi (1993: 117) は、現代トルコ語の人称接語は、一人称もしくは二人称の主語を持つ文で用いられる際、現代ウイグル語とは異なり、ほぼ常に義務的であるとし、「接語の振る舞いにおけるこのような違いは、人称代名詞から接語への文法化の度合いと相関しているように思われる」と述べている。その根拠として Hayasi (1993: 117, 118) は、現代トルコ語の人称接語は形の上で人称代名詞とはかなり異なっているが、現代ウイグル語の人称接語と人称代名詞はほぼ同形であることを挙げている。しかし、この問題は複雑であるため、さらなる調査が必要であると Hayasi (1993: 118) は述べている。

トルコ語と現代ウイグル語以外のチュルク諸語で観察される状況は、Hayasi (1993) が述べるように複雑である。チュヴァシ語の述語人称標識 (表 91) は人称代名詞とはかなり異なっており、定形動詞にのみ現れる。その形式と分布からチュヴァシ語の述語人称標識は接辞であるとみなすことができる。チュヴァシ語の述語人称標識が定形動詞において義務的であることは、Hayasi (1993) の説を支持する。一方、現代ウイグル語と同じく述語人称標識 (代名詞型) が人称代名詞とほぼ同形であるカザフ語では、述語人称標識 (代名詞型) の出現頻度がタタール語よりも高く、分析型の構造の容認度が低い。さらに、タタール語では動詞述語文に比べて、非動詞述語文で述語人称標識 (代名詞型) の出現頻度が著しく低い (5.2 節の表 60 ~ 62 を参照)。これらのことから、Hayasi (1993) の言う (人称代名詞から接語への、形の上での) 「文法化の度合い」が同程度であっても、言語によって、さらに同一言語内でも述語の種類などによって、述語人称標識の出現頻度が異なる場合があるといえる。この要因の一つとしては、第 9 章で述べる言語接触の影響が考えられる。

結論

「結論」は、第9章「言語接触の影響の可能性」と第10章「本稿のまとめと今後の課題」からなる。

9. 言語接触の影響の可能性

タタール語における人称標識の出現傾向に関する調査結果（第5章）、タタール語以外の主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述（第6章）および調査結果（第8章）に基づけば、タタール語における人称標識の全体的な出現頻度は、Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）より低いといえる。これは、言語接触の影響によるものである可能性があると筆者は考える。

Siewierska (2004: 277-281) は、「典型的には、密接に系統的に関係した言語での人称の一致の存在は消失の指標とみなされる」と述べ、言語接触や言語委縮の結果として人称一致標識を消失した、もしくは一致標識が減少した言語について言及している。Siewierska (2004: 280) は、「言語委縮の場合、人称標識は最も影響を受けやすい文法標識の1つであると思われる」と述べている（2.2節を参照）。

Johanson (2002: 104) は、チュルク諸語における言語接触の影響に関して、「動詞の人称接辞も外来の影響下で削除されうる」と述べ、例として、中国語（シナ・チベット語族シナ語派）の影響下で話されるサラール語とサリグ・ヨグル語の定形動詞で人称標識が消失していることを挙げている¹⁰⁰。サラール語とサリグ・ヨグル語は述語人称標識を持っていないことに加え、所有人称接辞のパラダイムが不完全である。Tenišev (1976b: 54) は、両言語における所有人称接辞の不完全なパラダイムについて、「これら二言語における所有カテゴリーの形態的表現の薄れは、所有を分析的な形式で表す中国語の影響で説明できる。この言語の影響をより長く経験したサリグ・ヨグル語では、崩壊のプロセスがサラール語よりも進んでいる」と述べている（6.2.1.6節を参照）。

現代ウイグル語における述語人称標識の出現傾向にも、言語接触が影響している可能性がある。主に中国の新疆ウイグル自治区に話者が分布する現代ウイグル語は、（程度の差はあるだろうが）中国領内に話者が分布するサラール語やサリグ・ヨグル語と同様に、中国語の影響を受けている。中国語は孤立型の言語であり、所有人称標識も述語人称標識も持たない。本稿では現代ウイグル語に関する調査は行うことができなかったが、6.2.2.6節で述べた Hayasi (1993) の記述から、トルコ語などに比べて述語人称標識の出現頻度が低いことが推

¹⁰⁰ 両言語は周辺のチベット語やモンゴル系諸言語とも接触しており、人称標識の消失が中国語のみの影響であると断定することはできないと筆者は考える。Janhunen (2012: 178) によると、両言語は周辺の漢語方言、チベット系およびモンゴル系の諸言語とともにアムド言語連合 (Amdo Sprachbund) を形成しており、チベット語と同様に視点 (perspective) カテゴリー（主観・客観を区別するカテゴリー）を持っている。Janhunen (2012: 182) は、アムド言語連合に属するチュルク諸語（サリグ・ヨグル語とサラール語）が、述語人称標識の体系を失った唯一のチュルク諸語であること理由は、視点カテゴリーが（人称標識自体は含まないとはいえ）、人称カテゴリーと重複していることであると述べている。

察される。これは、中国語との接触の影響による部分もあると考えられる。

タタール語は、チュヴァシ語、ウラル語族フィン・ウゴル語派のマリ語、ウドムルト語などの近隣言語と、ヴォルガ・カマ言語連合 (Volga-Kama Sprachbund) を形成しており (Helimski 2003: 159, 160)、さらにロシア語と数世紀にわたって接触してきた。タタール語の人称標識の出現頻度が他の主な Common Turkic の言語に比べて低いのは、これら周辺言語 (特に上層言語であるロシア語) との接触の影響による部分もあることが推察される。

Johanson (1998b: 121) は、多くのチュルク語が現代にロシア語の影響を受けたが、ロシア語と初期に接触があった言語 (タタール語、バシキール語) では、その影響はより深いとしている。その影響の深さは、5.1 節で挙げたものも含め、ロシア語直訳的な表現が多くみられることから見て取れる (例: タタール語 *Minä yegerme yäš.* ロシア語 *Mne dvadcat' let.* [1SG.DAT 二十 歳]「私は 20 歳だ」)。

以下に、タタール語とその周辺言語 (ロシア語、チュヴァシ語)、および (比較のため) トルコ語における人称標識の分布 (領域内に人称代名詞を含む場合) を簡潔に示した表 108 を挙げる。◎は多くの場合義務的であること、○は多くの場合随意的であること、△は稀であること、×は標識が存在しないことを表わす。

表 108 : タタール語とその周辺言語およびトルコ語における人称標識の分布

	所有人称	述語人称	
		動詞述語 ¹⁰¹	非動詞述語
トルコ語	◎	◎	◎
タタール語	○	◎~○	△
チュヴァシ語	△	◎/×	×
ロシア語	×	◎/×	×

タタール語の周辺言語 (表 108 に示したロシア語とチュヴァシ語に加え、ウラル語族のマリ語とウドムルト語) は非動詞述語に付加する人称標識を持たず、ロシア語は所有人称標識も持たない。タタール語とチュヴァシ語において一般的な分析型の構造 (9-1a, b; 9-2a, b) は、ロシア語の表現 (9-1c, 9-2c) と構造的に並行している。

(9-1) 「私は教師だ」 (a. タタール語、b. チュヴァシ語、c. ロシア語)

- a. Min uq̇ituwčĭ.
- b. Epĕ vĕrenteken.
- c. Ja učitel'.
- 私は 教師

¹⁰¹ チュヴァシ語とロシア語には、人称標示が義務的な動詞述語と、人称標示がなされない動詞述語が存在する。

(9-2) 「私たちの村」 (a. タタール語、b. チュヴァシ語、c. ロシア語)

- | | | |
|----|--------|----------|
| a. | bezneŋ | awıl |
| b. | pirēn | yal |
| c. | naša | derevnja |
| | 私たちの | 村 |

タタール語で非動詞述語文における述語人称標識の出現頻度が低く、分析型の構造が一般的なのは、非動詞述語に付加する人称標識を持たない周辺言語の影響である可能性がある¹⁰²。所有人称接辞についても、属格人称代名詞が現れる場合の出現頻度が他の主なチュルク諸語に比べて低いことには、やはり所有人称標識を持たず分析型の構造を用いるロシア語との接触の影響があることが推察される¹⁰³。

¹⁰² 後置された代名詞を起源とする代名詞型の述語人称標識に関しては、元々義務的ではなく、トルコ語などで文法化が進んで義務化していったと考えることもできる。この場合、タタール語や現代ウイグル語の祖先が周辺言語の影響を受ける前の段階でこの標識がどの程度文法化していたかによるが、周辺言語が文法化を食い止める役割を担った可能性もある。

¹⁰³ 5.1 節で述べたように、一部のロシア語直訳的表現では所有人称接辞が現れない。Ovsjannikova and Say (2014: 189) は、バシキール語の一・二人称複数の所有名詞句において、従属部標示の構造（分析型）が特に若い話者にとって基本的な選択肢であると述べている。タタール語およびバシキール語の若い話者の多くはロシア語とのバイリンガルであり、ロシア語の影響を強く受けている。ただし、Dmitriev (1956: 34) が分析型の所有構造について、「8 世紀のオルホン碑文にも見られるため、これをロシア語の影響で生まれた構造であるとするのは正しくない」と述べているように、分析型の構造自体は古くから存在していた。

10. 本稿のまとめと今後の課題

本稿は、タタール語および他の主なチュルク諸語を対象にコーパスを用いた定量的調査を主とした調査を行い、1) タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにすること、2) タタール語における人称標識の出現傾向を他の主なチュルク諸語と比較し、タタール語のチュルク諸語における位置づけを行うこと、を目的とした。調査結果から本稿では、主に以下の二点を主張した。

1) タタール語における人称標識の出現傾向は複数の要因によって異なっていること（主要要因をまとめた表2を以下に再掲する）。

表2（再掲）：人称標識の出現傾向とそれに影響している要因

人称標識	要因	出現傾向
所有人称接辞	人称・数	2SG 標識 > 1PL 標識
	主要部要素の種類	述語 > 被所有名詞 > 後置詞的名詞
	従属部と主要部の距離	非隣接 > 隣接
述語人称標識	標識の種類	所有型 > 代名詞型
	主要部要素の種類	動詞 > 形容詞 > 名詞
	節の種類	非動詞述語文：その他 > =mE 疑問文 動詞述語文：主節 > 引用節

2) タタール語における人称標識の出現頻度は他の主なチュルク諸語に比べて低く、これが言語接触の影響によるものである可能性があること。

以下、まず 10.1 節で本稿（本論と結論）の内容をまとめ、10.2 節で今後の課題を挙げる。

10.1. 本稿のまとめ

本論第一部では、タタール語における人称標識の出現傾向について述べた。

タタール語の人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述は不十分である。さらにそれらの記述は、定量的調査を行った上でのものではない。よって、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、タタール語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があると筆者は考えた。

調査に際し、まず表1に挙げた所有人称接辞と述語人称標識（代名詞型・所有型）を人称標識とみなし、これらが現れうる領域（表41）を分類した。次に、人称標示構造を統合型、分析統合型、分析型に分類し、調査対象を分析統合型および分析型とした。

所有人称接辞に関する調査の結果から、主に、1) 人称・数、2) 主要部要素の種類、3) 従属部と主要部の距離、が所有人称接辞の出現頻度に影響していることを示した（所有人称

接辞を義務的にする個別具体的な要因を除く)。より具体的には、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いこと、2) 後置詞句や、後置詞的に機能する名詞が主要部である名詞句で所有人称接辞の出現頻度が低く、動名詞や非定形コピュラ *ikänlek* が主要部である名詞節で所有人称接辞の出現頻度が高いこと、3) 従属部と主要部が隣接している場合に所有人称接辞の出現頻度が低く、隣接していない場合に所有人称接辞の出現頻度が高いこと、を示した。これらの調査結果から筆者は、1) 一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向は、人称階層 (図 9) が示す通言語的な傾向には沿っておらず、接辞の長さ、指示対象の数といった要因が関係している可能性があること、2) 所有人称接辞の出現頻度が、後置詞句や、後置詞的に機能する名詞が主要部の名詞句で低く、動名詞や非定形コピュラ *ikänlek* が主要部の名詞節で高いことは、述語階層 (図 5) が示す通言語的な傾向に沿っていること、一方、所有人称接辞が譲渡可能名詞よりも譲渡不可能名詞で現れやすいという傾向は見られず、被所有名詞階層 (図 7) が示す通言語的な傾向には沿っていないこと、3) 所有人称接辞の出現頻度が、従属部と主要部が隣接している場合に低く、隣接していない場合に高いのは、従属部と主要部の距離が離れるほど、それらの関係が所有人称接辞なしでは分かりにくくなるためであること、を主張した。

述語人称標識に関する調査の結果から、述語人称標識の出現傾向は主に、1) 標識の種類、2) 主要部 (述語) の種類、3) 節の種類、によって異なることを示した。より具体的には、1) 所有型の標識に比べ、代名詞型の標識の出現頻度が低いこと、2) 述語人称標識の出現頻度は、述語が非動詞述語である場合に低く、動詞述語である場合に高いこと、非動詞述語文では、名詞述語よりも形容詞述語 (特に感情やモダリティを表わす形容詞) で高いこと、動詞述語文では、述語が意図形 *-mAKčE*、(結果状態を表わす) 完了形 *-GAn* の動詞である場合に低いこと、3) 非動詞述語文では *=mE* 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いこと、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いこと、を示した。これらの調査結果から筆者は、1) 所有型の標識に比べて代名詞型の標識の出現頻度が低いのは、代名詞型の標識の方が独立性が高いためであること、2) 主要部要素の種類による述語人称標識の出現頻度は大まかに「動詞 > 形容詞 > 名詞」であるといえ、この傾向は意味論的述語階層 (図 6) が示す通言語的な傾向に沿っていること、3) 非動詞述語を持つ *=mE* 疑問文で述語人称標識の出現頻度が特に低いのは、非動詞述語文で述語人称標識が主に強調して述べる必要がある場合に用いられる、つまり疑問モダリティとは相容れない断言モダリティを表わすことが多いためであること、動詞述語文では主節に比べて引用節で述語人称標識の出現頻度が低いが、これは主節主語の視点が関係しているためであること、を主張した。

本論第二部では、チュルク諸語におけるタタール語の位置づけを試みた。

タタール語以外の主なチュルク諸語における人称標識の出現傾向に関する先行研究の記述も不十分である。さらにそれらの記述も、定量的調査を行った上でのものではない。よっ

て、タタール語以外の主なチュルク諸語を対象に、コーパスを用いた定量的調査を中心とした調査を行い、それぞれの言語における人称標識の出現傾向を明らかにする必要があると筆者は考えた。

調査対象の言語は、トルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）、カザフ語（北西語群）、チュヴァシ語（オグル語群）とし、それぞれの言語でタタール語の人称標識（表1）に対応する標識（表95～98）の出現傾向を調査した。

所有人称接辞に関する調査の結果から、1）タタール語における所有人称接辞の全体的な出現頻度は、チュヴァシ語よりは高いが、トルコ語、ウズベク語、カザフ語よりは低いこと、2）トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語においても、所有人称接辞の出現頻度が人称・数によって異なっており、一人称複数標識の出現頻度が最も低いというタタール語と同様の傾向が見られること、3）主要部が後置詞的に機能する補助名詞である場合に所有人称接辞の出現頻度が低いというタタール語で見られる傾向が、トルコ語、ウズベク語、カザフ語では見られないこと、4）トルコ語、ウズベク語、カザフ語の関係節名詞句と名詞節では所有人称接辞がほとんどの場合現れること、を示した。先行研究の記述および調査結果から筆者は、1）多くのチュルク諸語において、一人称複数標識の出現頻度が他に比べて低く、二人称単数標識の出現頻度は高いという傾向が共通している可能性があること、2）タタール語を含めた主なチュルク諸語で一人称複数標識の出現頻度が低いのは、一人称複数という人称・数の持つ特性が影響しているためである可能性があること、3）チュルク諸語の中で所有人称接辞が最も衰退しているサリグ・ヨグル語において、本来は二人称単数を表わしたであろう形式 $-(D)ŋ$ が残存していることと、本稿で定量的調査を行った5言語（タタール語、トルコ語、ウズベク語、カザフ語、チュヴァシ語）において、二人称単数の所有人称接辞の出現頻度が高いことは、関連している可能性があること、4）一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという傾向は牧地マリ語（ウラル語族フィン・ウゴル諸語）でも見られるため、チュルク諸語に限られないこと、を主張した。

述語人称標識に関する調査の結果から、トルコ語、カザフ語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）でも述語人称標識が現れない例が見られるが、タタール語に比べて少なく、容認度も低いことを示した。よって、タタール語の非動詞述語文（名詞述語文・形容詞述語文）における述語人称標識の出現頻度は、トルコ語、カザフ語より低いと言えることについて述べた。先行研究の記述および調査結果から筆者は、言語による述語人称標識の（人称代名詞から接語への、形の上での）「文法化の度合い」（Hayasi 1993: 117）の違いが、言語による述語人称標識の出現頻度の差と関係している可能性がある一方で、述語人称標識の「文法化の度合い」が同程度であっても、言語間や同一言語内で述語人称標識の出現頻度に差が見られる場合もあることについて述べた。

最後に**結論**で、タタール語における人称標識の全体的な出現頻度が Common Turkic に属する主な言語（トルコ語、ウズベク語、カザフ語、サハ語）より低いのは、ロシア語などの周辺言語との言語接触によるものである可能性を提示した。

10.2. 今後の課題

まず、本論第一部に関する今後の課題を挙げる。

本稿では、主に分析型と分析統合型の構造（従属部または主語が、主要部の前方に現れる単一の人称代名詞であるもの）を調査対象とした。従って、以下のものは調査対象外とした。今後は以下のものについても調査を行い、タタール語における人称標識の出現傾向に関してより網羅的に記述する必要がある。

1) 統合型の構造

人称標示の全体像を知る上では、統合型も併せて扱うことが必要である。分析統合型に比べて分析型の出現頻度が圧倒的に高いタタール語の後置詞句では、統合型もほとんど見られないという特徴がある（例えば、分析型 **bez-neŋ xaqta** [1PL-GEN について]「我々について」が CWT から 688 例抽出されたのに対し、統合型 **xaq-ibiz-da** [(語幹)-1PL.POSS-LOC] は 0 例であった)。一方、タタール語の後置詞句に比べて分析統合型がより多く見られるトルコ語の後置詞句では、統合型も観察される（例：**Hakk-ımız-da** [(語幹)-1PL.POSS-LOC]「(ウェブサイトなどで見られる) About Us」)。今後は、このような統合型との相互関係についても調査する必要がある。コーパス調査では統合型のみを抽出することが難しいため、実現可能な調査方法を見つけることが課題である。

2) 従属部または主語と主要部が倒置された構造

従属部または主語と主要部が倒置された構造（例：**bala-m minem** [子供-1SG.POSS 1SG.GEN]「わが子よ」）における人称標識の出現傾向について調査することも今後の課題である。菱山 (2019a) では、従属部または主語と主要部が倒置された所有名詞句について扱っているが、関係節名詞句、名詞節、定形節に関する調査は行うことができていない。

3) 従属部または主語が人称代名詞以外の要素であるもの

再帰代名詞の人称形が従属部である場合、主要部に所有人称接辞が現れうる（例：**üz-em-neŋ yalyış-ım** [自身-1SG.POSS 過ち-1SG.POSS]「私自身の過ち」）。よって、人称代名詞が従属部である場合に比べ、再帰代名詞の人称形が従属部である場合の主要部における所有人称接辞の出現傾向にどのような特徴があるのかについて調査することも今後の課題として挙げられる。

代名詞化した限定詞が従属部または主語である場合は、主要部に人称標識が現れる場合も現れない場合もある（例：**Barı-biz=da bel-ä(-bez)**. [全ての-1PL.POSS 知る-PRS(-1PL)]「私たち全員が知っている」）。この問題は菱山 (2019b) で扱っているが、調査対象が現在形、過去形を述部とする定形節と所有名詞句に限られており、今後さらに調査する余地がある。

4) 従属部または主語が人称代名詞を含む等位名詞句であるもの

Zäkiev et al. (2017: 120) は、*häm* 「～と～」で結びついた等位名詞句が主語の場合、「一人称と二人称の代名詞が等位主語である場合は一人称と、二人称と三人称の代名詞が等位主語である場合は二人称と、一人称と三人称の代名詞が等位主語である場合は一人称と述語は一致する。主語はそれぞれは単数（人称）であるが、述語は複数（人称）で標示される」と述べている（例：*Yäliy häm min utin-ya bar-a-biz*. [PN と 1SG 薪-DAT 行く-PRS-1PL] 「ガリーと私は薪割りに行く」）。さらに Zäkiev et al. (2017: 120) は、等位名詞句が *yäki* 「～または～」で結びつく場合、「述語は自身に近い位置にある主語の人称・数と一致する」と述べている（例：*Sin yäki min bar-ir-min*. [2SG または 1SG 行く-FUTI-1SG] 「君か私が行く」）。しかし、そうでないものも観察される（例：*Abiy häm min tuw-di-m*. [兄 と 1SG 生まれる-PST-1SG] 「兄と私が生まれた」、*min yäki Danil berär qizniñ bilennän alip tancyya čiq-sa-q* [1SG または PN(中略) 出る-COND-1PL] 「私、またはダニルが、ある女の子の腰に手をまわし、踊りに出たら」）。人称代名詞を含む等位名詞句が従属部である名詞句や名詞節でも類似の現象が観察される（例：*minem häm sineñ din-eñ* [1SG.GEN と 2SG.GEN 宗教-2SG] 「私と君の宗教」、*minem häm sineñ dust-ibiz* [1SG.GEN と 2SG.GEN 友-1PL] 「私と君の友達」）。よって、従属部または主語が人称代名詞を含む等位名詞句である場合の人称標識の出現傾向についても今後調査する必要がある。

5) 述語が人称代名詞を含む複数の主語項をとるもの

述語が人称代名詞を含む複数の主語項をとる場合、述語に異なる人称標識が現れうる（例：*Min sine, sin mine tabiš-ti-q*. [1SG 2SG.ACC 2SG 1SG.ACC 見つけ合う-PST-1PL] 「私は君を、君は私を見つけた」、*Min sine, sin mine bel-miy-señ*. [1SG 2SG.ACC 2SG 1SG.ACC 知る-NEG.PRS-2SG] 「私は君を、君は私を知らない」）。よって、述語が人称代名詞を含む複数の主語項をとる場合の述語人称標識の出現傾向についても、4) と併せて研究する必要がある。

加えて、1) 譲渡可能性に関して、譲渡不可能性階層（図 8）に基づいた調査を行うことを含め、主要部要素の種類による所有人称接辞の出現傾向の違いに関して、より詳細な調査を行うこと、2) 格接辞の有無が所有人称接辞の出現頻度に影響するかを調査すること、3) 名詞、形容詞以外の非動詞述語、条件形における述語人称標識の出現傾向について調査を行うこと、も今後の課題である。

調査方法としては、コーパスを用いた定量的調査と、インフォーマントの協力による容認度調査を併用したが、それぞれに問題点がある。

まず、コーパス (CWT) については、1) タグ付けが正確ではない、2) 重複例が多く含まれる、といった問題点がある。よって、検索方法の工夫や、目視によるノイズ除去を行った。しかし、これらの対策によってコーパスの問題点を完全に補えたとは言えない。例えば、形動詞を主要部とする名詞節に関しては、1) の問題点により主格項の名詞節をノイズとし

て除去したため、所有人称接辞の全体的な出現頻度を明らかにすることができなかった(5.1節を参照)。同様の理由で、形動詞を持つ複合述語構文における所有人称接辞の出現頻度も調査することができなかった。タグ付け精度の向上を含めた、コーパスの質の向上が俟たれる。調査では多くの場合、対象の構造を人称・数ごとに50例ずつ、もしくは100例ずつ抽出し、人称標識の出現傾向を調べた。今後は、抽出数を増やすことでデータの正確性を向上させたい。他に取得した調査方法としては、コーパスから作業用のデータセットを作成し、それに対して各要因のタグ付けを行い、各要因がそれぞれの程度の影響力を持つのかを統計的手法により明らかにするというものがある(野元 p.c.)。この調査方法を用いれば、データ収集から始まる類似の作業を項目ごとに繰り返す必要はなくなり、複数の要因を比べることもできる。よって、今後はこの調査方法を用いることを検討したい。

インフォーマント調査に関しては、インフォーマントが一人と少ないことが問題点として挙げられる。今後はインフォーマントの人数を増やし、より正確な容認度を調査する必要がある。

考察に関しても、十分検討できていない問題が残されている。人称・数による所有人称接辞の出現頻度は、多くのデータで一人称複数標識の出現頻度が最も低く、二人称単数標識の出現頻度が最も高いという共通の傾向を示していることが分かった。人称階層(図9)が示す通言語的な傾向に沿っていないこの傾向は、指示対象の数によって部分的に説明できるが、二人称単数標識の出現頻度が最も高いことは説明できない。この仮説の妥当性を確かめるには、二人称複数代名詞の指示対象が二人称複数か二人称単数敬称かで所有人称接辞の出現頻度に差があることを示す必要がある。この点も含め、タタール語における人称標識の出現傾向に関して、通言語学的な階層に沿う沿わないだけでなく、なぜそうなのかについてさらなる考察を行うことも今後の課題である。

次に、本論第二部に関する今後の課題を挙げる。

チュルク諸語全般および個別言語に関する先行研究は膨大である。本稿では、個別言語に関する先行研究として、文章語を持ち、それぞれの語群の主要な(話者数の多い)言語であるトルコ語(南西語群)、ウズベク語(南東語群)、カザフ語(北西語群)、サハ語(北東語群)、チュヴァシ語(オグル語群)および、現代ウイグル語、サラール語、サリグ・ヨグル語(いずれも南東語群)の主な研究をとりあげるに留まった。そのため、今後は他の言語に関するものを含め、より多くの先行研究を見る必要がある。

調査対象に関する問題点として、まず調査対象とした言語が4言語にとどまったことが挙げられる。調査対象の言語は、1)それぞれの語群の代表的な(話者数の多い)言語であること、2)筆者がある程度の知識を持ち、分析を行える言語であること、3)コーパス調査とインフォーマント調査が可能な言語であること、の3つの条件に当てはまるトルコ語(南西語群)、ウズベク語(南東語群)、カザフ語(北西語群)、チュヴァシ語(オグル語群)とした。北東語群で最も話者数の多い言語であるサハ語は、2)、3)の条件に当てはまらなかったため、本稿では調査対象外とした。現代ウイグル語(南東語群)は、特に述語人称

標識の出現傾向がタタール語と類似しており（6.2.2.6 節を参照）、タタール語と対照することが望ましかったが、サハ語と同様に、2）、3）の条件に当てはまらなかったため調査対象外とした。述語人称標識の出現傾向に関しては、主にコーパスの機能の問題から、これら4言語のうちトルコ語とカザフ語のみを調査対象とした。今後は、より多くの言語を対象に調査を行うことを目指したい。

加えて、タタール語以外の調査対象言語に関しても、タタール語と同じく主に分析型と分析統合型の構造（従属部または主語が、主要部の前方に現れる単一人称代名詞であるもの）を調査対象とした。従って、1）統合型の構造、2）従属部または主語と主要部が倒置された構造、3）従属部または主語が人称代名詞以外の要素であるもの、4）従属部または主語が人称代名詞を含む等位名詞句であるもの、5）述語が人称代名詞を含む複数の主語項をとるもの、は同じく調査対象外とした。今後はこれらについても調査し、タタール語と対照を行う必要がある。

調査で用いたそれぞれの言語のコーパスは、量も質も異なっている。よって、調査結果にはそれぞれの言語の違いだけではなく、コーパスの違いも反映されている可能性がある。さらに、それぞれの言語に関して、本論第一部でタタール語に関して行った調査と同規模の調査は行えていない（例えば、関係節名詞句に関しては名詞化関係節の調査が行えていない）。インフォーマントも各言語一人ずつと少ない。今後はより大規模な調査を行い、チュルク諸語におけるタタール語の位置づけをより正確に行う必要がある。

考察では、所有人称接辞に関して、一人称複数標識の出現頻度が低く、二人称単数の出現頻度が高いという傾向が、なぜ主なチュルク諸語および一部の別系言語に共通して見られるのかを明らかにするには至らなかった。今後は、これを解明すること、所有人称接辞を持つ他の言語に関しても類似の調査を行い、同様の傾向が通言語的に見られるかどうかを調べる必要がある。

最後に結論では、タタール語における人称標識の出現頻度が他の主な **Common Turkic** の言語に比べて低いことが、言語接触によるものである可能性を提示した。この可能性を確かめるためには、数世紀前のロシア語の姿や、接触状況がどうだったか、接触によってどうして人称標識の出現頻度が減少するのかまで踏み込まなければならない。また、周辺の印欧語の影響を強く受けたガガウズ語（南西語群）をはじめ、本稿で扱わなかった他のチュルク諸語における状況についても調査する必要がある。

初出一覧

本稿の一部は、以下に挙げる各稿を大幅に加筆・修正したものをもとにしている。

本論第一部

Xisiyama, Yu. (2016) *Tatar häm başqort tellärendä tartım formalarınıñ semantik-morfologik üzençälekläre*. [タタール語とバシキール語における所有形式の意味論的・形態論的特徴] Magistrlıq dissertatsiäse, Qazan federal' universiteti.

菱山湧人 (2017) 「タタール語の所有構造について」 修士論文, 東京外国語大学.

菱山湧人 (2019a) 「タタール語の所有名詞句における所有人称標示」『言語・地域文化研究』 25: 93-114.

菱山湧人 (2020a) 「タタール語の関係節における主語人称標示」『言語・地域文化研究』 26: 33-47.

菱山湧人 (2020b) 「タタール語の非動詞述語文における主語人称標示」『北方言語研究』 10: 83-98.

筆者の修士論文である Xisiyama (2016) および菱山 (2017) では、タタール語の所有構造における所有人称接辞の出現傾向を扱った。修士論文では、定量的調査を、名詞が主要部の構造に関してのみ行い、その他に関しては用例を挙げるにとどまった。菱山 (2019a) は、菱山 (2017) の所有名詞句に関する部分を大幅に加筆・修正したものである。菱山 (2020a) は、関係節名詞句における所有人称接辞を対象に、菱山 (2020b) は非動詞述語文における述語人称標識を対象に、定量的調査を行ったものである。本稿では、加えて名詞節や動詞述語文における人称標識も対象に、より網羅的に調査を行った。ただし、本稿で示したデータはいずれも再調査を行っており、上記の各稿におけるデータとは異なっている。

本論第二部

Xisiyama, Yu. and G. Ä. Näbiullina (2019) *Tatar, başqort häm çuşı telläreneñ tartım konstruktsiälärendä I häm II zat tartım quşımçalarınıñullanılı yışlığı* [The First and Second Person Affixes in Possessive Constructions of the Tatar, Bashkir and Chuvash Languages: Frequency of Use]. *Tatarica* (13): 7-17.

Xisiyama and Näbiullina (2019) では、タタール語、バシキール語、チュヴァシ語の所有名詞句における所有人称接辞の出現頻度について扱った。本論第二部では、タタール語と大きな差が見られなかったバシキール語は扱わず、チュヴァシ語に加えてトルコ語、ウズベク語、カザフ語を扱った。なお、本稿で示したタタール語およびチュヴァシ語のデータはいずれも再調査を行っており、上記の論文におけるデータとは異なっている。

参考文献

- Alparov, Ğ. (1945) *Saylanma xezmätlär (Tatar grammatikası häm ğomumi tel beleme mä's'üläläre)*.
[論文集 (タタル語文法および一般言語学の諸問題)] Qazan.
- Andreev, I. A. (1961) *Pričastie v čuvašskom jazyke*. Čeboksary: Čuvaškoe gosudarstvennoe izdatel'stvo.
- _____ (1966) Čuvaškij jazyk. In: V. V. Vinogradov (ed.) *Jazyki narodov SSSR. Tom II. Tjurkskie jazyki*, 43-65. Moskva: Izdatel'stvo Nauka.
- Baitchura, U. (1993) An overview of the development of Tatar linguistics in the Soviet time.
Journal of Turkish Studies 17: 9-36.
- Berta, Á. (1998) Tatar and Bashkir. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 283-300. London, New York: Routledge.
- Boeschoten, H. (1998) Uzbek. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 357-378. London, New York: Routledge.
- Clark, L. (1998) Chuvash. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 434-452. London, New York: Routledge.
- Comrie, B. (1998) Rethinking the typology of relative clauses. *Language design* 1: 59-86.
- Corbett, G. G. (2000) *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Csató, E. A. (2019) On Turkish non-canonical possessives. In: L. Johanson et al. (eds.) *Possession of languages in Europe and North and Central Asia*, 85-102. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Cysouw, M. (2003) *The Paradigmatic Structure of Person Marking*. New York: Oxford University Press.
- Dmitriev, N. K. (1956) Kategorija prinadležnosti. In: N. K. Dmitriev (ed.) *Issledovanija po sravnitel'noj grammatike tjurkskix jazykov. Č. II. Morfologija*, 22-37. Moskva: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.
- 江畑冬生 (2018) 「統語的要素を含む派生に見る語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題」『東京大学言語学論集』 39: 41-53.
- _____ (2020) 『サハ語文法 統語的派生と言語類型論的特異性』 東京: 勉誠出版.
- Ersen-Rasch, Margarete I. (2009) *Tatarisch: Lehrbuch für Anfänger und Fortgeschrittene*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.
- 原明海 (2019) 「サラール語における所有表現について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』 15: 227-234. 東京外国語大学.
- Harris, A. C. (2001) Focus and universal principles governing simplification of cleft structures. In J. T. Faarlund (ed.) *Grammatical Relations in Change* [Studies in Language Companion Series 56], 159-170. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

- Harris, A. C. and L. Campbell (1995) *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective*. Cambridge: CUP.
- 服部四郎 (1940) 「タタール語の数詞のアクセント」服部四郎『アルタイ諸言語の研究 1』236-249. 東京: 三省堂.
- _____ (1941) 「タタール語の述語人称語尾とアクセント」『言語研究』7-8: 68-82.
- _____ (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15: 1-26.
- _____ (1972) 「タタール語の成立とチュワシュ族の起源」服部四郎『アルタイ諸言語の研究 3』140-156. 東京: 三省堂.
- Hattori, S. (1975) Phonological interpretation of Tatar high vowels. 服部四郎『アルタイ諸言語の研究 4』256-264. 東京: 三省堂.
- _____ (1983) Vowel harmony or consonant harmony? 服部四郎『アルタイ諸言語の研究 4』319-327. 東京: 三省堂.
- Hayasi, T. (1993) Personal Enclitics in Modern Uyghur. *Türk Dilleri Araştırmaları* 3: 109-118.
- 林徹 (1989a) 「タタール語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典: 世界言語編 (中) さ-に 第2巻』620-626. 東京: 三省堂.
- _____ (1989b) 「トルコ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典: 世界言語編 (中) さ-に 第2巻』1383-1395. 東京: 三省堂.
- _____ (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社.
- Heine, B. and M. Reh (1984) *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*. Hamburg: Helmut Buske.
- Helimski, E. (2003) Areal groupings (Sprachbünde) within and across the borders of the Uralic language family: A survey. *Nyelvtudományi Közlemények* 100: 156-167.
- 日高晋介 (2020) 「ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節について」博士論文. 東京外国語大学.
- 菱山湧人 (2018) 「タタール語の形動詞を含む複合述語構文における主語人称標示」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』14: 27-44.
- _____ (2019a) 「タタール語の所有名詞句における所有人称標示」『言語・地域文化研究』25: 93-114.
- _____ (2019b) 「タタール語における代名詞化した限定詞との一致について」『日本言語学会第159大会 予稿集』152-158.
- _____ (2020b) 「タタール語の非動詞述語文における主語人称標示」『北方言語研究』10: 83-98.
- İşsever, S. (2003) Information structure in Turkish: the word order - prosody interface. *Lingua* 113 (11): 1025-1053.
- Janhunen, J. (2012) On the hierarchy of structural convergence in the Amdo Sprachbund. In: P. Suihkonen, B. Comrie and V. Solovyev (eds.) *Argument Structure and Grammatical Relations*:

- A Crosslinguistic Typology*, 177-189. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Johanson, L. and É. Á. Csató (eds.) (1998) *The Turkic Languages. Routledge Language Family Descriptions*. London, New York: Routledge.
- Johanson, L. (1998a) The Structure of Turkic. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 30-66. London, New York: Routledge.
- _____ (1998b) The History of Turkic. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 81-125. London, New York: Routledge.
- _____ (2002) *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. Richmond: Curzon.
- _____ (2008) Tatar. In: K. Brown and S. Ogilvie (eds.) *Concise Encyclopedia of Languages of the World (Concise Encyclopedias of Language and Linguistics)* 12, 509-512. Oxford: Elsevier Science.
- Kirchner, M. (1998) Kazakh and Karakalpak. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 318-332. London, New York: Routledge.
- Kononov, A. N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*. Moskva / Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Krueger, J. (1961) *Chuvash Manual. Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 7. The Hague: Mouton.
- Kunduracı, A. (2015) Türkçede Aitlik Ulamı ve Biçimsel İfadesi. [トルコ語における関係カテゴリーと形態的表現] *Dilbilim Araştırmaları Dergisi*, 2015/1: 43-62.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish Grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- 马伟 (2013) 《撒拉语形态研究》中央民族大学.
- Muhamedowa, R. (2016) *Kazakh: A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.
- 中嶋善輝 (2013) 『カザフ語文法読本』東京: 大学書林.
- Nichols, J. (1986) Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* (62): 56-119.
- _____ (1988) On alienable and inalienable possession. In: W. Shipley (ed.) *In honor of Mary Haas; from the Haas Festival Conference on Native American Linguistics*, 557-609. Berlin: Mouton de Gruyter.
- _____ (1992) *Linguistic Diversity in Space and Time*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 新田志穂 (2015) 「現代ウイグル語の動詞形態論」博士論文. 岡山大学.
- Ovsjannikova, M. and S. Say (2014) Between predicative and attributive possession in Bashkir. In: P. Suihkonen and L. J. Whaley (eds.) *On diversity and complexity of languages spoken in Europe and North and Central Asia*, 175-201. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Öztürk, B., E. E. Taylan and K. Zimmer (2015) Possessive-free genitives. In: D. Zeynek et al. (eds.) *Ankara papers in Turkish and Turkic linguistics (Turcologica 103)*, 1189-1203. Wiesbaden: Harrassowitz.

- Pavlov, I. P. (2014) *Sovremennyj Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija. Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.*
- Poppe, N. (1963) *Tatar Manual – descriptive grammar and texts with a Tatar-English glossary.* Bloomington: Indiana University.
- 櫻間瑛・中村瑞希・菱山湧人 (2017) 『タタールスタンファンブック：ロシア最大のテュルク系ムスリム少数民族とその民族共和国（連邦制マニアックス）』東京：パブリブ.
- Sayxunov, M., T. İbrahimov and İ. Sälimcanov (2012) Tatar teleneñ yazma korpusı. [タタール語の書き言葉コーパス] *Fän häm tel.* 2012 (1-2): 26-30.
- Schönig, C. (1984) *Hilfsverben im Tatarischen. Untersuchung zur Funktionsweise einiger Hilfsverbverbindungen.* Wiesbaden: Franz Steiner-Verlag.
- _____ (1997) A new attempt to classify the Turkic languages (2). *Turkic languages* 1: 262-277.
- Schroeder, C. (1999) *The Turkish nominal phrase in spoken discourse* (Turcologica 40). Wiesbaden: Harrassowitz.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čävaš čělxi: čävaš filologi fakul'tečën studenčesem valli xatërleñ vërenü këneki.* [チュヴァシ語：チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čävaš këneke izd-vi.
- Sezer, T. (2017) TS Corpus Project: An online Turkish Dictionary and TS DIY Corpus. *European Journal of Language and Literature*, 9(1): 18-24.
- Sezer, T. and B. Sezer (2013) TS Corpus: Herkes İçin Türkçe Derlem. [TS コーパス：すべての人のためのトルコ語コレクション] *Proceedings 27th National Linguistics Conference*, 217-225. Antalya, Kemer: Hacettepe University, English Linguistics Department.
- Shinzato, R. (2011) Nominalization in Okinawan: From a diachronic and comparative perspective. In F. H. Yap, K. Grunow-Hårsta and J. Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives (Typological Studies in Language)*, 445-472. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Siewierska, A. (2004) *Person.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Sjoberg, A. F. (1963) *Uzbek Structural Grammar.* Uralic and Altaic Series, 18. Bloomington: Indiana University.
- Stachowski, M. and A. Menz (1998) Yakut. In: L. Johanson and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages*, 417-433. London, New York: Routledge.
- Stassen, L. (1997) *Intransitive Predication.* Oxford: Clarendon Press.
- 竹内和夫 (1988) 「第3人称について」『言語研究』94: 25-49.
- Tatarstan Respublikası Fännär akademiäse (2000) *Tatar teleneñ orfografiäse.* [タタール語の正書法] Qazan: Mäğärif Näşriyatı.
- Tenišev, E. R. (1976a) *Stroj salarskogo jazyka.* Moskva.
- _____ (1976b) *Stroj saryg-jugurskogo jazyka.* Moskva.

- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編一』 東京: くろしお出版.
- Thomsen, K. (1959) Das Kasantatarische und die westsibirischen Dialekte. In: J. Deny et al. (eds) *Philologiae Turcicae Fundamenta*, Tomus Primus, 407-421. Wiesbaden: Apud Franciscum Steiner.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tumaşeva, D. Ğ. (1978) *Xäzerge tatar ädäbi tele: Morfologiä*. [現代タタール文語: 形態論] Qazan: Tatarstan kitap näşriyatı.
- Wäliullina, Z. M., K. Z. Zinnätullina and M. A. Säğitov (1972) *Xäzerge tatar ädäbi tele morfologiäse*. [現代タタール文語の形態論] Qazan: KDPİ.
- Xangildin, W. N. (1959) *Tatar tele grammatikası*. [タタール語文法] Qazan: Tatarstan kitap näşriyatı.
- Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiäse*. [タタール語の形態論] Qazan: Mäğärif näşriyatı.
- Zakiev, M. Z., F. A. Ganiev and K. Z. Zinnatullina (eds.) (1992) *Tatarskaja grammatika. T.III. Sintaksis*. Kazan': Tatarskoe knižnoe izdatel'stvo.
- _____ (1993) *Tatarskaja grammatika. T.II. Morfologija*. Kazan': Tatarskoe knižnoe izdatel'stvo.
- _____ (1995) *Tatarskaja grammatika. T.I. Vvedenie, fonetika, fonologija, prosodika, grafika i orfografija, orfoepija, osnovnye ponjatija grammatiki, morfemika, morfonologija, slovoobrazovanie*. Kazan': Tatarskoe knižnoe izdatel'stvo.
- Zäkiev, M. Z., F. M. Xisamova and K. R. Galiullin (eds.) (2015) *Tatar grammatikası. T.I*. [タタール語文法 第一卷] Qazan: TÄhSİ.
- _____ (2016) *Tatar grammatikası. T.II. Morfologiä*. [タタール語文法 第二卷 形態論] Qazan: TÄhSİ.
- _____ (2017) *Tatar grammatikası. T.III. Sintaksis*. [タタール語文法 第三卷 統語論] Qazan: TÄhSİ.

URL

- Areal rasselenie tatar v Rossii (Po dannym Vserossijskoj perepisi naselenija 2010 goda) [ロシア連邦におけるタタール人の分布 (2010年国勢調査)] (https://ru.wikipedia.org/wiki/Расселение_татар_в_России) [最終閲覧日: 2021/6/12]
- Ethnic map of the Ural-Volga region (based on the census of 2010) [ウラル・ヴォルガ地域における諸民族の分布 (2010年国勢調査)] (<https://acer120.livejournal.com/>) [最終閲覧日: 2021/6/12]
- Korpus pirki [コーパスについて] (<https://corpus.chv.su/content/about.html>) [最終閲覧日: 2021/8/10]
- Tatarstan na karte Rossii [ロシア連邦におけるタタールスタン共和国の位置] (<https://ru.wikipedia.org/wiki/Татарстан>) [最終閲覧日: 2021/6/12]

Tormışqa aşmağan latin älifbası urınına yañası qabul itelde [実現しなかったラテン文字の代わりに新しいものが承認される] (<https://www.azatliq.org/a/24807561.html>) [最終閲覧日：2021/6/12]

Vse Rossijskaja perepis' naselenija 2010. Tom 4. Nacional'nyj sostav i vladenie jazykami, graždanstvo [全ロシア国勢調査 2010. 第 4 巻. 民族構成と言語能力、国籍] (https://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm) [最終閲覧日：2021/6/12]

調査資料

Almaty Corpus of Kazakh (<http://web-corpora.net/KazakhCorpus/search/>) [最終閲覧日：2021/6/12]

Corpus of Written Tatar (http://www.corpus.tatar/index_tt.php?of=main_tt.htm#top) [最終閲覧日：2021/6/12]

Čävaš čělxin ikčělzellě šüpsi [チュヴァシ語二言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日：2021/6/12]

Meadow Mari Corpora (<http://meadow-mari.web-corpora.net>) [最終閲覧日：2021/6/12]

O‘zbek tilining ta’limiy korpusi [ウズベク語教育コーパス] (<http://uzschoolcorpara.uz/>) [最終閲覧日：2021/6/12]

TS Corpus v2 (<https://tscorpus.com/corpora/ts-corpus-v2/>) [最終閲覧日：2021/6/12]

謝辞

本稿の執筆にあたり、論文執筆を指導して下さった主任指導教官の風間伸次郎先生、副指導教官の菅原睦先生、野元裕樹先生、箕浦信勝先生、学会や研究会でご指摘・コメントをくださった先生方、日高晋介さんをはじめとする東京外国語大学風間伸次郎研究室の先輩、同期、後輩の皆様、調査に協力して下さったタタール語母語話者のラミル氏をはじめ、トルコ語母語話者のオヌル氏、ウズベク語母語話者のザリナ氏、カザフ語母語話者のマリヤム氏、チュヴァシ語母語話者のアレクサンドル氏、統計分析に関して助言をくださった櫻間瑞希氏と池田周平氏、その他多くの方々のお力添えがあった。この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。